

14. 9-11

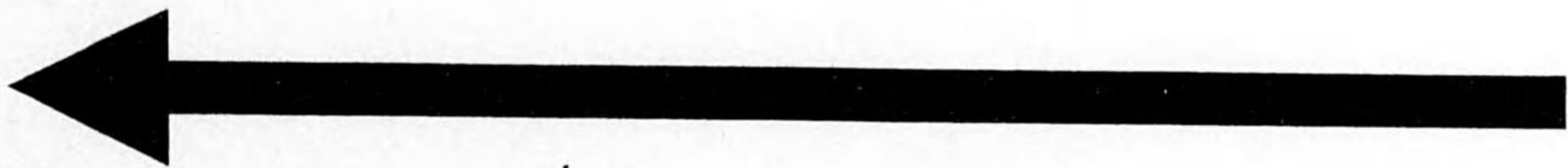


1200501227891

149



始



2106
7846
149-11

149-11

~~2106~~
~~7846~~
(1)

太政官編纂
東京帝國大學藏版



復古記

第一冊



內外書籍株式會社發行



復古記序

王政維新の鴻業漸く緒に就くや、朝廷、府藩縣に布告して、嘉永六年、米艦渡來以來、國事に勤勞せし者の姓名郷貫を録上せしめ、死者は、妻子を録上せしめたり。時に明治二年正月晦日なりき。是れ蓋し朝廷、國事勤勞者の事蹟を記録して、以て其功を永く世に傳へんとするの趣意に出でたるものにして、後年復古記の編纂を計畫するに至りし精神は、夙く是時に發露したるを知るべし。

幾くもなく、朝廷大に修史の業を興さんと欲し、史局を舊和學講談所に置き、四月四日、勅して、輔相三條實美をして、修史の事を總裁せしめられたり。其詔に曰く、

修史は、萬古不朽の大典、祖宗の盛舉なるに、三代實錄以後絶て續なきは、豈大闕典に非ずや。今や鎌倉以降武門專權の弊を革除し、政務を振興せり。故に史局を開き、祖宗の芳躅を繼ぎ、大に文教を天下に施さんと欲し、總裁の職に任ず。須く速に君臣名分の誼を正し、華夷内外の辨を明にし、以て天下の綱常を扶植せよ。

後史局を昌平學校に移し、教授をして、編修を兼ねしめたり。然れども國事多端にして、未だ著手するに遑あらず、荏苒歲月を經過し、其事消たるが如くなりき。

明治五年十月四日、太政官正院に、歴史地誌の二課を置き、國史を編輯せしめたり。蓋し前年藩を廢して、縣を置かる、ことあり、國家統一の事業新に成りしを以て、爰に聖旨奉戴の實績を擧げんと欲し、此制定を見るに至りしならん。而して復古記の編纂亦其端を是時に發したり。然るに明治六年五月五日、皇城火あり、太政官廳も亦類焼し、國史編輯の爲めに、全國より蒐集せる記録圖書の類、悉く烏有に歸したり。是に於て、更に諸省府縣舊藩主等に令して、史料を録上せしめ、先づ力を王政復古の事蹟に效し、傍ら他の時代に及べり。

初め太政官に歴史課を置かる、や、長松幹其首唱たり。太政官乃ち幹を其課長に任じ、専ら復古記編輯の事を擔當せしめたり。幹等博搜旁索、藩記私記の類にして、其記事苟も復古の歴史に關るものは、悉く之を網羅して、復古記三十餘本、復古外記二十餘本を編纂せり。而して淨寫の際、偶ま祝融の災に罹り、稿本原本を併せて烏有に付したりと雖も、幹等更に勇を鼓して、復古記再輯の事に當り、經營三年の後、纔に稿を成し、漸次脱稿上進せり。

明治九年六月、幹等始めて慶應三年十月十四日より二十五日に至る復古記貳卷を淨寫して、之を上進し、又別に其綱文及び明治三年に至る史料の綱文を集めて、明治史要第一編を印刷上進せり。

明治十四年十二月、修史館の職制を改定し、従前の局科を廢して、新に五局を設けたり。是れ専ら力を六國史以後の編年史編輯に效さんが爲めにして、復古記編纂の如きは、將に中止せられんとするの勢ありき。翌年一月、幹、意見書を總裁三條實美に上りて、復古記編纂の事業を繼續せんことを乞へり。其書に曰く、

乞復古記編修議

近日本館職制更正の舉あり、編修の方亦隨て其端を改む。従前三科後小松天皇以降後陽成天皇皇以降先朝に至る史料一科、今上復古を學て、一に後小松天皇以降國史編修の事に従ふ、是に於て、記府縣史明治史要西征始末等一科を學て、一に後小松天皇以降國史編修の事に従ふ、是に於て、復古記一科主任する所なし。幹謹て按ずるに、今上御極朝權古に復す、其盛徳大業前古比なし。而して當時朝廷積衰の餘を承け、兵馬の權なく、土地の富なく、其海内の命を制する、一の名義あるのみ。其際反亂相踵ぎ、兵結解けず、幸に今上叡明神武、在廷元老之を内に輔贊し、正義雄藩之を外に翼戴し、撥亂反正以て東京臨幸、大政歸一に至る。然れども兵馬倥偬の故を以て、朝廷記載備らず、其盛徳大業、元勳偉烈の跡より、夫列藩の向背反亂の情形に至るまで、其首尾顛末得て詳悉すべからず。是に於て、往年復古記丁卯十月、大政奉還に起り、戊辰十一月、東編纂の命あり、幹乏に承けて其事に従ひ、百方搜索、藩記京臨幸、鎮將府を廢し、大政歸一に終る。編纂の命あり、幹乏に承けて其事に従ひ、百方搜索、藩

記私記の類羅致粗備り、復古正記三十餘本、復古外記東海東北
陸三道戰記二十餘本を編す。而して淨寫の際六年五月、祝融の災に罹り、稿本原記等を併せて、一瞬烏有に付す。再び諸記を博搜し、其事ありて其書なきは、其家若くは其人に就て之を問ひ、經營數年、僅に稿を成し、漸次脱稿上進せしもの一百有餘卷、其餘す所十の二三耳。是宜しく主任を置き、其業を畢べきなり。抑前世の史の如きは、之を修る諸舊記の在るあり、遲速必しも利害あらず。復古記に至ては、其書の據るべきなく、其事に就き、其人に問ひ、以て前後首尾を接續するもの極て多し。今にして修めざれば、其人亡びて、其事佚し、後來復手を下す所なからん、其遲速の利害に關するや甚大なり。因て願くは、本館の一部を分ち、舊に仍て其業を畢しめんことを。或曰、本館更革は、全力を前世修史に用ひるに在り、一部を分ち、一分の力を殺ぐは不可なりと。幹曰、全力既に前史に移す、一分の力を殺ぐは、唯其功程の一分を損するのみ、復古記遲速の利害に關すると其輕重如何ぞや。又曰、復古記材料完全ならず。是に據て之を修む、完全の史たるを得ずと。幹曰、材料完全ならざるは、書なきの故なり。故に其年を経る久からず、其人未だ亡びざるに及び、之が編修を速にし、以て其完全に至るを期せざる可らず。且夫本記は、前後通じて十有四月、大約一百五十卷、既成のもの十月、百有餘卷、今にして之を止む、唯所謂功一篋

に虧くのみならず、既成のものも、亦頭ありて尾なく、併せて無用の長物に屬す。況や本記編修を止むるの命なきに於をや。豈私に之を止むるの理あらんや。是一部を分て、其業を畢へんことを乞ふ所以なり。是幹敢て私情を訴るに非ず、蓋亦條理のみ。殿下幸に高裁を賜へ。惘願の至に勝へず。恐悚拜上。

明治十五年一月

修史館監事 長

松

幹

三條 總裁 公

殿 下

と。六月に至りて裁可せられ、再び編纂に著手することとなれり。

明治十九年一月、修史館を廢し、内閣に臨時修史局を置き、明治二十一年十月、臨時修史局を廢し、其著手の事業を、帝國大學に屬せしめ、臨時編年史編纂掛を設けたり。其間復古記編纂の事絶ゆることなく、明治二十二年十二月に至り、前後十六年八箇月を費して、復古記及び復古外記合せて二百九十八卷を完成せり。

この編纂については、長松幹終始其主幹たり。長茨、四屋恒之、中村鼎五、廣瀬進一等協修の事に當り、重野安釋、川田剛、巖谷修、依田百川、藤野正啓、久米邦武等之を檢閲せり。引用書一千二百十二種の多きに上り、原本の散逸或は燒失により再び獲べからざるも

の亦尠しとせず。而してこの浩瀚なる著作の原稿は、永く我史料編纂所の書庫に藏せられ、一部學者の外は之を知るもの多からず、之を利用するものに至つては更に甚だ稀なりとす。而して近時維新史研究の氣運大に勃興し、之に關する書籍の陸續刊行せらるゝは學界の爲め喜ぶべしと雖も、然も其の完備せる史料に至つては未だ出版せられしものあるを見ず。されば今の秋に方つて本書を公刊せんことは、一は之によつて學界の要望を充し、一は之によつて先輩の功績を顯揚すべき所以ならずばならず。乃ち内外書籍株式會社をしてこの出版の事に任せしむ。庶幾くは王政復古の原委之によりて詳かなるを得ん歟。茲に刊行を了へんとするに臨み、編纂の由來を陳じて以て序とす。

昭和五年八月

東京帝國大學文學部

史料編纂所

例言

復古記は百五十卷（二百八冊附圖一冊、附錄二冊を含む）、復古外記（稿）は百四十八卷（百四十九冊）、通計二百九十八卷（三百五十七冊）あり。いま總稱して復古記といひ、別に編纂せる附録と共に十五冊と爲したり。

引用書中、字句の疑はしきものも猥りに改竄を加へず、原本其他に據つて訂正し、なほ決し難きものは（……）又はマ、と傍註し、或は校訂者の按文を附したり。

本書中、假名書の名詞に限り濁點を施し、も、外國語の中清濁の明らかならざるものは、原文のまゝとしたり。

原本に平出擡頭せるものは、今便宜に従ひ、特殊の場合を除くの外、凡て一字明きとして一行中に連記し、人名、地名等、別行に認めたるものも亦概ね二段或は數段に竝記せり。

附録には、綱文を集録し、また索引を附して檢索の便に供せり。

復古記 第一冊 目次

凡例.....三
引用書目.....一

慶應三年

十月

- 十四日 征夷大將軍德川慶喜上表シテ、政權ヲ奉還センコトヲ請フ。.....三
- 幕府、大宮御所造營費ヲ全國ニ課シ、其上納ノ節目期限ヲ定ム。.....七
- 十五日 德川慶喜ニ詔シテ、政權奉還ノ請ヲ允シ且政務委任ノ條項ヲ指令ス○十萬石以上ノ諸侯ヲ召集シ、又
特ニ松永慶永、鍋島齊正、山内豊信、伊達宗城、島津久光ヲ召ス。.....二
- 十六日 加藤明實ヲシテ泉涌寺ヲ警衛セシム○明實京ニ至ル。.....二
- 十七日 幕府、政務委任ノ條項ニ就キ二事ヲ稟請ス。.....二
- 十八日 德川慶喜、書ヲ上リ、在京諸侯及ヒ藩士ヲ召シ、外國事務ヲ商議センコトヲ請フ。.....三
- 、本願寺光澤、大坂ノ支院ヲ以テ、三條實美等ノ旅寓ニ充ルヲ稟ス。.....三
- 德川慶喜、十萬石以上ノ諸侯ヲシテ、京師ニ至ラシム○一萬石以上ノ諸侯ヲ召集ス。.....五
- 十九日 幕府、京都警備等八箇條、及ヒ三條實美以下五人ノ措置ヲ稟請ス。.....五
- 幕府、久松定昭ノ加判列上座ヲ罷ム。.....六
- 二十日 幕府稟議ノ、京都警備等八箇條及ヒ外國事務、三條實美以下ノ處分ヲ列藩ニ下示シ、各意見書ヲ上ラシム。.....六
- 正親町三條實愛等連署上疏シ、三條實美、三條西季知ノ義絶ヲ釋カンコトヲ請フ。.....七

松平慶憲疾ヲ謝シ老臣ヲシテ代リテ入京セシメシムルコトヲ請フ。……………一八
幕府、紙幣ヲ關以東ニ發行セントス。……………一九
英國公使、自國軍艦水夫被害事件ニ就キ、幕府ト往復判論ス。○幕府書ヲ公使ニ致シ、平山敬忠ヲ遣シテ、其事ヲ處分セシムルヲ告ク。……………二五

卷 二

廿一日 十萬石以下ノ諸侯ヲ召集ス。……………三〇
德川慶喜、三條實美等ノ措置ヲ稟ス。○諸侯ノ家臣各答議ヲ上ル。……………三〇

廿二日 幕府申稟スル所ノ三事ニ批シ、八條ハ姑ク其舊ニ依リ、三條實美等ハ大坂ニ止メ、外國ノ事ハ數藩ト謀リ、論シテ之ヲ紓フセシム。○之ヲ、列藩ニ布告ス。……………三五
久我通久等、書ヲ上リ、東久世通禧ノ義絶ヲ釋カシテ請フ。……………三五
德川慶勝、幕府ヲ匡輔スルコト能ハサルノ罪ヲ謝シ、其官爵ヲ貶黜センコトヲ請フ。……………三六
市橋長義、京ニ至ル。……………三六

廿三日 上京ノ諸侯ニ令シ、務テ從者ヲ減省セシム。……………三六
幕府再ヒ、外國常事ノ措置、及ヒ課金、驛法、布告ノ事ヲ稟問ス。……………三六
持明院基政等連署シテ、壬生基修ノ義絶ヲ釋カシテ請フ。……………三七
幕府書ヲ佛國公使ニ與ヘ、浦上村耶蘇教徒處分ノ事ヲ告ク。……………三七

廿四日 德川慶喜上表シテ、征夷大將軍ヲ辭ス。……………三九
甘露寺勝長ノ義子萬長ヲ堂上ニ班シ、松崎氏ヲ稱セシム。……………三九
北條氏恭ヲシテ市橋長義ト共ニ、四塚關門ヲ守ラシム。……………三九

廿五日 諸藩ニ申企シ、十一月ヲ期シテ京ニ至ラシム。……………四〇
幕府書ヲ上リ、使ヲ朝鮮國ニ遣ハシ、佛米二國トノ講和ヲ謀ランコトヲ請フ。○宗義達、朝鮮國往復書ヲ上リ、其事由ヲ上陳ス。……………四〇

井伊直憲等十二人ノ家臣連署シテ、廿二日批下ノ疑條ヲ稟シ、且外國ノ事ハ諸侯ノ會同ヲ待テ、之ヲ決センコトヲ請フ。……………四一
山科言知等連署シテ、四條隆謨ノ義絶ヲ釋カシテ請フ。……………四一
加藤明實、藩ニ歸ル。……………四一
幕府、攝津、播磨間ノ官道ヲ改ム。……………四一
黑田齊博、封内漂到ノ朝鮮人ヲ長崎ニ送致スルヲ幕府ニ報ス。……………四一
薩、藝、長三藩兵ヲ上國ニ送りテ爲ス所アラントシ、薩兵ヲシテ先ツ京ニ入ラシム。……………四一

卷 三

廿六日 本田忠民家臣伏見警守事項ノ稟請及ヒ三條實美等待接ノ事ヲ幕府ニ請問ス。……………四二
幕府、邦内寄寓ノ支那人、及ヒ條約未濟國人取締法ヲ設ケ、之ヲ各國公使、領事ニ告ク。……………四二

廿七日 德川慶喜ノ辭表ニ批シ、姑ク其舊ニ依リ、諸侯朝會公議決裁ヲ待タシム。……………四二
德川慶勝、京ニ至ル。○森忠典、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ入京セシメシムルコトヲ請フ。……………四二
幕府、老中ノ江戸ニ在ル者、及ヒ十萬石以下ノ諸侯ニ令シ、其上京ヲ延期セシム。……………四二
幕府、江戸開市場外國人居留規則及ヒ運送船等ノ規則ヲ定メ、之ヲ各國公使ニ謀ル。○外人居留地域外夜行ノ際、我護衛兵ヲ附スルコトヲ告ク。……………四二

廿八日 朽木爲綱、京ニ至ル。○青山幸宜疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメシムルコトヲ請フ。……………四二
廿九日 宣命使日野資宗ヲ後月輪東陵ニ遣シ、造陵竣功、及ヒ大政復古ヲ告ク。……………四二
市橋長義歸藩ノ請ヲ聽ス。……………四二
幕府令シテ、驛遞法、及ヒ大宮御所造營課金、姑ク其舊ニ仍ラシム。……………四二
幕府書ヲ各國公使ニ致シ、大政奉還ノ意ヲ陳述ス。……………四二
幕府書ヲ各國公使ニ致シ、新潟開港ノ期ヲ改メンコトヲ報ス。……………四二

晦日 淺野茂勳、毛利廣封ト周防新湊ニ會シ、島津茂久ノ至ルヲ待チ、俱ニ入京センコトヲ議ス。…………… 八九

朔日 分部光貞、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ謂フ。…………… 八九

十一日 大給乘謨、稻葉正巳京ニ至ル。…………… 八九

三日 幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、江戸開市期限ヲ改メンコトヲ報ス。…………… 九〇

三日 松平慶倫、暫ク上京ノ延期ヲ請フ○批シテ本月ヲ限リテ會同セシム。…………… 九一

三日 德川茂承等四人、病ニヨリ上京ノ延期ヲ請フ○小笠原貞孚、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ

三日 ○戸田氏共、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ京ニ至ラシム○松平慶憲ノ警衛兵、京ニ至ル。…………… 九二

四日 幕府諸藩ニ令シテ、江戸郭内諸門ヲ警守ス。…………… 九三

四日 幕府ニ命シテ、朝鮮、佛朗西二國ノ和議ヲ調停セシメ、宗義達ヲシテ、其事ヲ幹セシム。…………… 九四

四日 柳澤保申、京ニ至ル。…………… 九五

五日 幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、貨約改鑄ノ事、期約ニ循フコト能ハサルヲ告ク。…………… 九六

五日 山田奉行本田忠貫ノ請ヲ聽シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。…………… 九六

五日 前田慶寧、阿部正方、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。…………… 九六

六日 幕府、再ヒ諸藩ニ令シテ、江戸外郭及ヒ各處ヲ警守ス。…………… 九七

六日 德川茂承ノ家臣江戸ニ在ル者、幕府ノ親戚譜第及ヒ諸藩士ヲ會シ、幕府ヲ扶持センコトヲ勸諭ス。…………… 一〇一

六日 兵庫開港ノ期近キニ在ルヲ以テ、幕府、本地居留外人ノ遊歩區域ヲ定ムルヲ布告ス。…………… 一〇五

八日 九條尙忠、久我建通、千種有文、岩倉具視、富小路敬直ノ罪ヲ赦シ、各其家ニ歸ラシム。…………… 一〇六

八日 幕府、英國公使、將サニ横濱ヨリ兵庫ニ來ラントシ、其軍艦一隻、先至ルヲ稟ス。…………… 一〇六

八日 松平慶永、井伊直憲京ニ至ル。…………… 一〇七

八日 前田利惣ノ朔平門前警衛ヲ罷メ、松平慶憲ヲ以テ之ニ代フ。…………… 一〇九

卷 四

幕府、重ネテ外國事宜ヲ稟請ス、批シテ諸藩衆議ヲ待タシム。…………… 一〇九

幕府、譜第諸侯ノ、職務及ヒ警衛ニ服シ、若クハ疾病幼弱ノ者ハ、老臣ヲシテ代リテ、朝召ニ應セシメンコトヲ請フ、批シテ警衛ヲ除クノ外、其事由ヲ上陳シテ朝裁ヲ請ハシム。…………… 一一〇

松平武聰、疾ヲ以テ召命ヲ辭ス。…………… 一一〇

福岡孝弟、辻維嶽等、松永慮永ニ説キ、幕府譜第諸藩ノ爲ニ進退ヲ誤ルコト勿ラシム。…………… 一一一

幕府、毛利敬親ノ支封主及ヒ老臣等上坂ノ命ヲ停メ、朝命ヲ待タシム。…………… 一一三

脇坂安斐、櫻井忠興、京ニ至ル○堀直虎、疾ヲ以テ召命ヲ辭ス。…………… 一一四

前田利惣ノ歸藩ノ請ヲ聽ス○大給乘謨、稻葉正巳江戸ニ歸ル。…………… 一一四

十二日 國事係近衛忠房等連署シテ、大政復古、綱紀確立ノ策問二道、太政官八省以下再興ノ議案ヲ上ル。…………… 一二四

朽木爲綱、藩ニ歸ル。…………… 一二四

十三日 有馬道純、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ、代リテ入京セシメンコトヲ請フ○津輕承敏、疾ニヨリ上京スル能ハサルヲ以テ朝旨ヲ候ス。…………… 一二三

十四日 本多康積、京ニ至ル。…………… 一二三

十五日 民間、符籙天ヨリ降ルト稱シ、奔走舞蹈狂スルカ如シ○京都町奉行、令シテ其狂躁雜還ヲ禁ス。…………… 一二三

十五日 大政歸一、綱紀確立ノ策問ヲ德川慶喜及ヒ德川慶勝、松平慶永ニ下シ、尋テ之ヲ在京諸侯ニ下問ス。…………… 一二三

酒井忠篤等書ヲ幕府ニ呈シ、官位ヲ朝廷ニ還シ、德川氏臣屬ノ義ヲ明ニセンコトヲ請フ○安倍信發等二十四人書ヲ幕府ニ呈シ、朝召ヲ辭センコトヲ請フ。…………… 一二三

賊アリ、坂本直柔、中岡道正ヲ刺ス。…………… 一二三

卷 五

十六日 德川慶勝引咎ノ請ヲ慰諭シ、奉仕故ノ如クナラシム。…………… 一二五

十六日 大久保忠禮等三十七人、書ヲ幕府ニ呈シ、朝召ヲ辭センコトヲ請フ。…………… 一二七

十七日 一柳頼紹、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。…………… 一三〇

尾、越二藩、幕府ノ親藩及ヒ僚屬中、政權挽回ヲ議スル者アルヲ憂ヘ陰ニ之カ匡正ヲ謀ル。……………三三

土屋寅直等書ヲ幕府ニ上リ、朝召ヲ辭センコトヲ請フ。……………三三

幕府、書ヲ英國公使ニ致シ、航海術教導士官召聘ノ事ヲ謝ス。……………三三

前田利裕、本莊道美、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……………三三

島津茂久、三田尻港ニ至リ、毛利廣封ト前途ノ策ヲ議シ、直ニ上國ニ赴ク○廣封、之ヲ淺野茂長ニ報知シ、共ニ其兵ヲ東上セシメンコトヲ約ス。……………三四

幕府、英國公使館附屬士官ニ危害ヲ加ヘントスル者ヲ逮捕擬刑シ、之ヲ英國公使ニ報ス。……………三四

徳川慶喜、綱紀確立ノコトハ諸侯會同ヲ待テ、之ヲ公議スヘキヲ稟ス。……………三四

徳川慶勝、上書シテ、楠正成ニ神號ヲ贈リ、祀典ニ列シ、近古殉國者ヲ、從祀センコトヲ建議ス、命シテ死事者ノ姓名等ヲ錄上セシム。……………三四

織田信親、江戸ヨリ京ニ至リ、塚原關門ヲ守ルヲ稟ス○山内豐信疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○南部信順疾ヲ謝シ、赴召期シ難キヲ稟ス。……………三四

幕府、紙幣ヲ畿内及ヒ附近地方ニ發行ス○新潟ヲ開港場ト爲シ、其開港及ヒ江戸開市ノ期ヲ、明年三月九日ト爲スコトヲ布告ス。……………三四

北小路俊昌ヲ堂上ニ班ス。……………三四

戸田氏共、再ヒ疾ニヨリ、入京スルコト能ハサルヲ謝ス○松平定安、上京ノ延期ヲ請フ。……………三四

長崎奉行河津祐邦、薩摩藩ノ、佛國人モンブラン等ヲ、其軍事ニ參シ、又英國汽船ヲ購置シ、告ケスシテ歸藩スルヲ、幕府ニ報ス○幕府、書ヲ佛國公使ニ興ヘ、其事由ヲ問フ。……………三四

豐岡隨資上書シテ、舊習ヲ除キ、紀綱ヲ張リ、人才ヲ擧ケ、公議ヲ採ランコトヲ建議ス。……………三四

松平頼英、同義勇疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ。……………三四

小出英尙、市橋長義、京ニ至ル○池田慶徳等三人、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………三四

幕府、横濱外國人居留地取締規則ヲ設ケ、且英國人ヲ其取締役トナスヲ、各國公使ニ告ク。……………三四

米國公使書ヲ幕府ニ致シ、本國大統領、我使節ヲ朝鮮ニ遣リ、講和ヲ謀ラントスルヲ謝スヲ陳ス。……………三五

卷 六

廿三日 島津茂久京ニ至ル○黒田齊溥、久松定法、疾ニヨリ、赴召遅緩ヲ謝ス。……………三六

廿四日 黒田齊溥、其管地肥前國內ノ耶蘇宗徒、長崎奉行ノ捕縛スル所ト爲ルヲ幕府ニ稟ス。……………三六

明年正月、天皇首服ノ日ヲ卜定ス。……………三六

廿五日 左大臣近衛忠房、右大臣一條實良、上表シテ職ヲ辭ス。……………三六

松平定安、再ヒ上京遅緩ヲ謝ス○眞田幸民、織田信成等四人、病ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○岡部長寛、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ。……………三六

土佐藩士、尾、越、肥後等ノ藩士ト議シ、在京諸侯ノ會議ヲ興シ、以テ幕府政權奉還ノ實ヲ擧ケンコトヲ謀ル。……………三六

幕府、東北諸藩ニ令シ、其士民ノ唐太島開拓及ヒ移住ヲ許ス。……………三六

廿六日 柳澤保申、歸藩ノ請ヲ允ス。……………三六

柳澤德忠、幼且疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………三六

柳澤政敬、書ヲ幕府ニ呈シ、朝廷ノ召命ヲ辭ス○幕府、之ヲ卻ク。……………三六

廿七日 島津義久、京ニ至ル○淺野茂勳、國ヲ發シテ上京ス○毛利敬親ノ支封主、老臣等國ヲ發シ、藝藩兵ニ、御手洗港ニ會ス○淺野茂長、書ヲ上リ、長藩召命停格ノ令、途上齟齬スルノ狀ヲ稟ス。……………三六

遠山友祿疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……………三六

廿八日 淺野茂勳京ニ至ル○池田茂政以下十四人、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○松平武聰、南部信順、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………三六

松平慶永、薩藩ノ幕府ヲ疑フヲ憂ヒ、慶喜ニ説キ、西郷隆盛等ヲ招キ、其眞意ヲ諭サンコトヲ勸ム。……………三六

幕府令シテ、脇往還ノ驛夫錢、渡船賃ヲ増加ス○江戸鐵砲洲ヲ外國人居留地ト爲シ、其居民ノ家屋ヲ、外人ニ貸與スルヲ許ス。……………三六

幕府、兵庫地方ノ民、外國貨幣ニ慣ハサルヲ以テ、姑ク我銀貨ト兌換通行セシム○各國公使ニ移書シ、……………三六

廿九日 其改鑄耗減費ヲ收ム。……………一七三

北條氏恭、京ニ至ル○堀直虎老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○榊原政敬以下九人、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○九條隆備、再ヒ上京ノ延期ヲ請フ○稻葉久通等三人、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ上京セシメンコトヲ請フ。……………一七三

晦日 左大臣近衛忠房、右大臣一條實良ノ官ヲ罷ム、國事掛故ノ如シ○權大納言九條道孝ヲ左大臣兼左近衛大將、内大臣大炊御門家信ヲ右大臣、權大納言廣幡忠禮ヲ内大臣兼右近衛大將ト爲ス。……………一七三

幕府、鍋島茂實、松平定安ニ、明春京師警衛ヲ命ス。……………一七三

毛利敬親ノ老臣等、兵ヲ率キテ打出濱ニ至リ、尋テ西ノ宮ニ次ス○淺野茂勳上書シテ其情由ヲ陳疏ス。……………一七三

伊達慶邦等六人、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○松平慶倫、再ヒ上京ノ延期ヲ請フ○松平頼英、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○丹羽長國以下六人、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ○青木重義、病ヲ謝シ、佐竹義謀疾ヲ以テ上京スル能ハス、公事ハ佐竹義堯ニ傳諭センコトヲ請フ○奥平昌服ノ家臣、昌服、會同ノ期ニ後ル、ヲ稟ス。……………一七三

是月 幕府ニ命シ、嚴ニ紀伊藩士等ノ黨議ヲ禁遏セシム。……………一七三

井伊直憲書ヲ上リ、朝命及申牒等幕府ヲ經由センコトヲ請フ、聽サス。……………一七三

幕府、關東八國ニ令シ、酒醬油等醸造三年ノ均額ヲ錄上セシム。……………一七三

神奈川奉行、米國商社ヲ請フ許シ、煤氣燈ヲ橫濱市街ニ設ケントスルヲ、幕府ニ稟ス。……………一七三

朔日 櫻井忠興、歸色ノ請ヲ允ス。……………一七三

蜂須賀齊裕等十一人、疾ニヨリ、上杉齊憲ハ、道路難澁ニヨリ、竝ニ上京ノ延期ヲ請フ○德川茂承等五人、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○酒井忠美等二人ハ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ○溝口直正、老臣ノ代赴遅緩ヲ謝ス○伊達宗孝、大久保忠順、病ヲ謝ス○有馬慶頼等五人、在京ノ家臣、其七上京ノ遅緩ヲ講ス。……………一七三

二日 毛利敬親ノ老臣ニ命シ、大坂ニ詣テ後命ヲ俟タシム。……………一七三

毛利敬親ノ老臣等、書ヲ薩藝二藩ニ致シテ其情ヲ陳ス、淺野茂勳之ヲ上ル。……………一七三

岩城隆邦、疾ヲ講シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○黒田齊博、鍋島茂實ハ道路遠隔ニヨリ、毛利高謙ハ病ニヨリ、竝ニ上京ノ延期ヲ請フ。……………一七三

北條氏恭、市橋長義ニ代リ四塚關門ヲ守ルヲ稟ス。……………一七三

幕府、櫻井忠興ニ令シ、長門藩士等ノ其封内ノ留次及ヒ經過ヲ聽ス。……………一七三

脇阪安斐、歸邑ノ請ヲ聽ス。……………一七三

松平慶憲、汽船九隻、日章及ヒ薩藝長三藩ノ旗章ヲ掲ケ、封内近海ヲ過クルヲ、幕府ニ報ス○大州藩士ノ打出村ヲ戍ル者、長門藩老臣等ノ、其旁近ニ次スルヲ報ス。……………一七三

藤堂高邦、京ニ至ル。……………一七三

四日 山崎關門警守ノ津藩士、書ヲ上リ、毛利敬親ノ老臣等、關ニ至ラハ、之ヲ掃蕩センコトヲ稟ス○書ヲ幕府ニ呈シ、支封久居藩兵ノ都下守衛ヲ撤シ、共ニ山崎ヲ守ランコトヲ請フ。……………一七三

池田政禮京ニ至ル○丹羽長國、病ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………一七三

五日 松永慶永、德川慶喜ニ勸メ、毛利敬親等ノ處置、一ニ朝裁ヲ仰カシム。……………一七三

幕府堀直虎ヲ若年寄兼外國總奉行ト爲ス○譜第諸藩ニ諭シテ上京セシム。……………一七三

幕府、大坂外國人居留規則及ヒ大坂兵庫間運送船等ノ規則ヲ設ケ、之ヲ各國公使ニ謀ル。……………一七三

攝政二條齊敬、内旨ヲ德川慶喜ニ傳ヘ、毛利敬親等赦宥ノコトヲ告ク。……………一七三

英國公使、書ヲ幕府ニ致シ、諸藩兵ノ大坂ニ福湊スルヲ止メンコトヲ請フ、幕府其書ヲ上ル。……………一七三

伊東祐相、疾ニヨリ重臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○小笠原忠忱、同貞正、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメント請フ○織田長易疾ニヨリ、上京遅緩ヲ謝ス。……………一七三

幕府、石川成之ノ江戸郭門警衛ヲ罷メテ、西上セシム。……………一七三

七日

德川慶喜、毛利敬親等、赦宥ノ内旨ニ答申ス。○在京諸侯ニ令シ、明日悉ク朝參セシム。……津藩士ノ稟狀ニ批シ、毛利敬親ノ老臣等、關ニ至ラハ之ヲ留メ、朝命ヲ請ハシム。……幕府、植村家保ノ請ヲ聽シ、本多忠鄰ノ子釗八郎ヲ養フテ嗣ト爲サシム。……兵庫港及ヒ大坂互市場ヲ開ク。……

八日

毛利敬親其子廣封及ヒ支封主ノ官位ヲ復シ、入京ヲ許ス。○淺野茂勳ヲシテ、敬親ノ老臣等ノ西ノ宮ニ在ル者ヲ、京ニ召サシム。○三條實美等五人ノ官位ヲ復シテ、之ヲ召還シ、錦小路賴徳ノ官位ヲ復シ、澤宣嘉ノ義絶ヲ釋ス。○九條尙忠、久我建通、千種有文、岩倉具視、富小路敬直ヲシテ復飾セシメ、建通以下四人ノ蟄居ヲ釋シ、滋野井實在、正親町公董、滋野井公壽、鷲尾隆聚ノ差控ヲ釋ス。……中山忠能、岩倉具視等、將ニ大ニ更革ヲ行ハントシ、内旨ヲ島津茂久、淺野茂勳、山内豊信、德川慶勝、松平慶永ニ傳フ。○島津茂久、毛利敬親等赦命ノ事ヲ、敬親ノ老臣ニ報シテ、急ニ北上セシム。……是夜、中山忠能、密旨ヲ鷲尾隆聚ニ傳ヘ、兵ヲ率キテ潛ニ高野山ニ赴カシム。……藤堂高潔、京ニ至ル。○遠山友祿、母ノ喪ニヨリ再ヒ上京ノ延期ヲ請フ。……

卷八

九日

薩尾藝越土五藩ノ兵ヲ徵シテ宮門ヲ守ラシテ、王政復古ノ令ヲ布ク。○攝政、關白、征夷大將軍、議奏、傳奏、國事掛、守護職、所司代及ヒ内覽、攝籙、門流ヲ廢シ、新ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置ク。○大將軍德川慶喜ノ請ヲ許シ、其職ヲ罷ム。○攝政一條齊敏等二十六人ヲ罷メ、其朝參ヲ停ム。○又守護職松平容保、所司代松平定敬ヲ罷メ、之ヲ歸藩セシム。○小御所ニ開議シ、大政施設ノ方、及ヒ德川氏處分ノ事ヲ議ス。○德川慶勝、松平慶永ヲシテ、辭官獻地ノ内旨ヲ、慶喜ニ諭サシム。……熾仁親王ヲ總裁ト爲シ、純仁親王、晃親王、中山忠能、正親町三條實美、中御門經之、德川慶勝、松平慶永、島津茂久、淺野茂勳、山内豊信ヲ議定ト爲シ、大原重徳、萬里小路博房、長谷信篤、岩倉具視、橋本實梁ヲ參與ト爲ス。○茂久、慶勝、茂勳、慶永、豊信ニ命シ、其藩士、參與ノ任ニ當ルモノヲ薦舉セシム。○太政復古ヲ宮堂上ニ諭告ス。○後宮ニ諭シテ、内行ヲ正フセシム。……

十日

諸藩ノ衛兵ニ命シ、警備ノ事、今後朝命ヲ奉セシム。○平戸藩兵ニ清所門ヲ、十津川郷兵ニ蛤門ヲ守ラシム。……毛利敬親ノ老臣、及ヒ其支封主ヲ京ニ召スヲ、山崎成兵ニ諭シ、敬親父子、及ヒ三條實美等五人ノ入京ヲ許スヲ、沿道關門ニ諭ス。○敏親ノ老臣等、山崎ニ至リ、尋テ光明寺ニ次ス。……德川慶喜ニ命シ、毛利敬親等赦宥ニヨリ、部下ノ黨議ヲ生スルモノヲ訓諭セシム。○尾越二藩ニ内諭シ、二條城中ノ紛擾ヲ鎮撫セシム。……伊達慶邦等二十餘人ノ老臣、各英國公使書東ノ答議ヲ上ル。……前田慶寧、京ニ至ル。……舊幕府、戸田忠行、秋元禮朝、島居忠定ヲシテ、下野出流山村ニ嘯聚スル者ヲ緝捕セシム。……

卷九

十一日

備前藩兵ヲシテ蛤門ヲ守リ、池田政禮ノ兵ヲシテ、之ニ屬セシム。……德川慶勝、松平慶永、二條城ニ至リ、朝命ヲ德川慶喜ニ傳フ。○慶喜罷職ノ命ヲ奉シ、辭官獻地ノ事ハ、衆情鎮定ノ後ヲ待タンコトヲ請フ。……長門藩ノ老臣毛利親信、相國寺ノ薩營ニ入ル。……土方雄永疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……江戸市街中、劫盜横行ス、舊幕府、譜第諸侯ニ諭シ、鎮緝ノ方ヲ陳セシム。……禁内守衛兵ヲ除クノ外、戎服、九門内ニ入ルヲ禁ス。○長門藩兵ヲシテ、九門内外ヲ巡邏シ、且正親町三條實美、橋本實梁ノ衛兵ヲ出シ、因幡藩兵ヲシテ、長谷信篤ノ衛兵ヲ出サシム。……榊原政敬、書ヲ上リ、命令、奏請、仍ホ德川氏ノ手ヲ經由センコトヲ請フ。……

十二日

松平慶永、舊幕府ノ廳下及ヒ譜第藩士等ノ暴發ヲ憂ヒ、姑ク大坂ニ赴ンコトヲ德川慶喜ニ勸告ス。……參與ヲシテ、假ニ舊武家傳奏ノ事ヲ掌ラシメ、一乘院里坊ヲ以テ本衛ト爲ス。……西郷隆盛、丹羽賢、辻維嶽、中根師質、後藤元燁等、薩尾藝越土五藩士十四人ヲ參與ト爲ス。……加藤明實再ヒ京ニ至ル、命シテ内侍所ヲ守衛セシム。○津和野藩兵ニ、建春門テ守衛セシム。……

山内豊信、書ヲ上リテ、公議ヲ興サンコトヲ請ヒ、且徳川慶喜辭官獻地ノ事ハ、之ヲ松平慶永ニ委ネンコトヲ建議ス。……………二六四

細川慶順等十人ノ老臣連署シテ、速ニ戒嚴ヲ解キ、且舊攝政、將軍以下、宜ク公議ヲ以テ、之ヲ處スヘキヲ建議ス。……………二六五

徳川慶喜、松平容保、松平定敬等ヲ率ヰ、大坂ニ赴ク○慶喜、徳川慶勝、松平慶永ニ就キテ奏狀ヲ上リ、慶永、慶勝モ亦之ヲ懇懇スルヲ謝ス。……………二六六

前田慶寧、藩ニ歸ル○久松定昭、大坂ニ赴ク。……………二七〇

舊幕府、間部詮道ノ敦賀港守衛ヲ罷ム。……………二七一

正親町公董、烏丸光徳ヲ參與ト爲ス。……………二七二

山城國取締松平信正、青山忠敏、本多康頼ヲ京都市中取締ト爲ス○九門ヲ除クノ外、悉ク禁内ノ守兵ヲ撤ス○薩尾藝士四藩兵ヲシテ、建春、建禮、朔平、清所四門ヲ守ラシム○岡山藩兵等ノ蛤門守衛ヲ罷メ、長門藩兵ヲシテ之ニ代ラシム。……………二七三

植村家保老臣ノ請ニヨリ、命シテ其藩兵ヲ召サシム。……………二七六

薩尾藝士五藩ヲシテ、仁和寺宮ノ衛兵、安藝藩ヲシテ、中山忠能ノ衛兵ヲ出サシム。……………二七七

久留島通靖、京ニ至リ、其赴召遅延ヲ謝ス○秋月種股病ヲ謝シ、其子種、樹ヲシテ代リテ、上京セシメンコトヲ請フ○一柳末徳、再ヒ上京遅延ヲ謝ス。……………二七七

鷲尾隆聚、高野山ニ到リ、僧侶ニ告諭シ、又十津川郷兵ヲ徵集ス。……………二七九

卷 十

十四日

大政復古ヲ列藩ニ布告シ、各人材ヲ選舉セシム○朝廷ノ徳川氏ニ於ケル、舊ニ異ナルコト無キヲ諭ス。……………二八〇

禁門解嚴及ヒ市中取締巡邏ヲ置クコトヲ都下ニ布告ス○取締三藩ニ防火ノ事ヲ兼シメ、大州、平戸、津和野、水口、園部、高取六藩兵ニ市中ヲ巡邏セシメ、水口藩兵ノ内侍所守衛ヲ罷ム。……………二八一

戸田忠至、溝口貞直、津田信弘ヲ參與ト爲ス、忠至之ヲ辭ス。……………二八三

十津川郷兵ヲシテ、建春、宜秋、清所三門ヲ守衛セシム。……………二八四

戸田忠至ヲシテ、舊ニ依テ宮中度支ノ事ヲ掌ラシム○忠至大坂ニ赴キ、徳川慶喜ニ説テ獻金セシム。……………二八四

純仁親王、書ヲ上リ、朝堂ノ禮分ヲ正フシ、新進ノ藩士ニ、爵位ヲ賜フヘキヲ建議ス。……………二八四

戸田氏共、重臣京ニアル者ナキヲ稟シ、本日ノ召命ヲ辭ス。……………二八五

鷲尾隆聚、書ヲ徳川茂承ニ遺リ、内旨ヲ奉シ、兵士ヲ糾合シテ、不虞ニ備フルヲ報ス。……………二八六

舊幕府、諸第諸藩ニ令シ、城中蓄米ヲ江戸ニ運輸セシム。……………二八七

三職朝參議事ノ時限、及ヒ參與上下ノ稱ヲ定ム。……………二八七

純仁親王ヲシテ仁和寺宮ト稱シ、嘉彰ト復名セシム。……………二八七

參與大原重徳ヲ罷ム。……………二八八

市中取締三藩、吏員ヲ藩ヨリ召シテ、其衛ヲ開カンコトヲ稟ス。……………二八八

參與後藤元輝等、上下議事所及ヒ諸制度ノ條議ヲ上ル。……………二八九

井伊直憲、藤堂高潔、病ニヨリ歸藩センコトヲ請フ○松平忠恕、上京遅延ヲ謝ス。……………二九三

徳川慶喜、大將軍ヲ罷ムルヲ以テ、令シテ其稱呼ヲ改ム。……………二九四

舊幕府、大河内正質ヲ老中格、永井尚志ヲ若年寄ト爲ス。……………二九四

凡ソ議定、常參ヲ須ヒス、事アレハ之ヲ宣召ス。……………二九四

田宮篤輝ヲ參與ト爲シ、市尹ノ事ヲ總管セシム○牧野成憲ヲ徵ス。……………二九四

松平慶永等、岩倉具視ニ就キ、徳川慶喜ノ處分、朝旨ノ在ル所ヲ領シ、之ヲ慶喜ニ諭サンコトヲ請フ○具視、奏狀ノ擬案ヲ内付ス。……………二九五

長門藩ニ仁和寺宮、及ヒ正親町公董ノ衛兵、備前藩ニ烏丸光徳ノ衛兵ヲ出サシム○安藝藩ノ仁和寺宮、及ヒ中山忠能ノ衛兵ヲ罷メ、山階宮ノ衛兵ヲ出サシム。……………二九六

徳川慶喜、各國公使ヲ大坂城ニ延見シ、政體更革ノ事ヲ説キ、益情誼ヲ固フセンコトヲ陳ス。……………二九九

井伊直憲ノ家臣、下野別邑附近ノ浪徒ヲ俘獲スルヲ、舊幕府ニ報ス○大久保教義、浪土其邑ヲ剽掠ス……………三〇〇

十七日

ルヲ以テ一橋門守衛ヲ罷メテ、其守ヲ固フセンコトヲ請フ。……………三〇三
 加藤明實ノ泉涌寺守衛ヲ罷メ、復タ内侍所ヲ衛ラシム。……………三〇三
 德川茂承、鷲尾隆聚ノ高野山ニ據ルノ狀ヲ稟ス、批シテ其朝旨ニ出ルヲ諭ス。……………三〇四
 長門藩士、仁和寺宮及ヒ正親町公董ノ衛兵ハ、後軍ノ至ルヲ俟タンコトヲ請フ○中川久昭ヲシテ、公董ノ衛兵ヲ出サシム。……………三〇四
 長門藩士、竊ニ時務條議ヲ、總裁熾仁親王ニ上ル。……………三〇四
 鷲尾隆聚、書ヲ植村家保、及ヒ五條代官中村勘兵衛ニ遺リ、内旨ヲ奉シテ、兵士ヲ糾合スルヲ報ス。……………三〇五
 舊幕府、譜第諸藩ニ令シ、江戸私邸ノ旁近ヲ巡邏シ、以テ劫盜ニ備フ。……………三〇六

卷 十一

十八日

大政復古ヲ外國ニ報スルノ擬案、及ヒ人材ヲ擧ケ、革政所ヲ設クル等ノ事ヲ議ス。……………三〇八
 諸候ニ申令シテ、速ニ朝集セシム。……………三四
 市中取締三藩ニ諭シ、兇徒橫行制シ難キハ、巡邏諸藩ノ應援ヲ請ハシム○都下ニ告諭シテ民情ヲ綏撫ス○公卿諸侯ノ家臣ニ令シテ、下民ノ請托ヲ受クルコト勿カラシム。……………三五
 三岡公正ヲ徵士參與ト爲ス。……………三五
 再ヒ島津久光ヲ召シ、又長岡護美、桂久武、木戸孝允、土肥實匡、小原忠寛ヲ徵ス。……………三六
 加賀、薩摩、土佐、岡四藩兵ヲシテ市中巡邏セシム○薩摩藩ヲシテ仁和寺宮ノ衛兵ヲ増シ、備前藩ヲシテ中山忠能ノ衛兵ヲ出サシム。……………三七
 坂兵北上ノ報アルヲ以テ、德川慶勝、松平慶永ニ命シ、松平容保、松平定敬ヲシテ、速ニ藩ニ就カシム。……………三七
 井伊直憲、藩ニ歸リ、老臣ヲシテ代ラシメンコトヲ請フ、聽サス○藤堂高猷ノ老臣、其子高潔ノ爲ニ、再ヒ歸藩ヲ請フ。……………三八
 巡邏六藩、其分轄ノ區域ヲ定メ、且其措置ノ目ヲ稟ス。……………三九
 松平慶永等、再ヒ岩倉具視ト謀リ、先ツ德川慶喜ヲ入觀セシメ、以テ擬案ノ事ヲ舉行セシメントシ永

十九日

井尙志ヲシテ、之ヲ慶喜ニ諭サシム。……………三二〇
 細川興貫、疾ニヨリ、上京運緩ヲ謝ス。……………三二一
 酒井忠惇、入京ノ途大津ニ至リ、德川慶喜ノ大坂ニ在ルヲ聞キ、直チニ之ニ赴ク。……………三二一
 舊幕府老中稻葉正邦、譜第諸候ノ江戸ニ在ル者ヲ城中ニ會シ、更革ノ朝命ヲ示シ、各意見ヲ陳セシム○土井利教等九人ヲシテ、兵ヲ率キテ、西上セシム○勝義邦、書ヲ正邦ニ贈リ、其妄動、主君ノ意ニ反スルヲ論ス。……………三二二
 戸田忠行、出流山屯聚ノ浪徒ヲ殺獲スルヲ舊幕府ニ報ス。……………三二四
 外國報告ノ議ヲ決シ、議定ニ命シテ、明日、告文ニ署印セシム。……………三二四
 十時時維惠ヲ參與ト爲ス○池田茂政、池田政詮、鍋島齊正及小松清廉ヲ召ス。……………三二四
 藤堂高猷ノ老臣、復前請ヲ申ス、之ヲ聽ス。……………三二五
 德川慶勝、自ラ大坂ニ赴キ、會桑ニ藩ヲ措置センコトヲ請フ。……………三二五
 市中取締三藩、舊東町奉行所、及ヒ附屬ノ簿書什器ヲ交付センコトヲ請フ。……………三二六
 德川慶喜上疎シテ、更革ノ事、一二藩ノ私意ニ出ルヲ論シ、又、家門譜第諸藩ノ兵ヲ徵ス○戸川安愛、戸田忠至ニ因テ、奏狀ヲ岩倉具視ニ呈ス○松平慶永等、具視ニ就テ其書ヲ請下シ、安愛ヲシテ歸テ慶喜ヲ諭サシム。……………三二六

二十日

毛利元蕃ノ子元功、吉川經幹、老臣宮莊主水京ニ至ル。……………三三〇
 參與長谷信篤ヲ議定、西園寺公望ヲ參與、五條爲榮、柳原前光、西四辻公業ヲ參與助役ト爲ス。……………三三〇
 熾仁親王ヲ一品ニ叙ス。……………三三一
 准后玆性入道親王薨ス。……………三三一
 池田茂政ノ召命ヲ止メ、加藤泰秋ニ代テ西ノ宮ヲ守衛セシム○中川久昭ノ京都市中巡邏ヲ罷ム。……………三三三
 長門藩兵ノ、仁和寺宮守衛ヲ止メ、有栖川宮ノ衛兵ヲ増サシム○尾張藩兵ノ仁和寺宮守衛ヲ罷ム。……………三三三
 德川慶勝、松平慶永、淺野茂勳、山内豊信等、異議アルヲ以テ、姑ク外國告文ノ事ヲ止ム。……………三三三

池田德澄、建部政世京ニ至ル。……………三三

卷 十二

廿一日 熾仁親王ヲシテ除服朝參セシム。……………三三七

長谷信成ヲ參與助役ト爲ス。……………三三七

永井直諒及ヒ高松藩兵ニ命シ、孝明天皇ノ小祥忌祭ニ、泉涌寺般舟院ヲ守衛セシム○直諒ヲシテ京都

防火ノ事ヲ掌ラシム。……………三三七

舊幕府兵、猶伏見ニ在リ、會桑ニ藩兵モ亦稍々北上ス○田宮篤輝ニ命シ、伏見取締ヲ兼テ、薩藝長土四

藩兵ヲシテ巡邏警備セシム○藝土ニ藩、之ヲ辭ス。……………三三八

植村家保ノ傳法川守衛ヲ罷メ、其師ヲ京師ニ召ス。……………三三九

池田德澄ノ上京ヲ嘉獎シ、宗家ト共同從事セシム。……………三四〇

大野藩兵ヲシテ、嵯峨關門ノ守備ヲ撤セシム。……………三四〇

德川慶勝、松平慶永等田中輔、中根師質ヲ、大阪ニ遣リ、德川慶喜ヲ説カシム。……………三四〇

德川茂承、入京ノ途病ヲ以テ大阪ニ留リ、姑ク藩ニ就カンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……………三四三

萬機ヲ親裁シ、博ク公議ヲ採リ、舊幕府ノ善政良法ハ、舊ニ仍テ變更セサルヲ告諭ス。……………三四三

荒川良知ヲ參與ト爲ス。……………三四三

德川慶勝ノ請ヲ允シ、自ラ大阪ニ赴キ、期ヲ刻シテ其功ヲ奏セシム、尋テ慶勝、其延期ヲ請フ。……………三四三

山内豊信上書シテ、外國ノ報告ハ、列侯會議ノ後ニ付シ、姑ク德川慶喜ヲシテ、還政ノ事ヲ報セシメン

コトヲ建議ス。……………三四四

林左門ヲ參與ト爲シ、參與三岡公正ヲシテ、會計ノ事ヲ監督セシム。……………三四四

堀親義ヲシテ般舟院ヲ守衛シ、永井直諒ニ火元見役ヲ兼ネシム。……………三四六

鍋島茂實、松平定安ノ家臣、明春、京都警衛ノ事ヲ稟問ス、批シテ前命ニ從ハシム。……………三四六

京都市中取締三藩、防火ノ事、舊町奉行ノ例ニ因リ、専ラ巡視ヲ主トセンコトヲ稟請ス。……………三四七

廿三日 井伊直憲、疾ヲカメテ京師ニ留リ、王事ニ服センコトヲ請フ。……………三四八

牧野忠訓、京ニ至リ、上書シテ時事ヲ論シ、再ヒ政權ヲ德川氏ニ委セント請フ、省セス。……………三四八

永井尙志、德川慶喜ノ旨ヲ含ンテ京ニ至リ、德川慶勝、松平慶永等ト、慶喜入覲ノ事ヲ謀ル。……………三四八

伊達宗城京ニ至ル。……………三四九

舊幕府老中稻葉正邦等、譜第藩士ヲ江戸城ニ召シ、德川慶喜ノ奏狀ヲ示シ、各、兵ヲ率テ西上セシム

○江戸城一ノ丸火アリ。……………三四九

卷 十三

廿四日 德川慶勝、松平慶永ヲシテ、辭官納地ノ命ヲ德川慶喜ニ傳ヘシム。……………三五七

入道尊秀親王ニ命シ、日ニ朝堂ニ入テ機務ヲ習ハシム。……………三六一

毛利敬親ヲ召ス。……………三六一

小笠原長守ニ命シ、竹田街道守衛ヲ撤シ、後命ヲ待タシム。……………三六一

山内豊信、書ヲ上リ、政府ノ經費、宜ク之ヲ列藩ニ課スヘキヲ建議ス。……………三六三

德川慶勝上表シテ職ヲ辭ス、允サス。……………三六三

戸田氏共、復々上京延期ヲ請フ。……………三六三

鷲尾隆聚、再ヒ書ヲ五條代官中村勘兵衛ニ與ヘ、其報答遲緩ヲ責ム。……………三六四

萬機親裁、公義博採ノ論旨ヲ、三條橋ニ揭示ス。……………三六六

毛利廣封、同元周、同元純ヲ召ス。……………三六六

舊幕府、莊内、松山、前橋、西尾、上ノ山ノ諸藩及ヒ陸軍ニ命シ、江戸薩藩邸ヲ包圍シテ之ヲ燒キ、支封

佐土原藩邸ニ及フ。……………三六六

舊幕府、若年寄秋月種樹ノ職ヲ罷ム。……………三六七

再ヒ池田慶德、京極高厚ヲ召ス。……………三六七

九條道孝ノ邸ヲ以テ、假ニ太政官代ト爲サントシ、三岡公正ヲシテ其事ヲ管セシム。……………三七四

廿六日 復古記 第一冊 目次……………一七

井伊直憲ノ請ヲ嘉獎シ、四塚關門ヲ守衛セシム。……………三三三
 ↓本願寺光澤ニ諭シ、門徒ヲ倡率シテ、力ヲ王事ニ致サシム。……………三三四
 三輪田元綱等六人ヲ宥免ス。……………三三五
 長門藩ノ請ヲ許シ、文武館ヲ以テ屯營ト爲サシム。……………三三六
 堀親義大阪ニ赴キ、徳川慶喜ニ面ヒンコトヲ請フ、許サス。……………三三七
 伊達慶邦等十一人ノ老臣、連署書ヲ上リ、徳川氏ヲ處スル、務メテ其部下ヲ鎮輯センコトヲ請フ。……………三三八
 毛利元功、及ヒ吉川經幹老臣宮莊主水參朝シ、毛利敬親父子等官位復舊ノ恩ヲ謝ス。……………三三九
 舊幕府、榊原政敬ヲシテ、前田利同等ト共ニ、東叡山ヲ警守セシム。……………三四〇

卷十四

廿七日 天皇、建春門ニ御シ、薩藝長土四藩兵ノ操練ヲ覽給フ。……………三三九
 參與岩倉具視ヲ、議定ト爲ス。……………三四〇
 三條實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆謨、壬生基修、筑前ヨリ至リ、朝恩ヲ謝ス○實美ヲ議定、通禧ヲ參與ト爲ス。……………三四一
 熊野三山社家ニ命シテ、檢校宮ノ管理ニ屬シ、且ツ其還俗ヲ許ス。……………三四二
 建部政世歸藩ノ請ヲ聽ス。……………三四三
 松平慶倫、書ヲ上リ、徳川慶喜政權奉還ノ本意ヲ失ハサランコトヲ陳ス。……………三四四
 伊達宗城ヲ議定ト爲ス。……………三四五
 池田茂政ニ令シ、速ニ西宮守兵ヲ出サシム。……………三四六
 牧野忠訓大阪ニ赴ク○久松定法、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………三四七
 徳川慶勝、松平慶永、大阪ニ赴キ、命ヲ徳川慶喜ニ傳フ○慶喜、奉命書ヲ二人ニ致シ、且政府ノ經費ハ、之ヲ全國ニ課セサレハ、部下ノ心ヲ鎮輯シ能ハサルヲ陳ス。……………三四八
 舊幕府、保科正益、戸田氏良ヲシテ品川驛關門ヲ守ラシム○關門ヲ江戸諸口ニ置キ、出入ヲ檢ス。……………三四九

廿九日 松平容保ノ子喜徳、上國ノ報ヲ聞キ、書ヲ上杉齊憲ニ致シ、其協同救援ヲ請フ○容保ノ老臣モ亦藩内士民ニ激シ、守備ヲ請ス。……………三四四
 市中取締三藩ヲシテ、伏見ヲ兼管セシム、三藩、之ヲ辭ス、聽サス。……………三四五
 戸田氏共ノ家臣、藩士小原忠寛、奉命遲緩ノ故ヲ稟謝ス。……………三四六
 植村家保、病ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………三四七
 佛國公使、書ヲ舊幕府ニ致シ、西班牙國ノ商船、橫濱港ニ來ルモノハ、其國船ト同視センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……………三四八

晦日 天皇服除シ給フ○祓禊ノ儀ヲ行フ。……………三四九
 百官及ヒ在京諸侯ニ令シ、明年新正ニ參賀セシム。……………三五十
 ↓本願寺光澤、書ヲ上リ、奉上ノ意ヲ陳シ、且即位ノ資ヲ獻セント請フ○東本願寺光勝、奉上他ナキヲ陳ス○興福寺ノ僧侶、米ヲ獻シ、且王事ニ從ハンコトヲ請フ之ヲ許ス、……………三五一

徳川慶勝、松平慶永、大阪ヨリ至リ、徳川慶喜ニ代テ、奉命書ヲ上ル。……………三五二
 永井直諒ノ家臣、本日以後、消防ノ役ニ服スルヲ稟シ、且其條款ヲ申請ス。……………三五三
 藤堂高邦、歸藩ノ請ヲ聽ス○片桐貞篤、老臣ヲシテ代テ、京ニ至ラシム。……………三五四
 部下ノ豪商三井三郎助、島田八郎左衛門、小野善助等金ヲ獻スルコト差アリ。……………三五五
 江戸薩摩藩邸襲撃ノ事、漸ク傳播スルヲ以テ、舊幕府及ヒ薩摩藩ニ内諭シ、釁隙ヲ開クコト勿ラシム。……………三五六
 舊幕府、酒井忠惇ヲ加判下座ト爲ス○岡田忠養ヲシテ、下總國布佐村陣屋ニ居リ、上總以下四國ノ事務ヲ管セシム。……………三五七

是日 密旨ヲ親子内親王ニ傳ヘテ、其西上ヲ促ス。……………三五八
 蜂須賀齊祐ニ命シ、老臣稻田邦植ノ家臣三田昇馬等二人ヲ召ス。……………三五九
 松平定安、池田政詮、疾ヲ謝シ、上京遲緩ヲ稟ス。……………三六〇

卷十五

元

明治元年正月

日 四方拜、百官朝賀ス、天皇御不豫ニヨリテ、臨ミ給ハス、且今年三節會ヲ停ム。

池田政禮ニ命シ、兵ヲ出シテ伏見ヲ巡撫セシム。

酒井忠氏、入京ノ途次、大阪ニ赴クヲ稟ス。○本莊宗武、八幡守衛ノ任ニ赴クノ途次、疾ニ罹リ、復タ江

戸ニ歸ル。

舊幕府、大久保忠禮以下四人ニ命シテ、江戸薩摩藩邸逋逃者ノ、駿相間ニ赴ク者ヲ緝捕セシム。

假ニ議事ヲ九條道孝ノ邸ニ開キ、徳川慶喜ヲシテ、召命ヲ各國公使ニ傳ヘシメ、及ヒ慶喜ニ内諭シ、松

平容保等罷歸ノ後、入觀セシムル等ノ事ヲ議ス。

戸田氏共、其藩士小原忠寛ヲ、召命ニ赴カシムヲ稟ス。

池田徳定、京極高典、京ニ至ル。

徳川慶勝、松平慶永、山内豊信、伊達宗城等、坂兵ノ北上ヲ鎮輯センコトヲ謀ル。

天皇、將ニ首服ヲ加ヘントシ、奉幣使藤波教忠ヲ伊勢神宮ニ遣シテ、之ヲ告ク。

徳大寺實則、久我通久、壬生基修、四條隆訶及ヒ廣澤直臣、井上馨、小原忠寛ヲ參與、穗波經度、坊城俊

章ヲ參與助役ト爲ス、

令シテ、江戸薩摩藩邸ノ事ヲ以テ、妄ニ擾動ヲ生スルコト勿ラシム。

參與職ヲシテ、熊野三山ノ社家ヲ管セシム。

山内豊信、上書シテ、會桑二國歸國ノ前後ヲ問ハス、速ニ徳川慶喜ヲ召シ、國是ノ基本ヲ定ムヘキヲ建議ス。

市中取締三藩、篠山藩兵ヲ伏見ニ派遣スルヲ稟ス。

四塚關ノ守兵ニ命シ、會桑二藩兵ノ經過ヲ停メシム。

阿波藩ノ老臣稻田邦植ニ命シテ、其邑ヲ嚴守シ、且西ノ宮ノ衛兵ニ應援ノ出兵ヲ爲サシム。

織田信親、加藤泰令ヲシテ、萬里小路博房、五條爲榮ノ衛兵ヲ出サシム。

細川喜延、京ニ至ル。○織田信親、兵ヲ率キテ、塚原ヨリ京ニ至ル。

三

日

中根師質、岩倉具視ニ就テ、徳川慶喜入京ノ日、參朝任職等ノ目ヲ稟請ス。 四二
 徳川慶喜、討薩表ヲ帥シ、瀧川具知ヲ遣シテ之ヲ奏シ、又之ヲ諸藩ニ示シ、大ニ其兵ヲ徵ス。○慶喜、兵 四三
 士ヲ部署シ、會桑二藩兵ヲ先鋒ト爲シ、召命ニ赴クト稱シ、伏見、鳥羽二道ニ向フ。○伏見、鳥羽ノ守兵 四四
 之ヲ拒ミ、朝命ヲ俟タシム。 四五
 百官ヲ朝集シ、姑ク慶喜ノ入京ヲ停メ、參與四條隆訶ヲ伏見ニ遣シ、坂兵ニ退歸ヲ命シ、又、徳川慶勝 四六
 等ヲシテ、之ヲ措置セシム。○薩長土三藩ニ合シテ、伏見ノ守備ヲ嚴ニセシム。○安藝藩兵ヲ伏見ニ、阿 四七
 波、彦根、平戸、大州、大村、佐土原六藩ノ兵ヲ大津ニ派遣ス。○平戸、大洲二藩ノ京都巡邏ヲ罷ム。 四八
 坂兵進テ鳥羽、伏見ニ迫ル、薩長二藩兵、之ヲ邀撃ス。○京師戒嚴。○内命ヲ宮中ニ傳ヘテ、密ニ乘輿ヲ遷 四九
 スノ備ヲ爲ス。○徳川慶勝、松平慶永、伊達宗城ニ禁闕、水戸藩兵ニ泉涌寺、宇和島、高鍋、高取三藩兵ニ 五〇
 諸門、備前支藩兵及ヒ岡藩兵ニ狼カ辻守衛ヲ命ス。○井伊直憲ヲシテ、兵ヲ率キテ大津ニ赴カシム。○因 五一
 幡藩兵ヲシテ伏見ニ赴カシム。○毛利敬親、鷲尾隆聚ヲシテ大阪ヲ攻撃セシメ、錦旗ヲ隆聚ニ賜フ。○因 五二
 幡、備前二藩兵ヲシテ征討兵ヲ備ヘ、且備前藩兵ヲシテ西宮ヲ嚴守セシム。○徳川茂承ヲシテ官軍ヲ糾 五三
 合セシム。○藤堂高猷、稻葉正邦ヲ諭シ、方向ヲ誤ルコト勿ラシム。 五四
 議定嘉彰親王ニ軍事總裁ヲ、議定伊達宗城、參與東久世通禧、烏丸光徳ニ軍事參謀ヲ兼ネシム。○參與 五五
 橋本實梁、參與助役柳原前光ニ大津口ノ兵ヲ、參與西園寺公望ニ、丹波口ノ兵ヲ督セシム。 五六
 徳川慶勝、松平慶永、調停至ラサルヲ以テ其職ヲ解カントテ請フ。 五七
 本願寺光威、東本願寺光勝參朝シ、光勝金千兩ヲ獻ス。○光威ヲシテ九門内外巡邏及ヒ猿ヶ辻ヲ警守セ 五八
 シム。○松平頼聰ノ家臣京ニ在ル者、見兵ヲ以テ事ニ從ハントテ請フ。 五九
 慶喜、書ヲ大阪在留各國公使ニ致シ、薩摩藩ト交兵ノ由ヲ陳シ、其民人ヲシテ條約ヲ確守セシメ、軍艦 六〇
 兵器ヲ私賣シ及ヒ未開港場ニ至ルヲ禁ス。 六一
 舊幕府ノ軍艦、薩艦ヲ神戸海及ヒ土佐洋ニ砲撃ス。○募兵、大阪薩藩邸ヲ襲ハントス、藩人、邸ヲ焚テ遁ル。 六二

軍事總裁嘉彰親王ヲ征討大將軍ト爲シ、旗錦節刀ヲ賜ヒ、參與四條隆壽、參與助役五條爲榮ヲ錦旗奉行ト爲ス、○參謀伊達宗城、征討ノ事宜、列藩ノ公議ヲ盡スヘキヲ論ス、淺野茂勳、山内豊信之ヲ助ク、廷議省セス○大將軍、出テ東寺ニ次ス、宗城、從ハス○大將軍、矢守平好、中沼之舜、高崎正風ヲ下參謀ト爲ス。……………四四一

參與西園寺公望ヲ山陰道鎮撫總督ト爲シ、本道諸藩ヲシテ其指揮ヲ受ケシム○丹波、丹後、但馬ノ諸侯ニ諭シ、王事ヲ勤メシム。……………四四二

三職以下徹夜事ヲ乘ル、是日、命シテ退休セシム。……………四四四

薩摩藩兵ニ命シ、黒谷ノ會津藩邸ヲ伐タシム。……………四四四

池田政禮ノ伏見巡撫ヲ罷メ、専ラ猿ヶ辻ヲ守衛セシム○因幡、森、柏原三藩ヲシテ、正親町三條實愛等四人ノ衛兵ヲ出サシム。……………四四五

本多康穰ノ請ヲ聽シ、歸邑シテ守備ヲ修セシム○平戸、大州二藩ノ請ヲ聽シ、大津警備ヲ罷メ、再ヒ京都ヲ巡邏セシム○備前藩兵ヲシテ大津ニ赴カシム。……………四四六

本願寺光澤、金二千兩ヲ獻ス、書ヲ下シテ之ヲ賞ス。……………四四六

篠山藩、伏見兵火ノ狀ヲ上報ス。……………四四六

九鬼隆備、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ、京ニ至ラシム。……………四四七

官軍、伏見、鳥羽ノ賊ヲ撃テ、之ヲ卻ク。……………四四七

舊幕府老中、江戸傍近ノ諸藩ニ令シテ薩人ニ備ヘ、又諸關ノ守ヲ嚴ニセシム。……………四四七

參與橋本實梁ヲ東海道鎮撫總督、參與助役柳原前光ヲ副總督ト爲ス○實梁、前光及ヒ山陰道鎮撫總督西園寺公望京師ヲ發ス。……………四四七

徳川慶勝ヲシテ二城城ヲ收管シ、城中ノ殘兵ヲ大阪ニ押送セシム。……………四四八

四條隆平ヲ山崎ニ遣シ、守關ノ津藩兵ニ命シテ宜軍ニ應セシメ、多度津藩ヲシテ、其衛兵ヲ出サシム。……………四四八

諸藩ニ令シテ、京坂見兵ノ數ヲ録上セシム。……………四四九

九門守衛諸藩ニ命シ、譏察ヲ嚴トセシム○因幡藩、九門警守ノ事ヲ上申ス。……………四四六

池田慶徳ニ命シ、山陰道鎮撫使ノ令ヲ奉シテ、本道不庭ノ諸藩ヲ討セシム○藝長二藩兵ノ尾道ニアルモノヲ、京師ニ召ス。……………四四六

肥後藩兵ヲシテ、大津ニ赴カシム○池田政禮ノ猿ヶ辻守衛ヲ罷メ、兵ヲ大津ニ出サシム○堀義親ニ伏見取締ヲ命シ、尋テ更命シテ般舟院ヲ守衛セシム。……………四四七

秋月種股ニ命シ、其子種樹ヲシテ速ニ上京セシメ、又大原重徳ノ衛兵ヲ出サシム。……………四四八

酒井忠氏ヲシテ、其京邸ニ上ラシム。……………四四八

興正寺攝信ニ命シ、門徒ヲ率キテ大津ニ至リ、東海道鎮撫總督ニ從ハシム。……………四四八

薩長二藩兵ノ戦功ヲ賞ス。……………四四九

東本願寺光勝ノ家臣、慶喜ニ通スルノ疑アリ、見親王ヲシテ、之ヲ亂サシム、光勝及ヒ其子光誓誓書ヲ上ル。……………四四九

議定伊達宗城、軍事參謀ヲ辭ス、之ヲ大將軍ニ請ハシム。……………四五〇

小出英尙、其邑園部ニ城カンコトヲ請フ。……………四五〇

鳥羽、伏見ノ官軍、進テ淀ヲ攻ム、賊兵、退テ八幡ニ據ル。……………四六一

瀧川具知、戸田忠至ニ因テ討薩表ヲ上ル○徳川慶喜、書ヲ徳川慶勝、松平慶永等ニ致シ、禁闕ヲ守衛セシム○トヲ請フ○慶喜、又、近日ノ事情ヲ諸藩ニ陳辨ス。……………四六一

舊幕府老中、令シテ、諸船舶ノ品川港ニ入ル者ヲ檢シ、其搭客ヲ譏察ス。……………四六五

木梨恒準ヲ、東海道鎮撫總督參謀ト爲ス。……………四六五

公卿ノ涅齒點眉、古制ニ非ルヲ以テ、必スシモ依違セサルヲ令ス。……………四六五

申牌後ヨリ翌卯牌迄、九門ヲ鎖シ、出入印票ヲ以テセシム○越前藩兵ヲシテ、諸家ノ寶門ヲ守ラシム。……………四六六

櫻井忠興、永井直諒ニ命シテ、城守ニ嚴ニシ、織田信親ヲシテ白川越ヲ警守セシム○長備二藩兵ヲ召スヲ以テ、忠興ニ命シ、其封内經過及ヒ糧食運搬等ノ便ヲ與ヘシム。……………四六六

篠山藩兵ノ伏見取締ヲ罷メ、多度津藩兵ヲ以テ之ニ代フ。……………四六七

東本願寺光勝ニ命シ、大津ニ至リ、官軍ノ糧食ヲ措辨シ、且、東國ノ門徒ヲ勸勵セシム○興福寺ノ僧侶
 ニ命シ、伊賀一路東兵ノ狀ヲ諜セシム。……………四六七
 加茂兩社司ニ命シ、管地ノ壯丁ヲ出シテ、薩摩藩兵ノ使役ニ充テシム。……………四六八
 岡崎藩臣ノ京ニ在ル者、伏見衛戍ノ藩兵、戰後其之ク所ヲ知ラサルヲ以テ、別ニ兵ヲ藩ヨリ徵サンコ
 トヲ請フ之ヲ聽ス○久松定法ノ老臣、其兵備ヲ缺クコトヲ定法ニ歸報セント請フ、命シテ、兵ヲ京師
 ニ出サシム。……………四六八
 九鬼隆備、病アルヲ以テ、先ツ兵ヲ京師ニ出ス○福岡藩臣ノ在京ノ者、見兵ヲ以テ守備ニ服センコト
 ヲ請フ。……………四七〇

官軍、賊兵ヲ橋本ニ破リ尾撃シテ、楠葉ニ至ル○征討府、下參謀高崎正風ヲ罷メ、大山綱良ヲ以テ之ニ代フ。……………四七二
 綾小路俊實、滋野井公壽京都ヲ出奔ス、相樂、武振等之ニ從フ。……………四七二
 徳川慶喜、書ヲ各國公使ニ遣リ、敵軍來襲ノ勢アルヲ以テ、各其國旗ヲ保守センコトヲ陳ス○舊幕府
 老中大河内輝照、水野忠弘ヲシテ品川港砲臺ノ守ヲ嚴ニセシム。……………四七三
 徳川慶喜、汽船ニ駕シテ東走ス、松平容保等之ニ從フ○老中格大河内正質、大坂城代牧野貞直等、江戸
 ニ走リ、松平忠誠ハ紀伊ニ赴キ、久松定昭、酒井忠民ハ藩ニ歸ル。……………四七三
 卷十七

七日
 徳川慶喜征討ノ令ヲ發シ、諸侯ヲシテ其去就ヲ決セシム。……………四七七
 入道雄仁、尊秀ニ親王ヲシテ、蓄髮セシメ、尊秀親王ノ徳川氏猶子ヲ停ム。……………四八〇
 因幡藩及ヒ支藩兵ノ伏見守衛ヲ罷テ、八幡、橋本ヲ警守シ、勝山藩兵ヲシテ關嶺ノ警守セシム○永井
 直諒ノ請ヲ許シ洞嶺ノ守衛ヲ撤シテ、本城ノ守備ニ充テシム。……………四八一
 薩摩、筑前、因幡、彦根四藩兵ヲシテ、寺町門、下立賣門以北、諸家ノ賣門ヲ守ラシム○筑前藩ヲシテ、
 四條隆譚ノ衛兵ヲ出サシム。……………四八三
 鷲尾隆聚ニ内諭シ、姑ク坂城攻撃ヲ止メ、先ツ大和ヲ鎮撫セシム。……………四八三

八日
 山陰道鎮撫總督及ヒ久居藩、宇治ノ守兵ニ諭シ、出雲藩兵ノ入京ヲ妨クルコト勿ラシム。……………四八三
 加藤泰令、京ニ至ル。……………四八四
 大將軍、進テ淀城ニ入ル。……………四八四
 鷲尾隆聚、五條代官所ヲ收メ、傍近ノ諸藩ニ檄シテ、王事ニ勤メシム。……………四八四
 雄仁親王、一品ヲ辭ス、名ヲ嘉言ニ復ス○入道信仁親王ヲシテ昭高院宮ト稱セシム。……………四八四
 錦旗ニ旒ヲ建禮門ニ樹テ、尋テ又建春、宜秋二門ニ樹ツ。……………四八五
 高松、小濱、松山、大垣、鳥羽、宮津、延岡七藩士ノ九門ニ出入スルヲ禁ス。……………四八五
 筑前藩兵ニ石藥師、清和院二門ノ間ヲ、長門藩兵ニ蛤、下立賣二門ノ間ヲ警守セシム、長門藩、之ヲ辭ス。……………四八六
 岡部長寛ノ老臣ノ請ヲ聽シ、藩兵ヲ京師ニ徵サシム。……………四八六
 松平頼聰ノ家臣京ニ在ル者、書ヲ上リ、頼聰ノ爲ニ辯疏ス○命シテ、頼聰ヲシテ自ラ其罪ヲ乞ハシム。……………四八六
 徳川慶勝ノ請ヲ聽シ、其隣近諸藩ノ方嚮ヲ問ハシム。……………四八七
 參與小原忠寛ノ請ヲ聽シ、大垣ニ赴キ、藩主戸田氏共ニ説テ、自効セシム。……………四八八
 徳川慶喜ノ家臣、妻木頼矩大坂ニ留リ慶喜ノ奏狀及ヒ坂城ヲ、尾越二藩ニ託ス○徳川慶勝、松平慶永
 其奏狀ヲ上ル。……………四八八

九日
 戸田氏共ノ家臣、氏共、伏見守關兵ノ爲ニ扼セラレ入京スル能ハスシテ藩ニ歸ルヲ稟シ、後命ヲ請フ。……………四九一
 長門藩、小濱藩邸貯フル所ノ彈藥ヲ、借ランコトヲ請フ。……………四九三
 松浦詮、永井直諒京ニ至ル○松平慶憲、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ、入京セシムルヲ稟ス○出雲藩ノ
 警衛兵京ニ至ル。……………四九三
 大將軍、八幡ニ至リ、勅旨ヲ諸藩兵ニ傳ヘテ、其戰勞ヲ犒フ○伊達宗城ノ請ヲ許シ、其軍事參謀ヲ罷ム。……………四九三
 議定三條實美、岩倉具視ヲ副總裁、嘉言親王、徳大寺實則ヲ議定ト爲ス○征討大將軍嘉彰親王ニ、外國
 事務總裁ヲ兼ネ、實美及ヒ參與東久世通禧、岩下方平、後藤元輝ニ外國事務取調掛ヲ兼ネシム○徳川
 慶勝、松平慶永、伊達宗城ヲ議定ト爲ス○嘉言親王ノ園城寺長吏ヲ罷メテ、別當ト爲ス。……………四九三

大將軍嘉彰親王ニ命シ、坂城ヲ以テ牙營ト爲シ、四方ヲ指揮セシム。○東海道鎮撫總督橋本實梁ニ命シ、隣近ノ諸藩ヲ糾合シ、進ンテ桑名ヲ討タシム。……………四九五

高倉永祐ヲ北陸道鎮撫總督、四條隆平ヲ副總督ト爲ス。○岩倉具定ヲ東山道鎮撫總督、岩倉具經ヲ副總督ト爲ス。……………四九七

松浦詮ヲシテ、守兵ヲ關嶺ニ出サシメ、其京都巡邏ヲ免ス。○柏原藩東久世通禧ノ衛兵ヲ罷メ、郡山藩兵ヲ以テ之ニ代フ。……………四九七

舊京都守護職ニ給セル廩米ヲ、薩長ニ藩ニ賜ヒ、糧食ニ充ツ。○東本願寺光勝ニ命シ、伏見、八幡、橋本ノ兵禍ニ罹リシ者ヲ賑恤セシム。……………四九八

德川茂承、將ニ京師ニ觀セントシ、朝命ヲ賜ハランコトヲ請フ。……………四九九

森忠典、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラセシム。……………五〇〇

官軍ノ前隊長門藩兵、大坂城ヲ收ム。○城中火起リ、焚燒、翌日ニ至ル。……………五〇〇

鷲尾隆聚、使ヲ紀伊藩遣ハス、藩兵之ヲ抑留ス、隆聚書ヲ與ヘテ其無狀ヲ數ム。○橋本成兵、隆聚ニ復書シ、前日ノ諭告ニ答フ。……………五〇三

薩長ニ藩兵、備後福山城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……………五〇三

舊幕府老中ノ江戸ニ在ルモノ、伏見ノ戰報ヲ聞キ、諸藩ヲ戒メ、急ニ西上ノ備ヲ爲サシム。……………五〇三

卷 十八

聖護院宮ニ令シ、其修驗道ニ關スル者ハ、管領宮ト稱セシム。○知恩院宮ヲ改テ、華頂宮ト稱ス。……………五〇五

德川慶喜、及ヒ松平容保、松平定敬、板倉勝靜等二十七人ノ官位ヲ褫キ、容保以下六人ノ邸ヲ沒ス。○酒井忠氏等五人ノ入京ヲ禁ス。……………五〇五

參與正親町公董ヲ大坂ニ遣シ、大政復古ヲ外國ニ報スル圖書ヲ、東久世通禧ニ付シ、通禧ヲシテ其事ヲ掌ラシム。……………五〇七

揖取素彦ヲ參與、岩倉具經ヲ參與助役ト爲ス。……………五〇八

德川慶喜征討ノ令、及ヒ舊幕府領地ヲ直管ト爲スノ布告書ヲ、三條、荒神口二橋ニ掲ケ、士民ノ賊徒ニ通スルヲ禁ス、之ヲ諸道ニ揭示ス。……………五〇八

兵ヲ列藩ニ徵シ、特ニ織田信學ヲ召ス。……………五〇〇

肥後、筑前、因幡、出雲、郡山、淀六藩ニ令シ、德川慶喜征討及ヒ慶喜以下官位褫奪等ノ諸令ヲ、旁近ノ諸藩及ヒ衆庶ニ傳布セシム。……………五〇〇

德川慶勝ニ命シ、舊幕府屬吏等ノ京ニ在ルモノヲ、草津ニ押送シテ之ヲ放タシム。……………五〇三

因幡藩兵及ヒ其支藩兵ヲシテ東海道鎮撫總督ニ屬セシメ、其橋本警守ヲ罷メ、肥後藩兵ヲ以テ之ニ代ラシム。○柏原藩兵ヲシテ山陰道鎮撫總督ニ屬セシメ、其白川口警守ヲ罷メ、新發田藩兵ヲ以テ之ニ代フ。……………五〇四

平戸藩、守兵ヲ關嶺ニ出スヲ以テ、郡山藩ノ向背ヲ稟請ス。……………五〇五

滋野井公壽、綾小路俊實、兵ヲ近江松尾山ニ集ム。○二人、書ヲ上リ、命ヲ奉シテ賊ヲ討タンコトヲ請フ。……………五〇六

池田慶徳、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。○戸田氏良、疾ヲ以テ、上京遲延ヲ謝ス。○九鬼隆義、江戸ヨリ入京セントシ、疾ヲ以テ姑ク歸藩ヲ稟ス。……………五〇六

大將軍、大坂ニ至リ、本願寺支院ヲ以テ牙營ト爲ス。……………五〇七

備前藩兵、櫻井忠興ノ向背ヲ問フ、忠興ノ老臣、奉上貳ナキノ證書ヲ致ス。……………五〇七

舊幕府老中江戸ニ在ル者、討薩表及ヒ檄文ヲ諸藩ニ示ス。○松平直克ヲシテ、江戸ヲ警守シ、阿部正靜ヲシテ薩摩藩ノ支邸ヲ收メシム。○立花種恭ヲ老中格會計總裁ト爲ス。……………五〇七

尊秀親王ニ命シ、鎮西、西山ノ宗派ヲ管セシム。……………五〇八

石山基政、萬里小路通房ヲ、參與助役ト爲ス。……………五〇八

朝集會議ノ命ヲ止メ、諸侯ニ申令シ、兵ヲ率ヰテ入覲セシム。……………五〇八

安藝、備前、土佐三藩ニ命シ、福山、松山、高松、松山ヲ討チ、且備中、備後、讃岐、伊豫ノ舊幕府領地ヲ收メシム。○征討府、薩摩以下六藩ニ令シ、高松、松山、大垣、姫路ヲ討タシム。○薩長ニ藩兵ヲシテ兵庫ヲ管理セシム。……………五〇九

滋野井公壽、綾小路俊實ニ命シ、義兵ヲ召集シテ、東海道鎮撫總督ニ屬セシム○堂上ニ告諭シ、公壽、俊實ノ學ニ倣フコト勿ラシム。……………五三

加藤明實ノ請ヲ聽シテ、内侍所建春門ノ守衛ヲ罷メ、歸藩シテ賊兵ヲ追撃セシム○肥後藩兵ノ橋本警守ヲ罷メ、加賀藩兵ヲシテ之ニ代ラシム○高田藩兵ノ京市巡邏ヲ罷メ、十津川郷兵ヲ援ケテ、大和ノ殘賊ヲ勦セシム。……………五三

朽木爲綱將ニ入觀セントシ、道中ノ印票下賜ヲ請フ、命シテ、山陰道鎮撫總督ノ指揮ニ從ハシム。……………五五

池田慶徳、徳川氏ノ至親タルヲ以テ、上表シテ罪ヲ待ツ、池田徳澄モ亦上表ス。……………五五

酒井忠氏ノ父忠義、召命ニ赴クヲ稟シ、且忠氏ノ爲ニ罪ヲ乞フ○戸田氏共、召ニ應シ、西上スルヲ稟ス。……………五六

牧野誠成、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………五八

東海道鎮撫總督橋本實梁ニ命シ、舊大津代官石原清一郎、信樂代官多羅尾光弼ヲシテ、軍資ヲ供億セシム○實梁、光弼ヲシテ、舊ニ仍リ、其地ヲ管セシム。……………五八

山陰道鎮撫總督西園寺公望、酒井忠氏ヲ歸國ノ途ニ要シ、其兵器ヲ收メ、歸藩謹慎セシム。……………五九

備前藩老臣日置忠尙、西宮ニ赴クノ途、其從兵、外國人ト神戸驛ニ鬪フ。……………五九

舊幕府老中榊原政敬ノ東叡山守衛ヲ罷ム○米國公使館書記官、書ヲ舊幕府老中ニ致シ、上國變動措置ノ方ヲ聞キ、自ラ處センコトヲ請フ。……………五三

卷十九

十二日

詔シテ、島津茂久、淺野茂長、毛利敬親、池田慶徳、山内豐範ノ、復古ノ勳及ヒ征討ノ功ヲ賞シ、御劍各一口ヲ賜フ○藤堂高猷ノ戰功ヲ賞シ、茂久等五人ト、竝ニ金幣ヲ賜ヒ、藩士ノ戰死者ヲ弔ス○徳川慶勝、松平慶永、伊達宗城ノ復古ノ勳、及ヒ細川喜延以下十九人ノ軍勞ヲ賞ス。……………五三

尊秀親王、細川喜延ヲ議定、土倉正彦ヲ參與ト爲シ、議定伊達宗城ニ、外國係ヲ兼ネシム。……………五六

滋野井公壽、綾小路俊實ノ使者相良武振、書ヲ上リ、官軍ノ徽章ヲ賜ヒ、且東征先鋒ノ命ヲ奉センコトヲ請ヒ、又、舊幕府領地ノ減稅ヲ建議ス○公壽、俊實ニ命シ、東海道鎮撫總督ノ約束ヲ受ケ、又、舊幕府領地、今年租稅ヲ半減セシム。……………五九

徳川茂承、本月三日ノ命ヲ領スルヲ稟シ、且大坂ノ敗兵、和歌山ニ至ルノ狀ヲ陳ス。……………五九

市橋長義、四塚ノ守衛ヲ罷メ、他役ニ服センコトヲ請フ○朽木爲綱、山陰道鎮撫使ノ令ヲ奉シ、兵ヲ久美濱ニ出スヲ稟ス。……………五九

内藤政學ノ家臣、尾張、肥後二藩ニ因リ、政學ノ爲ニ辯疏シ、其入京ヲ許サレンコトヲ請フ。……………五九

本多康稷、再ヒ京ニ至ル○秋田映季、織田長易、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシム。……………五九

征討府、備前等五藩及ヒ稻田邦植ニ令シ、高松、姫路、松山征討ノ軍ニ應援セシム○薩藝長三藩兵ヲシテ大坂街市ヲ巡警セシム。……………五九

東海道鎮撫使橋本實梁、阿波藩兵ヲシテ、大津、信樂舊代官所轄ノ地ヲ管理シ、且、舊幕府及ヒ會、桑領地ノ附近ニ在ル者ヲ檢セシム○膳所藩ヲシテ、賊兵ノ逃歸スル者ヲ要撃セシム。……………五九

松平定敬ノ老臣、書ヲ尾張藩ニ致シ、其寬宥ヲ申請センコトヲ求ム。……………五九

徳川慶喜、江戸城ニ還リ、東歸ノ情由及ヒ後日ノ形勢ニ因リ、再ヒ西上スルノ意アルヲ列藩ニ告ク○諸藩門ヲ鎖シ、之ヲ各國書記官ニ報ス。……………五九

各國公使等、兵ヲ出シテ、神戸驛ノ兩口ヲ扼シ、港内ニ在ル諸藩艦船ヲ拘留ス。……………五九

宣命使ヲ、山階、後月輪、弘化、後月輪東ノ四陵ニ遣シ、天皇、將ニ首服ヲ加ヘントスルヲ告ク。……………五九

假ニ九條道孝ノ第ヲ、太政官代ト爲ス○參與局ヲ宮中ニ移ス。……………五九

參與助役西四辻公業ヲ參與ト爲ス。……………五九

石川成之ニ命シ、鈴鹿嶺及ヒ傍近ノ隘口ヲ扼シ、東海道鎮撫使ノ約束ヲ受ケシム。……………五九

酒井忠義ヲ北陸道先鋒、戸田氏共ヲ東山道先鋒ト爲シ、功ヲ立テ自ラ贖ハシム。……………五九

伊達宗城、藩兵ヲ以テ松山ヲ討チ、且、大阪駐在中、其臣某ヲシテ、參與局ニ候セシメンコトヲ請フ。……………五九

毛利敬親、書ヲ上リ、家臣木戸孝允ノ召命ヲ謝シ、其疾ヲ以テ、上京ノ延期ヲ請フ。……………五九

徳川茂承、再ヒ大阪敗兵ノ來投スル者ヲ、拒絶スルヲ上申ス。……………五九

十三日

新發田藩兵、白川越警守ノ命ヲ辭ス、郡山藩兵ヲ以テ之ニ代フ。……………五五三

大村純熙、木下俊愿、京ニ至ル。……………五五四

征討府、錦旗奉行四條隆謨ヲ軍事參謀兼中國四國征討總督、同奉行五條爲榮ヲ監軍ト爲ス、下參謀大山綱良之ニ屬ス。……………五五四

鷲尾隆聚、高野山ヲ發シ、進テ大阪ニ入ル○徳川茂承、使ヲ遣シ、守兵ノ無狀ヲ謝ス。……………五五五

徳川慶喜、板倉勝股ヲシテ、碓氷嶺ヲ嚴守セシム。……………五五五

參與助役長谷信成ヲ參與ト爲ス。……………五五六

十四日 内旨ヲ親子内親王ニ下シ、其緩急護衛ノ命ヲ、大久保忠寛ニ傳諭セシム。……………五五六

安藝、長門、備前三藩ニ令シ、山陽道諸藩ノ向背ヲ問ヒ、且、舊幕府ノ領地ヲ檢シ、本年租税ノ半ヲ蠲カシム。……………五五七

豊岡藩兵ヲシテ、桂御所ヲ守衛セシム。……………五五七

宇和島藩ニ令シ、藩士ノ參與ト爲スヘキ者ヲ薦舉セシム。……………五五七

池田茂政、日置忠尙、神戸驛争鬪ノ事ヲ上申ス。……………五五八

徳川茂承、老臣水野忠幹ヲ、大阪ニ出スノ情由ヲ陳疏ス。……………五五九

谷衛滋ノ老臣、京ニ至リ、衛滋入覲ノ途ニ上ルヲ稟シ、王事ニ從ハンコトヲ請フ○豊岡藩兵京ニ至ル。……………五五九

薩長二藩、特賜ノ慶米ヲ辭シ、以テ兵備ニ充テシコトヲ請フ。……………五六〇

備前藩兵、備中松山城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……………五六一

徳川慶喜、太田資美等ヲシテ、駿府城ヲ警守セシム。……………五六一

舊長崎奉行河津祐邦、上國ノ報ヲ聞キ、援テ各國領事ニ請フ○祐邦、後事ヲ筑肥二藩士ニ託シ、海路江戸ニ歸ル。……………五六二

十五日 天皇、元服ヲ加ヘ玉フ、詔シテ海内ニ大赦ス。……………五六七

嘉言親王ヲ二品ニ敘シ、尊秀親王ヲ博經ト復名セシメ、三品ニ敘ス。……………五六七

卷二十

大勢ヲ察シ、世變ニ隨ヒ、新ニ外國ト和親ヲ結フヲ布告ス。……………五七四

三道東征ノ師ヲ發スルヲ以テ、奥羽諸藩ニ命シ、六師ニ會セシム○宇和島藩ヲシテ、土佐藩松山討伐ノ兵ニ應援セシム。……………五七五

高槻藩ニ命シ、所管ノ倉庫ヲ發シテ、兵禍ニ罹リシ者ヲ賑恤セシム。……………五七六

徳川慶勝、歸藩シテ藩士ノ竊ニ徳川慶喜ニ應セントスル者ヲ鎮定センコトヲ請フ○慶勝ニ命シ、城守ヲ嚴ニシ、奸徒ヲ誅劔シ、且、附近ノ諸藩ヲ糾合セシメ、其子徳成ヲシテ、代リテ上京セシム。……………五七七

酒井忠義、京ニ至ル、命シテ其ノ子忠氏ヲ幽シ、忠義ヲシテ立功自贖セシム。……………五七八

建部政世ヲシテ、博經親王、醍醐忠順ノ衛兵ヲ出サシム。……………五八〇

出雲藩警衛ノ器仗、未タ具備セサルヲ以テ、姑ク服役ノ期ヲ緩ウセント請フ。……………五八〇

松平武聰ノ老臣、書ヲ上リ、粮食ヲ給シ、兵器ヲ借ランコトヲ請フ。……………五八一

小原忠寛、大垣ヨリ至リ、其藩事ヲ料理センコトヲ請ヒ、又討伐鎮撫ノ規律ヲ定メ、之ヲ諸道ノ軍ニ頒タンコトヲ建議ス。……………五八二

京極明徹、京ニ至ル○松平慶憲、一柳頼紹、老臣ヲシテ代リテ入京セシム。……………五八三

參與外國事務取調掛東久世通禧、各國公使ト神戸港ニ會シ、大政復古ヲ報スルノ國書ヲ致シ、且、神戸驛争鬪ノ事ヲ判理ス○各國公使、神戸驛ノ守兵ヲ撤シ、拘留ノ船艦ヲ解ク○薩長二藩兵ヲシテ神戸驛ヲ守ラシメ、阿波藩兵ノ兵庫警守ヲ罷ム。……………五八四

徳川慶喜、大久保忠禮ノ甲府城代ヲ罷メ、函根關ヲ嚴守セシム○書ヲ英國公使パークスニ致シ、條約履行ノ事、固ヨリ變替ナキヲ告ク。……………五九三

十六日 親王ヲ三公ノ上ニ班ス。……………五九五

宮堂上及ヒ諸官人ニ諭シ、舊習ヲ洗除シ、志操ヲ磨勵シテ實用ニ適セシム。……………五九五

九條道孝、近衛忠熙等十七人ノ朝參ヲ許ス。……………五九六

十七日

内旨ヲ佐竹義堯ニ下シ、奥羽諸藩ヲ糾合シテ東征ノ師ニ應援セシメ、其召命ヲ止ム。……………六〇〇

戸田氏共、京ニ至ル、命シテ伏見從役者ヲ幽シ、氏共ヲシテ立功自贖セシム。……………六〇一

郡山藩ノ請ヲ聽シ、平戸藩ト策應シテ關嶺ヲ守備セシム。……………六〇二

藤堂高邦、各所守衛ノ命ヲ奉シ、且其封、桑名ト相近キヲ以テ、京師ニ出兵スル能ハサルヲ稟ス。……………六〇三

九鬼隆備、京ニ至ル〇渡邊章綱、織田信成、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………六〇三

外國事務總裁嘉彰親王、書ヲ各國公使ニ與ヘ、交際ノ事、舊幕府締結ノ條約ヲ遵守スルヲ諭シ、且其本官ト爲リ、三條實美等三人、之ニ副タルヲ告ク。……………六〇三

各國公使、書ヲ東久世通禧ニ致シ、神戸爭鬪處分ノ目ヲ陳論ス。……………六〇四

備前藩兵、播磨姫路城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……………六〇五

上杉齊憲、西上ノ途、慶喜敗歸ノ報ヲ聞キテ歸還ス。……………六〇六

聯制ヲ定メ、神祇、内國、外國、海陸軍、會計、刑法、制度ノ七科ヲ置キ、事務總督及ヒ事務係ヲ補任ス。……………六〇六

蜂須賀茂韶ヲシテ、其父齊祐ノ遺封ヲ襲カシム。……………六〇六

鷲尾隆聚、大坂ヨリ至ル、召見シテ之ヲ慰勞ス〇隆聚及ヒ十津川郷士ニ金穀ヲ賜フ。……………六〇三

市橋長義ニ命シテ、日ニ朝堂ニ參セシム。……………六〇四

伊達慶邦ニ命シ、獨力ヲ以テ會津ヲ討タシム。……………六〇四

柳澤保申ニ命シ、泉涌寺及ヒ洞嶺ヲ警守シ、且、石山基正ノ衛兵ヲ出サシム。……………六〇五

小出英尙築城ノ請ヲ聽ス。……………六〇五

興福寺僧侶ニ命シ、假ニ春日社領及ヒ舊奈良奉行ノ事務ヲ管セシム。……………六〇五

井伊直憲、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ桑名征討ノ役ニ從ハシメ、且、四塚ノ守衛ヲ罷メンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……………六〇六

分部光貞、疾ヲ謝シ、且兵ヲ京師ニ出スヲ稟ス、又、雲母坂警守ノ命ヲ得ンコトヲ請フ〇平戸藩、長崎茂木口ノ戍兵ヲ撤センコトヲ請フ。……………六〇七

京極高富ノ老臣、京ニ至ル、命シテ速ニ京師ニ出兵セシム。……………六〇九

櫻井忠興、京師出兵ノ命ヲ止ム。……………六〇九

池田茂政、兵ヲ發シテ、旁近諸藩諸藩ノ向背ヲ問フヲ稟ス。……………六〇〇

松平頼聽、興正寺攝信ニ因テ、謝罪書ヲ上ル。……………六〇〇

東海道鎮撫總督橋本實梁、大津代官石原某ヲシテ舊ニ仍テ其地ヲ管セシム。……………六〇一

徳川慶喜、戸田光則、大河内輝照ヲシテ碓氷關ヲ警守セシム。……………六〇三

卷二十二

十八日

議定正親町三條實愛ヲ大坂ニ遣シ、征討大將軍ノ印ヲ、嘉彰親王ニ授ケ、且大將軍及ヒ將士ヲ犒フ。……………六三三

織田信親ノ請ヲ聽シ、塚原ノ守衛ヲ罷ム。……………六三三

山内豊信、書ヲ上リ、征討ノ命令、一途ニ出テンコトヲ請フ。……………六三四

海陸軍務總督島津忠義、上表シテ、其職及ヒ家臣西郷隆盛ノ參與ヲ辭ス。……………六三四

肥後藩ニ命シテ、延岡藩抗敵ノ狀ヲ責問セシム、肥後藩其供狀ヲ上ル。……………六三五

本多忠貫、鷲尾隆聚、其別邑ヲ收メシ狀ヲ具シ、奉上他意ナキノ意ヲ陳ス。……………六三六

石川成之等、京ニ至ル〇岩城隆邦、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム〇片桐貞篤、兵ヲ京師ニ出シ、仙石久利、京極高厚、山陰道鎮撫使ノ令ヲ以テ、兵ヲ生野ニ出スヲ稟ス。……………六三七

外國事務總督東久世通禧、書ヲ各國公使ニ贈リ、事務係岩下方平及ヒ伊藤博文等ヲシテ權ニ兵庫奉行ノ事ヲ管理セシムルヲ告ク。……………六三八

土藩士佐々木高行、薩藩士松方正義等、舊長崎奉行所ヲ收メテ會議所ヲ開キ、權ニ内外ノ事務ヲ管理シ、之ヲ京都ニ奏シ、又各國領事ニ告ク。……………六三九

舊幕府、諸藩ニ幽閉セル水戸降人ノ罪ヲ赦シ、之ヲ江戸ニ致サシム。……………六四〇

舊幕府麾下士勝義邦、官軍三道東下スルヲ聞キ、書ヲ沿道ノ諸侯ニ致シ、其兩端ヲ持スルヲ責ム。……………六四〇

卷二十三

十九日

假ニ會計事務裁判所ヲ學習院ニ置ク。……………六四一

參與廣澤直臣、中根師質、神山君風ニ、内國事務掛ヲ兼ネシメ、直臣ノ海陸軍務掛ヲ罷ム。……………六五一

池田慶徳、引咎ノ請ヲ慰籍シ、命シテ入觀セシム。……………六五二

徳川慶篤ニ命シ、鈴木重棟、市川弘美等ヲ罰シテ、藩屏ノ職ヲ盡サシメ、其泉涌寺守衛ヲ罷ム。……………六五三

都下ノ居民、賊徒ノ兵仗器具ヲ藏スルモノハ、悉ク之ヲ市中取締所ニ納メシム。……………六五三

備前藩ノ老臣日置忠尙ヲ召ス。……………六五三

永井直諒ニ命シ、舊ニ仍リテ舊幕府領地ヲ管シ、且昨年負欠ノ數ヲ錄上セシム。……………六五三

九鬼隆義ニ命シ、舊ニ仍リテ神崎川ヲ警守セシム○稻田邦植ノ家臣、書ヲ上リ、西ノ宮ノ守衛ヲ罷メ、專
ラ高松應援ニ從バンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……………六五四

毛利敬親父子、不日、坂城討伐ノ軍ヲ發スルヲ稟ス。……………六五五

稻葉久通、織田長易、兵ヲ京師ニ出ス○長易、又、鷲尾隆聚ノ令ヲ以テ、守兵ヲ慈恩寺村ニ置クヲ稟ス。……………六五六

金穀出納所三井三郎助、島田八郎左衛門、小野善助、金壹萬圓ヲ獻ス。……………六五九

脇坂安斐、谷衛滋、永井直哉京ニ至ル。……………六五九

長門藩兵、松平慶倫ノ向背ヲ問フ、慶倫ノ老臣、勤王ノ誓書ヲ致ス。……………六六〇

徳川慶喜、諸藩ノ老臣ヲ江戸城ニ召シ、救解ノコトヲ託ス○松平容保等、慶喜ヲ勸メテ再舉ヲ謀シム、
慶喜從ハス。……………六六〇

伊達宗城等大坂ヨリ至リ、各國公使神戸ノ事ヲ論セシ書ヲ上ル、廷議、遂ニ其言ニ從フ○東久世通禧
ニ命シ、之ヲ各國公使ニ報シ、又池田茂政ニ諭ス。……………六六五

戸田思至ヲ參與兼會計事務掛ト爲シ、參與榊取素彦ニ制度寮事務掛ヲ兼ネシム。……………六六七

參與酒井忠温ヲ罷メ、北陸道鎮撫使ニ隨ハシム○小原忠寛ニ命シ、大垣ニ赴キ、官軍ノ糧食ヲ措辦セシム。……………六六八

竹澤邦光ヲ美濃ニ遣ハス○郡上藩ニ令シ、邦光ト謀リ、附近ノ舊幕府領地及ヒ士民ノ向背ヲ按檢シテ
鎮撫使ヲ迎ヘシム。……………六六九

加藤明實、再ヒ京ニ至ル、命シテ内侍所及ヒ建春門ヲ守ラシメ、新谷藩ノ守衛ヲ罷ム。……………六七〇

廿一日

綾部藩ヲシテ舊ニ仍テ塚原口ヲ守衛セシム○平戸藩、征討府ノ令ヲ以テ、關嶺守兵ヲ奈良ニ移スヲ稟ス。……………六七〇

熾仁親王、牛車ノ永宣旨ヲ辭ス。……………六七三

松平慶倫、書ヲ上リ、備前藩兵來討ノ聞アルヲ稟訴シ、其奉命ノ狀ヲ得ンコトヲ請フ。……………六七三

本多忠鄰、京ニ至ル○大河内信古、遠山友祿、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○秋元禮朝ノ家臣、河内
ノ別邑ニ在ル者、役夫ヲ發シテ事ニ從ハンコトヲ請フ。……………六七三

北陸道鎮撫總督高倉永祐、副總督四條隆平京師ヲ發ス。……………六七四

中國四國征討總督四條隆謨、明石城ニ至ル。……………六七四

徳川慶勝、藩ニ歸リ、渡邊新左衛門等ヲ誅ス。……………六七四

松平頼聰、罪臣二人ノ首級ヲ征討府ニ獻シ、城ヲ出テ佛寺ニ屏居ス○土佐藩兵、高松城ヲ拘ヘテ之ヲ下ス。……………六七七

花山院家理、浪徒ヲ率キテ周防室積港ニ至ル、其黨肥後天草、豊前四日市ヲ鹵掠ス○長門藩、吏ヲ室積
ニ遣リ、家理ヲ拘留シ、長崎會議所モ、亦兵ヲ天草ニ遣リ之ヲ鎮撫ス。……………六七七

卷二十四

議事條規、及ヒ朝參放衙時限休暇日ヲ定ム。……………六八四

臺鎮ヲ大和ニ置キ、參與久我通久之ヲ督ス○東園基敬ヲ參與ト爲ス。……………六八四

池田慶徳ノ請ヒニヨリ、支族池田喜通ヲシテ入觀セシム○小笠原貞孚ノ請ヲ聽シ、老臣ヲシテ代リテ
京ニ至ラシメ、且兵ヲ京師ニ出サシム。……………六八五

加藤明實、大河内信古、東海道鎮撫使橋本實梁ノ令ヲ以テ、兵ヲ桑名ニ出スヲ稟ス○建部政世ノ請ヲ
聽シ、姫路征伐ニ應援スルヲ以テ、在京ノ兵ヲ撤セシム。……………六八五

毛利敬親父子、上表シテ、復官ノ恩ヲ謝シ、藩内兵禍後ノ爲、入觀遲緩スルヲ稟シ、且其占有セル豊前
石見ノ地ヲ、上ランコトヲ請フ。……………六八七

松平武聰、書ヲ上リ、屏居罪ヲ待ツヲ稟シ、且老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………六八九

東山道鎮撫總督岩倉具定、副總督岩倉具經京師ヲ發ス。……………六九〇

廿二日

外國事務總督東久世通禧、各國公使ニ移書シ、其國人ノ、兵器船艦ヲ、德川慶喜及ヒ其臣屬ニ販賣貸與スルヲ禁ス。……………六九〇

鎮臺ヲ大坂、兵庫ニ置キ、醍醐忠順ヲ參與兼内國事務掛ト爲シ、外國事務總督伊達宗城ト共ニ、大坂鎮撫臺ヲ督シ、外國事務總督東久世通禧ノ軍事參謀ヲ罷メ、兵庫鎮臺ヲ督セシム、忠順、内國事務掛ヲ辭ス。……………六九一

大宮御所經營課金、二月ヲ限リテ之ヲ出サシム。……………六九二

松平直克ヲ召ス。……………六九三

郡山藩ヲシテ、植松雅言等五人ノ衛兵ヲ出サシム。……………六九四

德川茂承、書ヲ上リ、更ニ入京ノ命ヲ請ヒ、且藩兵ヲ以テ東征ノ先鋒ト爲サンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……………六九五

松平定安、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、且出雲附近地方檢査ノ命ヲ得ンコトヲ請フ。……………六九六

松平慶倫、再ヒ書ヲ上リ、備前藩兵、東上ヲ止ムルヲ稟シ、入覲ノ朝命ヲ得ンコトヲ請フ。……………六九七

竹澤邦光、美濃等松ヲ收メ、其狀ヲ上ル。……………六九八

澤宣嘉、長門ヨリ至ル。……………六九九

備前藩兵、津山城ニ至リ、其向背ヲ問フ、松平慶倫及ヒ老臣等、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。……………七〇〇

德川慶喜、米國公使ノ要求ニ應シ、討薩表ヲ贈ル。……………七〇一

議定嘉言親王ニ内國事務總督、博經親王ニ會計事務總督ヲ兼ネシム○寺島宗則、町田久成、五氏友厚ヲ參與兼外國事務掛ト爲シ、宗則ヲ兵庫ニ、久成ヲ長崎ニ派遣ス○木村貞通ヲ參與刑法事務掛ト爲ス。……………七〇二

暗殺ヲ嚴禁ス。……………七〇三

參與會計事務掛三岡公正ノ建議ヲ納レ、公正ヲシテ紙幣製造ノ事ヲ掌ラシム。……………七〇四

池田慶徳ノ請ヲ聽シ、山陰道公文布達ノ事ヲ專掌セシメ、松平定安ノ分管ヲ罷ム。……………七〇五

本願寺光澤ノ請ヲ聽シ、近畿ノ門徒ヲ募化セシム。……………七〇六

東本願寺光勝、書ヲ上リ、滋野井公壽、其門徒兵及ヒ糧食ヲ徵求セシ狀ヲ稟ス○光勝ニ命シ、東海北陸二道官軍ノ糧食ヲ措辦セシム。……………七〇七

廿三日

廿四日

池田茂政、疾ヲ以テ、其弟政實ヲシテ松山征討ノ事ヲ督セシメシヲ稟シ、且備中、美作諸藩、歸順ノ狀及ヒ松山藩ノ老臣熊田短芳自及ノ事ヲ奏ス。……………七〇八

織田信成、鷲尾隆聚ノ令ヲ以テ、兵ヲ慈恩寺村ニ出スヲ稟ス。……………七〇九

伊東長壽、京ニ至ル○五島盛徳、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………七一〇

東海道鎮撫總督橋本實梁、四日市ニ至ル○松平定教、及ヒ老臣等、總督府ニ至リ、罪ヲ謝ス、命シテ定教ヲ法泉寺ニ幽シ、龜山藩兵ヲシテ監守セシム。……………七一一

山陰道鎮撫總督西園寺公望、宮津城ニ至ル、其老臣等、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。……………七一二

德川慶喜、大給乘護ノ陸軍總裁ヲ罷ム。……………七一三

成瀬正肥、竹腰正舊、安藤直裕、水野忠幹、中山信徴ヲ藩屏ニ列ス。……………七一四

參與土倉正彦ニ、軍務掛ヲ兼ネシム。……………七一五

特旨ヲ以テ、島津忠義、毛利敬親ニ金各二萬兩、德川徳成、淺野茂長、松平茂昭、山内豊範、伊達宗徳ニ各一萬五千兩ヲ賜フ。……………七一六

綾小路俊實ニ命シ、大原氏ニ復歸シ、重徳ノ嗣タラシム。……………七一七

宇和島藩ノ宜秋門及ヒ御旗守衛ヲ罷メ、阿波藩ヲ以テ之ニ代フ。……………七一八

郡山藩ニ令シ、東山基敬ノ衛兵ヲ出サシム。……………七一九

清水谷公考ヲ召シテ、私ニ金ヲ叡山ニ募ルヲ責メ、其罪ヲ問ハス。……………七二〇

島津忠義ノ請ヲ徳シ、英國ノ醫生ヲ京ニ召シテ、兵士ノ瘡痍ヲ治セシム。……………七二一

織田長易、京ニ至ル。……………七二二

中國四國追討總督四條隆壽、姫路城ヲ檢シ、備前藩ヲシテ之ヲ監守セシム。……………七二三

長門藩兵、花山院家理ノ黨ヲ馬城峰ニ討テ之ヲ平ケ、旁近ノ諸藩ニ移檄シテ、其逋逃者ヲ逮捕セシム。……………七二四

德川慶喜、再ヒ榊原政敬ヲシテ、東叡山ヲ警守セシム。……………七二五

廿五日 澤宜嘉ヲ參與兼九州鎮撫總督外國事務總督、木戸孝允ヲ總裁局顧問ト爲ス○鷲尾隆聚、及ヒ伊藤博文、林通顯ヲ參與ト爲シ、博文ニ外國事務係、通顯ニ海陸軍務掛ヲ兼メシム。……………七三
 苞直私謁ノ禁ヲ嚴ニス。……………七四
 黒田齊溥、鍋島茂實ニ命シ、舊ニ依リテ、長崎ヲ警守セシム。……………七四
 上杉齊憲、南部利剛、佐竹義堯ニ命シ、伊達慶邦ニ應援シテ會津ヲ討タシム。……………七四
 分部光貞ノ請ヲ聽シ、在京ノ兵ヲ撤シテ、専ラ叡山附近ヲ警守シ、小泉藩兵ニ八幡山ノ間道ヲ警守セシム○因幡藩ヲシテ、長谷信篤ノ衛兵ヲ出サシム。……………七五
 參與大久保利通、遷都ノ議ヲ上ル。……………七六
 舊山田奉行本多忠實、伊勢神宮及ヒ三別宮遷宮ノ經費ヲ稟請シ、尋テ三別宮ノ費ヲ獻センコトヲ請フ。……………七七
 徳川徳成、柳生俊益、京ニ至ル○黒田齊溥、疾ヲ謝シ、其子慶賢ヲシテ入謁セシメントスルヲ稟ス。……………七〇
 徳川慶喜、江戸ノ諸郭門ヲ開キ、之ヲ各國書記官ニ報ス。……………七〇
 各國公使、其國人ニ局外中立ヲ布告ス。……………七二
 大村純熙ニ命シ、九州鎮撫總督ト謀リ、長崎ヲ警守セシム。……………七六
 高松實村、私ニ京師ヲ去リ、兵ヲ甲信ノ間ニ募ル、其父保實ニ命シテ、之ヲ召還セシム。……………七六
 木下利恭、京ニ至リ、青山忠敏、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○織田長易、大和鎮臺ヲ置クヲ以テ、其事ニ從ハンコトヲ請フ。……………七六
 前橋藩、竊ニ同志ト議シ、徳川慶喜ヲシテ謝罪セシメ、社稷ヲ存セント謀ル○松平慶永、岩倉具視ノ旨ヲ受ケテ、書ヲ前橋藩ニ致シ、其事ヲ陳論ス。……………七七
 長門藩、征討總督ノ令ヲ以テ、山陽ノ兵ヲ轉シテ、松山征討ノ先鋒タルヲ稟ス。……………七六
 北陸道鎮撫總督高倉永祐、小濱ニ至ル、城主酒井忠氏ノ老臣、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。……………七六
 島津久光、檄ヲ西海道諸藩ニ傳ヘテ、其方向ヲ問フ。……………七六
 徳川慶喜、公議所ヲ置キ、其下ニ令シテ各所見ヲ陳シ、家政ヲ匡救セシム。……………七六

廿七日

太政官代ヲ一條城ニ移ス。……………七四
 參與大久保利通ヲ、總裁局顧問ト爲ス。……………七四
 大阪鎮臺ヲ改メテ裁判所ト爲シ、醍醐忠順ヲ總督、伊達宗城ヲ副總督ト爲ス○宗城ニ命シ、忠順ノ隨從及ヒ衛兵ヲ出サシム○岸和田藩ニ命シ、大坂市中ヲ巡警セシム。……………七四
 東征ヲ議スルヲ以テ、大將軍嘉彰親王ヲ召還ス○滋野井公壽ヲ召ス。……………七四
 東海、東山、北陸三道鎮撫使及ヒ淺野茂長等六人ニ命シ、舊幕府領地ノ東海、東山、北陸、山陽、山陰、南海ニ在ル者ヲ檢シ、其人民ヲ安撫シ、圖録ヲ上ラシム。……………七五
 諸藩ノ九門警衛及ヒ征討兵ヲシテ、菊章ノ旗幕ヲ用ヒシム○諸侯ノ松平氏ヲ冒稱スル者ハ、其本氏ニ復セシム。……………七五
 池田茂政ニ令シ、其沒收セシ所ノ舊幕府貢米ヲ、大坂ニ輸送セシム。……………七五
 松平慶倫ノ請ヲ聽シ、命シテ入謁セシメ、又之ヲ池田茂政ニ諭ス。……………七五
 細川慶順ニ命シ、姑ク舊ニ仍テ、豊後ノ四郡及ヒ日田、天草ヲ守衛セシム。……………七五
 毛利敬親、其子廣封ヲシテ兵ヲ率キテ命ヲ闕下ニ待シムルヲ稟ス○敬親、上書シテ、諸藩ノ方向ヲ一ニシ、復古ノ基本立テ、而ル後、徳川氏ヲ處置センコトヲ建議ス。……………七五
 徳川慶喜、書ヲ松平慶永、山内豊信等ニ致シテ、解救ヲ請フ、慶永、其書ヲ上ル。……………七五
 池田茂政、松平武聰ノ家臣等、大坂ヨリ敗歸シ、其封内金岡港ニ至ルヲ以テ、之ヲ拘留スルヲ稟ス。……………七五
 出雲藩兵、京ニ至ル○伊東長齋、兵ヲ姫路ニ出スヲ稟ス。……………七五
 東山道總督岩倉具定、近江三上ヲ收メ、加藤明實ヲシテ其地ヲ管理セシム。……………七五
 中國四國征討總督四條隆謨、大坂ニ歸ル。……………七五
 土佐藩兵、伊豫松山城ヲ拘ヘテ之ヲ下ス。……………七五
 百官ヲ會シテ、東征ノ議ヲ決ス。……………七五

廿八日

廿九日

參與井上馨ヲ外國事務掛ト爲シ、九州鎮撫使ニ屬セシム。……………七五二

毛利敬親ニ命シ、姑ク豊石占有ノ地ヲ管セシム。……………七五三

大將軍嘉彰親王、大坂ヨリ凱旋シ、錦旗節刀ヲ上リ、其狀ヲ奏ス。……………七五三

松平定安、其管地隱岐國租稅貢納ノ方ヲ稟請ス、命シテ、金ハ會計裁判所ニ入レ、穀ハ大坂ニ輸サシム。……………七五三

池田茂政、米五千石ヲ獻セント請フ、之ヲ聽ス。……………七五四

山名義濟ノ請ヲ聽シ、命シテ入觀セシム。……………七五五

長門藩ノ請ヲ聽シ、時々兵ヲ二條河東ニ操シ、且新選組ノ兵器、東本願寺ニ在ル物ヲ交附ス。……………七五五

伊達宗城ノ請ヲ聽シ、大坂ノ舊奉行邸及ヒ桑名邸ヲ貸與ス。……………七五七

松平武聰、再ヒ書ヲ上リ、其臣隸ノ伏見ノ事ニ與ルヲ以テ、屏居罪ヲ待ツヲ稟シ、其情ヲ陳疏ス。……………七五七

酒井忠義、疾ヲ以テ、再ヒ從軍遲延ヲ謝ス。……………七六〇

酒井忠惇ノ老臣、書ヲ上リ、忠惇ノ父忠績ヲ上京セシメ、且藩兵ヲ出シテ謝罪ノ實効ヲ表センコトヲ請フ。……………七六〇

柳澤保申、再ヒ京ニ至ル。……………七六一

東海道鎮撫總督橋本實梁、桑名城ヲ收メ、尾張、津二藩ヲシテ之ヲ管セシム。……………七六一

吉井德春ヲ、參與兼海陸軍務掛ト爲ス。……………七六一

福知山、出石、龍野三藩ニ命シ、假ニ舊幕府領地ノ其封内旁近ニ在ルモノヲ管セシム、尋テ福知山、出石、二藩ヲ罷ム。……………七六一

肥後、筑前、島原三藩ニ命シ、花山院家理ノ餘黨ヲ追捕セシム。……………七六一

會計事務總督中御門經之、淺野茂勳、京坂ノ豪商ヲ召シ、度支ノ事ニ服セシムルヲ諭シ、且紙幣準備金三百萬兩ヲ課ス。……………七六一

東海、東山二道鎮撫使ニ令シ、横濱居留ノ外國人ト實際ヲ開クコト勿ラシム。……………七六一

池田茂政、再ヒ松山降伏ノ狀、及ヒ其藩情ヲ陳シ、且措置ノ目ヲ稟請ス。……………七六一

島津忠義、日田、長崎地方鎮定ニヨリ、藩兵ヲ撤スルヲ稟ス。○青山忠敏、山陰道鎮撫使所屬ノ兵ヲ罷ム

是月

ルヲ稟ス。……………七六九

德川慶喜、再ヒ書ヲ松平慶永等ニ致シ、退隱ノ意ヲ陳シ、救解ヲ請フ、松平慶永、其書ヲ上ル。……………七七〇

松平定安、京ニ至リ、大村純熙、京ヲ辭シテ長崎ニ赴ク。○本莊道美、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、三宅康保、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……………七七一

德川慶勝、使ヲ參遠駿信甲野七國ニ遣シ、諸藩以下ノ向背ヲ問ヒ、其老臣ヲ名古屋ニ來會セシム。○松平乘秩ノ老臣、連署シテ勤王ノ證書ヲ致ス。……………七七一

德川慶喜、榊原政敬ヲ甲府城代ト爲ス。……………七七一

酒井忠經、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……………七七一

卷二十七

朔日

大和鎮臺ヲ廢シ、久我通久ヲ大和鎮撫總督兼內國事務掛ト爲ス。○內國顧問木戶孝允ニ、外國事務掛ヲ兼ネシメ大坂ニ派遣ス。……………七七一

再ヒ、松平慶倫ヲ京師ニ召ス。……………七七一

渡邊章綱ヲシテ、和泉海岸ノ警守ヲ撤セシム。……………七七一

土御門晴雄ノ請ヲ許シ、江戸ノ天文方ヲ京都ニ移シ、曆法授時ノ事ヲ管セシム。……………七七七

佐竹義堯ノ老臣京師ニ在ル者、書ヲ上リテ、本藩ノ討會應援ノ事ヲ申稟ス、令シテ、再命ヲ俟タシム。……………七七七

日置忠尙、再ヒ神戸爭鬪ノ事ヲ上陳ス。……………七七八

池田慶德、支族ノ江戸ニ在ル者ヲシテ、力ヲ王事ニ効サンコトヲ請フ。……………七七八

關長克、兵ヲ出シテ、備中巡撫ノ備前藩兵ニ屬セシムルヲ稟ス。……………七七八

丹羽氏中、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシムルヲ稟ス。……………七八〇

東山道鎮撫總督岩倉具定、大垣ニ至ル。……………七八〇

池田慶德、使ヲ出雲ニ遣シ、松平定安ノ向背ヲ問フ、留守ノ老臣等、奉命貳ナキノ證書ヲ致ス。○山陰道

鎮撫總督西園寺公望鳥取城ニ至ル、定安ノ子直應、勤王ノ誓書ヲ呈ス。……………七〇〇

小笠原長國、老臣ヲ長崎會議所ニ遣リ、其子長行罪ヲ犯スヲ以テ、之ヲ廢シ、立功自贖センコトヲ請フ。……………七〇〇

徳川慶喜、阿部正靜ヲ陸奥白河ニ移封シ、棚倉城ヲ管セシム。……………七〇一

松平慶永、書ヲ徳川慶喜ニ致シ、速ニ謝罪ノ意ヲ表シ、朝命ヲ待タンコトヲ勸ム。……………七〇一

太田資美、慶喜ノ命ヲ以テ、駿府城ヲ守リ、疾ヲ稱シテ、朝召ヲ辭ス。○慶喜謝罪ノ狀ヲ聞キ、從兵ヲ留メテ其邑ニ歸ル。……………七〇二

二 日

近衛忠房ヲ神祇事務總督、鷹司輔熙ヲ制度寮事務總督、小松清廉ヲ總裁局顧問ト爲シ、顧問參與大久保利通ノ顧問ヲ罷ム。……………七〇九

兵庫鎮臺ヲ改メテ裁判所ト爲シ、東久世通禧ヲ總督ト爲ス。○長崎裁判所ヲ置キ、九州鎮撫總督澤宣嘉ニ、其總督ヲ兼ネシム。……………七〇〇

池田茂政及ヒ日置忠尙ニ命シ、外人ト神戸驛ニ爭鬪セシ隊長ヲ兵庫ニ押送シテ自刃セシメ且、忠尙ニ謹慎ヲ命ス。……………七〇〇

備前藩兵ノ西ノ宮警守ヲ罷メ、久留米藩兵ヲ以テ之ニ代フ。○郡山藩ノ西洞院信愛ノ衛兵ヲ罷メ、愛宕通旭ノ衛兵ト爲ス。○備前藩兵ヲ京師ニ徵ス。……………七〇三

大村純熙ニ申命シ、長崎警守ノ事ハ、裁判所總督ノ指揮ヲ受ケシム。……………七〇三

橋本關門警守ノ加賀藩兵、外國人經過措置ノ事ヲ稟請ス。……………七〇四

三浦弘次ノ家臣、弘次、藩兵ヲ發シ、美作駐在ノ備前藩兵ニ屬スルヲ稟ス。……………七〇四

鍋島茂實、其父齊正ニ代リテ京ニ至ル。……………七〇五

松平喜徳、書ヲ上杉齊憲ニ致シ、其父容保ヲ救解センコトヲ請フ。……………七〇五

三 日

天皇、太政官代ニ臨ミ、親征及ヒ大總督ヲ置クノ義ヲ定メ、列藩ニ詔シテ、軍備ヲ爲サシム。……………七〇五

職制ヲ更定シ、七科ヲ改メテ總裁局及ヒ神祇、内國、外國、軍防、會計、刑法、制度ノ七局ト爲ス。……………七〇六

議定中山忠能、正親町三條實愛ニ輔弼ヲ兼ネ、參與萬里小路博房ニ、制度事務局輔ヲ兼ネシム。……………七〇六

復古記

凡例

此書、慶應三年丁卯十月十四日徳川氏ノ政權奉還ニ起リ、明治元年戊辰十月二十八日東征大總督ノ解任ニ終ル、分テ若干卷ト爲シ、題シテ復古記ト曰フ、別ニ外記若干卷ヲ附シ、以テ征討ノ顛末ヲ詳ニス。

此書、日ヲ以テ月ニ繫ケ、月ヲ以テ年ニ繫ケ、毎條其要ヲ掲ケテ綱ト爲シ、原文ヲ録シテ目ト爲ス、要其實ヲ失ハサルニ在リ、故ニ原文ハ、敢テ一字ヲ加損セス。

復古ノ際、典章未タ備ラス、繼ニ兵革ヲ以テス、朝廷ノ記載、徵スルニ足モノナシ、間マ三職ノ手録アリト雖モ、大率斷簡零紙ニ係ル、其餘ハ僅ニ言渡之記、非藏人日記アルノミ、戊辰二月、始テ太政官日誌、職務進退録アリ、三月ニ至リ、官中日記アリ、故ヲ以テ二月以前ハ、諸藩記、華族家記ヲ掇拾シ、僅ニ其梗概ヲ知ルヲ得タリ、三職手録、癸酉ノ災ニ罹リ、今存セス、爾後百官履歴表、鎮將府日誌、鎮臺日誌、諸道總督記、北征日誌、外務省記、各人ノ私記等ヲ參用ス、皆其出處ヲ註シ、事實ノ疑ハシキハ、之ヲ本人ニ質シ、或ハ考按ヲ附ス、月日異同アルハ、其最先ナル者ニ從ヒ、日ヲ闕クハ月末ニ收ム。

凡ソ官職任罷、太政官ハ、參與以上、諸官ハ、長次官、府縣ハ、長官ヲ限ル、但事故アルモノ、及ヒ閏四月改正以前、辦事判事等、參與ノ兼任ニ係ル者ハ、此限ニ在ラス。

凡ソ官職ヲ解ク、辭否ヲ問ハス、概シテ罷ト書ス、其事ニ坐スル者ハ、免ト書ス。

薨卒ハ、親王及ヒ在官ノ者任罷ヲ載ス、ル者ニ止ル、ヲ限ル、餘ハ皆略ス、勅使臨弔、贈位恩典等ノ事アルハ、此限ニ在ラス。

人名始テ見ユル、其貫籍ヲ註ス、諸侯ハ、藩名ヲ註ス、藩名ハ當時ノ稱ヲ用フ、加賀藩、薩摩藩、肥後藩ノ類、人名ハ概シテ名ヲ書シ、其詳ナラサルハ某ト書シ、通稱ハ其下ニ註ス。

復古記 凡例

宮、堂上、諸侯等ノ通稱ナキ者ハ、宮號若クハ官名ヲ填ス、年少ナレハ、姓名ハ必ス氏ヲ書シ、氏名皆當時ノ稱ヲ用フ、後ニ改ムル者ハ、其初稱ヲ註ス、但諸侯ノ松平氏ヲ冒スル、極テ混淆シ易シ、故ニ概シテ本氏ニ從ヒ、之ヲ註記ス。宮、堂上、ト曰ヒ、親王、公卿ト曰フ、指ス所少異アリ、故ニ其原文ニ從ヒ、敢テ彼此ヲ混合セス。凡ソ幕府ヲ書スル、丁卯十二月九日以後ハ、舊ノ字ヲ加フ。

取締、取扱、某掛、某心得、某加勢、某口總督、某改所、某會所、永預、永盤居、謹慎、差控、閉門、石高、現石、本山、本寺、後見、判物等ノ字、雅馴ナラス、然レトモ其名詞ニ係ルヲ以テ、敢テ改易セス。

明治九年六月

引用書目

- | | | | |
|-------------------------|------------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 公卿補任 | 職務進退錄 <small>京都、東京二種</small> | 官中日記 <small>同上</small> | 別本官中日記 |
| 太政官日誌 <small>刻本</small> | 行政官記 | 行政官傳達所日記 | 軍務官記 |
| 三職局叢書 | 總裁局記 | 總裁局叢書 | 參與局叢書 |
| 辦事局記 | 辦事局叢書 | 內國事務局記 | 內國事務局叢書 |
| 外國事務局筆記 | 外國事務局叢書 | 軍防局諸達留 | 刑法事務局叢書 |
| 制度事務局叢書 | 行政官叢書 | 留守官記 | 三條家叢書 |
| 林和靖間日記 | 言渡之記 | 非藏人日記 | 執次日記 |
| 大内記新作留 | 諸陵御祭典略抄 | 祭儀錄 | 公文錄御即位式 |
| 百官履歷表 | 驛遞司布告留 | 二條攝政記 | 徳川慶喜實記 |
| 嵯峨實愛切紙留 | 嵯峨實愛手記 | 日野資宗記 | 土御門晴雄日時勘文記 |
| 春嶽私記 | 皇族家記 <small>八種</small> | 皇族家譜 <small>二種</small> | 靜寬院宮記 |
| 靜寬院宮日誌 | 靜寬院宮上臈日記 | 華族家記 <small>三百五</small> | 華族家譜 <small>四百四</small> |
| 諸藩藩記 <small>百四十</small> | 指華入京日載 | 輦下日載 | 木戸孝允奏議錄 |
| 木戸孝允手記摘要 | 甲東叢書 | 佐々木高行天草事記 | 香川敬三私記 |
| 水萍貽孫錄 | 復古功臣事蹟 <small>二十</small> | 軍事勤勞事蹟 <small>四十</small> | 諸家從軍事蹟 <small>六</small> |
| 諸藩戰死名簿 | 各藩戰功錄 | 招魂社名簿 | 慶明雜錄 |
| 晚翠樓叢書 | 坤儀革正錄 | 吉田溫苗見聞錄 | 御東巡日錄 |

復古記

引用書目

復古記

引用書目

- 東巡日誌以下十一種刻本
- 鎮將府日誌
- 公議所日誌
- 內務省記
- 海軍省記
- 宮内省記
- 京都府記
- 三府史料
- 日光山東照宮記
- 延曆寺記
- 寬永寺記
- 東京開成學校記錄
- 歲入出決算報告書
- 甲鐵艦收領顛末
- 逸事史補
- 橋本實麗手記
- 鈴木重嶺手記
- 竹內孫助筆記
- 大久保忠告筆記
- 行在所日誌
- 東京城日誌
- 市政日誌
- 大藏省記
- 文部省記
- 式部寮記
- 大坂府記
- 諸縣史料
- 本願寺記
- 興福寺記
- 自證院記
- 憲法類編以下五種刻本
- 工部省統計志
- 朝鮮交際始末
- 史館叢錄
- 五辻安仲手記
- 田中光儀手記
- 江川英武筆記
- 黑川秀波筆記
- 江城日誌
- 東征日誌
- 金川府日誌
- 陸軍省記
- 教部省記
- 東京府記
- 長崎縣記
- 男山八幡宮記
- 東本願寺記
- 高野山金剛峯寺記
- 諸侯參罷錄
- 文部省第一年報
- 海軍省報告書
- 朝鮮尋交始末
- 舊幕府記錄
- 河田景與手記
- 大槻文彦筆記
- 井東守常筆記
- 遠山正功筆記
- 鎮臺日誌
- 北征日誌
- 外務省記
- 陸軍省叢書
- 司法省記
- 東京府日誌
- 滋賀縣記
- 八坂神社記
- 興正寺記
- 興山寺記
- 華族明細短冊
- 條約類纂
- 戊辰局外中立顛末
- 印影叢
- 勝安芳日記一名海舟日記抄
- 吉井正澄手記
- 淀瀨加藤某筆記
- 伊藤祐將筆記
- 南摩綱紀筆記

各人履歷書

- 東征紀略
- 海軍先鋒記
- 總房鎮撫日誌
- 醍醐忠敬手記
- 橋本實梁私記
- 清水谷公考青森總督日記
- 慶應出軍雜記
- 鹽小路光孚筆記
- 東山道戰記
- 慶應兵謀秘錄
- 義團錄
- 雜書八種
- 通計 一千二百十二種

各人手記

- 東海道先鋒記
- 東北遊擊軍將府日誌
- 平潟口總督日誌
- 四條隆謨諸道記概略
- 柳原前光輒誌
- 西四辻公業私記
- 京畿討幕錄
- 稻田邦植出兵記
- 東山新聞
- 奧越戰爭日記
- 赤報記

各人筆記

- 東山道總督府諸記錄
- 甲斐鎮撫日誌
- 澤爲量征討記錄附奧羽鎮撫使日誌
- 大原重實手記附海軍先鋒日誌
- 正親町公董陣中日誌
- 高野山出張概略
- 戊辰征戰紀略
- 鍋島茂昌陣中日記
- 米澤藩戊辰事情概旨
- 荷生日記
- 若松記稿

東征總督記

- 北陸道先鋒記
- 甲州鎮撫概略
- 澤爲量筆記
- 四條隆平北征紀事
- 鷲尾隆聚奧羽追討日誌
- 慶應出軍戰狀
- 伊地知正治日記
- 津輕舊記
- 戊辰新聞記
- 斃休錄
- 麥叢錄

○十月

十四日、征夷大將軍正二位内大臣兼右近衛大將德川慶喜、上表シテ、政權ヲ奉還セント請フ。

臣慶喜謹テ 皇國時運之沿革ヲ考候ニ、昔 王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平之亂、政權武門ニ移テヨリ、祖宗ニ至リ、更ニ 寵眷ヲ蒙リ、二百餘年、子孫相受、臣其職ヲ奉スト雖モ、政刑當ヲ失フコト不少、今日之形勢ニ至候モ、畢竟薄德之所致、不堪慙懼候、況ヤ當今外國之交際日ニ盛ナルニヨリ、愈 朝權一途ニ出不申候而者、綱紀難立候間、從來之舊習ヲ改メ、政權ヲ 朝廷ニ奉歸、廣ク天下ノ公議ヲ盡シ、 聖斷ヲ仰キ、同心協力、共ニ 皇國ヲ保護仕候得ハ、必ス海外萬國ト可並立候、臣慶喜國家ニ所盡、是ニ不過ト奉存候、乍去、猶見込之儀モ有之候得者、可申聞旨、諸候へ相達置候、依之、此段謹テ奏聞仕候、以上詢。

十月十四日

慶

喜

○十三日慶喜諸藩ニ示ス書

我 皇國時運ノ沿革ヲ觀ルニ、昔 王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平ノ亂、政權武門ニ移テヨリ、我祖宗ニ至リ、更ニ 寵眷ヲ蒙リ、二百餘年、子孫相受、我其職ヲ奉スト雖モ、政刑當ヲ失フ不少、今日ノ形勢ニ至リ候モ、畢竟薄德ノ所致、不堪慙懼候、況ヤ當今外國ノ交際日ニ盛ナルニヨリ、愈 朝權一途ニ出不候テハ、綱紀難立候間、從來之舊習ヲ改メ、政權ヲ 朝廷ニ歸シ、廣ク天下ノ公議ヲ盡シ、 聖斷ヲ仰キ、同心協力、共ニ 皇國ヲ保護セハ、必海外萬國ト可並立、我國家ニ所盡不過之候、乍去、猶見込之儀モ有之候者、聊忌諱ヲ不憚可申聞候。 德川慶喜實記 細川護久家記

○同日老中副書

今般上意之趣ハ、當今宇内之形勢ヲ御洞察被遊候處、外國交通之道盛ニ開ニ至リ、御政權ニ途ニ相分候而者、 皇國之御綱

紀難相立ニ付、永久之治安ヲ被爲計候遠大之御深慮ヨリ被 仰出候儀ニ而、誠以奉感佩候、殊ニ從前之御過失ヲ御一身ニ御引受、御薄德ヲ被爲表、御政權ヲ 朝廷へ御歸被遊候御文言等、臣子之身分ヨリ奉伺候得者、何共以奉恐入、涕泣之至候、就而者、此上益以御武備御充實相成不申候而者、決而不相成儀ニ付、各ニ於テ聊氣弛無之、前文之御趣意相貫、御武備相張候様、一際奮發忠勤、精々可被申合候。 德川慶喜實記 春嶽私記

○附 春嶽私記ニ、板倉勝靜本月十日ノ書ヲ載ス、云、松平容堂ヨリ家來後藤象二郎出京爲致、去ル四日、別紙寫之通建白書出ス、差出、即今切迫之形勢故、寸刻モ早ク御採用之有無相同度ト切迫ニ申聞候得共、當今、御國內人氣形勢ヲモ熟考致候得者、當節之御成行ニ而、必定平穩トノ見据モ無之、容堂之論至當ニモ可有之、乍去、只々御實行之處如何モノカ、御國體一變トハ重大之事件、此上モナキ儀、但御實行之利害得失如何ト、深焦心苦慮之至ニ御坐候、素ヨリ 天朝御尊崇 皇國ヲ御維持被遊候思召ニ而、御相續以來モ、日々夜々御苦心被遊候御儀ニ御座候、然處、一朝 王政ニ被復、 皇國必平穩上ハ、被安 宸襟、下萬民安堵、萬歲ヲ唱候様相成儀等ニ候ハ、上ニ者御職掌者如何相成候トモ、 王政復古モ御本意トノ公明正大之尊慮ニ被爲在候、何分先之見据無之、容易ニ御決著モ被遊兼、衆議ヲ被盡候思召ニ御座候、依而、貴君之御見込モ十分御承知被遊度、從拙子申上候様被仰付。 下文 略ス、

十月十日

伊

賀

守

大藏 大輔 様

再白前文、不遠長州家老モ上坂、三條始五人モ上坂、其中へ英公使モ上坂ナトノ薄々噂モ有之、百事幅湊、殆困難ヲ極メ、痛心之至御坐候、 下文 略ス、
十三日答書ニ云、前文、扱、上ニハ 王政ニ被復、 皇國必平穩上ハ被安 宸襟、下萬民萬歲ヲ唱候様相成候儀候得者、御職掌ハ如何相成候トモ、 王政復古モ御本意トノ公明正大之尊慮ニ被爲在候得共、先々之御見据無之而ハ、容易ニ御決著モ

被遊兼、衆議ヲ被盡候思召之程、乍恐難有奉感佩候、右ニ付、鄙意言上候様被仰下奉畏候、此件ニ付而ハ、昨日之呈書ニモ粗陳述仕候通ニ而、私ニ於而ハ更ニ見込モ付兼候事ニ御坐候、畢竟 王政復古ト申儀、近年通議ニテ尤之様ニハ相聞候得共、數百年前ノ舊制ニテ、御體裁之所モ一向ニ相心得不申、郡縣封建之差別ヲ始、國體時勢之變遷モ亦、霄壤之懸隔ニ相成候事故、二百餘年來、開闢以後地球上無比之太平ヲ唱候御盛業、實近之轍跡ヲ履マヌシテ、茫乎タル 王家之舊制ニ相復候儀ハ、局量淺議之私輩ニ而ハ、更ニ根柢モ相立不申、不及了見儀ト、素ヨリ相決候事候得者、容堂之書面一應ニ而、中々淵底致兼候得者、御採用相成候而モ可然儀トハ難申上候、議論之正大ハ如何ニモ如被仰越、御實踐ニ於テ腕ト御手覺不被爲在儀ハ御採用難相成ハ御當然之御儀ト、御同意至極奉存候、乍併、是ハ 王政之御制度不案内ニ而、目途付兼候、固陋寡力之偏見上ヨリ申上候事ニ而、決而完全具備之定見ニハ無之候得者、申上候迄モ無御坐候得共、如此斷然トシテ及建議候程之容堂之見込通リ、朝野之人心ニモ、時運之體態ニモ、至當之事理ニサヘ有之候得ハ、速ニ御信隨御採用之思召テ以、懇々篤々御垂問御坐候而、申上候次第、實ニ至當至善之全策ニ而、御信用ニ相成候得ハ、急度治平之御見込御一定ニモ被爲在候ハ、御公平ニ其議ニ御隨ヒ、御變革可被遊ハ勿論之義ト奉存候、其節ニ方リ、固執ノ私議申立候所存ハ元ヨリ無之候、此上ハ何卒容堂使節之情意貫徹、遺憾無之處マテ、御虛懷ヲ以御下問ニ相成候様竊ニ奉仰望候。不文、略ス、

十月十三日 第五字

慶

永

板倉 伊賀守 様

又云、十一月九日、土藩福岡藩治來話、建白十月三日ノ建白書ヲ指ス、板倉伊賀守殿へ持出候處、趣意ハ至極尤候へトモ、重大ノ事件故、急ニ御採用ト申儀ハ、左様ニ速ニ御決評ハ六ヶ敷トノ答ニ有之ニ付、猶迫テ相伺候處、御採用ニモ可相成御模様ナカラ、曖昧ニ有之内、卒然ト諸藩士ヲ被召、御英斷ノ被仰出ニテ、土州杯ニテモ意表ニ出、致愕然候事ノ由、叔御直聞モ可被成下トノ御事故、薩藩小松帶刀、藝藩辻將曹、土藩後藤象二郎、福岡藩治等、同志ノ事故、一所ニ拜謁相願ヒ候テ及言上候ハ、如斯御盛意、片時モ早ク 朝野ニ貫徹不仕候ハテハ不相濟事候へハ、明日ハ早々御參内ニテ 御奏聞ニ相成、又御英斷ニテ、諸

藩士ノ建議モ御聽上ケ、共ニ 御奏聞ニ相成候様仰望仕候段申上候處、奏聞ハ奏聞、御下問ハ御下問ニテ、別段ノ事也、參内早速ノ義モ御承知ニハ候へトモ、明後日ナラテハ御手順御出來難相成トノ上意候へトモ、唯一刻モ早ク御實跡ニ被施候様仕度ト、斷テ言上候處、明後日ノ處ハ急度無相違候間、其處ハ致安心候様トノ御意ニテ、退坐ノ上、猶又伊賀守殿へ同様申立、明日御參 内ノ義相願候處、諸藩へ御下問ノ義ハ、子細モ無之候へトモ、明日ノ御參 内ト申テハ、御所へノ御伺等ノ御手續相濟不申、別テ此度ノ事杯ハ、朝廷ニテ 御聞恐テ被遊、容易ニ運ヒ付キ申間敷候へハ、明日ハ叔置、明後日モ無覺束、先達テ開港之義サヘモ、御迫リ被成候ト申世評モ有之次第、況テ此度ハ御身上ノ御儀ニモ候へハ、朝廷へ御迫リ被成候様ニテハ不相濟、夫故中々御聽入モ六ヶ敷トノ御應對故、左候ハ、先ッ攝政様ノ御手元ヲ、何モヨリ内調可仕哉ト申試候へトモ、左様ニモ御決シ無之、猶再三ノ御應接ニテ、漸ク約ル處、明後日御參 内トノ被仰出ニ相成候、夫ヨリ殿下御手元ノ義モ、永井殿内意ニテ致周旋候様申來ニ付、何モ殿下へ伺候ノ處、中々御聽受無之候へトモ、如此一大機會得失ノ境ト相成候事故、犯上ノ罪責ハ何モヘ引受、大亂目前ノ趣ヲ以御迫リ申上、漸ク御聞入ニ相成候事ノ由。

○附三日山内豐信慶喜ニ致ス書

誠惶誠恐謹言仕候、天下憂世ノ士、口ヲ噤シテ敢テ不言ニ至リ候ハ、誠ニ可懼ノ時ニ候、朝廷、幕府、公卿、諸侯旨趣相違フノ狀アルニ似タリ、誠ニ可懼ノ事ニ候、此ニ懼ハ我ノ大患ニシテ、彼ノ策於是乎成矣ト可謂候、如此事態ニ陥リ候ハ、其責任竟誰ニ可歸ヤ、併シ既往ノ是非曲直ヲ喋々辨難ストモ何ノ益カアラン、唯願クハ大活眼大英斷ヲ以テ、天下萬民ト共ニ同心協力公明正大ノ道理ニ歸シ、萬世ニ亘テ不愧、萬國ニ臨ンテ恥サルノ大根柢ヲ建テサルヘカラス、此旨趣、前月上京ノ砌ニモ追々建言仕候心得ニ御坐候へトモ、何分阻隔ノ筋ノミ有之、其内不圖モ舊疾再發仕、不得止歸國仕候以來、起居動作ト雖モ不隨意ノ事ニ成リ至リ、再上ノ儀、暫時相調不申候ハ、誠ニ遺憾ノ次第ニテ、只管此事ノミ日夜焦心苦思仕罷在候、因テ愚存ノ趣、二家來共ヲ以テ言上仕候、唯幾重ニモ公明正大ノ道理ニ歸シ、天下萬民ト共ニ、皇國數百年ノ國體ヲ一變シ、至誠ヲ以テ萬國ニ接シ、王政復古ノ業ヲ建テサルヘカラサルノ一大機會ト奉存候、猶又別紙得度御細覽被仰付

度、懇々ノ至情難默止、泣血流涕ノ至ニ不堪候。

慶應三年丁卯九月

松平容堂

別紙、

宇内ノ形勢、古今ノ得失ヲ鑒シ、誠惶誠恐頓首再拜、伏惟 皇國興復ノ基業ヲ建テント欲セハ、國體ヲ一定シ、政度ヲ一新シ、王政復古、萬國萬世ニ不恥者ヲ以テ本旨トスヘシ、奸ヲ除キ良ヲ學ケ、寛恕ノ政ヲ施行シ、朝暮諸侯齊ク此大基本ニ注意スルヲ以テ、方今急務ト奉存候、前月四藩上京仕、二獻言ノ次第モ有之、容堂儀ハ病症ニ因テ歸國仕候以來、猶又篤ト熟慮仕候ニ、實ニ不容易時態ニテ、安危ノ決今日ニ有之哉ニ愚慮仕候、因テ早速再上仕、右ノ次第一々不及建言仕候志願ニ御坐候處、今ニ至テ病症難澀仕、不得已微賤ノ私共ヲ以テ、愚存ノ趣乍恐言上爲仕候、

一天下ノ大政ヲ議定スル全權ハ、朝廷ニアリ、乃我 皇國ノ制度法則一切萬機、必ス京師ノ議政所ヨリ出ツヘシ、

一議政所上下ヲ分チ、議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ル迄、正明純良ノ士ヲ選舉スヘシ、

一庠序學校ヲ都會ノ地ニ設ケ、長幼ノ序ヲ分チ、學術技藝ヲ教導セサルヘカラス、

一一切外蕃トノ規約ハ、兵庫港ニ於テ、新ニ 朝廷ノ大臣ト諸藩ト相議シ、道理明確之新條約ヲ結ヒ、誠實ノ商法ヲ行ヒ、信義ヲ外藩ニ失セサルヲ以テ主要トスヘシ、

一海陸軍備ハ一大至要トス、軍局ヲ京畿ノ間ニ築造シ、朝廷守護ノ親兵トシ、世界ニ比類ナキ兵隊ト爲シコトヲ要ス、

一中古以來、政刑武門ニ出ツ、洋艦來港以後、天下紛紜、國家多難、於是、政權稍動ク、是自然ノ勢ナリ、今日ニ至リ、古來ノ舊弊ヲ改新シ、枝葉ニ馳セス、小條理ニ止マラス、大根基ヲ建ルヲ以テ主トス、

一朝廷ノ制度法則、從昔ノ律例アリト雖、方今ノ時勢ニ參合シ、間或當然ナラサルモノアラン、宜ク其弊風ヲ一新シ改革シテ、地球上ニ獨立スルノ國本ヲ建ツヘシ、

一議事ノ士大夫ハ、私心ヲ去リ、公平ニ基キ、術策ヲ設ケス、正直ヲ旨トシ、既住ノ是非曲直ヲ問ハス、一新更始、今後ノ事ヲ

見ルヲ要ス、言論多ク、實效少キ通弊ヲ蹈ムヘカラス、

右ノ條目、恐ラクハ當今ノ急務、内外各般ノ至要、是ヲ捨テ、他ニ求ムヘキモノハ有之間敷ト奉存候、然則、職ニ當ル者、成

敗利鈍ヲ不顧、一心協力、萬世ニ互テ貫徹致シ候様有之度、若或ハ從來ノ事件ヲ執リ、辨難抗論、朝暮諸侯、互ニ相爭ノ意

アルハ尤然ルヘカラス、是則、容堂ノ志願ニ御坐候、因テ愚昧不才ヲ不顧、大意建言仕候、就テハ乍恐是等ノ次第、空シク御

聽捨ニ相成候テハ、天下ノ爲遺憾不鮮候、猶又、此上寛仁ノ御趣意ヲ以テ、微賤ノ私共ト雖モ、御親問被 仰付度奉懇願候。

松平土佐守内

慶應三年丁卯九月

寺村左膳

後藤象二郎

福岡藤次

神山佐多衛

山内豊範家記

水萍貽孫錄

○幕府、大宮御所造營費ヲ全國ニ課シ、其上納ノ節目期限ヲ定ム。

大宮御所新規御造立相成候ニ付、御譜請御入用、御料所萬石以上領分、寺社領へ國役割被仰付、村高百石ニ付金三歩之割合

ヲ以テ、御料ハ御代官御預所、私領ハ領主ニテ取立可相納旨被仰出候ニ付、拜領高並込高改出、新田高共、巨細別紙案文之

通相認、來ル二十日^{案スルニ、二十日ノ上、月ヲ脱スルナルヘ}迄之内、町奉行所内御所御用取扱所へ可被差出候、右國役金懸改

之儀ハ、爲替御用達別紙名前之者へ申渡候間、案文之通相心得、右御用達之内へ金子引渡相成候ハ、受取手形相添納、定

日前、同所へ可被差出候、

右者、大久保主膳正、小栗下總守申達之、

別紙雜形、

復古記 卷一 慶應三年十月十四日

七

上納申金子之事、
一金何程

右ハ、今般大宮御所御造立御入用、國役金高百石ニ付、金三步之割合ヲ以テ可相納旨被 仰出候ニ付、領分村々ヨリ取立、
書面之通上納申所、仍テ如件。

年號月日

御勘定所

別紙名前書、

何之誰家來

何之

誰印

爲替三井組

三井三郎助

三井次郎左衛門

三井元之助

爲替方人組

竹川彦太郎

荒木伊左衛門

奥田仁左衛門

島田八郎左衛門

小野善助

右之通ニ有之候。

卯十月

大宮御所御造立ニ付、上納日限左之通、

每月

朔日

六日

十一日

十六日

二十一日

二十六日

村高内譯等、急速巨細取調難出來分ハ、合高凡ニモ取調、日限通可被差出、且本紙之儀ハ、美濃紙堅帳ニ相認候事。

何ノ誰領分

何國 何國 村高國役金取調申上候書附

何之誰家來

何之

誰

拜領高何程

何之誰領分

一村高何程

何國 何國 村々

内

高何程

無地高、其外云々、諸引
田方五分以上、荒地免除

殘

高何程

掛高

但百石ニ付
金三步宛

此國役金

内譯 何國何郡

村高何程

但、天保御改之節、村高何程之處、其後新田高何程相増、

内

何

村

高何程 無地高、其外云々諸引

但、無地高、其他等之諸引有之分ハ、左ノ通相認候事、

田方何程

内 荒田高何程但何分何蓋
何毛ニ當ル

畑高何程

但、田方五分以上之荒地無之分ハ、左之通相認、其餘ハ田畑内譯相認候ニ不及候事、

村高何程

何國何郡

何

村

但、右同斷之節書出候後、増減無御坐候、

内譯同斷

右之通御坐候。

年 號 月 日

十月 黒田長知家記

何之誰家來

何

誰印

○本件小笠原忠忱家記、十五日ニ在リ、堀親廣家記ハ十一月五日ニ載セ、文字小異同アリ、蓋シ親廣ハ江戸ニテ達セシナルヘシ。

十五日、徳川慶喜ニ詔シテ、其政權奉還ノ請ヲ允シ、命シテ、國家ノ大事、及ヒ外國ノ事項ハ、

衆議ヲ盡シ、諸侯ノ稟奏、及ヒ命令等ハ、議奏傳奏之ヲ掌リ、其他更革ハ、諸侯會同ヲ待テ之ヲ

議定シ、支配地、及ヒ都下取締ハ、姑ク其舊ニ仍ラシム、乃チ十萬石以上ノ諸侯ヲ召集シ、又特

ニ松平慶永、大藏大輔、春嶽ト號ス、鍋島齊正、前肥前守、閑叟ト號ス、山内豊信、前土佐守、容堂ト號ス、

伊達宗城、伊豫守、宇和島藩主宗徳ノ父、島津久光、大隅守、薩摩藩主茂久ノ生父ヲ召ス。

○ 祖宗以來御委任厚御依頼被爲在候得共、方今宇内之形勢ヲ考察シ、建白ノ旨趣尤ニ被思食候間、被 聞食候、尙天下ト共ニ

同心盡力ヲ致シ、皇國ヲ維持シ、可奉安 宸襟 御沙汰候事。二條攝政記 徳川慶喜實記

○ 大事件外夷一條ハ盡業議、其他諸大名伺被 仰出等者、朝廷於兩役取扱、自餘ノ儀ハ、召ノ諸侯上京ノ上御決定可有之、

夫迄ノ處、徳川支配地、市中取締等ハ、先是迄ノ通ニテ、追テ可及 御沙汰候事。二條攝政記 徳川慶喜實記

○ 諸藩へ達書 別紙之通被 仰出候ニ付テハ、被爲在 御用候間、早々上京可有之旨 御沙汰候事。細川護久家記 池田章政家記

○ 特命ノ分 別紙之通被 仰出候ニ付而者、御用被爲在候間、早々閑叟上京可有之候、若所勞上京難相成候半者、肥前守早々上京可有

之旨 御沙汰候事。

十月 鍋島直 大家記

○ 別紙之通被 仰出候付テハ、御用被爲在候間、伊豫守早々上京候様、若所勞押テ上京難相成候ハ、遠江守早々上京可有

復古記 卷一 慶應三年十月十五日

之旨 御沙汰候事。

十月 伊達宗
德家記

○慶喜實記ヲ按スルニ、第二條文中、徳川ノ二字ナシ、諸家記ハ皆攝政記ト同シ、蓋シ實記二字ヲ省略セシモノナラン、又末條、豊信、慶永、久光亦同シ、癸酉災後原記ヲ失シ、家記モ亦之ヲ逸ス、慶永ハ私記ニ雜掌ヲ以テ被仰聞ト記シ、原文ヲ載セス。

十六日、是ヨリ先、加藤明實能登守○水口藩主、食封二萬五千石ニ命シテ、泉涌寺ヲ警衛セシム、是日、明實京ニ至ル。

○加藤明實家記ニ云、丁卯十月十六日、兼テ被 仰付有之候泉涌寺 御陵御守衛人數指揮之爲、上京仕候、同所悲田院ニ宿陣、固場等巡視仕候。

○明實家記ニ、此節京都市中動搖之趣傳聞ニ付、上京仕候、丁卯三月十八日ヨリ、泉涌寺御警衛被 仰付候トアリ。

十七日、幕府、十五日ノ朝命ニ就テ、其三事ヲ稟問ス。

一昨十五日、被 仰出候御別紙之内、盡衆議ト之御文言、

召之衆諸侯上京之上、公議ヲ被爲盡、差掛リ候儀者、詰合諸侯、諸藩士等ニ會議被 仰付候儀ニ御坐候哉、

諸大名同被 仰出等者、於兩役取扱候ト之御文言、

諸侯ヨリ御兩役ヘ伺差出候節者、衆議ヲ被爲盡、御決定之上、御兩役ヲ以被 仰出候儀ニ御坐候哉、

支配地ト之御文言、

山城國其他御領所之儀ニ御坐候哉、又者徳川領地ヲ被 仰候儀ニ御坐候哉。

十月十七日 二條攝政記
徳川慶喜實記

○批紙

第一條 書面之通、

第二條 尤重事ニ於テハ、衆議ヲ盡シ候上取扱候事、尋常小事ハ直ニ取扱之事、

第三條 支配地之義ハ、禁裏御所領之義ニ候。 徳川慶喜實記

十八日、徳川慶喜、書ヲ上リ、在京諸侯及ヒ藩士ヲ召シテ、外國事務ヲ商議セント請フ。

此度、王政御決定被爲在候付テハ、召之諸侯參著之上、篤ト衆議ヲ被爲盡、御綱紀御確定可相成儀ニ候得共、外國御取扱之儀ハ、尤御至重之儀ニテ、時ヲ不計、各國ヨリ申達候事件無之共難申候、其砌、御相當之御取扱振相立居不申テハ、自然御不都合之儀モ可有之、其他件々御評決相立不申候而ハ、御差支之儀モ御座候間、差向詰合之諸侯、諸藩士被召集、被爲盡衆議可然哉ト奉存候、尤御沙汰次第、私儀モ參 内可仕奉存候、此段奉申上候、以上。

十月十七日

慶

喜

二條攝政記
徳川慶喜實記

○細川護久家記、御差支以下八字、朝威ニモ拘リ可申奉存ニ作ル。

○本願寺光澤、大坂ノ支院ヲ以テ、三條實美等 三條西季知、東久世通禧、壬生基修、四條隆壽ノ旅寓ニ充ルヲ稟ス。

口上覺、

長門國ヘ脱走之堂上、當時筑前、筑後、久留米、肥前、肥後、薩摩等之藩預リ有之處、上坂上京可被致候節、大坂表著所之義、御當方御掛所旅宿ニ拜借致度旨、右五藩家來申出候ニ付、其段當四月被仰入置候處、猶又右家來、別紙名前之者ヨリ、彌來ル二十日頃上坂、粗治定ニ付、必拜借致度義再應申出候旨、就而者、過日御届被仰入置候毛利大膳、並吉川監物使者應接之場所者、前顯之次第ニ候間、外方ニ而御用意相成候儀、大坂町奉行所ヨリ被達候旨等、同所津村御掛所留守居共ヨリ申登候ニ付、此段御届被仰入候、以上。

復古記 卷一 慶應三年十月十八日

十月

本願寺御門跡御使

田 中 主 鈴

別紙、

松平美濃守内 中村 左 源 太
 細川越中守内 猪 俣 才 八 橋 本 卓 之 允
 有馬中務大輔内 雨 森 傳 右 衛 門
 松平修理大夫内 永 井 清 左 衛 門 黑 田 彦 衛 門
 松平肥前守内 山 田 嘉 太 夫 二條攝政記

○本年正月二十三日、五氏歸京ノ命アリ、而シテ歸ルヲ果サス、此ニ至テ忽チ此事アリ、蓋シ長門藩ノ支封、及ヒ老臣ヲ召スニ際シ、薩摩藩士大山綱良、長門及ヒ宰府ニ赴キ、同時入京ノ事ヲ謀ルニ因ル歟、本月二十一日、薩摩藩奉答書ニ、推テ上京ノ事有之間敷ト云モノハ、上國ノ形勢ニ由テ、前策少シク變スルモノナルヘシ、後文傳聞ヲ記シテ、悉ク信ス可カラスト雖モ、其梗概ヲ見ルヘキヲ以テ、此ニ附記ス、

坤儀革正録ニ云、薩藩大山格之助事、先日御當地發途、長州へ下向仕、種々談合之由、太宰府へ罷越、五卿方へ御歸洛之義、只今真好機會ニ候間、早々御上京可然、御船之義ハ、弊藩ヨリ差出可申候、且 天幕之御命ヲ被爲受候様ニテハ、所詮六ヶ敷杯段々入説候處、五卿方並隨從之者、水野慶雲齋始承知イタシ、不日上京ニ一決イタシ、其支度ニオヨフ、肥後、肥前、久留米、筑前等之警衛士ハ、天幕へ今一應御伺申上候上、御歸洛之方可然趣申立候へ共、一統不相用、依之、筑藩東喜助、蒸氣船ニテ早速上坂、去ル十二日夕當地著、兩肥、久留米士示談之上、薩邸へ罷越、内田仲之助ニ面會、太宰府之趣逐一相談候處、仲之助答ニハ、先日大山事同所へ差遣候處、今以何之報知モ無之、一向次第柄承知不仕趣ニテ取合不申、四藩色色談合有之候處、如何之模様ニ候哉、明七日、當地出立ニテ、三條家始三條西、東久世、壬生等之家々ヨリ、御家來共、大坂

表へ五卿御向トシテ下向候由、右ハ今般長州重臣上坂、先達入京イタシ、何カ策略モ有之哉之由。

○是ヨリ先、徳川慶喜、十萬石以上ノ諸侯ヲシテ京師ニ至ラシム、細川護久、池田輝知家記 是日、又一萬石以上ノ者ヲ招集ス。

口達、

不容易御時勢ニ付、太儀ニ思召候得共、宗十郎早々上京可致、此段可相達事。

石川成徳家記

○成徳家記ニ、板倉伊賀守被渡トアリ、市橋長義家記ニ、板倉伊賀守ヨリ、御用候間早々上京可有之旨被達トアリ、諸家記、往々原記ヲ失スレ共、二十七日幕府ノ令ニ照セハ、盡ク之ヲ招クモノ疑ナシ。

十九日、幕府、上疏シテ、諸藩兵都下更番及ヒ諸口警備、供御地管轄及ヒ度支、大宮御所造營課金、驛遞法、供御地及ヒ攝家宮門跡領地ノ訟獄、刑法所司代以下ノ職務、紙幣發行ノ八條、及ヒ三條實美以下五人ノ措置ヲ稟請ス。

召ノ諸侯、上京迄ノ處取計向候廉々、

一 當地三ヶ月詰、並口々御固大名割、御兩役ニテ御取調之上、夫々御達相成候哉、又ハ是迄ノ手續ニテ取調申上候テ、達方ハ御兩役ニテ被成候哉、

一 禁裏御料、並御入用筋之儀、御料所ハ小堀數馬ニテ取計、御入用筋ハ是迄之通ノ取扱ニ仕置可申哉、

一 大宮御所御造立御入用國役金ノ儀ハ、既達濟ニハ相成居候得共、其後收方等取扱ノ儀、是迄之手續ニテ可然候哉、左候者、其段諸大名へ、御兩役ヨリ御達有之候様致度候、

一 五街道脇往還宿々人馬之儀、先是迄之通被成置候儀ニ御坐候ハ、其段御兩役ヨリ御國中へ御觸達相成候儀可有之哉、

一山城、大和、近江、丹波四ヶ國、並攝家、宮、門跡、堂上方御家領、其他寺社領、大名領分ニ關係致シ候公事出入、京都町奉行所ニテ取扱來ル廉々ハ、是迄ノ通取扱、呼出等ハ、其主人主人へ掛合可申哉、

一刑法ノ儀ハ、召ノ諸侯上京之上御取究可相成ト存候得共、夫迄ノ處ハ仕來ノ通ニテ宜敷候哉、

一所司代、並戸田大和守御附兩人勤向ハ、先是迄之通ニテ宜敷候哉、

一兵庫開港ニ付、金札通用之儀ハ、諸人百姓融通ノ爲ニテ、既ニ申上濟ニテ、出來相成居候間、通用相成候様仕度候。

十月 德川慶喜實記
細川護久家記

○ 脫走人實美已下五人、明後日、大坂表へ著之旨御届申入候、且京都洛外謹慎之儀ハ、兼而御治定承居候得共、御反格ヲ以、朝廷思召出格之御沙汰可申付被 仰付迄、大樹ヨリ其儀申渡候テ宜敷候哉、且亦京都洛外宿所之邊、從大樹申付宜敷候哉、是モ早折伺度、大和守伺出候間相伺候事。

十月 晚翠樓叢書

○ 本條、文字謬誤アリ、措辭モ亦幕府ノ體ニ非ス、按スルニ、幕府ヨリ口上申出シテ、傳奏ヨリ伺出シモノナランカ、幕府ノ原書ナキヲ以テ、姑ク之ヲ存ス。

○ 幕府、久松定昭伊豫守○伊豫松山藩主、食封十五萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、ノ請ヲ許シ、其加判列上座ヲ罷ム。

松平伊豫守

内願之趣モ有之候間、御役被成御免候。

久松定昭家記

二十日、幕府稟議ノ京都警備等八條、及ヒ外國事務三條實美以下ノ處分ヲ列藩ニ下示シ、明日ヲ期シテ、各意見ヲ上ラシム。

外夷之事、幕府十八日ノ上書ヲ指ス、

實美以下脫走之五卿之事、

大樹申出之事、八條ヲ指ス、

同意之向者連名ニ而、大樹へ申出候事。

小笠原忠忱家記

○ 一近々上坂ノ間有之候實美以下脫走人ノ事、

一外國ノ事、

右、尚 召ノ諸侯上京、公論衆議ノ上、決定ニ相成候得共、先差向取扱ノ處尋被下候事。

小笠原忠忱家記
細川護久家記

○ 忠忱家記ニ、前條被達、同夜再ヒ後條ノ達アリト云フ。

○ 今日被尋下候件々、明二十一日中、兩役之内へ必返答可有之事。

酒井忠祿家記
小笠原忠忱家記

○ 正親町三條實愛、前大納言、阿野公誠、宰相中將、等、連署上疏シ、三條實美、三條西季知ノ義絶ヲ釋カント請フ。

藤原季知

藤原實美

右、先年依 御沙汰、一族一同致義絶候處、去五月、於長州モ寬典之儀被 仰出候事故、於兩人モ義絶 御免奉願存候、此段宜預御沙汰候也。

十月

復古記 卷一 慶應三年十月二十日

公	義姊小路	實	文川鱒
實	延花園	公	紀風早
公	靜園池	公	香武者小路
實	潔押小路	保	實高松
公	誠阿野	實	愛正親町三條

日野大納言 殿
飛鳥井大納言 殿
阿野公誠家記
晚翠樓叢書

○松平慶憲、兵部大輔○明石藩主、食封八萬石疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ、批シテ、其少間ヲ待テ、速ニ上京セシム。

兵部大輔義上京仕候様奉蒙 御沙汰、早々登京可仕義ニ御坐候處、病氣罷在候ニ付、不取敢、爲名代家老出京爲仕候而モ不苦義ニ御坐候哉、此段奉伺候、以上。

松平兵部大輔家來

友部 權 六

○批紙

病氣之趣ニ候得共、三ヶ月詰モ被 仰付候儀、精々加養、少々ニ而モ快方ニ候ハ、速ニ上京可有之候事。

松平直致家記

○二十四日上申書

御用被爲 在候間、早々登京可仕旨奉蒙 御沙汰奉畏候、然ル處、乍恐從來之病症痔疾、昨年來別テ不相勝、甚以難澀仕罷在候、此體ニテハ急速發足難仕奉恐入候、少モ快氣仕候得者、早速上京仕度奉存候、先不取敢御請奉申上候、此段御憐察被成下、宜御執成程奉頼上候、誠恐謹言。

十月

松平兵部大輔

松平直致家記

○上條、批紙日ヲ失ス、直致家記ニ云、前書在京ノ家臣ヨリ差出シ、後日御呼出ニテ、御附札ヲ以テ御差圖ニ相成ルト、案スルニ、本條日ヲ署セス、タ、二十四日差出ストアリ、然レハ批紙ハ其後ニ在ル可シ、別ニ據ル所ナキヲ以テ、此ニ併録ス。

○諸侯參罷申告、及ヒ疾ヲ以テ上京ノ期ヲ延シ、或ハ代理ヲ出サント請フノ類、後皆其要ヲ掲ケテ原文ヲ擧ケス、事故アル者ハ之ヲ録ス。

○幕府、紙幣貳百兩、百兩、五拾兩、貳拾五兩ノ四種ヲ關以東ニ發行シ、己巳歲三月ヲ以テ限ト爲スヲ令ス。遂ニ果サス、

○十月二十日幕府達書

今度、御用金差出候者共へ、御用金高ニ應シ、金札可相渡候、右金札之儀ハ、來々巳年三月迄、都テ通用金銀同様相心得、御年貢、其外諸公納ニ相用不苦候間、御府内、竝關東在方共無差支通用可致候、尤一時融通之タメ、通用被 仰出候儀ニ付、心得違致間敷、引替之儀ハ、來々巳年三月ヨリ三井八郎右衛門方オイテ、正金銀ト引替可相渡候、右引替ニ付テハ、歩合減等一切無之候間、不取締無之様取引可致候、右之趣、關東筋御料、私領、寺社領共、不洩様可被相觸候、

復古記 卷一 慶應三年十月二十日
右之通可被相觸候。

十月 德川慶喜實記
足利聰氏家記

○紙幣發行ノ事、之ヲ當時事ヲ執リシ者ニ質スニ、遂ニ果サスト云フ。

○金札之儀ニ付申上候書付、

小栗上野介
小野友五郎
佐藤清五郎

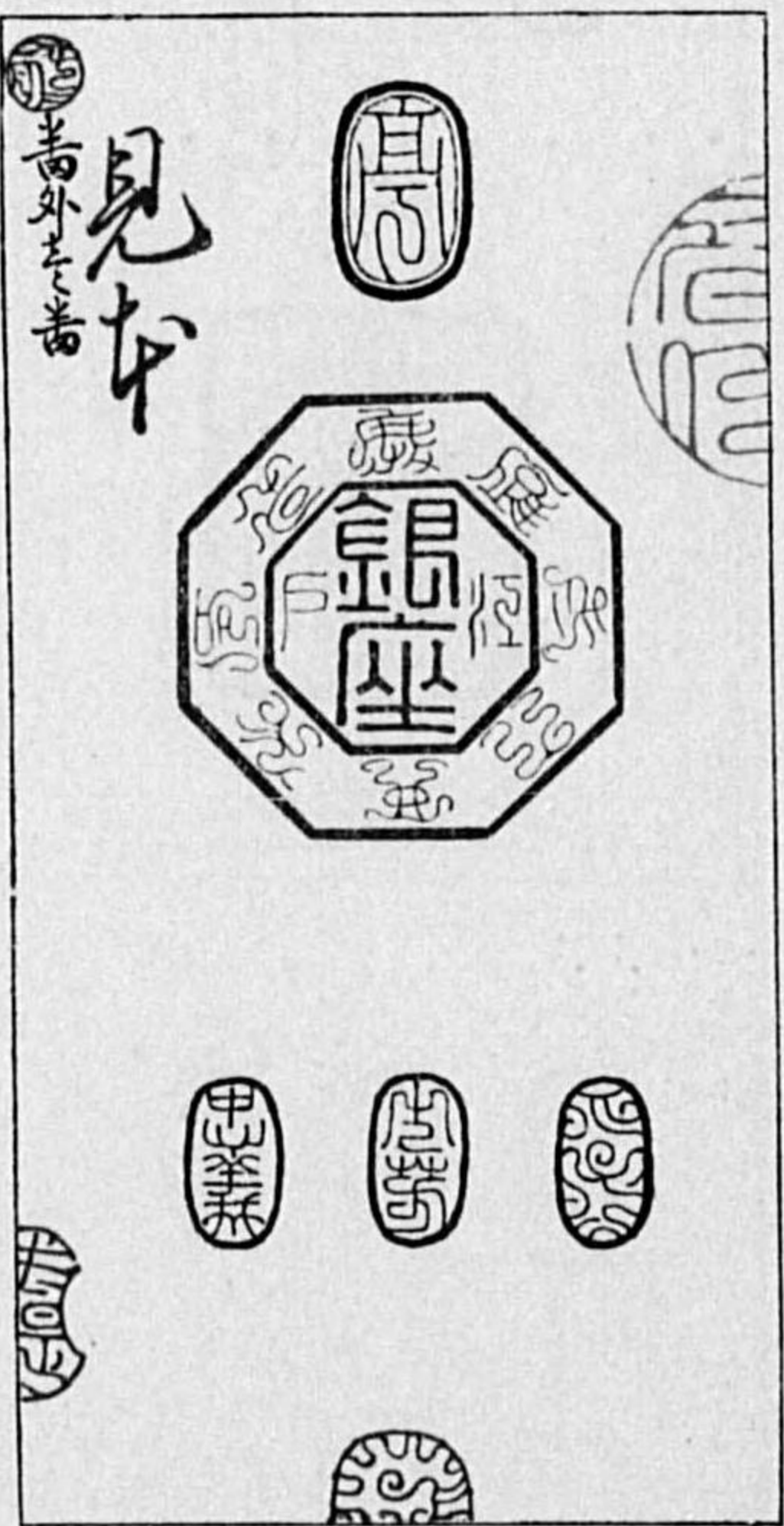
今般、御用金差出候モノへ、御用金高ニ應相渡候金札之儀、五拾兩以上ノ札御出來之積申上候處、當分之内通用被 仰出候
ニ付、猶勘辨仕候處、金高多之札ニテハ、取引不辨ニモ可有之候間、貳拾五兩、五拾兩、百兩、貳百兩ト四等之金札ニ仕候方、
必通用方可宣ト奉存候、依之、右見本札四枚相添、此段申上候、以上。

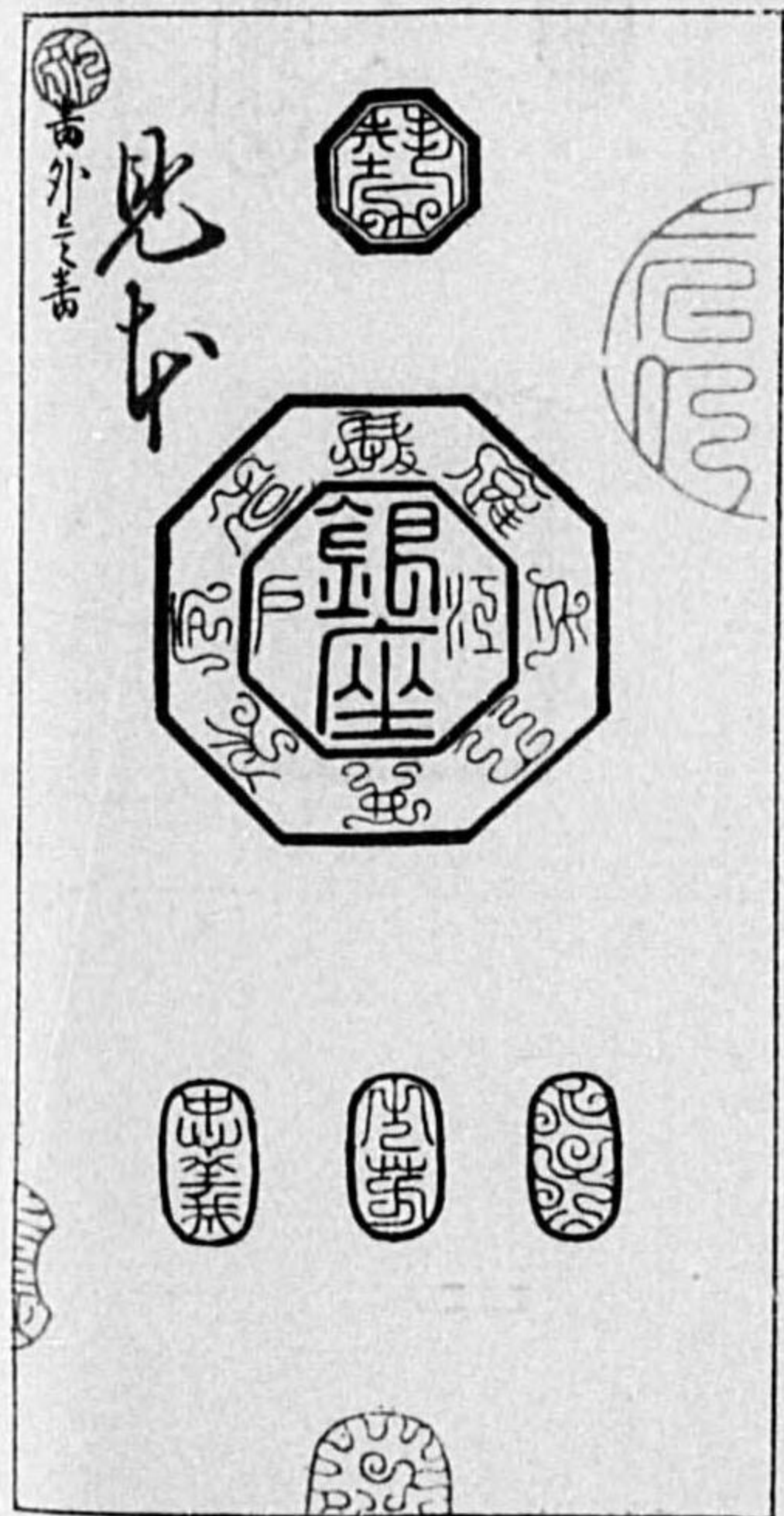
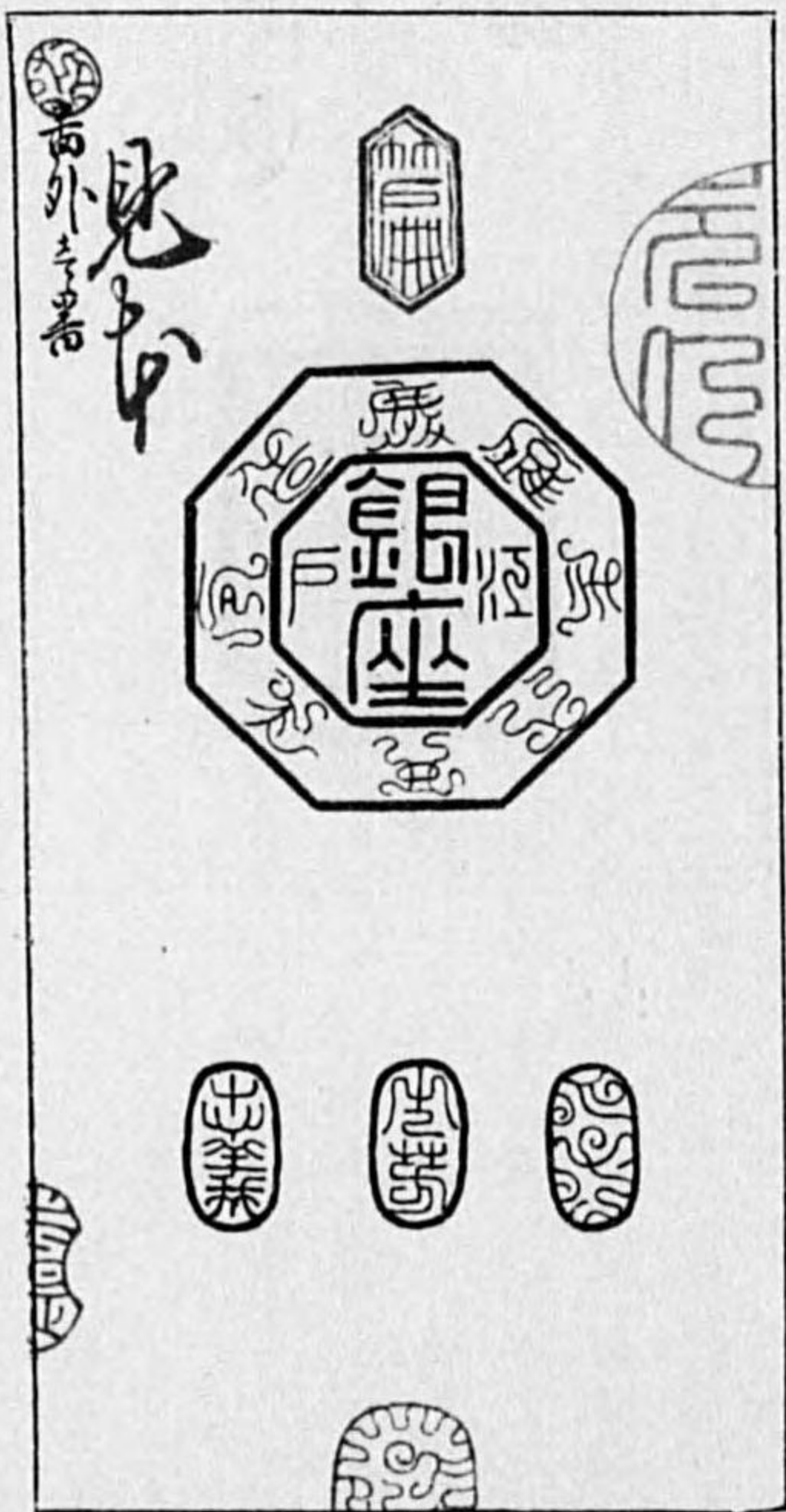
卯十一月

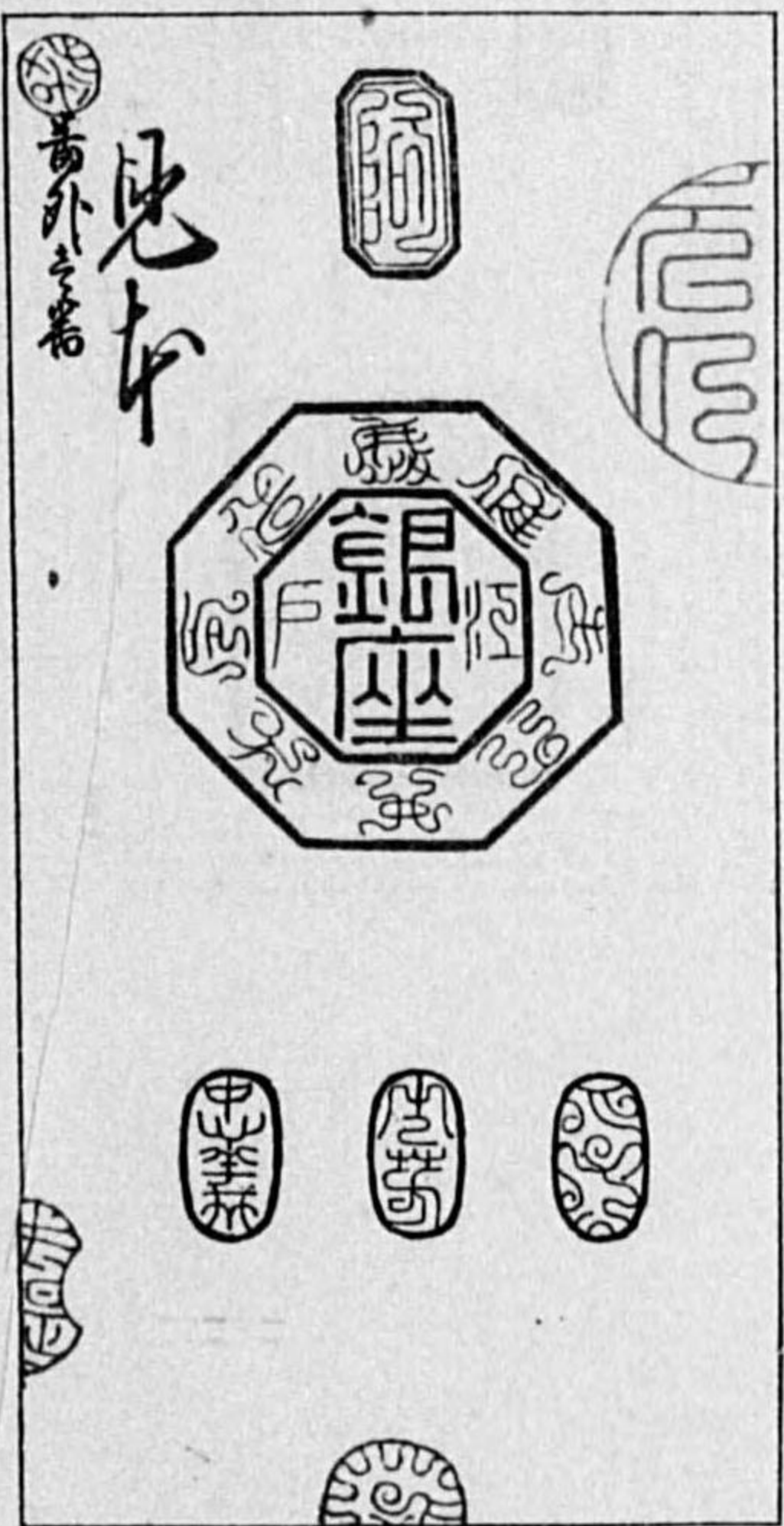
○下紙、

周防守殿卯十一月十九日被下 三藏殿。

○紙幣見本







舊幕記録

○是ヨリ先、英吉利國軍艦水夫ヲ長崎ニ横殺スル者アリ、本年七月ニ在リ英國公使、幕府ト往復判論ス、是日幕府、書ヲ公使ニ致シ、平山敬忠圖書頭○外國總奉行ヲ遣シテ、其事ヲ處分セシムルヲ告ク。

大貌利太泥亞特派公使全權 ミニストル兼コンシユルゼネラール
エキセルレンシースルハルリー、エス、パークスケシビヘ

以書翰申進候、今日三時半、其公使館へ可罷越處、不快ニテ何分難罷出、就テハ尊來モ請度候得トモ、左件ノ次第ニテ、態々尊來被成下候モ、閣下御多事ノ中御氣ノ毒ニ存候間、下條ノ趣御了解ノ上、御回答被下度候、一體長崎表ニ於テ、貴國人殺傷セラレ候事件ハ、犯罪人召捕方、疑案ノ者取調向等、長崎表ニオイテノ取扱振、委曲ノ顛末ヲモ、實地取調候儀ニ付、土州表ニオイテ閣下ノ懇請ニヨリ、平山圖書頭態々彼地へ出張、閣下ヨリハサトウ氏ヲ名代トシテ御差遣被成、且政府ニオイテ、鄭重ノ處置ヲモツテ兵隊ヲ差遣、新規ニ奉行ヲ撰任シ、是迄ノ奉行呼戻シノ命ヲ下シ、其外彼地ニ於テモ警衛ノ兵隊ヲ取立候儀ニ有之候處、一昨日、圖書頭歸府イタシ候ニ付、サトウ氏彼地退帆後、尙又取計候件々ヲモ、圖書頭同席ニテ閣下へ御面晤、委細御相談可及存候處、同人へハ御面會被成兼候趣ヲ以テ中坐セラレ、終ニ右委曲ノ事情ヲ盡シ兼候段、遺憾ノ至リニ候、且我國高官ノ者壹人、長崎表へ差遣シ可申トノ儀、昨日御申聞有之、其意味ハ更ニ御物語無之、左候テハ、閣下ノ御意衷徹底難致、乍不本意御即答モ不致次第候間、右趣意承知イタシ度旨、再應懇請ニオヨヒ候得トモ、錄々御申聞モ無之、殆ト當惑イタシ候、右事柄了解イタシ不申候ハテハ、御決答ニオヨヒ兼候次第ニ付、サトウ氏ト、圖書頭ト委曲御引合ノ上、面晤候ハ、情實徹底イタシ可申、若シ互ニ意衷ヲ悉シ、事實ヲ辨明セサルニオイテハ、雙方ノ意齟齬イタシ、遂ニ閣下ノ深意ニ適セサル事モアランカト、憂慮ノ餘リ申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十月十八日

小笠原壹岐守

外務省記

○英公使答書

貴翰致披讀候、然ハ、本日午後第三時半、拙者へ面接ノ爲メ當公使館へ御出張可有之筈之處、御病氣ニ付、其義被成兼候趣承知セリ、然ル處、來示中、事實不當ノ廉數多御座候へハ、其非ヲ解明セサルヲ不得、其故ハ來書ニテハ、昨日、拙者義、平山圖書頭御面會致申間敷旨ヲ申、退出セシニ付、長崎表ニ於テ、右同人取計委曲ヲ盡シ候事難成趣ニ候得トモ、其實ハ、圖書頭ハ執政ヨリ下役ノ仁ニ付、外國事務總裁ヨリ承可申事柄ヲ、右同人ヨリ聞兼候趣申立候處、強テ圖書頭出席爲致、是非トモ面會セシメント被成シニ付、拙者一先退席セシ處、又候、圖書頭ハ最早退席セシ趣、閣下ヨリ承リ候ニ付、拙者義、猶又出席致候義ニ御座候、其上、閣下モ退席被成、カ一ト時ノ間、圖書頭ト談話被成候内、拙者義ハ相扣へ申候、既ニシテ閣下再應出座被成候、且又々一ト時ノ間、拙者ト談話ニ被及候義ニ候へハ、閣下モ圖書頭ヨリ御傳聞被成候事ノ委曲ヲ、拙者へ御申聞ノ暇ナキニシモ非スト存候、然ルニ、閣下ニハ、只々圖書頭義、長崎諸役人所業満足不致候ニ付、同所ヲ退去シ、上京之上、大君へ其義ヲ言上被及候段、御申聞有之ノミニ候、且其節、貴國高官之者、長崎へ御差立有之度旨、拙者申立候處、來書ニハ、右高官差立候趣意柄、拙者ヨリ申立無之トノ趣、是又閣下心得違ト存候、其故ハ、昨日拙者再三申立候ハ、右ハ重大之事件ニ付、十分ナル盡力ヲ以テ所置ヲ施ス爲ニハ、長崎奉行位卑キノミナラス、加之、權威モ不足、且殺害有リシコト、最早三ヶ月相經候へトモ、未タ罪人ノ探索ヲ遂ケ、相當ノ處置無之ヲ見レハ、同所長官ハ因循權ナキヲ知ルヘケレハ、高官ノ者被差立度趣、且貴國內政ノ義ニ付、重大ナル事件ヲ處置センカ爲メ、高官ノモノヲ每度諸方へ差立候義有之候へハ、矢張外國急迫ノ事件ニ於テモ、右同様切意ヲ以取行ヘキ筈、又長崎兩奉行、並平山圖書頭等閑ニ付、我政府ヨリ貴國政府へ嚴敷掛合可致ノ道理有之候間、拙者ヨリ無理ニ非サル事ヲ申立候時ハ、貴政府ニ於テ、實意ヲ以テ日本ノ國辱トナルヘキ惡業ヲ行シ者共ヲ探索シ、罰ヲ與シ決心ノ證トシテ、早々此義御承諾可有之筈ト存候旨等、其節申立候、然ルニ、此一條ニ付、猶今一度拙者ニ面會被成度旨、且圖書頭義、サトウへ引合被致度趣ニ候得ハ、則其意ニ應シ、明日第十一時、貴宅へ罷出可申候得ハ、若圖書頭、實ニサトウへ面會被成度候半ハ、其前迄ニ御面會可被成候、且明日ハ彌以談判ノ上、決著致度候間、高官ノ者、長崎

へ不可差立義ニ於テハ、此後閣下へ此一條ニ付、面談致間敷候、拜具謹言。

十月十八日

ハルリー、エス、パークス

小笠原壹岐守 閣下

外務省記

大貌利太泥亞特派公使全權

ミニストル兼コンシニルゼネラー

エキセルレンシー

スルハルリー、エス、パークスケシビへ

以書翰申進候、於長崎表、貴國人殺傷セラレ候儀ニ付、此程御越有之砌云々、御申聞ノ趣モ有之候へトモ、其節貴意ノ程了解難致、彼我ノ意中洞徹致シ不申候テハ、何分貴意ニ應シカタク候間、當十月十八日附ヲ以、委細申進候處、昨日態々御越有之、縷々御物語ニテ、具ニ氷解イタシ、御足勞ヲ重ネ候段、所謝候、就テハ右事件、團圓ノ運ヒニ至ラセ度、彌平山圖書頭ヲシテ支度出來次第、長崎表ニ差遣シ候事ニ決定致シ候間、此段御報告及度如斯候、拜具謹言。

慶應三年十月二十日

小笠原壹岐守

外務省記

○英公使再答書

昨日附ノ貴翰致披讀候、然ハ、我國軍艦イケラス水夫兩人殺害セラレ候一條ニ付、犯罪人召捕仕置爲果取度、平山圖書頭早速長崎へ差遣、且右事件ノ運ヒニ爲至度御心組有之候趣、大悅至極ニ存候、右ハ、大英國政府へ對シ、貴國政府ニ於テ公平ナル處置緊要ナル而已ナラス、貴國臣民ヲシテ政府ヲ尊シムル一端ト存候、乍然、平山圖書頭出立ノ日限、且十分事ヲ果取迄、長崎ニ滞在致シ、並別ニ一人ノ高官ヲ附添、事宜次第、他所へ爲赴候旨書載無御座候間、猶一封ヲ以テ、右三ヶ條被申越

復古記 卷一 慶應三年十月二十日

二七

候様致度、將又貴國十八日附來書ニテハ、從來ノ奉行呼返趣ノ處、右ハ能勢大隅守、徳永石見守兩人ヲ被呼返候哉承度候、其故ハ長崎街説ハ、兩人役向因循ノ罰ニハ無之、只々平常役替而已ニテ、被呼返事相聞エ候ナリ、此段伺申度如此御座候、拜具謹言。

十月二十一日

ハルリー、エス、パークス

小笠原壹岐守外務省記

○本書、外務省記二十三日ニ作ル、然ルニ、書中昨日附ノ文アリ、且二十九日幕僚答書ニ、十一月十六日附ト云フ、西曆十一月十六日ハ、即チ我十月二十一日ナリ、故ニ之ヲ改ム。

大貌利太泥亞特派公使全權

ミニストル兼コンシユルゼネラール

エキセルレンシー

スルハルリー、エス、パークスケシビヘ

貴國十一月十六日附貴簡落手、長崎表ニ於テ貴國水夫ヲ殺害イタシ候モノ召捕方ニ付、平山圖書頭、同表へ出立之比合、御承知被成度旨御申越承知イタシ候、右ハ閣下ニモ御承知之通り、目今京師ヨリ申越候義モ有之候折柄、翔鶴丸歸船次第、右へ爲乗組、急速出帆爲致、京師御差圖相同、長崎表へ罷越候様相命申候、尤右事件落著迄ハ、在崎爲致、將附添之高士官ハ別紙之モノニ有之、末條長崎奉行之義ハ、交代等ニハ無之、呼戻シ之命下シ置候間、歸著之上、處置イタシ候積ニ有之候、右再貴答如此候、拜具謹言。

慶應三年卯十月二十九日

小笠原壹岐守花押

外務省記

○本條、別紙高士官姓名見ル所ナシ

復古記 卷一終

總括兼纂修

一等修撰 臣長松 幹

校 勘 臣長

一等修撰 臣長 茨

一等協修 臣四屋 恒之

校 録 臣澤渡 廣孝

一等書記 臣澤渡 廣孝

繕 寫 臣小川 長和

二等繕寫生 臣小川 長和

二等繕寫生 臣小島 春

復古記 卷二

慶應三丁卯十月二十一日ニ起リ二十五日ニ至ル

○十月

二十一日、十萬石以下ノ諸侯ヲ召集ス。石川成徳家記

○達書、十萬石以上ト同シ、故ニ之ヲ略ス。

○德川慶喜、三條實美等ノ措置ヲ稟ス、前田利徳、飛騨守○大聖寺藩主、食封十萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、及ヒ鳥津茂久、修理大夫○薩摩藩主、食封七十七萬八百石、時ニ松平氏ヲ稱ス、德川徳成、元千代○尾張藩主、食封六十九萬九千五百石、伊達慶邦、陸奥守○仙臺藩主、食封六十二萬五千石、時ニ松平氏ヲ稱ス、德川茂承、中納言○紀伊藩主、食封五十五萬石、細川應順、越中守○肥後藩主、食封五十四萬石、黒田齊溥、美濃守○筑前藩主、食封五十二萬石、淺野茂長、安藝守○安藝藩主、食封四十二萬石、鍋島茂實、肥前守○肥前藩主、食封三十五萬石、池田慶徳、因幡守○因幡藩主、食封三十二萬石、藤堂高猷、和泉守○津藩主、食封三十二萬石、池田茂政、備前守○備前藩主、食封三十一萬石、蜂須賀齊裕、阿波守○阿波藩主、食封二十五萬石、山内豊範、土佐守○土佐藩主、食封二十五萬石、有馬慶頼、中務大輔○久留米藩主、食封二十一萬石、南部利剛、美濃守○盛岡藩主、食封二十萬石、松平直克、大和守○前橋藩主、食封十七萬石、酒井忠篤、左衛門尉○莊内藩主、食封十七萬石、酒井忠悳、雅樂頭○姫路藩主、食封十五萬石、榊原政敬、式部大輔○高田藩主、食封十五萬石、久松定昭、豐千代丸○小倉藩主、食封十五萬石、前田利同、和松○富山藩主、食封十萬石、宗義達、對馬守○對馬藩主、食封十萬石、松平忠誠、下總守○松平藩主、食封十萬石、眞田幸民、信濃守○松代藩主、食封十萬石、奥平昌服、大膳大夫○中津藩主、食封十萬石、戸田氏共、采女正○大垣藩主、食封十萬石、松平慶憲ノ家臣モ亦各

答議ヲ上ル。

實美以下、若上坂仕候ハ、召之諸侯上京御決定迄之處滯坂可罷在、太宰府出船前ニ候ハ、追テ御沙汰御坐候迄同所ニ可罷在旨、五藩へ被 仰渡可然哉奉存候、此段奉申上候。

十月二十一日

慶

喜

徳川慶喜實記 本多正憲家記

○正憲家記二十二日載スル所ノ、自然上坂云々ノ批紙ヲ此文後ニ付シ、幕僚ヨリ達示トアリ、本條ノ文意ヲ考ルニ、慶喜モ亦諸藩ト共ニ下問アリテ、答議ヲ上リ、二十二日ニ至リ、批紙ヲ付下セシナルヘシ、慶喜ニ下問ノ事、別ニ據ル所ナシ、姑ク録シテ参考ニ備フ。

一 近々上坂之間有之候實美以下脱走人之事、
大事件ハ盡衆議御主意ヲ奉伺之候ノ間、脱走人上坂之儀ハ、召之諸侯上京之上、衆議御聞糺之上、御所置御座候而モ宜哉ニ奉存候、夫迄之處ハ、是迄之通御留置候而モ不苦哉ト奉存候、
一 外國之事、
召之諸侯上京、衆議御聞糺之上御決評可有之、夫迄ハ在來之通、徳川へ御委任ニ相成、所置之儀者總而朝廷伺之上、取扱ニ相成候而モ不苦儀ト奉存候、

十月二十一日

松平 飛騨 守

右、如何體之御取扱ニ相成候共、異存無御座候。

大樹ヨリ伺之八ヶ條、

復古記 卷二 慶應三年十月二十一日

十月二十一日

松平飛驒守

前田利惣家記

○ 今般、幕府政權ヲ 朝廷へ奉還仕候次第、誠以復古ノ御大業、數百年來ノ英斷ニ御坐候而、御國體御變革、宇宙間ニ御獨立可被遊御基本ニ候へハ、微賤ノ私共迄モ、深ク天下ノ爲メニ奉恐悅候、就而ハ衆庶議事ノ意ヲ以、諸藩士共被召出、廉々 御下問被 仰出候儀ニ付、謹而奉言上候、

一 徳川家取扱掛之廉々、當時伺出ノ通被 仰付置、召ノ諸侯會議ノ上、御確定被遊可然哉ニ奉存候、

一 脱走公卿方、近々上坂ノ間エ有之趣ニ御坐候へテ、推而右等ノ次第ニ相成候儀ハ有之間敷、召ノ諸侯會議初發ニ 御裁斷被 仰出、長防御處置同時ニ相成可然哉ニ奉存候、

一 外國取扱ノ儀ハ、暫時越方ノ通ニ被閣、召ノ諸侯會議之上、皇國一體ヲ以テ 朝廷ノ御條約可被爲結、尤兵庫開港ノ處ハ、今般大改革ヲ以、國體變換ノ次第談判ニ及ヒ、被差延候而可然哉ニ奉存候、

右件々、當時在京仕候三藩ノ者共同意仕候ニ付、乍恐連名ニテ申上候、尤書外猶又口舌ヲ以言上可仕候、誠恐誠惶頓首謹言。

○ 丁卯十月二十一日

松平修理大夫内

關山 紘

松平安藝守内

辻 將 曹

松平土佐守内

後藤象二郎

福岡藤次

神山左多衛

鳥津忠義家記
水萍貽孫錄

○ 謹而奉申上候、昨日被 仰渡候脱走人、並外國之事件ハ、素ヨリ關係不仕儀ニ付、可否難申上候得共、脱走人到著ニモ相成候ハ、何方ニテモ著候處へ御差留、先言上之趣旨 御聞上被爲在、且外國御應接之儀者、御差延難被遊廉出來候分、其品御達之上、諸藩見込ヲモ御尋被爲在候方可然奉存候、誠恐誠惶謹言。

尾州在京役

佐々鉄三郎

十月二十一日

○ 謹而奉言上候、昨日被 仰出候幕府ヨリ伺之件々者、過日御達之通、都而御召之諸侯上京迄御評定御差延、其内片時モ御猶豫難被遊廉ハ、先是迄之通手續ヲ以、爲御取計御座候方可然奉存候。

尾州在京役

佐々鉄三郎

十月二十一日

徳川義宜家記
黒川秀波筆記

○ 召之諸侯上京日決定迄之處、指向候事件ニ付、私共見込御下問被成下候趣奉畏、愚案之廉々左ニ奉申上候、
一 外國事件之儀ハ、誠ニ重大之御所置ニ御座候得共、先達テ大樹公具ニ建言、且諸藩見込之趣モ被爲聞、衆議被相盡、已ニ開港御指許ニモ相成候上ハ、應接等都テ瑣細之事業ハ、當分大樹公へ御委任相成可然、乍併難被相任廉モ御座候ハ、兼テ外國之情實ニ通曉仕候公卿諸藩モ可有之、其向へ取扱被仰出可然奉存候、方今外患切迫之形勢ハ勿論之儀ニ候得共、尤所可先憂者、腹心之病ト奉恐察候、何分人心輯睦、萬國ニ御威信被爲立候御所置被爲在度奉存候、

一實美以下御所置之儀ハ、被處御寬典被召登候上ハ、別ニ異議モ有之間敷候得共、諸藩上京御決議迄之處、先暫之間入京被相扣置可然奉存候、

一大樹公伺之件々、諸藩上京迄之處、是迄之通御委任被遊可然、乍併御變換被成置候事件モ御座候ハ、尙御衆議之上御決定可然、全體錢穀之出納、刑獄之聽斷等ハ、局ニ依而古典舊習モ有之、有司ニ無之候得ハ、脉絡條理モ不相心得儀ニ而、空敷可奉論列様無御座奉存候事、

右之條々御尋ニ付奉申上候、方今不容易折柄、數百年來ニシテ王政御宏復ニモ被爲成候上ハ、御中興之御初政ニテ、萬民刮目、御維新ヲ望居候機會ニ御座候間、萬々一御失體ナト被爲在候テハ、誠ニ恐入候御事ニ御座候間、幾重ニモ衆議被相盡、公平中正之御施行被爲在候様奉希望候、恐懼頓首謹言。

仙臺中將内

十月二十一日

松崎仲太夫

大槻文彦筆記

○ 今般御改革ニ付、召之諸侯上京難被爲待件々、御下尋之趣、盛大之重事、御施爲之當否ニ寄り、天下治亂之機、深御憂慮之段奉恐察、不憚言上仕候、抑王政ハ王政之規模アリ、武政ハ武政之綱紀アリ、皆天下自然之勢ニヨリ、沿革且大利之所在者必大害之所存、古今沿革之際程利害危難之機會無之候、其所以者新制未立、舊綱已弛ミ、人心洶々、施爲紛紜之際ニ乘シ、奸雄激徒、一己之私略ヲ逞シ、天下之大亂不可收拾ニ至リ候事、古今之常證、是大害之所存、皆欲速之私心ヨリ出來候間、先其大害ヲ禦キ、大體ヲ存シ、然後、改革之大利可相生候、大害ヲ禦キ候新制未定候間ハ、舊綱ヲ弛候外ニ道者無之、抑今日之御改革者、大樹公至誠至忠ヲ以、二百五十年之積權ヲ一朝ニ奉歸候美德、天下ノ賢明、無此上盛德ニ候間、斯大樹ヘ王政之規模組立總督ヲ被仰任、古今之沿革、時勢之變遷、萬國ノ形勢ヲ斟酌シ、人情時勢至當ノ大規模ヲ被爲立、萬國ニ卓立シ、

萬世ニ貫徹相成候御盛業被爲立度、右大規模相立候迄者、朝廷清肅之體ヲ不被爲失、從來之舊綱不相弛候様、目前指掛候事件等ニ者少モ無御拘、一切幕府ニ御任被置候事、御當然之義ト奉存候間、外國之事件、實美以下之事者勿論、御別紙件々、其他一切幕府ヘ御任可被成、別段施爲之儀者御答不奉申上候、只々盛大之御趣意御貫徹御座候様奉至願候、以上。

紀州

十月二十一日

三浦休太郎

大槻文彦筆記
晚翠樓叢書

○ 今般御下問ノ件々、重大ノ儀ニテ、差寄利害得失ノ見込付兼候得共、近々上坂之間有之候五卿方御取扱ノ儀ハ、既ニ洛外幽居迄ノ儀ハ、朝廷御間濟御許容被成置候儀ト奉存候得ハ、今更別途ニ言上仕候程之儀無御坐候、尤幽居後ノ御處置筋ハ、召ノ諸侯上京之上、御衆議モ可有之、且又外國事件、及大樹公ヨリ伺ノ廉々トモ差向候儀ハ、先幕府ヘ被任置、御差障不被爲在儀ハ、召ノ諸侯參著迄ハ、從來之通ニテ被閣、其段兩御役ヨリ御觸出ニ相成候ハ、去十六日、御沙汰ノ大事件云々ノ御旨趣ニモ相叶可申歟ト奉存候、爲差定見モ無御坐、此段御請迄申上候、誠恐誠惶謹言。

細川越中守家老

十月二十一日

三宅藤左衛門

第一條

此儀、朝廷ニハ御手馴ニモ無之、御手ニモ被爲及間敷、萬一順番等狂候而ハ如何ニ付、幕府ニテ御取調ニ相成候ヲ、御兩役ニテ御達ニ相成候方可然見込申候、

第二條

朝廷ニハ、未タ御代官等夫々之御役方不被設候事ニ付、是迄通ノ御取扱ニテ無之候テハ御用辨兼可申候、

第三條

此儀モ前條同様、夫々之御役無之、御手ニ難被及可有御坐哉ニ付、矢張是迄之御手續ニテ無之候テハ辨兼可申候間、其段諸侯方ヘハ、御兩役ヨリ被成御達方ト奉存候、

第四條

此儀是迄ノ振りニ違ヒ、領主領主ノ心々ニ相成候ハ、差寄、此節 召ニ被應候諸侯方ノ迷惑ニモ相成可申候間、右同斷、

第五條

朝廷ニ其御役被成御設候迄ハ、是迄之通ニテ無之候テハ、亂妨ノ基タルヘク候間、伺之通タルヘク奉存候、

第六條

御懲戒ハ暫モ難被廢候處、 朝廷往古ノ律ハ、方今ノ時宜ニ協不申儀モ可有之候間、追テ御取究迄ハ、仕來ノ通タルヘクト奉存候、

第七條

本文ノ役々、如何様ノ勤向歟、委ク不奉承知候間、如何様共見込付兼申候、

第八條

金札ハ輕便之物ニ有之候得共、理金ニテ融通不致譯ハ無之、自然ハ幕府ノ疲弊ヨリ起候儀ニハ無之哉、然ルニ政權奉還之上モ、其儘融通被仰付候ハ、列侯方各願立ニ相成候ハ必定ニテ、是又不被差許候テハ難相成、往往外夷ヘ被對候テハ、別テ混雜ヲ生シ可申歟、依之、追テハ當時ノ札ヲ 朝廷ノ御札ニモ可被成候得共、先此儘ニ被閣、列侯方ノ御願ハ堅被禁候方歟、此一條ハ掛念不少奉存候間、篤ト御衆評ヲ奉仰候。細川護久家記

○ 微臣等、辱ク御下問ヲ蒙リ恐懼之至ニ奉存候、然ル處、重大之事件、固ヨリ微臣等之敢テ跋テ及フ所ニハ無御座候得共、當

御時勢難忽事件御下問ニ付、卑陋之管見奉申上候、今般、大樹公自ラ御非德ヲ御責被遊、政權ヲ朝廷ヘ御奉還被遊候事、固ヨリ一君萬民、全國一致、皇國之太平ヲ御期望被遊候御英斷ヨリ出候事ニテ、微臣等不堪感激奉存候、各藩諸侯右御盛意拜承仕候テ、不日ニ上京仕、協力同心、共ニ王朝ヲ保護仕、皇國昇平之基ヲ公議仕候儀、的然之事奉存候、乍然、今日、御下問五卿上坂、外國之事件、是皇國治亂之所關、當今之急務、一日モ難忽儀ニ奉存候、然ルテ其事之頭末ヲ熟知セス、日々會議仕候共、衆言紛紜、勞シテ功無キ而已ナラス、萬一處置當ヲ失ヒ候ハ、災害目前ニ生シ、皇國ノ御爲ニ相成中間敷愚考仕候、就而ハ重大之事件ハ不及申、瑣小之事ニ至迄、諸侯上京迄ハ幕府ヘ御委任被遊候方、萬全之儀ト奉存候、右御下問ニ付、卑陋之管見奉申上候、誠恐頓首。

筑前宰相内

十月二十一日

桐山作兵衛

井上六之丞

黒田長知家記

○ 一實美以下云々、

右者、當春五藩申立御聞濟之通、歸洛御取扱ニ而可有御座、尤御所置之儀者、長防ニ相準候事ト奉存候、

一外國之事、

右者大事件之儀ニ付、卒爾ニ見込難申上、何レ御召之諸藩方御著京、公議衆議ヲ被盡、御決定迄者、有形ノ通、幕ニ而御取扱之儀可然歟、尤御改變ニ付而者、條約調印之儀ヲ申立候哉モ難計候ニ付、 朝廷之御事盤御決定被成置度奉存候、

一幕府ヨリ御伺之件々、

御衆議御決定迄ハ、矢張幕府ニテ是迄之通、左無之候テハ、新規之御事柄、御役々御揃不相成候テハ、御差支筋可有之哉ニ

奉存候、
右之通、御尋ニ付、愚存之次第奉申上候、以上。

十月二十一日

松平肥前守内
百武作左衛門
鍋島直大家記
晚翠樓叢書

○ 今般、王政御復古被遊候ニ付、天下之公論廣ク被爲 聞召度、諸侯被召之處、差向御不都合之事件モ有之候ニ付、當時在京之諸侯並各藩士へ御下問被遊候段、誠以御至公之御次第ト奉存候得共、元來數百年來、廢弛之乾綱御再攬被遊候非常之御大業ニ被爲在候ハ、一時物情ニ觸レ、諸事不都合ノ事件モ勿論可有之筈ニ候ヘハ、眼前之節目ニ御泥ミ無之、皇國之御基本御立被遊候儀、尤御急務ト奉存候、參集會議被仰付、丁寧反覆熟議仕候而、自然天下之公論ニ歸著仕候道理ニハ御坐候得共、宇内之形勢、天下之事柄、沿革多端之折柄、隨而人々見込之相違モ可有之候間、召之諸侯上京迄之間ハ、當地三ヶ月詰大名割等八ヶ條之面、都而是迄之仕來被爲居置度、殊ニ外國交際之儀者、最重大之事件ニ御座候處、全體之御基本不相立内、萬一輕易之御所置、御取返シモ難被遊筋出來候而者、天下一新御發政之御砌、乍恐朝威ニモ御拘リ、不容易御次第ニ御座候間、差向御取扱筋者、矢張仕來之通被爲任、別而御厚重ニ御商議被爲在度、左モ無之、細目トハ乍申、御決定被遊候様ニ而ハ、折角天下之公議ヲ被爲盡候光明正大之御盛業ニモ相戻リ申間敷哉、就而者道路之遠近御參考被爲在、諸侯著京之期限嚴重ニ被仰付、一齊參内、朝議之上、皇國之大御基本御決定被爲在候後、諸事御施行被遊候様奉存候、尤脱走五卿上坂之儀ハ、差迫リ候次第ニ付、兼而洛外謹慎住居可被仰付トノ御決議モ被爲在候ハ、其通御取計被遊、尙諸侯上京之上、是亦公議ヲ被爲盡候様奉存候、此段御垂問ニ付、不願恐愚建言仕候。

水戸中納言家來

十月二十一日

大場主膳正
晚翠樓叢書

○ 一五卿方之事、
御歸京迄ノ御形跡ニ寄、至當ノ御所置可被爲在御儀ト奉存候、
一外夷之事、
外夷ヨリ差懸リ申立候箇條、大事件ハ衆議ヲ被爲盡、都而御取扱ノ處ハ、召ノ諸侯上京迄ハ、先是迄ノ通幕府へ御委任被爲在可然ト奉存候、
一御別紙八ヶ條ノ事、
召ノ諸侯、上京ノ上御決定ニモ可相成ニ付、朝政御基本被爲立候迄ハ、先是迄ノ通、幕府へ御委任可然御儀ト奉存候、
右之外存込候儀無御座候、此段申上候。

十月二十一日

松平因幡守内
眞野代次郎
河毛文藏
池田輝知家記
晚翠樓叢書

○ 蒙御垂問恐惶之至奉存候、不容易御用筋ニ候故、不願恐直様奉申上候、抑政權武家へ御委任之事ハ、不得止之勢ニヨリ相歸シ候事ニ而、幕府力ヲ盡シ候而、海内治安二百五十年餘、今般、大樹公虛心政ヲ 朝廷へ奉歸シ候儀、御願之通海内人心之向背御定權モ可被爲在候得共、卒然如願被仰付候テハ、輦轂騷擾難計、皇國之亂階此ニ基可申ト奉存候、今日蒙 御垂

問候脫走之五卿上坂之儀、自然兵勢ヲ張り、朝廷ヲ脅シ、迫而入京之形勢有之候ハ、其罪ヲ重ネ候次第ニ付、速ニ御所置可然御儀ト奉存候、外國之事件ハ、今日ニ至候次第之處、御廟議之模様ニヨリ候而者、信ヲ外ニ失ヒ、内禍心ヲ包藏候者不生共難申、杞憂之至ニ奉存候、唯是迄之通、幕府御委任被爲在候様仕度奉存候、猶其餘細事御箇條者申上候迄モ無御座、諸侯上京之上、御公論モ可被爲在候得共、於微臣ハ、是迄御委任之廉々、誠ニ御變革不可然奉存候事。

藤堂和泉守内

十月二十一日

深井半左衛門

藤井鼎助

藤堂高潔家記
晚翠樓叢書

○大槻文彦筆記、高潔家臣ノ答議ヲ載ス、其文異同アリ、併録シテ參考ニ備フ、

微臣共蒙御下問恐懼之至ニ奉存候、不容易御用筋ニ候故、不願恐直様奉申上候、抑政權之歸不歸ハ、古來ヨリ自然之勢ニヨリ相歸候事ニ而、幕府政刑ヲ用候事二百五十年來、今般、大樹公、虛心政ヲ朝廷ヘ奉歸候儀相希候得共、是又自然之勢ニ無之而ハ、假令如願被仰付候共、京師忽紛擾ヲ醸候儀、皇國之治亂此ニ基キ可申ト奉存候、今日蒙御垂問箇條、脫走之五卿上坂之儀、自然兵勢ヲ張り、朝廷ヲ脅シ、迫而入京之形勢ニ有之候ハ、其罪ヲ重ネ候次第ニ付、速ニ其罪ヲ鳴ラシ、御追討被仰付可然ト奉存候、若穩ニシテ上坂致候得ハ、幕府ヘ御渡、先、坂地ヘ被廻置候様仕度、外國之事件ハ、如舊幕府ヘ御委任被爲在候様仕度、覬覦之藩、朝廷ヲシテ約ヲ結、始メ幕府之交際ヲ破リ、己レ交際之權ヲ恣ニ致サント計候意ニ出候間、是又、如舊幕府ヘ御委任被爲在候様仕度、各國公使入京之儀願出候共、於幕府モ爲延候儀、不容易ト奉存候得共、自然御模様ニヨリ、御沙汰次第、當今之形勢ニ候故、私共ヘ被仰付候得ハ、朝廷、幕府之爲ニ期限ヲ爲延可申奉存候、別段御渡ニ相成候數ヶ條之儀ハ、前同斷幕府ヘ御委任被爲在候様仕度、摠而於朝廷、政ヲ被爲執候儀、乍恐大害之基ニ相成可申候故、斷然幕府ヘ御委任、覬覦之者之志ヲ斷候事緊要ト奉存候、御垂問ニ付、概略奉申上候、誠惶誠恐頓首敬白。

藤堂和泉守内

深井半左衛門

○一脱走五卿ハ御歸京相成候上ハ、最早御殿御住居相成候ハ、萬事御都合可然御儀ト奉存上候事、

一外國之事ハ、此度大御變革ニ付而ハ、御國是御一定相成候迄ハ、第一外國之事一切御謝絶相成置不申候而ハ不被爲叶、一年、二年乃至三五年之間、一途ニ内地ヲ御整被遊、其上ニ而外國之事件改而御受掛ニ相成度奉存候、左ニ無御座、カ、ル大變革未御落成モ無之内、右之事件差湊候而ハ、乍恐倉皇之御所置ニ相成終天不可回之御國害ニ立至リ候ハ、瞭然之儀ト奉存上候、

一大樹公ヨリ御伺之儀ハ、衆議御決定迄ハ、先是迄之通可然、金札之儀ハ、外國御取扱未御決定無御座儀ニ候得ハ、如何可有御座候哉ニ奉存上候、
右ハ御下問ニ付、乍恐不取敢愚存之趣奉申上候。

備前

牧野權六郎

大槻文彦筆記

十月二十一日

○昨日御下問被仰付件々委曲奉畏候、退而熟考仕候處、右者微臣之輩、敢而可奉申上候御事柄トモ不奉存候得共、御垂問ニ付、不願恐惶奉申上候、抑脫走之實美以下、上坂之儀モ御座候得共、先滞坂被仰付置、御召之諸侯上著之上、御決議御所置被仰付候ヲ如何可被爲在哉奉存候、

一外國之儀者、尤不容易御大事件ニ候得ハ、殊更厚再三被爲盡衆議衆之所希望、人心和服之御所置無之而者、永世不朽之御

策ニ難被爲到奉存候、御召之諸侯上著之上、御斷決被仰付可然哉ト奉存候、其他 大樹公御伺之件々、即今於 朝廷御差支之儀ニモ可被爲在哉、是又諸侯上著之上、本根相立候様御決議被仰付度、夫迄之處、是迄之通幕府へ御取扱被仰付候方可然奉存候、以上。

十月二十一日

松平阿波守内留守居

合田左源次

渡瀬浪江

寺西金右衛門

蜂須賀茂韶家記
晚翠樓叢書

○ 一實美以下云々之事、

右者、近々上坂ニモ相成候ハ、先同所へ暫滞留、其上御決定之御都合モ可有御座哉ト奉存候、

一外國之事、

右者、大事件之儀ニ付、是迄諸侯追々建白モ有之候得者、此節 御召之諸侯上京之上御決定可相成、夫迄之處ハ、幕府ニテ御取扱可然哉ト奉存候、

一幕府ヨリ御伺ノ件々、

衆議ノ上御決定可有之候得共、夫迄ノ處ハ、矢張幕府ニテ御取扱可然哉ト奉存候、

右ノ件々御下問ニ付、不憚見込ノ趣奉申上候。

十月

有馬中務大輔内

柘植傳八

有馬頼成家記
晚翠樓叢書

○ 昨日、御達之趣奉畏候、然ル處、當今御變革、實ニ不容易儀ニ付、爰許限美濃守存入推量申兼候、且別段私共見込等無之候得共、御下問之件々、何レモ衆議御決定迄之處、都而大樹公へ被成御任候儀至當ニ奉存候、依之、御改政ノ折柄、人心安兼候儀モ難計奉存候間、一入厚御依頼被成置候様奉存候、御尋ニ付不願恐此段御答申上候、以上。

十月二十一日

南部美濃守内

西村久次郎

津田又六

南部利恭家記
晚翠樓叢書

○ 御返答書、

昨日、御尋之儀ニ付、左ニ奉申上候、

一御書付之面八ヶ條之儀ハ、此度、御召之諸侯御上京、御衆議御盡ニ相成候迄之處ハ、是迄之形ニ、武邊へ御任セ相成候テハ如何可有御座哉、

一兼テ西國御下リ之堂上枚方、近々御上坂之御間御座候趣、其御始末具ニ不相辨候得共、道路之風説ニテ承リ候場ヲ以申上候、西國御下リノ儀者、御朝憲ニ被爲違候御事業ニ御座候得共、全赤心激發之趣ニ承候得者、御當節柄之儀、寛大

之御所置、御入洛被 仰出候而者如何可有御座哉、

一外國御取扱之儀者、御召之諸侯御上京、衆議御決定迄ハ、是迄之形被差置、武邊御取扱向御托ニ相成、雖小議、外國ヨリ新規異事等申立候儀者、官武被爲盡御商議、御取計被爲有候テハ如何可有御座哉。

十月

松平大和守留守居

鎌田三郎大夫

松平直方家記

○

御達之趣奉畏候、實美以下脱走人之儀ハ、御召之諸侯上京迄之處、未出帆無之候ハ、太宰府へ其儘御差置、萬一出帆有之候ハ、大坂表ニ御留置ニテ可然ト奉存候、
一外國之儀ハ、是迄之通、御召之諸侯上京迄之處、都テ幕府へ御委任可然ト奉存候、
右御尋ニ付、見込之趣奉申上候、以上。

十月二十一日

松平下總守家來

平野俊吾

酒井雅樂頭家來

青木平藏

榊原式部大輔家來

服部瀨兵衛

酒井左衛門尉家來

大野與一右衛門

御別紙之件々ハ、都テ幕府へ御任セ之方可然奉存候、猶主人共上京之上、見込之儀モ御座候ハ、可奉申上候、以上。

十月二十一日

名前同上

榊原政敬家記

一實美以下脱走人之事、

右御所置振之儀ハ、御召之諸侯上京之上、衆議公論ヲ以御取計可被爲在御儀ト奉存候得共、不日上坂之趣ニ相聞候間、差向上坂候ハ、同所へ被差置、追而御沙汰可被爲在旨、五藩へ御達置ニ相成可然奉存候事、

一外國御取扱振之事、

一幕府ヨリ被相伺候召之諸侯上京迄之處、取計向件々之事、

右、外國御取扱向者勿論、其餘之件々連モ、是迄於幕府被取扱來候手續有之、俄ニ御扱變リ相成候而者、如何之御不都合相生候哉難計奉存候、只此度伺ニ相成候件々而已ナラス、一日萬機之御政務、或者朝廷於テ御取扱之事件有之、或者幕府ニ而被取扱候事件モ有之候而者、人心疑惑適從スル所ヲ不知、萬事凝滯可仕、全ク御綱紀不立儀ト奉存候、御政柄朝廷へ御引取相成候上者、賞罰黜陟、財利斷獄、牧民治兵之官員、諸役局附屬吏徒ニ至迄夫々相備リ、萬機皆朝廷ヨリ出不申候而者不相成候處、末々俄ニ其御備モ相立申間敷、追々諸侯上京之上者、不拔之御制度モ御確定相成候得共、夫迄之處者、萬事は迄之通、幕府へ御委任被成置候外有御座間敷ト奉存候、此段深御思惟被爲在、皇國之御混亂ニ不立至候様御遠謀奉仰候事。

松平伊豫守家老

鈴木七郎右衛門

久松定謨家記
晚翠樓叢書

十月二十一日

○
御下問之件々、私式微賤之者、見込申上候ハ誠以恐懼之至奉存候、且又從來之顛末曲折篤ト伺得不申候付、目的難相立奉存候得共、御請不申上候而者、猶以奉恐入候付、管見之大意左ニ奉申上候、

近々上坂之間有之候實美以下脫走人之事、

右者 勅許ニ而御上候哉、左モ無御座御上坂ニ相成候哉、御趣意柄篤ト伺得不申候付、駈ト御請難申上候得共、若 勅許無御坐、押而御上坂之義ニ御坐候得者、先大坂表へ御留置、召之諸侯上京之上、御決議被爲在候而者如何哉ト奉存候、外國之事、

三港並兵庫共、開港 勅許之御義ニ御坐候得者、先是迄通之御運ニ而、召之諸侯上京之上、猶後來之御規則斷然ト御評決被遊候様乍恐奉存上候、若又外國ヨリ申立等、其外迫候義者、朝廷御役向ヲ奉始、是迄御掛リ之御役々ニ而、御取扱被遊候而者如何哉ト奉存候、

大樹公ヨリ被仰上、召之諸侯上京迄之處、御取計向御伺八ヶ條、右廉々御伺被 仰上候御事ニ付、朝廷之 思召ヲ以、御沙汰被爲在可然御義哉ト奉存候、右之件々、乍恐御請奉申上候、稽首再拜。

十月二十一日

小笠原豊千代丸家來

二木 武兵衛

小笠原忠忱家記

昨日、以御書取被 仰渡候件々、私共限リ御請可申上事件ニ無御座候様相心得候得共、今日中必御請可申上旨被 仰出候上ハ、無據私共限リ見込左ニ申上候、

一大樹公ヨリ御伺ニ相成候件々ハ、夫々御政務ノ御綱領ニ而、其御ヶ條ニ到リ候而者、御多端御事務故、於 朝廷御取調方未御全備相成不申候ハ、御召之諸侯御京著迄之處、是迄之通、幕府ニ而御取扱相成候方可然奉存候、一實美以下近々上坂之儀ハ、今日迄之御取扱振リ相辨兼候得共、先同所ニ暫滞在、御召之諸侯上京之上、御衆議御決定被爲

在候方可然ト奉存候、

一外國御取扱振之儀ハ、重大之事件ニ付、私共身分ニ而者容易難申上、是亦御召之諸侯御著京之上御決定可然、夫迄之處、幕府ニ而御取扱有之候方可然ト奉存候。

十月二十一日

酒井若狭守内

山川五左衛門

酒井忠祿家記
晚翠樓叢記

昨日、御尋之二條拜考仕候處、不容易事件、前後辨別難仕、何等之存寄モ無御座候、此段申上候、以上。

十月二十一日

松平稠松家來

磯野新九郎

前田利回家記

○ 召之諸侯上著迄之御取計向ニ付、御下問之次第、愚意之趣乍恐左ニ奉申上候、

一從大樹家伺相成候八ヶ條之儀、別而見込之愚意無御座、何レニモ御賢慮次第之御事ト奉存候、一實美已下歸洛之儀、兼而警衛之諸藩ヨリ申立之越、御間濟ニ至居候哉ニ傳承仕、大體防長御所置之儀モ、寛大之御趣意柄ニ奉伺候得者、是又寛仁之御沙汰被仰付度御事哉ニ奉存候、

一外國御取扱向之儀ハ、御邦内ト違ヒ、俄ニ御變革相成候テハ、差向御行支ノ筋モ可有之御事ニ付、諸藩上京御決議迄之所、是迄之手續ヲ以、大樹家ニ於テ取扱候様被仰付度御事哉ニ奉存候、右、昨二十日御達之御旨ニ依、不願恐愚意之趣謹而奉言上候、以上。

十月二十一日

宗對馬守内 扇 源左衛門

宗重正家記 晚翠樓叢書

一八ヶ條

此段御差向之處、別段申上方無御坐奉存候、然處、今般、大樹公深ク古今ヲ觀察セラレ、御國家へ忠誠ヲ被爲盡、御政權ヲ朝廷へ奉還セラレ候御事、誠以深ク奉感激候義、何卒、此上右條理益御貫徹被爲在度御事ト奉存候、乍恐、朝廷ニテ右被爲、聞食候上ハ、彌、大樹公之忠誠ヲ御顯彰、天下後世大國主命ト共ニ其美ヲ稱シ、皇國御永世之御守護ト相成、尙乍恐、皇室ト共ニ永久繁榮セラレ候様、其條理モ是亦御貫通被爲遊度御義ト奉至願候、

一近々上坂之聞有之候實美以下脱走人之事、

此段、右五卿御預リ之五藩ニハ、右一條ニ付、深ク苦慮モ可有之義ニ御坐候テ、前後之事情モ熟知可仕義ト奉存候、依之、右五藩申上之趣モ可有之、乍恐、尙五藩申上之趣ヲ御採擇被爲遊度御義ト奉存候、

一外國之事、

右尙、召之諸侯上京、公論衆議之上、御決定ニ相成候得共、先指向御取扱之處、尋被下候事、

此段乍恐一時御差向之義ニ御坐候共、深ク宇内古今之形勢情實ヲ御洞察被爲在、天下萬世ヲ御達觀御通視被爲遊、皇國御維持之御大計御一定在セラレ、然ル後、一時御差向之義ニ候共、右御一定之御大計ニ障碍ヲ生シ不申、萬世一點御患害ニ不相成候様、深厚ニ御熟慮被爲遊、衆議ヲ盡サセラレ候上ニテ、御施行ニ不相成候テハ、無遠慮時ハ必近憂ヲ生シ候義ト奉存候、依之、乍恐聊存付候義、謹而左ニ奉申上候、

一明大義、御國是ヲ御定被爲在度御事、

右自然モ利害ニ依テ、御國是ヲ議セラレ候節ハ、乍恐利害百端、衆議紛々、御一定之期有之間敷歟ト奉存候、重々乍恐、大義ニ依テ、御國是ヲ議セラレ候節ハ、多言ニ不及義歟ト被奉存候、右ハ漢土周代之歴史、小國ヲ以齊楚大國之間ニ居リ、深ク恐レ候ヨリ、之ニ處スル之方ヲ孟軻ニ問候節、對テ申候ニ、是謀非吾所能及也、無止則有一焉、鑿此池也、築此城也、與民守之、效死而民弗去、則是可爲也、又問候節、對テ申候ニ、昔者大王居邠、狄人犯之、事之以皮幣不得免焉、事之以犬馬不得免焉、事之以珠玉不得免焉、乃屬其耆老、而告之曰、狄人之所欲者吾土地也、吾聞之也、君子不以所以養人者、害人二三子何患乎、無君我將去之去邠、踰梁山邑于岐山之下居焉、邠人曰、仁人也、不可失也、從之者如歸市、或曰、世守也、非身之所能爲也、效死勿去、君請擇於斯二者ト、孟軻之書ニ相見候、孟軻之書、不可取者多端ニ御坐候得共、右立論ニ至候テハ、是ヲ天地鬼神ニ質候テ、一點無疑者ニ御坐候テ、即チ大義ニ依テ言テ立候義ト奉存候、異邦小國之事、且異邦人之言說ヲ取候テ奉申上候義、深厚奉恐入候得共、乍恐、何レ之世、何レ之國ニ候共、右二者之外、決シテ他ニ道ハ無之歟ト奉存候、右様ニ御坐候處、堂々タル、天朝、外夷之覬覦ニ依テ、狄人之所欲此土地也ト、可被爲避之義、恐多クモ、皇祖日神ニ奉誓、決シテ無之御事ニ御坐候得ハ、乍恐、上下一心、死ヲ決シテ、御國ヲ奉守護之外、決シテ他ニ道ハ無之義ト奉存上候、君父辱ヲ受候時ハ、臣子死ヲ致シ候ハ、人道之大義ニ御坐候得ハ、君父之、御國、萬一モ辱ヲ受サセラレ候様之義有之候節ハ、凡、皇國之御臣子ニ候者、誰カ憤激決死不仕者可有之哉、悉ク效死候義、素ヨリ當然之義ト奉存候、依之、尙重々乍恐、攘夷之御大義、嚴然ト、御英斷、御國是御決定被爲在度御義ト奉存上候、左候處、世上ニハ、攘夷ト鎖港トヲ混同仕候論說モ有之候哉ニ傳承仕候處、攘夷ト鎖港トハ、素ヨリ別段之義カト奉存候、鎖港ハ外國人、御國地へ來リ候ヲ一切御禁絶被爲在、外國人ト見懸候得ハ、善惡ヲ不問、追拂ヒ膺チ懲シ候義ニ可有之候處、攘夷之義ハ、右ト相違仕、外國人之實ニ善意ヲ以來候者ハ、是ヲ信好撫懷セラレ、來テ、御國ノ御患害ト相成候者ハ、是ヲ攘斥膺懲セラレ候義ト奉存候、依之、開鎖之義ハ、攘夷中之二大伴ニ御坐候テ、時勢ニ隨ヒ、利害ヲ詳ニシ、可開時ハ之ヲ開キ、可鎖時ハ之ヲ鎖候義ニテ、開鎖之二端ニ、深ク拘泥可仕義ニハ、有之間敷ト奉存候、左候處、外國人之來テ、御國之御患害ヲ仕、御讎敵トモ

罷成候者ハ、即チ 朝敵ニ御坐候テ、之ヲ賊ト呼ヒ、夷狄ト名付候ハ、當然之義ト奉存候、其來テ 御國之御憂ト罷成候者ハ、君父之大讎ニ御坐候テ、共不可戴天之 朝敵逆賊ニ御坐候、是攘斥膺懲候義、即チ天下遵奉仕候様、厚ク御處分被爲在度御義ト、乍恐深ク誠ニ奉至願候、

一 詳利害嚴重御守備ヲ被爲設度御事、

右ハ深ク宇内之形勢情實ヲ御觀察在セラレ、時勢之變遷ニ隨ハセラレ、皇國四邊之御守衛、御措置、御遺算無之様嚴重御確定在セラレ、大義ヲ明ニセラレ、大ニ士氣ヲ御振作在セラレ、攻守之道ヲ詳ニセラレ、大ニ御兵制御兵略ヲ立サセラレ、城堡、船艦、大砲、諸般之兵器、烽燧、糧穀ニ至候迄、御全備御充實在セラレ、大ニ形勢ヲ張セラレ、海内之諸藩一心一致盡力守禦相成候様、大ニ其道ヲ立サセラレ、天下之銳氣 御國中ニ溢レ、餘威八表ニ震候様、御處分被爲遊度御義ト、尙乍恐誠ニ奉至願候、

一 正道義、御交際之御法則、御嚴重立サセラレ度候御事、

右ハ萬國之尊卑等第並通信通商之事實、交際之法則ヲ詳ニセラレ、禮制ヲ明ニセラレ、信義ヲ厚クセラレ、萬世御患害無之様、御制則ヲ立サセラレ度、謹テ大地之形勢ヲ觀察仕、古今之沿革ヲ傳聞仕、萬國之尊卑ヲ通聽仕候ニ、皇國ハ大地之元首、萬國之宗國ニ御坐候テ、天朝ニハ宇内之至尊、世界人間之極尊ニ御座シマス、御國ハ 皇國ト奉稱候義ニテ、外國唱候所之帝國王國ト比倫セラル可キ御事ニハ有御坐間敷奉存上候、左候得ハ、外邦帝國ト唱候者モ、皇國ニ奉交候ニハ、猶王國之帝國ニ交候禮節ヲ取候義、三才當然之修理ト奉存候、乍恐、皇國ハ 天祖日神ヨリ被爲賜候 御國ニ御坐候テ、乍恐、皇統ニハ實ニ 日神之 御神孫ニ被爲 在、天位ヲ無窮ニ被爲 踐候御事ニ御坐候得ハ、世界萬國誰カ比倫可仕者可有之哉、能ク此道義ヲ昭明ニセラレ、詳ニ外國へ御告諭有之候ハ、彼レ必ス敬服可仕義ト奉存候、何卒厚ク此大義ヲ明ニセラレ、御國體御嚴立セラレ、大ニ宇内ヲ御制御被爲遊候御大基本ヲ、今日ニ立サセラレ度御事ト奉存候、然ル上ニテ、通商貿易等之儀ハ、利害得失ノ道ヲ詳明ニセラレ、萬世御弊害無之様、御信義ヲ不被爲失候様、深

厚衆議ヲ盡サセラレ、御規則御確定在ラセラレ度御義ト、乍恐重々奉至願候、

右之段、微賤之私共へ 御尋被爲下候御儀、誠以感激伏泣之至ニ不堪、依之、不顧身分、不避萬死、重々乍恐、謹而此段御答奉申上候、誠恐誠惶頓首謹言。

十月二十一日

真田信濃守家來

長谷川 深 美

真田幸民家記

○ 昨日、以御書付、小臣私等へ存念可申上候様御下問之趣奉畏候、然ル處、右御ケ條ハ、何レモ不容易御大件、殊ニ尊威ヲ御降シ朝廷ヨリ之御直問、大膳大夫罷在候共、御答方何分ニ相心得可申哉、況不肖之小臣、私等御直答申上候儀、如何ニモ以恐懼之至奉存候處、仰願ハ一應幕府之御手ヲ被爲經、御沙汰ニ相成候様仕度、左候得ハ、見込之儀モ候ハ、幕府迄可及言上奉存候、左モ無御座候而ハ、實以天威恐多痛心之至ニ候、何卒宜御聞濟被成下候様伏而奉冀候、以上。

奥平大膳大夫家來

桑 名 登

大槻文彦筆記

○ 昨日、私共式へ 御下問之趣奉敬承候、然處、誠ニ大事件之儀御座候間、容易確定之見込モ付兼候間、乍恐一二之事件而已、左ニ申上候、

一 五卿御歸洛之事、

此御一事件、取極評議者仕兼候得共、御著坂ニモ相成候ハ、理非曲直御糺明、朝議御恐服之境御見留之上、御歸洛御

相當歟ニ奉存候、
一外夷之事、

朝廷御新政之儀ニ而、御裁斷難被差留被爲在候ハ、當分、是迄之姿ニ被成置、朝廷ヨリモ、御打混御所置被爲在候而、
者、如何可有御座候哉、

一幕府ヨリ御伺候ケ條書之事、

此御儀モ、幕府ヨリ御差定之件々ヲ御伺相成候迄之儀ト奉存候間、御朝議ヲ以御決定相成候様仕度奉存候、
右之通御座候、以上。

十月二十一日

戸田采女正内

桑山豊三郎

井田五藏

市川元之助

戸田氏共家記
黒川秀波筆記

○昨日、拜見被 仰付候御書付之件々、見込之義可奉言上旨被 仰付奉畏候得共、關係不仕義ニ御坐候得ハ、條理相辨兼候ニ
付、見込難仕奉存候得共、乍恐、大體ハ萬機之 御政務ニ被爲拘候御事柄モ可有御坐哉ト奉伺候得ハ、今般被爲 召候諸侯
上京、御公論御決定迄ハ、先御舊格之邊ニ被爲成置候テハ如何可被爲有候哉、御尋ニ付、不願恐、愚衷奉言上候、誠恐誠惶謹
言。

十月二十一日

松平兵部大輔家來

友部權六

松平直致家記

○薩、藝、土三藩士、答議水萍貽孫録二十五日トス、今廣島藩記ニ從フ、紀伊、水戸二藩士、建議家記皆載セス、傳寫ニ係ル
ヲ以テ、謬誤甚タ多ク、語意通シ難キ者アリ、然レトモ、之ヲ其家ニ質スニ、答議ヲ出セシハ疑ナシ、其餘加賀、米澤等諸
藩ノ如キ、家記皆原記ヲ失ス、今考フル所ナシ。

二十二日、幕府申稟スル所ノ三事ニ批シ、八條ハ姑ク其舊ニ依リ、三條實美等ハ、大坂ニ止メ、
外國ノ事ハ、其情ニ通スル數藩ト謀リ、諭シテ之ヲ紓フセシム、又之ヲ列藩ニ布告ス。

○八條批紙

右八ヶ條、召ノ諸侯上京之上、被立規則候得共、其迄ノ處、是迄ノ通可心得事、

但、當地三ヶ月詰、竝口々御固大名割ノ一條ハ、是迄ノ手續ニテ取調、於申渡ハ兩役取扱ノ事。

○實美以下ノ條批紙

自然上坂候得ハ、諸侯上京迄ノ處、於浪花滞留之事、

但、從 朝廷可申渡候事。

○外國ノ條批紙

召ノ諸侯上京之上、御決定ニ可相成候得共、夫迄ノ處、差向候儀有之候得ハ、諸侯上京迄差延候儀、外國之情ニ通シ候兩三
藩ト申合可取扱事。細川護久家記
小笠原忠忱家記

○忠忱家記ニ云、御假建ニ於テ、御下問ノ件々、御附札被仰出旨口達被相渡。

○久我通久、中納言六條有容、中納言等、書ヲ上リ、東久世通禧ノ義絶ヲ釋カント請フ。

源 通 禧

先年脫走之次第三付、義絶仕候、然ル處、長防寛大御所置被 仰出候ニ付而者、何卒以 御憐愍義絶御赦免之儀相願度、宜預御沙汰候也。

十月二十二日

通 久久我

日野大納言殿
飛鳥井大納言殿

源 禧

先年及脫走候次第三付、義絶仕候處、長防寛大之儀被 仰出候ニ付而者、何卒以 御憐愍之 御沙汰、義絶御赦免之事、從久我中納言相願候通、於一族中モ相願存候、此段宜預御沙汰候也。

十月二十二日

有 任千種

通 言植松

通 慶岩倉

通 熙久世

通 善梅溪

有 富中院

有 容六條

日野大納言殿
飛鳥井大納言殿

久久我通
久家記

○德川慶勝、大納言○尾張藩主、徳成ノ父、幕府親藩ノ首ニ居リ、匡輔スルコト能ハサルノ罪ヲ謝シ、其官爵ヲ貶黜セント請フ。

謹而奉言上候、臣慶喜、頃日政權之儀ニ付、奏聞之趣被爲 聞食候旨、謹而伏承仕候、右者獨慶喜之罪ノミナラス、不肖臣慶勝久敷親藩之立場柄ニ在、輔翼之事不行届、終ニ今日之形勢ニ立至候段、誠以惶懼戰慄之至ニ不堪、臣慶勝之罪不少奉存候、是迄者格別之 御寵遇ヲ奉蒙、過分之官爵ヲ汗居申候處、何卒御降奪之 御沙汰ヲ蒙、責而者萬分之一ヲモ償ヒ申度、口管奉伏罪候、臣慶勝誠惶誠恐頓首敬白。

十月

大納言 慶勝

二條攝政記
徳川義宣家記

○市橋長義、下總守○西大路藩主、食封一萬八千石、京ニ至ル、市橋長義參罷記

二十三日、上京ノ諸侯ニ令シ、務テ從者ヲ減省セシム。

諸藩上京之儀被 仰出候ニ付而者、京師モ狭小之儀、旅宿等モ不都合ニ候間、成丈ク少人数ニ而、上京有之候様可致候事。
十月 藤堂高邦家記
大岡忠實家記

○幕府、再ヒ外國常事ノ措置、及ヒ課金、驛法布告ノ事ヲ稟問ス。

一外國之儀ニ付、御附紙之趣奉畏候、平常之儀者、是迄之手續ニテ取扱置候テ可然候哉、
一同候八ヶ條、御指圖之趣奉畏候、就テハ 大宮御所御造營ニ付、國役金收メ方手續並五街道人馬之儀、御規則相立候迄者、是迄之通タルヘキ旨、御兩役ヨリ諸大名へ御觸達相成候儀ト奉存候得共、爲念此段猶又奉伺候。

十月二十三日 徳川慶喜實記
晩翠樓叢書

○持明院基政、六角能通等、連署シテ、壬生基修ノ義絶ヲ釋カント請フ。

藤原基修

去五月、長防之儀、寛大之 御沙汰被爲在候間、於藤原基修モ、以 御憐愍義絶被 免候様奉願上度候、宜預御沙汰候也。

十月二十三日

基	祥園
基	文石山
宗	有中御門 號松本
基	敬東園
保	美高野
基	安石野
能	通六角
喜	政持明院

日野 大納言 殿

飛鳥井 大納言 殿 園基祥
家記

○幕府、書ヲ佛朗西國公使ニ與ヘ、浦上村耶蘇教徒處分ノ事ヲ告ク。

佛蘭西全權ミニストル

エキセルレンシー

レオンロッシユヘ

以書簡申入候、浦上郷住民ノ事、竝ニ平山圖書頭、右事件ニ付、取計ヒ振り等ニ付、小笠原壹岐守ヘ充テラレシ書簡ヲ、同人余カ方ヘ差越タリ、

一京都、長崎竝ニ江戸府トモ、互ニ遠路相隔絶シ、書翰ノ往復等モ自然遅延ニオヨヒ、殊ニ右緊要事件之落著方等、大ニ行違ヒヲ生シ、計ラスモ餘程之手後レヲ引起シタルモ、素ヨリ其許ヨリノ兩通ノ書翰、長崎ノ貴國コンシユル、及ヒ僧徒首

長ノ方ヘ、著スヘキ時ニ至リ達セサルニ因ルナリ、其許、右嚴重成書翰ヲ認ラレシ、其趣意ハ余ニ於テ篤ト了解シ、深ク察シ入ル處ニシテ、萬一事ノ情實、其許ノ推考セラル、如クナルトキハ、其咎責ヲ受クヘキモノハ、余ト平山ノ兩人ナリ、然ルニ事全行違ヒニシテ、余等モ亦幸ヒニ其責ヲ脱スルノ餘地アリ、今此圖書頭ヨリノ書面ヲ一讀セラル、トキハ、事ノ情實亮然ト、其許ニモ了解シ給フヘシ、第一、其許ヨリ長崎ヘ遣ハサル、書翰差立方延引セシコトハ、余カ方ノ手落ナレハ、幾重ニモ其罪ヲ謝ス、右様所置セシモ、別ニ趣意アリテナセシコトニアラサルコトハ、天ノ鑒ミ知ル處ナリ、
一大君平山ヘ下命シ給ヒ、其許ノ方ニ至リ、右事件取計フトキニ當リ、種々ノ妨碍ニ逢ヒシ始末等ヲ委敷書記セシ、此書面ヲ其許ヘ呈シ、右ヲ一見セラル、時ハ、事ノ詐リナキ確證ヲシルコト、又難カラサルヘシ、就テハ、其許ニモ問ハル、廉アラハ、一々口上ニテ説明ニオヨフヘシトノ命ヲ蒙レリ、

一長崎ニオイテ、公然ト耶蘇教ヲ信仰シ、余國ノ大法ヲ破リシトイフヲ以テ、嘗テ入牢セシ日本人七十八人ノ内、七十七人ハ改心、又ハ國法ヲ破リシ過ヲ悔ユルトノ旨ヲ申出、外ニ言葉ヲ設ケス、唯改心トイフヲ以テ、盡ク赦罪セリ、跡一人ハ、右改心ヲ云フヲ否ミシニヨリ、歸村預申付置タリ、尤寛宥處置ノ方法ハ、尙可申入候、

一長崎奉行ノ組頭四人ノモノ、趣意ヲ述ヘ屈服セサルヲ憤リ、此者トモヲ打撃シ、奉行モ大君寛裕仁恕ノ趣意ニ甚タ反シタルコトヲ、平山ヘ告ケサリシヲ以テ、殿下此モノ等ノ職ヲ取揚クル而已ナラス、又此過失ニ相當ナル罰ヲ加フヘシト、決定シ給ヘリ、

右ハ、其許正理ヲ以テ愁訴セラル、苦情ヲ慰スルタメ、處置ニオヨハントスル事ニシテ、大君殿下ノ命ニヨリ、余其許ノ思ヲ安センカタメ、取計ハント思フ事也、且余カ政府ニオイテハ、耶蘇教ノ事ニ付、惡意ヲ包藏スルニアラス、畢竟、當今國內ノ形勢多難ノ場合ニ當リ、無餘義、歐羅巴各國ニオイテハ、過激ノ處置ト人々思ハル、ナルヘケレトモ、日本ニオイテハ、豫メ後患ヲ察シ、國法ヲ重ンスルヲ以テ第一トスルコト、無據事情ナレハ、猶其許ヘ此事ヲ再述ニオヨヒ置様、殿下余ニ命セラレタリ、

一貴國ノ僧徒等、日本人ヲ教化セサル様、尙其許ヨリ申遣ハサレンコトヲ願フ、此事ニ付テハ、余等カ所思ヲ、猶平山ヨリ委細其許ヘ可申入候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十三日

板倉 伊賀 守花押

外務省記

○佛公使及ヒ平山圖書頭書簡ハ、原記ヲ失ス。

二十四日、徳川慶喜、上表シテ、征夷大將軍ヲ辭ス。

臣慶喜昨秋相續仕候節、將軍職之儀、固ク御辭退申上、其後厚蒙 御沙汰候ニ付、御請仕奉職罷在候處、今般 奏聞仕候次第モ有之候間、將軍職御辭退奉申上度、此段 奏聞仕候、以上。

十月二十四日

慶

喜
徳川慶喜實記
春嶽私記

○甘露寺勝長^{左中}ノ義子萬長^高丸、ヲ堂上ニ班シ、松崎氏ヲ稱セシム。

○松崎萬長家譜略ニ云、慶應三年十月廿四日御取立、同年十一月一日賜號稱松崎。

○此事達書ナシ、其家ニ質スルニ、口達ニ出ツト云。

○北條氏恭^{相模守}主^{食封一萬石}ヲシテ市橋長義ト共ニ、四塚關門^{京師南郊}ニ在リ、ヲ守ラシム。

○幕府上申書

四ツ塚御警衛御手簿ニ付、別紙之通取調候、於御兩役御達御座候様仕度候事、

北條 相模守

四ツ塚關門御警衛之義、市橋下總守ヘ申合、相勤候様可致候。
晚翠樓 叢書

○本件達書、原記ヲ逸ス、因テ上申書ヲ補填ス。

二十五日、諸藩ニ申命シ、十一月ヲ期シテ京ニ至ラシム。

御用之儀有之被 召候、期限來月中ニ必有上著候事。

松平直方家記
木下利恭家記

○本條達書ノ日、諸家記異同アリ、蓋シ漸次發令セシモノナラン。

○初メ朝鮮國、佛朗西、米利堅ト釁隙ヲ開ク、^{去年八月、九月、幕府、佛、米公使ニ説キ、將ニ使節ヲ朝鮮ニ派遣シテ、講和ヲ謀ラントス、是日、朝旨ヲ奉シテ、其事ヲ行ヒ、且宗義達ニ命シテ、使事ヲ幹セシメント請フ、義達モ亦朝鮮國往復書ヲ上リ、其事由ヲ上陳ス。}

昨年朝鮮國ニ而、佛蘭西之教師ヲ致殺害候ニ付、佛國之水師提督軍艦數艘ヲ以及戰鬪候處、時寒氣ニ向ヒ、一ト先解兵、今年春暖ヲ待チ、大兵再舉之企有之趣相聞、且右戰爭之後、亞國之商船、朝鮮國之海岸ニ漂著候處、佛國ト謬認候哉、朝鮮人妄ニ舟中之人ヲ殺シ、其中ニ英人二名乘組居、同様ニ被殺候由ニ付、三國中合、軍艦差向候間エ有之、朝鮮國禮曹ヨリモ、戰爭之次第、宗對馬守ヘ及報知候、朝鮮國之義者、從來之舊好唇齒之國柄、彌三國合從ノ大兵ヲ向ケ、彼國滅亡ニモ至候ハ、皇國之大患トモ可相成、其上同國之義ニ付、去癸亥年、對馬守ヨリ申立候趣建言仕、朝廷御間濟ニモ相成居候旁、此度和議可取扱心得ヲ以、佛、亞兩國公使ト申談、尙朝鮮國ヘハ、爲使節若年寄、並平山圖書頭、目付古賀筑後守差遣候積リ、對馬守ヲ以、先ニ彼國ヘ爲及掛合候間、内外多事之折柄トハ乍申、兩人差遣方、此上遲延相成候テハ、隣交之信義難立候ニ付、十一月中出帆之積リ、猶又爲掛合置申候、右之通り之次第ニ而、兩人渡海期月差迫リ居候ニ付、是迄之手續ニ而取計候義ニ御座

候ハ、改而從 朝廷其段被 仰出、宗對馬守へモ同様御達ニ相成候様仕度奉存候、以上。

十月

慶

喜

外務省記

○ 昨年、朝鮮國、佛蘭西ト戰鬪ノ次第ハ、兼テ佛國ノ教師潛ニ韓國ニ入り、其邪教ヲ廣メ、黨類日ニ繁ク、種々ノ奸邪國害ヲ醸候ヨリ、朝鮮國政府相議シ、其巨魁、竝教師ヲ致殺戮候ニ相起リ、佛國ノ水師提督、復仇ノ爲軍艦數艘ヲ以、韓國ト及戰鬪候處、時寒氣ニ向、一ト先解兵、今年春暖ヲ待、大兵再舉ノ企有之趣、外國新聞誌中、具ニ相見、且右戰爭ノ後、亞國ノ商戰、朝鮮國ノ海岸へ漂著ノ處、佛國ト誤リ認候哉、韓人妄ニ舟中ノ人ヲ殺シ、其中ニ英人二名乘組居、同様被害候由、右暴據ニ依リ、三國憤怒、問罪ノ師差向候間モ有之、然内、朝鮮國禮曹ヨリ、佛國戰爭ノ次第表立テ及報知、尙其顛末委曲、幕府へ轉達ノ儀ヲモ申越、隨テ朝鮮國ノ儀ハ、從來ノ御舊好、殊ニ唇齒ノ國柄、今日ノ危急於 皇國御傍觀可被爲有様無之、彌三國合從、兵ヲ向候ニ至テハ、彼國亡滅旬月ヲ不出、舉國忽外夷ノ有ト相成、神州ノ大患難勝數、其上同國ノ儀ニ付、去癸亥年、對馬守ヨリ幕府へ建言ノ主意、 朝廷御間濟ニモ至居、旁、此度和義御取扱被下彼國危禍相免候ハ、 皇國ノ御仁恩深奉感戴、往々御德化ニ服從仕候御遠圖ノ御手始ト奉存候處、則於幕府和議御取扱方御決定ニ至リ、其趣、佛、亞兩國へ被及御說得、尙朝鮮國へハ、爲御使節平山圖書頭殿、古賀筑後守殿、圖書ヲ以渡海ノ手筈、前以彼國へ懸合置候様、當四月幕府ノ命ニ依、不取敢其趣朝鮮表へ懸合罷在候内、清國於上海、我國ノ漂人八戸順叔ト申者、無稽ノ妄說ヲ唱へ、右流言朝鮮國へ傳播致シ、韓人甚 皇國ヲ疑訝致候意味有之、當六月、禮曹ヨリ書翰ヲ以、右事件不審ノ趣申越候ニ付、事實辨白ノ返答向、幕府ヨリ内命ノ書面中、國使既行李ヲ戒メ、不日解纜渡海ノ趣相見候處、其後ニ至、御國使渡海方、又々數月相後レ、尤御邦内御用多ノ折柄、格別無御餘儀次第奉存候得共、兼々切迫相懸合置候末、其期限相扒候テハ、談判向ノ不都合ハ不及申、外國へ對シ御信義難相立、殆苦心罷在候處、本月初旬、圖書頭殿渡海ノ期限、來十一月中出帆可有之趣、朝鮮表へ懸合置候様、溫テ幕府

ノ命有之、右ニ付、詰合家來ノ内、急ニ歸國方御差圖ニ相成、今程ハ敏ニ彼國へ申達居候事ト奉存候、然ル處、今般御大政向不容易御變革被仰出、隨テハ右朝鮮國事件、委曲幕府ヨリ御伺ノ上、御取計ニ相成候義ト奉存候得共、是迄之手續、一ト通奉達 御内聽置候條、可然御間通被爲下度奉希候、尙又朝鮮國來翰寫、其外ノ書類、御勘考ノ御爲別紙ノ通差上候、以上。

宗對馬守内

大島友之允

十月二十五日

禮曹告異様船情形書、

朝鮮國禮曹參議任 冕鎬 奉書

日本國對馬州太守拾遺平公 閣下

玄英弭節、緬惟、

啓居珍恙、慰溯竝摯、竊以、敝邦與 貴國講信修好、垂三百年、凡係邊圉之政、疆場之事、未有不陳述、因由開示方略、知庚申 貴國書契者、卽所以申舊約、而敦隣誼也、西洋英佛諸國、遠涉重溟來、請交易於敝邦者、不止一再、而竟至於兵刃相加、則其毒愈憎矣、本年春間有南鍾三、洪鳳周者、或簪紳邇列、或衣冠遺裔、傳習邪教、糾結匪類、潛引洋人、奉爲教主、薰染既久、煽惑益廣、奸跡掀發於緝捕之際、悖黨駢就於刑辟之下、夏秋間洋船一艘、先泊於湖西海美縣前洋、次泊於畿内江華府近地、乍往旋來懇請通貨、敝邦嚴辭、牢拒終不聽允、則彼乃缺望而退、又於此際洋船一艘、自西海轉入平壤府羊角島、剽掠商貨、殺害人畜、道臣設計火攻、盡行勦滅、八月十六日、洋船二艘、自南洋直入京江、三宿而返、言語不通、情款相阻、行止莫詰、竭來自恣、乃於九月初六日、洋船大小三十餘艘、又到京畿、我留礙於富平府前洋、或直向江華府中串津、打破樓櫓、焚燬廟宇、殺害人民、攘奪牛畜、寇籍輓漕、盡爲剽劫著、巡撫使李景夏、開營戒嚴於輦下、先鋒中軍李容熙、陣于通津府、左先鋒將鄭志欽、陣于濟物鎮、右先鋒將金善弼、陣于富平府、遊擊將韓聖根、陣于文珠山城、遊擊將梁憲洙、陣于鼎足山城、遊擊將李基祖、陣于廣城、鎮摠戎使申觀浩、召募使李元熙、陣于楊花津、召募使鄭圭應、陣于西江隘口、御營中軍權諮、京畿中軍白樂

賢、陣于幸州隘口、楊州牧使林翰洙、陣于礪呢隘口、招討使韓應弼、陣于延安府、防禦使柳琬、陣于案ニ此處及州ノ下、坡州牧、都護使申楮、陣于長湍府、移檄請戰、期日相見、賊盡並其衆聚保港汊、無意交鋒、沿浦舟楫、沒數燒燼間、或潛襲文珠、鼎足諸城、輒被守將擊却、敵邦敵數器仗、修繕戰艦、又令三路舟師、合勢進攻、十月十二日、大小洋船、仍即捲還退、向外洋而去、此爲敵邦被兵之大略也、敵邦昇平日久、戎政弛而武備疎、未能長計制勝、使片帆不還、則雖有數三克捷、多少勦寇、固不足爲耀威武、而豐遠人、且夷情叵測、進退無常、未可以目下之紓急、永錫方來之憂虞也、又有一事之不容、不據實相報者、敵邦之瀕海東南、與 貴國諸州涯涘、可辨牛馬、境界殆聞鷄狗、而自夏秋至于近日、無數帆船、自西而南者、出沒於煙雲島嶼之間、封疆之臣、飛報日至、未知彼夷將欲起釁、而 貴國設備而待變歟、未知 貴國已與構兵、而彼夷左次而敗歟、又未知彼方恣睢潛伺、磨牙鼓吻、而 貴國或未覺悟、其因祕之情狀、逆折其森發之氣勢歟、敵邦用是憂慮、不叩自恤、茲以控舉顯末、修牘展布、幸將右項事由、轉達 東武、是所深望、惟 崇照肅此、不備、

丙寅年十月 日

禮曹參議任 冕鎬、

禮曹報異聞書、

朝鮮國禮曹參判李 沆應 奉書

日本國對馬州太守拾遺平公 閣下

花煦舒長、緬惟、

啓處沖裕、邇誦無射、敵邦與 貴國隣港之衣帶、只隔訊譯之冠蓋、相續爾來二百餘年之間、講信修好終始無替、今春節使自北京回言、得聞傳說、則有 日本國客人八戶順叔言、日本江戶政府、督理船務將軍中濱萬次郎、月前特至上海、制造火輪船八十餘艘、近日已啓行回國、國中共有二百六十諸侯、至江戶會同議政、現有興師往討 朝鮮之志、八戶順叔者、不識爲何狀人、屬籍之的在、貴國既不可詳流寓之現因、何事又未必詰、而竊怪其捏造靈誣、恣意譸幻、公肆流播、無所顧畏、揆諸事

理實、是窮究不得者矣、噫 兩國之誠信日星可監、先世之條約金石可透、百神共證不愉之盟、萬姓方邀、無量之福利、不當以一時驟聞之誑說、遽認實際、然義在永好、情出無隱、茲庸臚述耳、聞披展衷曲、幸將右項事實、轉達 東武、明賜覆音、是所深企肅此、不備、

丁卯年三月 日

禮曹參判李 沆應

遣禮曹參議、答異樣船情形書、

日本國對馬州太守拾遺平 義達、奉復

朝鮮國禮曹參議大人 閣下、

曩辱 華翰就諦、啓居珍步、傾慰良深、所 示戰鬪一款、臚列顯末、副以所見、既已稟 啓 東武、則 廷議以爲、去秋法國之開釁也、實出于不虞、不啻唇齒相患、抑於 鄰睦世敦之誼、憂恤那有措哉、欲使 貴國永計綏安者、此 東武盛意所在地、不佞在職曷任感哉、今番有 使節至 貴國之 命、東武官員身親開陳時務、則在 貴朝豈無宜當之處置耶、觀縷事實、要在 使節陳述、何待多及總、惟 照亮肅、此不備、

慶應三年丁卯六月 日

對馬州太守拾遺平 義達

遣禮曹參判答異聞書

日本國對馬州太守拾遺平 義達 奉復

朝鮮國禮曹參判大人 閣下、

遠承

芳緘憑審、

興居清迤、欣慰良深、所
示辭意斯速、轉

啓

東武、則其說果是荒誕虛妄、毫無形迹、此等流言囂々殆爲煩、貴朝於我豈忍然耶、抑我 大君殿下、不撫區域、舊弊斯除、百度一新、文武庶員、贊成謀議、夙夜唯以張皇 國威、爲目今急、購其砲艦器械於海外、給我富國強兵之資者、往々皆然、安知非流言之所以由來哉、本邦之於 貴國、世敦 鄰好、共接綏寧者、是 台慮所以睦々於今日也、至暴虎不法之訛言、不足信也、彰々矣、及聞法國戰鬪之事、鄰誼相孚、唇齒相依、豈可泛視于其間耶、用是恤念無措、欲使 貴國永錫後來之憂虞也、故這回特 命 使節遠至 京畿、開陳宇內形勢、則在 貴國、亦當斟酌時務、處置適當者、此 東武盛意所存也、使節既戒行李超溟在近、東武敦篤意、實總在陳述、則如彼僞妄無根之說、渙然冰解、兩國交際、永歸不渝、嚴命之下、如此、不俟在職實可感哉、餘冀 崇亮肅此、不備、

慶應三年丁卯八月 日

對馬州太守拾遺平 義達

六月五日幕府ヨリ御渡ノ書付、

宗 對馬守

今度、朝鮮國禮曹ヨリ、其方へ書翰差送り、八戸順叔ト申者、無稽ノ說ヲ唱候由、右者上海新聞中ニモ相見、何レノ漂民ニ候哉、更ニ不取留儀ニ有之、素ヨリ當三月中相達候通、彼國之艱難、於御隣誼難默止被思召、態々使節被差送、綏安之良策ヲモ被仰示度、厚キ思召候條者、既ニ此程者於彼國モ諒解可有之儀ト者被存候得共、尙厚キ御趣意之趣、禮曹へ申通候様可被致候、

朝鮮國へ返答向之主意柄、監察原市之進ムヨリ被相渡候書取一通、

來翰之趣、江戸政府へ申立候處、被申越候說之如キ者、無根妄言不足取儀ニ而、右等浮說流言之爲メ、彼是心配ニ被及候段、實ニ氣ノ毒千萬被存候、尤大君御相續以來、百事御一新、文武諸吏ニ命シ、舊弊ヲ去リ充實ヲ務メ、日夜只國威之伸ン事ヲ謀リ、砲艦諸器械、凡百之富強ニ資スル者、遠ク海外ニ購リ候者相違モ無之儀ニ付、前件之狂說モ、夫等之事ヨリ起リ候ニモ可有之處、兼而隣好ヲ厚クシ、雙方安全ヲ祈候ハ、素々政府之宿志ニ付、客秋法國釁ヲ開キ、不慮之兵戰ニ被及候次第承リ及、唇齒之國柄深ク痛心被致、何卒後來 貴國之幸福ヲ求度ト、此程態々使節ヲ命シ、遠ク其王畿ニ至リ、方今之形勢、宇內之情態モ告知、適當之處置アラン事ヲ可申入、既ニ行李ヲ戒メ居候事ユヘ、不日解纜渡海可致、就テハ政府之好意、深實之處者、委曲使節ヨリ可及陳述、然ル上者、前件之僞妄モ總テ氷解、益兩國締交ノ厚誼、永久不渝之基本モ可相立ト、屈指西望ノ次第、不取敢可申入置旨被命候ニ付、此段爲回答如是候也。

丁卯 六月 宗重正家記
外務省記

○井伊直憲、掃部頭○彦根藩主、食封二十五萬石、酒井忠篤、柳澤保申、甲斐守○郡山藩主、食封十五萬二千八百八十八石、時ニ松平氏ヲ稱ス、榊原政敬、酒井忠惇、小笠原忠忱、松平賴聰、讚岐守○高松藩主、食封十二萬石、酒井忠氏、奧平昌服、松平忠誠、眞田幸民、戸田氏共ノ家臣、連署シテ、二十二日批下ノ疑條ヲ稟シ、且外國ノ事、姑ク幕府ニ委シテ、諸藩士ト協議セシメ、諸侯會同ヲ待テ、之ヲ決セント請フ。

昨日、於 御假建所演說ヲ以御伺、且愚存申上候件々、以書取左ニ奉申上候、

一 御附札面ニ兩三藩ト御坐候ハ、何レ之藩ニ可有御坐候哉、御見込被爲在候處、奉伺度候事、

一 兩三藩之處、於 朝廷御選被爲在候義哉、於幕府御選ニ相成候義哉、諸藩衆議ヲ以相選候哉、奉伺候事、

一 外夷御取扱切迫之事件、諸藩上京 御決議ト御差延之義、成否如何歟、不容易御義ト奉存候、如何之御應接ニ而、御差延

相成候哉、萬一御差延難被成節者、如何之御處置被爲在候御義哉、一同奉懸念候付奉伺度事、
一召之諸侯上京、衆議 御決議相成候迄之處、是迄通、萬事幕府へ御委任被爲在、猶於幕府諸藩士被召寄、篤ト被盡衆議候
様被爲在度奉存候事、
右御伺、且愚存申上候件々、早々御沙汰被成下候様仕度、奉懇願候、以上。

十月二十五日

- 井伊掃部頭内
- 北川徳之丞
- 田邊全藏
- 酒井雅樂頭内
- 青木平藏
- 岩橋辰三
- 松平甲斐守内
- 安藤光太夫
- 松平讃岐守内
- 松山修輔
- 小笠原豊千代丸内
- 二木武兵衛
- 榊原式部大輔内
- 服部瀨兵衛
- 酒井左衛門尉内

○晚翠樓叢書、兩三藩云々ト、外夷云々ノ二條ヲ合シテ一條トシ、文字少異同アリ、忠忱家記正ニ似タリ、故ニ之ニ從フ、
連署ハ晚翠樓叢書ニ據ル。

○山科言知、前大納言、八等隆祐、前中納言、等、連署シテ、四條隆誥ノ義絶ヲ釋カント請フ。

去ル五月、長防之儀、寛大御沙汰被爲在候間、於藤原隆誥モ以 御憐愍、義絶被 免候様奉願上度候、宜預御沙汰候也。

十月二十五日

藤原隆誥
脩西大路

- 大野與一右衛門
- 戸田采女正内
- 市川元之助
- 奥平大膳大夫内
- 富士野彦右衛門
- 真田信濃守内
- 長谷川深美
- 松平下總守内
- 平野俊吾
- 岡本金藏
- 酒井若狭守内
- 深栖務

小笠原忠忱家記
晚翠樓叢書

隆 韶楠筭
隆 晃油小路
隆 祐八條
言 知山科

日野大納言殿
飛鳥井大納言殿
山科言
繩家記

○加藤明實、藩ニ歸ル。加藤明實家記

○幕府、令シテ攝津、播磨間ノ官道ヲ改ム。兵庫開港場ト爲ルヲ以テナリ

松平兵部大輔家來へ

今般兵庫御開港ニ付、西國往還道附替、攝州住吉村ヨリ明石迄之道筋、御開道相成候ニ付テハ、兵部大輔領分之内、右道筋へ相掛リ候村々モ有之候間、委細之義ハ御勘定奉行申談候様可仕候。松平直致家記

○本條、布告書アルヘシ、今考フル所ナシ。

○黒田齊溥、封内漂到ノ朝鮮人ヲ長崎ニ送致スルヲ幕府ニ報ス。

十月九日、私領沖ノ島へ、朝鮮之漁船ト相見エ一艘漂著仕候、彼島へ繫船之場所無之候ニ付、大島へ漕入候旨、同所定番之者ヨリ申越候ニ付、兼テ手當ノ人数、早速差遣シ、右ノ船相改候處、乗組五人有之、筆談不相整、言誤等モ相通シ兼候得共、朝鮮之漁船ニ相違無之、疑敷儀モ無之候ニ付、舊例之如ク、警固之者附添、於長崎河津伊豆守へ送越申候、此段御届仕候以上。

十月二十五日

松平美濃守

黒田長知家記

○是ヨリ先、薩、藝、長三藩謀ヲ通シ、薩兵周防港ニ來會シ、本月六日將ニ藝兵ト俱ニ東上シテ計畫スル所アラントス、幕府大政奉還ノ表入り、諸侯ノ召命新ニ出ルニ會ス、三藩乃チ其圖ヲ改メ、薩兵ヲシテ先ツ京ニ入ラシメ、又島津茂久若クハ久光ヲ其藩ヨリ迎フ。

○指華入京日載ニ云、六日夕ヨリ九日ニ至リ、薩艦三隻入港、第一艦大山格之助、其外乗組兵員四百人、後二艦、大約五小隊、二十一日夜、藝艦入港、廣澤兵助、福田俠平兩人、京師ヨリ薩藩小松帶刀、西郷吉之助、大久保一藏、一同歸國、右ハ前日三藩合從、東上ノ風評ニ付テハ、上國餘程紛擾、加之、土藝等建白モ有之、旁、橋府急迫之様子ニテ、朝廷へ建白、諸藩へ布告等有之、上國形勢大ニ變遷ニ付、小松等急速西下、華浦滞在ノ三艦兵隊ハ、飛船ヲ以テ差登シ、三艦ハ歸國致候テ、小松等兩侯ノ内御一人、急々隨從上京ノ手都合ニテ、二十四日曉出帆、二十五日朝、大山格之助、並二艦亦揚碇ス。

復古記 卷二 終

總括兼纂修	臣長松	幹
校 勘	臣長	茨
一等修撰	臣長	屋恒
一等協修	臣四	屋恒
校 錄	臣澤	渡廣
一等書記	臣澤	渡廣
繕 寫	臣小川	長和
二等繕寫生	臣小川	長和
二等繕寫生	臣小島	春

復古記 卷三

慶應三年丁卯十月二十六日ニ起リ十一月六日ニ至ル

○十月

二十六日、本多忠民^{美濃守}、家臣、伏見警守事項ノ稟請、及ヒ三條實美等待接ノ事ヲ幕府ニ請問ス、幕府、令シテ、稟請ハ姑ク其舊ニ依ラシム。

伏見御警衛之儀ニ付、諸事心得方之儀、今般諸御大名様伺被 仰出等ハ、朝廷於御兩役様御取扱相成候、御沙汰之趣モ御座候付テハ、向後伺等ハ都テ傳 奏様へ相伺可然哉、矢張是迄之通相心得居候テ宜敷御座候哉、右邊之處、兼テ心得罷在度、此段奉伺候、以上。

本多美濃守家來

安井藤九郎

十月二十六日

○幕府批紙

書面之趣ハ、御所ヨリ被 仰出之趣モ有之候間、先是迄之通相心得、達事ハ傳奏ヨリ相達候品モ可有之候。

本多忠直家記

○先年、長州表へ御下リ相成候堂上方五卿、近々御上京之風聞御座候、萬一急々御上京ニモ相成、若伏見御警衛關門御通行御座候ハ、何トカ御沙汰之趣モ可有御坐候哉、俄ニ御上京相成候節ハ、外ニ子細モ無御座候ハ、御通シ申候心得ニ罷在候、此段無屹度申上置候、以上。

十月二十六日

本多美濃守家來

安井藤九郎

本多忠直家記

○本條、忠直ニ質スニ、批紙ナシト云。

○幕府、邦内寄寓ノ支那人、及ヒ條約未濟國人取締法ヲ設ケ、之ヲ各國公使領事ニ告ク。

大貳利太泥亞公使館附

エルネスト、サトウエスクワイルへ

以書翰申進候、然ハ支那人等取締ノ儀ニ付、先日公使ヨリ御心附ノ趣、拜謝ノ至存候、就テハ今般各國岡士へ、別紙ノ通書翰相達、且新聞紙ニモ布告ノ積ニ付、此段其公使、竝ロコック氏へ宜御頼申候、謹言。

慶應三年十月二十六日

水野若狹守

各國岡士へ

以廻章申進候、然ハ條約未濟國ノモノ取締ノ儀、英、佛、米、宇、蘭ノ諸公使、我閣老ト協議之上、規則取極候ニ付テハ、條約未濟國人民之内、就中支那國之人民多數當港へ渡來居留スル故ニ、右取締之法ヲ設ル事、差當リテノ要務ナレハ、現今當港ニ在ル處ノ支那人、速ニ我方へ申出、其名字ヲ我役所ノ簿籍ニ載スル様致度ニ付、漢文ヲ以示令スヘシ、且支那人ノ儀ハ、多分ハ條約濟各國人ニ雇ハレ居候義ニテ、夫々給料ノ多少可有之、何レノ國々ニモ屬セサル支那人連モ、身分ノ厚薄可有之候間、三等ニ分ケ、其名ヲ名簿ニ加ヘ、公ケニ免狀相渡候節、上等之分ハ商人、ハ洋銀十五弗、中等ノ分ハ職人、ハ同七弗、下等ニ至テハ、即人、同三弗半宛、我方へ取立候積、尤右免狀ハ一ヶ年毎ニ改ムヘシ、且新渡ノモノ、直ニ其名ヲ名簿ニ載セシメントメ、外國船ニ遺ス取締士官ニ、支那旅客、其住家並職業ヲ告ル迄ハ、支那旅客之上陸ヲ濫ニ許サ、ル法ヲ設

クヘシ、右之外、酒店又ハ料理店等相開居候者モ有之候ニ付、相當ノ戸税銀ヲモ取立候積ニ有之、其許方、此書ニ同心アラレ候様イタシ度候、謹言。

慶應三卯年月日

水野若狹守、

外務省記

○附十一月七日英國書記官へ答書

大不列顛使臣館書記官

シッドニイ、ロコックエクスワイルへ

十一月二十六日附之貴翰披見イタシ候、然ハ横濱ニ住居スル支那人、竝條約未濟國ノ人民取締ノ儀ニ付、去ル二十一日我十月二、附ニテ、サトウ氏へ書翰ヲ以申進候趣、甚適當ナリト承知セラレ共、各國岡士へ未タ書翰不差出候ハ、英、佛、米、李、蘭公使ト約定セシトノ文章ヲ削リ可申、右ハ我政府ノ獨斷ニアリトノ事ノ由、申越サル、旨承知セリ、然ル處、右ノ書翰ハ、去月中、既ニ各國岡士へ差進候義ニ付、厚意ニハ候得共、既往ノ義ニテ如何共致シカタク、其公使へ宜敷申立置レシテ欲ス、此段回答如斯候、謹言。

慶應三卯年十一月七日

水野若狹守

外務省記

○書記官ノ來書ハ、之ヲ失ス。

二十七日、徳川慶喜ノ辭表ニ批シ、姑ク其舊ニ仍リ、諸侯朝會公議決裁ヲ待シム。

諸藩上京之上、追而可有 御沙汰、夫迄之處、是迄之通相心得候様 御沙汰候事。

藤堂高邦家記 春嶽私記

○本條、日ヲ失ス、春嶽私記、二十七日、御城ニ於テ大目附松平大隅守殿御渡トアリ、蓋シ幕府諸藩ニ告示スルノ日ナリ、姑ク此ニ收ム、高邦家記ハ二十八日ト爲ス。

○徳川慶勝、京ニ至ル、本人履歴書、森忠典、美作守○赤穂藩主、食封二萬石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメント請フ。森忠儀家記

○忠儀家記、指令ヲ失ス、他例ニ據レハ、疾ヲ以テ代理ヲ出シ、或ハ其期ヲ緩セント請フノ類ハ、總テ重臣ヲ出シ、御用可伺ノ指令アリ、疾ヲ以テ延期ヲ請フモノハ、療養少シク快方候ハ、速ニ上京スヘキノ指令アリ、本條モ亦同シカルヘシ、此類他故ナキモノハ、總テ指令ヲ掲ケス。

○幕府老中ノ江戸ニ在ル者、十萬石以下ノ諸侯ニ令シテ、其上京ノ期ヲ緩フセシム。

於二條、早々上京之儀相達候得共、追而相達候迄、出立見合候様可仕事、

但、十萬石以上之面々ハ、御所ヨリモ上京被 仰出候趣ニ付、上京候者勿論ニ候得共、十萬石以下者、於二條上京之儀相達候分ニ付、上京頃合、追而相達候旨申達候事ニ候段、爲心得相達ス。石川成徳家記 太田資美家記

○二十一日、十萬石以下ノ諸侯モ亦、召命アリ、蓋シ其事未タ江戸ニ達セス、故ニ此令アリシナラン。

○幕府、江戸開市場外國人居留規則、及ヒ運送船等規則ヲ定メ、之ヲ各國公使ニ謀リ、且外人居留地域外ニ夜行スルトキハ、必ス我護衛者ヲ附スルヲ告ケ。

亞墨利加合衆國ミニストルレシデント

エキセルレンシー

アルビワンワルケンボルグへ

以書翰申進候、先般、江戸外國人居留地規則書差進、御相談ニオヨヒ置候處、閣下竝ニ外公使ヨリ被申立候趣モ有之候ニ付、此程川勝備後守竝ニ江連加賀守ヨリ、閣下竝ニ英國公使へ爲及御談判候趣ヲ以取極度、右ニ付別紙貳通相添、猶御相談ニ

復古記 卷三 慶應三年十月二十七日

七三

オヨヒ候間、否貴答有之度、且居留地外へ外國人夜行之義ハ、掛念不少候ユヘ、可成丈見合候様致シ度、若不得止所用有之、出行ノ節者、其筋へ申立次第、護衛之者差出可申間、必ス同伴致シ候様、其人民へ諭達可致旨、貴國コンシユルへ兼テ御命令有之度候、此段申進候、拜具謹言。

慶應三年十月二十七日

小笠原 壹岐 守花押

江戸表外國人居留スル規則、

第一條

別紙繪圖面ニ、朱色ニテ彩色セシ場所内ハ、條約濟ノ外國人、日本人ヨリ所持ノ家屋ヲ借り、商賣ヲ稼クタメ、住居スル事ヲ得ヘシ、尤右一區ノ内、家屋ヲ所持スル日本人、若シ貸ス事ヲ不好時ハ、外國人へ無理ニ貸サシムル事ヲナスヘカラス、且又條約濟ノ外國人、開港場ニ於テ地面ヲ借り、家屋ヲ建ヘキ條約ノ法則同様ニ、右繪圖面ノ中ニ藍色ニ彩色セシ場所ヲ、自普請ノ爲ニ、日本政府ヨリ貸與フヘシ。

第二條

右自普請之爲ニスル地所、段々ニ塞リ、猶他ノ地所入用之節ニ至レハ、別紙繪圖面ニイト印記セシ、場所ヲ日本政府ヨリ用意イタシ、廻リニ幅六間四尺以上ノ道路ヲ取設クヘシ、然ルニ、其後猶又地面入用ノ節ハ、赤色ニテ彩色セシ場所内ヲ、都合次第地續ヲ以段々廣クヘシ。

第三條

別紙繪圖面ニ藍色ニテ彩色セシ場所ハ、日本政府ニテ、來ル十二月七日迄ニ、在來ノ家屋ヲ引拂ヒ、其周圍ニ幅六間四尺以上ノ道ヲ開キ、十分ニ下水等ヲ設ケ、大坂、兵庫外國人居留地規則第六、第七、第八、第九條ノ趣ニ從テ、外國人へ貸與フヘシ。

第四條

別紙繪圖面ニ、朱色ニテ彩色セシ場所内ヲ通過スル堀等ハ、來ル十二月七日迄ニ、日本政府ニテ掃除シ、其跡絶エス掃除セシムヘシ、尤右堀等掃除ノ諸入費ハ、日本政府ヨリ出スヘシ。

第五條

別紙繪圖ニ、ロト印セシ場所ニテ、普請ニ取掛リ居候外國人、旅籠屋ハ、日本政府ヨリ命シ、來ル十二月七日迄ニ必落成セシムヘシ、尤旅籠屋ハ日本人ニテ取扱フヘシ。

第六條

別紙繪圖面ニ、ハト印セシ場所ニ於テ、都合宜敷水揚場ヲ日本政府ヨリ取設クヘシ、且各國人所持之荷物ヲ、日本陸揚、或ハ船積スルタメ、原註、雨露ヲ凌クタメノ小屋ニテ、原註、雨露ヲ凌クタメノ小ヲ取建置ヘシ、且江戸ハ開港場ニアラサレハ、外國商船等碇泊スヘカラス、尤外國人所持之荷物ハ、即チ條約附錄交易規則ニ隨ヒ、横濱ニテ改メテ受ケ、同所或ハ他ノ開港場ニ於テ、輸入税ヲ納メタル上ニ非レハ、江戸へ陸揚スヘカラス、且江戸ニオイテ輸出税ヲ取立ル事ヲ要スルニ至ル迄、當分ノ内、外國人江戸ヨリ輸出スル物産モ、横濱運上所ニテ改メテ受ケ、輸出税ヲ納メタル上ニ非レハ、同港ニ於テ外國船へ積込ムヘカラス。

第七條

本書附錄ノ規則、並ニ條約附錄ノ交易規則ニ隨ヒ、日本人、或ハ外國人所持ノ荷物運送船、引船或ハ乗合船等、帆前、蒸氣ノ差別ナク、江戸ト横濱ノ間ヲ往復スヘシ。

第八條

江戸へ出ル外國人ハ、官服ヲ著用シタル士官ノ外ハ、神奈川奉行一覽附アル鑑札ヲ、横濱在留ノ其國ノコンシユルヨリ受取、是ヲ六郷渡場、或ハ江戸表ニ於テ、日本役人相改ムヘシ、尤鑑札ナク江戸へ出ルモノアラハ召捕ヘ、其國ノコンシユルへ引渡スヘシ、其故ハ、外國人ニ江戸開市ノ趣意ヲ、條約面通りニ遵奉セシメンカタメナリ。

第九條

都而外國船、江戸へ著スル時ハ、白キ標木ヲ立タル兩臺場ノ間ヨリ入津スヘシ、尤臺場ノ真中へ著スル時、日本役人乗船致
スタメ相扣へ可申、其時江戸へ出ルタメ、乗組外國人姓名書、船長ヨリ納メ候上、猶鑑札ヲ見セシムル事、日本役人存寄次
第タルヘシ。

第十條

兩臺場ヨリ、外國人居留場前マテ出入スル水筋ヲ追ヒ、日本政府ニ於テ滞杭、或ハウキヲ置ヘシ。

第十一條

江戸在留外國人、左ニ記セシ境界ノ内、遊歩勝手次第タルヘシ、即新利根川原註、又江戸トモ云口ヨリ、北方金町ノ關所迄、西ノ方
水戸街道ヲ沿ヒ、千住宿大橋迄、夫ヨリ隅田川以南川上へ登リ、古谷上郷迄、夫ヨリ小室村、高倉村、小矢田村、萩原村、宮寺
村、三木村、田中村、諸村落ヨリ筋ヲ引、日野ノ渡場迄、夫ヨリ玉川口マテ、以テ限トスヘシ、
外國人ハ、江戸表ニ於テ、海陸往來スル事、日本人同様差障ナカルヘシ。外務省記

○本條、所謂別紙規則書ノ一及ヒ第七條、本書附録ノ規則ハ、蓋シ下條運送船規則ヲ指ス、繪圖面別ニ見ル所ナシ、

阿蘭陀ボリチーキアゲント兼コンシユルゼネラー

エキセルレンシー

ドデガラーフファンボルスブルークヘ

以書翰申進候、先般、江戸外國人居留地規則書差進、御相談オヨヒ置候處、右規則中ノ儀ニ付、閣下並ニ外公使ヨリ被申立
候趣モ有之候ニ付、別紙ノ通り取直シ、且運送船等ノ規則ヲモ取設度、右ニ付、別紙規則書ニ通相添、猶御相談ニオヨヒ候
間、否貴答有之度、且居留地外へ外國人夜行ノ儀ハ、懸念不少候故、可成丈見合候様イタシ度、若シ不得已所用有之、出行ノ
節ハ、其筋へ申立次第、護衛ノ者差出可申間、必ス同伴イタシ候様、其人民へ諭達可致旨、貴國コンシユルへ兼テ御命令有

之度候、此段申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十七日

小笠原壹岐守花押

江戸ト横濱ノ間、引船荷物運送船、並ニ外國人乗合船ヲ設ル規則、

第一條

都テ引船、荷物運送船、或ハ乗合船等、兼テ日本長官ノ免許狀所持セサル者ハ、江戸ト横濱ノ間往復ナカルヘキ事。

第二條

免許狀願立者有之節ハ、神奈川奉行、並其筋ノコンシユル取調ノ上、免許狀可相渡、右免許狀ハ、雙方國語ヲ以テ、船ノ模様
等、精敷書加へ、神奈川奉行ヨリ相渡シ、コンシユルノ奥印可居事。

第三條

免許狀差出候テヨリ、一ケ年ヲ過キ、奉行、並ニコンシユル勘考ノ上、免許ヲ差留ヘキカ、又ハ再應差出スヘキカヲ取極ム
ヘシ、尤最初ハ勿論、其後免許狀相渡候都度都度、手数料トシテ、一トシニ付金壹分宛、日本政府へ可納事。

第四條

運送船ハ、荷物積込ミシ上、船足水入六尺以上ノ船ハ、免許狀相渡スヘカラス、且日本長官ヨリ別段ノ免許狀ヲ得ルモノニ
非レハ、臺場外ニオイテ人、及ヒ荷物ヲ揚卸スヘカラス。

第五條

免許有之船へ、役人ヲ爲乗組候事、或ハ江戸、横濱ノ間往復ノ時、役人差添ル事等、都テ日本政府ノ勝手次第タルヘキ事。

第六條

横濱ニ於テ免許有之候船へ、荷物積込候節ハ、其品ニヨリ稅濟證文、或ハ無稅證文ヲ、其持主ヨリ差添フヘシ、若シ證文ナ
シニ江戸へ陸揚セントスルモノ有之ニオイテハ、事宜次第取上ヘキ事。

第七條

江戸或ハ横濱ニ於テ、免許有之候船へ、荷物積込、陸揚ノ儀ハ、日本政府ヨリ差圖セシ波戸場、或ハ其タメニ日本政府ニ於テ免許有之候傳馬船ニ限ルヘキ事。

第八條

免許有之候船等ハ、江戸ト横濱ノ間ニ荷物、或ハ人ヲ運送、竝ニ引船ノ外、何用向タリトモ用ウヘカラス、且海上ハ外國船、亦ハ日本船、或ハ陸地等へ寄り附クヘカラサル事。

第九條

免許ヲ得タル船ニ乗組ノ外國人船長ヲ除クノ外、水夫等ハ江戸ニ於テ上陸スル事ヲ許サス。

第十條

此規則、或ハ追テ可取極ノ規則ヲ違背スルモノアラハ、免許狀取上ル而已ナラス、其コンシユルへ、兼テ其本國政府ヨリ、士民ヲシテ諸條約ヲ守ラシムル爲ニ與ヘラレシ權ヲ以テ、罰スヘキ事。外務省記

○本條、所謂別紙規則書ニ通、其一ハ蓋シ上條外國人居留規則ヲ指ス、案スルニ條約類纂ニ條規則、及ヒ下條新潟東港規則決定交付、竝ニ十一月朔日ト爲シ、文字小異同アリ、之ヲ外務省ニ質スニ、編纂ノ際、事ニ害ナキ者ハ、文字ヲ刪潤セリト、本書編纂、明治七年ニアリ、譯文ノ法モ亦其趣ヲ異ニス、今原文ニ從ヒ、當時ノ面目ヲ存ス。

二十八日、朽木爲綱、近江守○福知山藩主、食封三萬二千石、京ニ至ル、朽木綱鑑家記青山幸宜、峯之助○郡上藩主、食封四萬八千石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ。青山幸宜家記

二十九日、宣命使日野資宗、ヲ後月輪東陵孝明天皇ニ遣シ、造陵功竣リ、及ヒ大政古ニ復スルヲ告ク。

宣命

天皇我 詔旨止掛畏岐後月輪東山陵爾恐美恐美奏給止奏久 平安宮爾天下知食都先乃 天皇乃大御代爾神乎敬比人乎慈美大坐且絶在留神祭乎興復給比荒在留 山陵乎修理給比故今母亦古昔乃例爾復給且山陵乎令營造給留爾爾功成婆 其造仕奉終奴事乎正二位行權大納言藤原朝臣資宗乎差使且令奏給布此狀乎聞食且天下乎平久安久護給弊幸給止恐美恐美奏給止奏。

慶應三年十月二十九日

大内記 新作留

○ 自外夷渡來而天下紛擾、日不安 宸襟數年、未至治平而 殂落、噫如何乎、今于此慶喜告欲洞察時運之沿革、懃悔薄德、復歸權政奉戴廟議、與天下共勳力保護 皇國焉、斯稱其德許之、今日以往掌握萬機、而與衆謀宏張綱紀一新流弊也、謹奉告此狀、仰願 神靈照臨四表、海内一和、而不受外夷之侮、太平無窮、居萬民於泰山寧、護 祖業於悠久矣。日野資宗家記 晚翠樓叢書

○市橋長義、暫ク歸邑セント請フ、之ヲ聽ス。十一月三日ヲ以テ途ニ上ル、

今般私儀急 御用召ニ付、差掛候家政向打捨置、不取敢上京仕候處、諸藩上著之期限被 仰出候ニ付テハ、末日數モ御坐候間、近邊之儀、一ト先歸邑仕、家政向荒増取締置、出京仕度奉存候、其内御用筋之儀御坐候得ハ、重役之者差置候間、御達被成下候ハ、一晝夜ニテ乗切上著仕候、右願之通被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、此段奉願候、以上。

十月二十九日

市橋下總守

○批紙

願之趣、無據次第被 聞食候、家政向取締置、猶又上京可有之候事。市橋長義家記

○幕府、令シテ、驛遞法、及ヒ大宮御所造營課金、姑ク其舊ニ仍ラシム。

御政事向之儀ニ付、今般被 仰出之趣モ有之候處、五街道、竝脇往還共、人馬賃錢拂方之儀、追而御規則相立候迄ハ、是迄之

通タルヘキ旨、御所ヨリ被 仰出候。

十一月

御政事向之儀ニ付、今般被 仰出之越モ有之候處、大宮御所御造立御入用國役金之儀、追而御規則相立候迄者、是迄之手續ニ而取扱旨、御所ヨリ被 仰出候間、最前相達候通相心得、夫々納方可被致候、右之通、御料、私領、寺社領共、不洩様可被相觸候。

十一月 神原政 敬家記

○政敬家記ニ、十一月八日、江戸ニ於テ稻葉美濃守相渡シ、去月二十九日、於京地被達候間、向々相觸トアリ。
○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、大政奉還ノ意ヲ陳述ス。

演述之覺、

先年亞墨利加合衆國大統領ノ勸誘ニ從ヒ、廣ク和親之條約ヲ結ヒシヨリ以來、我累世ノ 大君、人心開化ノ域ニ進マン事ヲ謀ルトイヘトモ、鎖國之舊習變シカタク、一種ノ兇徒隨所ニ蜂起シ、頑冥ノ暴人ヲ嗾カシ、外國人ヲ擯斥スルヲ以テ名トシ、或ハ隱然殺害シ、或ハ不敬之事ヲナシ、罪ヲ政府ニ負センコトヲ謀ルモノ不少、我政府、種々鎮定ノ方略ヲ盡シ、或ハ懲シ、或ハ諭シ、猶外國交際ノ妨害ヲ釀サン事ヲ憂ヒ、先年中、特ニ使臣ヲ各國ヘ遣シ、國內不得止之事情ヲ述シメ、兩都、兩港、開市開港之延期ヲ請ヒ、一旦之紛紜ヲ紓ヘ、人心ヲ開誘セント、多年心慮ヲ勞ストイヘトモ、野心ヲ抱テ交誼ヲ妨ケ、禍亂ヲ醸シ、非望ヲ遂ントスルモノ益休ムコトヲシ、今大君大統領嗣之始メ、宇内之形勢ヲ洞察シ、英、佛、米、蘭各國公使ヲ阪城ニ招キ、從來我政府ニ於テ、各國ヘ對シ誠實ナル意衷ヲ表セラレ、是迄延期相成居シ兩都、兩港ヲ開キ、其外條約面ノ通リヲ履行ヒ、我國之信義ヲ各國ニ失ハサル様、親カラ斷決セラレ、爰ニ於テ多年辛苦セシ所之條約、盡ク施行スル事ヲ得テ、外國之交際、永遠不窮ニ傳ヘ動カサルモノトナレリ、然ルニ彼ノ不軌ヲ謀ラントセル輩、益其黨與ヲ連結シ、邪說暴行ヲ恣ニシ、政府ヲ誹リ、或ハ暴威ヲ以テ 御門ヲ壓シ、或ハ欺騙之術ヲ用ヒテ、己レ政柄ヲ擅ニスルト唱ヘ、或ハ開市貿易ノ利

ヲ專權スル等ノ讒誣ヲ放テ、動モスレハ公卿ヲ劫シ、 御門ニ迫リ、時ニ支吾ノ命令出ル事アリテ、良々政權ニ途ニ出ルニ近ク、我カ舊來ノ政體ヲ妨ケ、人心何分ニモ一致シ難シ、

一於是 大君御深慮被爲在テ、我國永遠各國ヘ對スル條約ニ於テ、既ニ大信ヲ立シ上ハ、只國內之治否ハ、天下ノ公議ヲ以テ、部内一致シ、政權一途ニ出ルニアラサレハ、無辜之生靈適從ノ路ヲ失ヒ、國內亂階ヲ生センコトヲ深ク憂ヒ、政體人心一致ヲ基本トスルハ、萬國ノ通義ナルニ從ヒ、今般我開祖 東照神君ヨリ連綿襲受セル政權、 御門ヨリ出ル様建言アリシ處、許允アリテ、尙衆議ヲ盡シ候様トノ旨ニテ候、

一我 大君政府ニ於テ、其國ヘ對シ懇親ナル意衷ハ、前ニ陳述セル通り、海外ニ信義ヲ全フセンコトヲ謀リ、多少之苦心ヲ盡セシ事明白ナレハ、尙此上和親交友ノ厚カルヘキハ疑ヲ容レサレトモ、一時國內變革ノ際ニ當リ、自然浮説流言等モ可有之、深ク懸念致候ニ付、是迄之成行推考イタシ、自拙者及演述候、尤此程書翰ヲ以テ申入置候通り、追テ京師ヨリ委細ノ儀申越次第速ニ可申進候。 外務 省記

○ 演述之覺、

我カ日本ノ 大君、祖宗以來二百五十餘年ヲ經、今日迄傳來セシ政權ヲ、 御門ニ歸シ給フ事ヲ自ラ英斷アリシニ依リ、余等コノ國勢變革ノ際ニ當リテ、或ハ流言浮説ノ起リテ、人心ヲ煽動スルヲ恐レ、各國ヘ其情狀ヲ演述センコトヲ要スル左ノコトシ、

目今ノ事情ヲ了悉センニ、古往ノ事蹟ヲ粗概説スルニアラサレハ、明晰ナラサルニヨリ、古ニ遡リテ申述候、往昔二千年前、鴻荒ノ初、國祖天神ノ子孫、常ニ全國ノ政柄ヲ執リ來リ、コレヲ 御門ト稱ス、其後 御門ノ政始テ衰微シ、政權、宰相藤原氏ノ手ニ移リ、公家ノ内、文武ノ官名ヲ具ストイヘトモ、文弱ニシテ、自ラ擅中執銳シテ、不享ヲ制スル能ハス、國家有事ニ臨テハ、必武家ヲ援テ爪牙トナス、政令多岐ニ出サルヲ得ス、武家ノ棟梁ヲ源、平二氏トナス、日本ノ半國ヲ分テ、

東ノ武家ハ源氏ニ屬シ、西ノ武士ハ平氏ニ隸シ、保元、平治ノ亂、皇子位ヲ爭テ、二氏ヲ互ニ依賴シ、源氏亡ヒテ、平氏盛ナル殆二十年、權始テ武家ノ平氏ニ落ツ、ソノ暴横、藤原氏ノ時ニ勝ルヲ以テ、御門源氏ノ胄裔ヲ頼ミテ、平氏ヲ亡ス、源氏父祖ノ舊仇ヲ滅シテ、朝家ヲ保護スルニヨリテ、御門、全國兵馬ノ權ヲ舉テ武家ニ歸ス、是西曆千二百年ノ頃ニ當リ、所謂將軍家ノ始トス、即累世大君職ヲ繼クヘキ徳川家同流ノ大祖ナリ、如斯モノ殆四百年、其間治亂アリトイヘトモ、將軍ノ職ニ任スルモノハ、朝敵ヲ討伐シ、萬民ヲ安ニスルヲ任トスル故、御門ヲ輔翼スルノ任ヲ受テ、其功アルモノハ、多ク兵力ト勤王ノ赤心ニ依テナリ、然シテ、時々小康アリトイヘトモ、國內猶靜謐ニ歸セサリシハ、國ノ政令一途ニ歸スルコト無キニヨリテ、各角立ノ風ヲナシテ、干戈止ム時ナク、人民塗炭ニ苦ミ、天下 主上アルヲ知ラサルモノ數百年ナリ、我カ 大君ノ開祖 東照宮、英邁ノ大德アリテ、自カラ汗馬ノ勞ヲ擔テ、大亂ヲ蕩平シ、國家始テ太平ヲ致シ、御門ヲ安ンシ、禁裏ヲ造營シ、大ニ供御料ヲ増シ、今ニ至ルマテ、朝紳安穩ニ生活スルヲ得ルハ、コノ勳勞ニ依レハナリ、御門コノ功績ノ大ナルヲ感嘉シ、東照宮ヘ政權ヲ舉テ全任シ、國家ノ政務一切預ラサル模範ヲ累代ニ垂レ給フニ依テ、東照宮ノ威權、日ニ烜赫ナルハ、前古將軍ノ曾テ見サル所ナリ、因テ大ニ全國ノ諸侯ヲ江戶ニ會シ、政府ノ基礎ヲ開キ給ヘリ、此時會同スル大小名等、皆其法ヲ仰キ戴カサルモノナク、江戶ニ邸ヲ置キ、隔年或ハ年ニ幾日間、江戶ニ參觀スル事ヲ確定シテ、一人モ異志アルモノナク、累代ノ法則トナレリ、

如斯ナレハ、我カ日本數百年間ノ大亂ヲ一統シ、二百五十餘年ノ太平幸福ノ基ヲ建立シ、其間大小名一人タリトモ、更ニ非望ヲ抱クモノ無キ様、内亂ヲ鎮定セシハ、振古、東照宮ノ右ニ出ルモノナシ、故ニ政權ノ歸シテ、其子孫累世ニ及フハ聊疑ヲ容ルヘキモノナシ、其後ニ至リ、宇内ノ形勢大ニ變遷シ、米船江戶灣ニ駛入セリ、爰ニ於テ、從來ノ舊習鎖國ノ規條ヲ廢棄スルコトハ已ムヲ得サルノ勢ナリ、

此時、西洋軍器兵法ニ長シ、我カ國二百餘年太平ノ民ヲ以テ、遽ニ無名ノ戰鬪ヲナスノ無策ヲ知ルノミナラス、世界一變、天涯比隣ノ如キ時世ニ當リテ、東洋ノ一島國ニテ、萬國ヲ仇トシテ自存スルノ事勢ナク、一天廣被ノ人民ヲ拒絶シテ、交ラ

サルノ公理ナキヲ早ク曉解シテ、各國ト交際ヲ開クノ條約ヲ取結フコトヲ決定セリ、

此時ニ當リ、追テ全國ノ大事件トナルヘキ新創ノ事ニシテ、闔國人民ノ思計ヲサル事ナレハ、政府ニオイトテ其議論ノ結局ヲ盡シテ、到底疑慮ヲ容サル様處置セサルハ、今更遺憾ノ至リナリ、條約取結ノ初、苟且ニシテ、外國人ト我國人トノ交ヲ疎遠ナラシメハ、交際ノ間ニ誤ヲ生セス、鎖國ノ頑論漸ク銷磨シテ、自然染習ノ期モアルヘシトオモヒシハ、却テ奸民ノ奇貨トナリテ、卒ニ雙方ノ不平隔意ヲ醸成スルニ至リ、諸侯ノ最大ナル、此時ニ乘シ、大君ノ權ヲ奪ハント謀リ、誦詐ノ點言ヲ逞フシ、京師ヲ欺騙シ、江戶政府ノ處置ヲ一々譏誣スルノ機會ヲ得タリ、

今、先君政權ノ衰亂セシ緣由ノ種々ヲ枚舉スルハ、臣子ノ分忍ハサル所ニテ、却テ益無キニ似タレハ、爰ニ贅セス、我政府所置ノ宜ヲ得タリトハ謂難シトイヘトモ、遂ニハ鎖國ヲ唱テ、外國ヲ諱嫌フモノヲ漸々ニ抑壓シ、一旦外國ト取結ヒシ條約ヲ履行ハントノ宿志ハ、曾テ止事ナシ、

然トイヘトモ、斷然其約ヲ守リ、其業ヲ果セシモノハ、英敏偉烈ノ天資アル 東照宮ノ遺業ヲ中興スルモ亦、難カラサル天縱ノ 今、大君ノ新タニ政權ヲ掌握シ給ヒシニヨルナリ、然ラサレハ此約ヲ全フスルヤ否、イマタ知ルヘカラサルモノナリ、今、大君ニハ、政令一途ニ出ルコト、國政ノ大體基本ナルヲ夙ニ洞察セラレ、繼統ノ初ヨリ、京師ニ久住シ、是迄政體ノ虧缺多キヲ見、久シク其職ヲ辭シ給ヒシカ、愈事情不容易ノ勢ニ迫リタルヲ以テ、無餘儀ソノ任ヲ受給ヒシモ、畢竟、是迄彼是ト條約遵奉趣意ニ合フモノ少ケレハ、今ヤコレヲ舉テ一々履行フハ、日本國ノ榮名ヲ保佑センカ爲ナリトイフ所ニ、深ク著眼アリテナリ、

各國公使ヲ大阪城ニ會集シ、懇親ノ情誼深ク、待遇ノ厚キハ勿論、條約施行ノ信ヲ固スル金石ノ如ク、節義ヲ重ンスル泰山ノ如ク、一々其約ヲ遂ケ、一モ欠ク所ナキハ、今大君ノ大任ノ當然トイヘトモ、百辛ヲ經テ、毫モ正理ヲ失フコトナキノ確證ヲ見ルヘシ、今日ニ至リ、既ニ條約ヲ全フシ、海外ヘ對シ、一點ノ愧慚ナク、信義ヲ十分ニ立シ上ハ、大君直チニ國內ノ治否ヲ顧念シ、是迄人心ノ向フ所、求ムル所、總テ日月ノ久ヲ積ミ、自然ノ變化ニ任セリ、然ルニ百年以前、至美ノ政制

ト仰キシモノモ、今日ハ時勢轉變シテ適宜ナラス、宇内ノ形勢、日ヲ追テ一新スルニ當テ、手ヲ束ネテ故習ニ安ニスルハ、自カラ其身ヲ剔スルニ異ナラス、此新法ヲ建ルノ策、毎ニ余等モ討論セシ事不少、畢竟、此大事ヲ議決スルモノハ、英明在上、今大君ノ深衷英斷ニ依ラサルヲ得ス、大君ノ御意内ヲ奉推ニ、政府ノ威力ヲ振ンニハ、全國人心ノ向背ニ從ヒ、號令一途ニ出サルヲ得ス、各國ノ政體皆其意ヲ同フストイヘトモ、余カ國政制ノ未タ曾テ在ラサル所ナリ、今ニ當テ、力ヲ極テ此制度ヲ建立スルニアラサレハ、泰治ヲ成ス能ハス、人々當今ノ形勢ニ於テ急務ナルコト、及ヒ國難ノ由テ起ル所、其他報國ノ赤心ヲ披テ、其公議ヲ聽ヘキナリ、

祖宗傳來ノ權ハ 神宮ヘ歸シ、依テ 御門ヘ建言シテ、國內ノ大家巨室ヲ集會シ、今ノ形勢事情ヲ論盡シ、力ヲ共ニシテ政府ノ法ヲ建立シ、將來再ヒ動カスヘカラサルノ政體國律ヲ一定シ、日本全國ノ幸福ト、獨立ノ勢ヲ盛ニスルノ策ヲ議スヘシトノ深意、實ニ國ヲ憂ルノ深キ、古今比類ナキ所ナリ、是即、當今形勢ノ情實ナリ、故ニ外國ト日本トノ交際ニ於テ、聊ノ難事アルコトナク、總テ是迄ノ如ク平穩ナレハ、必高慮ヲ煩ス勿レ、右様國家多難ノ日ニ當リ、外國ト交際ヲ全フシ、其公理ヲ失ハサル旨意ナレハ、尙向來事業泰然成遂ルハ言語ヲ待サルヘシ、大君ニ於テハ條約中之事ハ一句一言ヲ殘サス履行ヒ、約信ヲ全フスルノ榮名ヲ得タレハ、其招ニ應シ來會スル大小名ノ會議ニ於テ、外國事情ヲ辨論スル時ハ、其公平ノ意ニ從從セサルモノ無カルヘシ、殊ニ指顧響應スル大小名、旗本、全國ノ十カ八九分ナルハ、舉論スルニ及ハサル事ナリ、余等、冀クハ外國政府ニ於テ、平生ノ情誼ヲ以テ、余等カ同心協力中ノ一タラン事ヲ深ク望ム所ナリ、今、如斯贊成輔翼ヲ冀望スルモノハ、他日我カ國ノ益隆盛ナル、即貴國ノ盡力アリシ明徴ナルコトヲ、形影聲響ノ如クニ視ンコトヲ深ク願フ所ナリ、右ハ是迄ノ成行ヲ推考シテ、余等限り及演說候、餘者過日書翰ヲ以テ申進候通り、京師ヨリ申越次第、尙可及報告候。

外務省記

和蘭ボリチーキアгент兼コンシユルゼネラール

エキセルレンシー

ドデガラーフ、フアンボルスブルークヘ

以書翰申進候、閣下ニモ兼テ稔知セララル、如ク、我國政權武門ニ移リシヨリ爰ニ數百年、其間國內群雄各方ニ割據シ、四分五裂ノ際ニ當リ、我 東照宮撥亂反正ノ功アルヲ以テ、人心ノ歸スル所、終ニ大權ヲ握リ、延テ今日ニ及ヘリ、然ルニ、今大君、宇内ノ形勢ヲ洞察セララル、ニ、萬國ノ交際日ニ盛ナルニヨリテハ、國家ノ政權一途ニ出ルニアラサレハ綱紀難立、且萬國公共ノ定格ニ依リテモ、交際ノ道或ハ全キヲ失フニ至ラント深ク思慮被致、從來ノ舊套ヲ改メ、政權ヲ 御門ニ歸シ、廣ク衆論ヲ盡シ、同心協力、維新ノ政ヲ行ハント欲スルノ意ヲ今般言上被及候處、御門御許容有之候、抑貴國同盟以來、懇親ノ情日ニ切ニシテ、多少ノ告諭啓發ヲ受ケ、諸般ノ事務漸ク開化ニ向フニ至リシハ、全ク閣下等盡力ノ致ス所ト、我等ニ於テモ深ク感謝ニ不堪、此上猶一層ノ厚義尤所懇祈候、猶追々申入候件々モ可有之候得共、前件ノ旨趣報告ニ及ヒ度如此候、拜具謹言。

慶應三年卯十月

小笠原壹岐守花印

外務省記

○外務省記、本條第一書ニ二十九日頃ト標シ、第二書ノ末ニ、外國奉行江連某等、是書ヲ英國公使館書記官ニ送致スルノ附簡アリ、十月二十九日ト署シ、文中小笠原壹岐守約束致シ候別紙演達覺書一通差進候トアリ、而シテ又第二書ノ首ニ朱書シテ云、舊幕府呈進ノ舊記ニ、十一月十四日、閣老小笠原壹岐守邸ニ蘭公使參向應接ノ後、壹岐守自身是書ヲ付與スト、然レハ漸次各國公使ニ送致セシナルヘシ、今其前ナル者ニ從ヒ、本日ニ收ム、第三書、其日ヲ知ルヘカラス、姑ク此ニ類集ス。

○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、新潟開港ノ期^{十二月}七日ヲ改テ、明年三月九日ト爲サンコトヲ報シ、

且其條約書案ヲ示ス。

亞米利加合衆國ミニストルレシデント

エキセルレンシー

アルビワンワルケンボルグヘ

貴國十一月四日附貴翰、竝ニ和文トモ落手披見致シ候、西海岸開港場所ノ儀、七尾港ハ我國ニオイテ不都合ノ段御談判ニオヨヒ候處、我國ノ都合ヲ思慮被致、新潟港ニ御同意被成候段、御懇切ノ至リ深ク所謝ニ候、就テハ我政府ニオイテ、兩國ノ利益ヲ計リ、貿易ヲ盛大ニセンカ爲、新潟ヲ互市場ト定メ、佐渡ノ内夷港ヲ繫船場ト治定イタシ、來紙第三條中ニ掲載有之候蒸氣運送船ハ、差向先ツ壹艘相備ヘ可申、右開港場規則ノ儀ハ、閣下御差越シ有之候箇條ニ基キ、我政府決定ノ趣意ヲ參酌シ、別紙ノ通り取極メ度、尤新潟竝ニ夷町ニ於テ、外國人居留ノタメノ用意イマタ整ハス、開港期限迄ニ間ニ合兼候間、貴國第一月一日ヨリ三ヶ月後即千八百六十八年四月一日ニ至リ、開港互市ノ手續ハ處置可致、去ナカラ其他ノ用意猶十分整兼候儀モ可有之間、閣下ニモ右之趣御承諾有之候様、偏ニ望ム所ニ候、且貴翰末文ニ、新潟竝ニ夷港開港ノ儀ハ、我政府ノ都合ヲ計ラレ御承諾被成候儀ニ付、條約中右之廉ニ付テ、此後貴國政府ノ趣意ニ任セ、猶十分ノ御處置ヲ可被成トノ趣申越シ有之、政府ノ名代人取極メシ事ヲ公然許允スルノ理ハ、其政府ノ權ナレハ、政府ノ趣意ニ任セラル、トノ趣ハ、余ニ於テ聊異存無之儀ニテ、且貴國政府トイヘトモ、閣下ノ報信ヲ得テ、事情ヲ了解被致候事ト存候得者、是又、閣下同様ノ好意ヲ以テ、余等協議シテ取極メシ事件ヲ承諾セラル、事ト遙察致シ候、實ニ雙方ノ利益ヲ全フスルモ、唯此事ニアリト存候、此段貴答ニオヨヒ候間、否御申越有之度候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十九日

第一條

小笠原 壹岐守花印

日本政府ハ、貿易ノ用ニ給スルタメ、佐州夷町ノ内ニテ相當ノ貸納屋ヲ取建、舶來貨物ヲ積置カシムヘク、尤日數二十日ノ

間ハ、敷料ヲ取立サル事。

第二條

新潟ト夷港ノ沖ニ碇泊スル商船ノタメ、相應ノ端舟ヲ備置、右兩所ニ於テ荷物ヲ陸揚、又ハ船積セシメ、且新潟ト夷港ノ間ニ往來スル端舟ヲモ設ケテ、荷物無恙運送セシムヘシ、イツレモ相當ノ賃銀ヲ取立ヘキ事。

第三條

新潟ト夷港トノ間ヲ自由ニ渡航セシムルタメ、日本政府ニテ蒸氣船ヲ備置、往來ノ者並ニ荷物ヲ運送シ、又ハ荷積ノ端舟ヲ引カシムヘシ、尤相當ノ賃銀ヲ取立ヘキ事、併シ外國人所持ノ蒸氣船、或ハ端舟ヲ以、右所用ニ充ル事勝手タルヘシ。

第四條

若シ夷港海岸ニ於テ、荷物揚卸不便ナル節ハ、日本政府ニテ、夷町ノ後ロニアル湖水ヘ、海手ヨリ往來ノ通路ヲ開クヘキ事。

第五條

日本政府ニテ、新潟川口近傍ヘ相當ナル燈明臺ヲ取建、第一等ノ光ヲ點シ、且水戸口ヘ滯木、或ハ浮木ヲ備ヘテ、出入自在ナラシムヘキ事。

第六條

新潟ニ於テ、他ノ開港場同様貸納屋ヲ取建、且荷物揚卸ヲ便利ニセンタメ、揚場ヲ取建ヘキ事。

第七條

新潟并夷港ノ市中ニ於テ、日本人ト相對ニテ旅宿住宅、并ニ倉庫ヲ借り、又ハ買入、或ハ正當ナル所用ノタメ、地面ヲ借受ル事勝手タルヘシ、尤別ニ居留地ヲ定メス。
但、外國人地所ヲ借受ル廣狹ハ、新潟ニ於テ東北ハ海面、并ニ川筋ヲ限り、西南ハ當今奉行ノ支配所榜示杭アル場所ヲ限リトス、田畑其外政府ヘ年貢ヲ納ル地ハ、相對ヲ不許、前廣奉行所ヘ申立、免許ヲ受ヘシ。

第八條

條約濟各國ノ人民遊歩期程、新潟ハ奉行所ヨリ各方へ凡十里ヲ限ルトイヘトモ、其山川ノ都合ニヨリテ定ムヘシ、佐渡ハ全島其限程ヲ不立ヘシ。外務省記

○本條ノ外、各國公使ニ與フル者アリ、文意皆同シ、故ニ之ヲ略ス。

○十一月十二日米國辦理公使復書

千八百六十七年第十二月七日、江戸ニ在ル合衆國公使館ニ於テ、

江戸外國事務執政小笠原壹岐守閣下ニ呈ス、

余、謹テ、新潟及ヒ夷港ノ外國人居留地ノ爲ニ設クル規則書ノ板行ニセル者ヲ、閣下ニ贈ル、此規則ハ、余同僚ノ者ト共ニ同意セシ所ナリ○余、又亞墨利加ノ商人ニ觸流シタル書付モ、板行ニセシヲ以テ、之モ亦此書中ニ封入セリ、但シ此觸書ハ、閣下ノ望ニ從ヒテ告示セル者ニシテ、合衆國ト日本ト取結ヒタル條約ニ據レハ、江戸ノ開市、及ヒ日本西岸ノ新潟ト夷港トノ開港ハ、千八百六十八年第一月一日ニアルベキヲ、來ル第四月一日迄延期セルコトヲ記セシ者ナリ○此延期ハ、余、今日附閣下ニ贈リタル第九十八號ノ書狀中ニ述ヘタル趣ニ因テ、同意セシ者ナリ○余、合衆國政府ノ條約中ニ、日本ノ西岸ニ於テ開クヘキ港トシテハ、余カ新潟ト夷港トヲ撰ヘル取計ヒテ良善ナリトスルコトヲ信ス、然レトモ我政府、余カ取計ヲ良善トセス、又穿鑿若クハ吟味ノ後、夷港ハ、不安全ニシテ、港ト爲ニハ不適當ナルコトモアルヘケレハ、余、我政府ノ爲ニ、日本政府トノ條約ヲ更ニ十分ニ充足セシムルヲ望ムベキ理ヲ貯フ、恐惶敬白。

日本在留合衆國ミニストルレシデント

アルビワンワルケンビュルグ

外務省記

○各國復書、本條ノ外荷蘭アリ、今之ヲ略ス、餘ハ皆原記ヲ逸ス。

晦日、淺野茂勳、紀伊守○茂長ノ嗣子、毛利廣封敬親ノ嗣子、周防新湊ニ會議シ、島津茂久ノ至ルヲ待テ、俱ニ入京セントス。指華入京日載

○附指華入京日載ニ云、木戸準一郎、新湊會議後、直ニ藝州ニ罷越シ、打合書取左ニ、

一薩侯御一同、世子君原註、紀伊守様ヲサス、御上京被爲遊候トノ御事奉畏候。

但三田尻ニ薩國ヨリ報知有之候ハ、早急御報知仕候様ニトノ御儀承知仕候。

一敵國人數上坂之節、御一艦ヲ以御誘導被成下候ニ付テハ、發期中上次第御揚碇、御手洗港ニテ御待合可被下候段承知仕候。

別段、

一上國之模様ヲ以テ、後陣陸地罷登リ候儀可有之ト奉存候事、

一上國之形勢萬一モ艱難之節ハ、天下忽兩端ト相成可申、恐多モ一旦、至尊雲霧ニ被爲隔候トモ、御同心勦力雲霧ヲ拂盡シ、至尊ヲ奉迎、朝廷御回復ヲ目的ト仕候儀ト奉存候事、

一上國之形勢ニヨリ、備後、備中之諸藩、又ハ雲州等、大義ヲ以テ御同様ニ説諭シ、違反之節ハ、兵馬之覺悟御同前ト奉存候事。

○十一月

朔日、分部光貞、若狭守○大溝藩主、食封二萬石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ。分部光謙家記

二日、大給乘謨、繼殿頭○田野口藩主、後龍岡ト改稱ス、食封一萬六千石、時ニ幕府老中格、海軍總裁タリ、稻葉正己、兵部大輔○館山藩主、正善ノ養父、時ニ幕府老中格、海軍總裁タリ、京ニ至ル。

二條攝政記

○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、江戸開市期限^{十二月}ヲ改テ、明年三月九日ト爲ンコトヲ告ケ、且國內布告文案ヲ示ス。

大貌利太泥亞特派公使全權

ミニストル兼コンシユルゼネラール

エキセルレンシー

スル、ハルリー、エス、パークスケシビヘ

以書翰申進候、江戸表外國人貿易ノ爲、我カ十二月七日ヨリ居留可致、兼テノ約定ニ付、今般取極候規則書ニ通差進候處、右規則中ニ、外國人旅籠屋竝ニ自普請場ノ支度、右日限迄可爲抄取義ニ有之候ヘトモ、何分期限通り出來シ難キ模様ニ相成、且當今ノ形勢、江戸、大阪同日ニ相開キ候テハ、都テ不宜ト存候間、江戸開市ノ儀ハ、來ル貴國四月一日迄延期相成候様イタシ度存候、御承諾有之候ハ、別紙ノ通、國內へ普ク布告可致候、此上猶精々取急キ、右期限無相違成功致シ可申ト存候、此段申進度如此候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月二日

小笠原 壹岐守 弼

觸案、

來ル十二月七日ヨリ江戸開市ノ儀、兼テ相觸置候趣モ有之候處、御都合モ有之候ニ付、各國公使等へモ談判之上、來辰年三月九日迄延期相成候間、其旨可相心得候。^{外務省記}

○十一月四日英國公使復書

千八百六十七年十一月二十九日於江戸、

余、今月二十七日附、外國交易ノタメ、江戸市ヲ開ク事ヲ、來第四月一日迄差延サレ度儀ニ付キ申越サレタル閣下ノ貴翰、

竝ニ閣下右延期ヲ日本人民ニ知ラシムルタメニ、演述シタル別紙布告書ノ下案ヲ落掌セリ、

余、閣下ノ申越シタル趣ニ同意シ、而シテ余カ力ノ及フ丈ハ前文ノ如クナスタメ、日本政府ニ補助ヲ與フ可キ好意ノ明證ヲ顯サント欲スル意ヲ閣下ニ報知ス、余、マタ江戸ニ在ル外國人居留地ノ諸工作ヲ怠ラシメサル様、閣下ニ説勸メサルヲ得ス、何トナレハ、右工作來ル第四月一日ニ於テ成功セサル事アルニ於テハ、大ナル罪過、正サシク日本政府ニ歸スヘケレハナリ、

余、閣下ニ右別紙布告書ヲ遅延ナク發出シ、而シテ其公告ニナリタル日附ヲ、余ニ報告シ給フ事ヲ希望ス、恐惶謹言。

日本在留英國特派公使

兼全權ミニストル

ハルリー、エス、パークス

外務省記

○本件、各國ニ照會セシモノナレトモ、皆原記ヲ失ス、外務省記、承諾ノ答書、英國ノ外ニ一通アリ、其文意大同小異、故ニ之ヲ略ス。

三日、松平慶倫、^{三河守}津山藩^主、疾ニ罹リ、且長防ノ虞アルヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ、是日、批シテ、本月ヲ限り會同セシム。

去ル十五日夜、家來御呼出ニ而御渡ニ相成候御書付、昨二十二日相達拜見仕候、右 御書付之趣ニ付而者、被爲 在御用候間、早々上京可仕旨奉畏候、然處、私儀、昨年以來鬱症ニテ、今以駝ト不仕、何トモ奉恐入候、其上長防之趣、免角不穩様ニモ風聞承リ申候、乍去、屹度見留付候義無御坐候得共、萬一不慮ニ變事差起リ候節者、僅出雲國ヲ隔候而已ニ而、自國之義無心元、彼是兩條差湊ヒ甚以心配仕候、可相成義ニ御坐候得者、暫時發足之義御猶豫被成下候ハ、難有奉存候此段奉願候、

以上。

十月二十三日

松平三河守

○本日批紙

當月中ニハ必上京可有之候事。二條攝政記 松平康倫家記

○德川茂承、蜂須賀齊裕、小笠原忠忱、九鬼隆備、大隅守○綾部藩主、食封一萬九千五百石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セン
ト請ヒ、小笠原貞孚、幸松丸○安志藩主、食封一萬石、老臣ヲシテ代ラシメント請フ、二條攝政記又戸田氏共、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ兵ヲ率テ京ニ至ラシメ、二條攝政記松平慶憲ノ警衛兵モ亦京ニ至ル。松平直致家記

○幕府、諸藩ニ令シテ、江戸郭内諸門ヲ警守ス。

内櫻田御門前ヨリ	酒井左衛門尉	松平中務大輔	戸澤中務大輔
坂下御門前通リ	井伊掃部頭	松平伊豆守	戸田淡路守
外櫻田御門外	西尾隠岐守	松平伊次郎	三宅備後守
半藏御門外	酒井若狭守	水野眞次郎	阿部駿河守
田安御門外	前田丹後守	永井信濃守	米倉丹後守
清水御門外	眞田信濃守	久世出雲守	小出伊勢守
雉子橋御門外	安藤理三郎	板倉甲斐守	
	森川内膳正	松平丹後守	
	松平能登守	本多能登守	
	板倉攝津守		

一橋御門外	青山左京大夫	内藤若狭守	板倉主計頭
鍛冶橋御門内	本多豊後守	松平伊賀守	永井日向守
數寄屋橋御門内	溝口誠之進	森美作守	織田筑前守
山下御門内	上杉駿河守	田村右京大夫	酒井下野守
神田橋御門内	分部若狭守	有馬兵庫頭	伊東播磨守
常盤橋御門内	松平刑部大輔	水野肥前守	
吳服橋御門内	津輕越中守	本多美濃守	加納嘉元次郎
馬場先御門内	井上河内守	松平和泉守	細川玄蕃頭
馬場先御門外	田沼玄蕃頭	九鬼長門守	保科彈正忠
和御倉門内	松平下總守	松前志摩守	増山對馬守
同御門外	秋元但馬守	牧野伊勢守	一柳對馬守
虎ノ御門内	遠藤但馬守	内田主殿頭	
日比谷御門内	稻葉備後守	遠山信濃守	安部攝津守
	間部下總守		

渡邊丹後守

阿部美作守

堀田相模守

松平大和守

酒井雅樂頭

非常之節、人數差出可申旨、

右於美濃守宅、家來呼出達之。晚翠樓叢書

四日、幕府ニ命シテ、朝鮮、佛朗西ノ和議ヲ調停セシメ、宗義達ヲシテ其事ヲ幹セシム。

○幕府へ達書

兼テ御聞濟相成候儀ニ付、是迄ノ手續ヲ以使節差遣、和議ノ儀可然取扱候様被 仰出候、對馬守へモ右ノ段可相心得旨相達候。外務省記

宗 對馬守

朝鮮國之儀ニ付、幕府伺有之候、右者兼テ 御聞濟ニモ相成居候儀ユへ、是迄之手續ヲ以使節差遣、和議可取扱 御返答被仰出候條、此段對馬守ニモ可心得旨、被 仰出候事。

十一月 外務省記 宗重正家記

○重正家記ニ云、韓、佛和議ノ儀ニ付、爲國使平山圖書頭、十一月中、渡韓發途ノ筈ニ付、朝鮮國掛合向等、精々爲相運置候様、重正前職中指令有之、早急同國へ家來差渡シ、其向掛合ニ及置候末、十一月四日、更ニ朝命之御旨趣ニ依リ、十二月

九日、平山圖書頭彌發京渡韓之治定ニ至居候處、其初京師不穩ノ勢ニ依リ、姑ク猶豫有之内、終ニ不容易御形勢ニ至リ、其儘國使渡海ノ御沙汰相止ミ、戊辰ノ春、溫テ朝鮮國交通ヲ掌候様家役被命候。

○柳澤保申、京ニ至ル。柳澤保申家記

○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、貨幣改鑄ノ事、器械備具セサルヲ以テ、期約ニ循フコト能ハサルヲ告ク。

荷蘭ボリチーキアгент兼コンシユルセネラール

エキセルレンシー

ドデガラーフ、ファンボルスフルークへ

以書翰申進候、外國貨幣引替之儀、差支無之様處置可相成タメ、金銀吹立所取立、吹替方等、當卯十一月中ヨリ新定約書第六條ノ明文ニ基キ、右期限ヨリ施行可致筈之處、西洋法器械取寄ノ分到著相成候上、吹替場所等取立候儀ニ有之、然ル處、機械未タ到著不致、期限迄ニ取行候儀相成カタク、就テハ頃合ノ儀モ現今差定申入兼候、右ハ期限差迫リ居候儀ニ付、兼テ此段爲御心得申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月四日

小笠原 壹岐守花押

外務省記

○各國ノ照會、原記ヲ失ス、本月二十三日、外國奉行上申書アリ、併録シテ以テ參考ニ備フ。

貨幣鑄造器械之儀ニ付申上候書付、

外國總奉行
外國奉行

貨幣鑄造器械ノ儀ハ、新定約書第六條ノ明文モ有之候ニ付、既ニ右約書爲御取替之頃、御勘定奉行ヨリ佛國公使へ引合之上、御注文方取計候儀ト、私共一同兼テ心得罷在、先般右約書掲載之期限モ差迫リ候所、未タ右器械到着ノ儀モ承及ヒ不申、右取建場所等モ御治定無之哉ニテ、速モ期限通御施行難相成儀ト奉存候ニ付、イツレニモ右延期之儀、御勘定奉行見込御尋ノ上、豫メ外國公使等へ以御書簡被仰入候方ニ可有之旨、當九月中申上候所、右ハ西洋法器械等御取寄ノ分、到着ノ上ニ無之テハ、御施行ノ期限差定メ難申上ニ付、豫メ各國公使へ御書簡被差遣候方可然旨、御勘定奉行下ケ札ヲ以申上候ニ付、同月中旬、右書面御下相成候間、其趣ヲ以、各國公使等へ御書簡、並葡、白コンシユルへ之書簡案共取調差上、當十一月初旬、夫々御達相成候儀ニ有之、然ルニ其後近江守佛國公使へ引合ノ砌、話次右器械ノ儀ニ相涉リ候所、是迄右器械同國へ御注文相成候儀ハ一切承知不仕旨、同公使申聞候ニ付、不取敢小栗上野介へ其趣ヲ以談判仕候所、同人儀ハ、去ル丑年中、柴田日向守、佛國へ罷越候節、彼地ニオイテ右御注文方取計候儀ト相心得罷在候旨申聞候へ共、日向守儀同國ニオイテ御注文方取扱候ハ、横須賀表へ御取建可相成製鏡器、並其餘火藥製造器械而已、貨幣鑄造器械ノ儀ハ、同國滞留中御國事務取扱居候フロリヘラルトヨリ申立候趣ヲ以、聊與聞仕、銀貨雜形製造等ノ入用トシテ、佛貨六千フランク相殘シ來リ候迄ニテ、素ヨリ同人當地發程前、右之儀ニ付被仰渡等有之儀ハ承及ヒ不申候間、尙爲念取調候所、即別紙頭末書ノ通ニテ、別段御注文方引受取扱候儀ニハ無之、將備中守上野介ヨリフロリヘラルトへ往復仕候書簡ニ依リ推考仕候へハ、右御注文ノ儀、最初備中守、上野介兩人ニテ引受取扱罷在候哉ニ相見候得共、詰リ是迄右御用御委任ノ者モ無之、御勘定奉行、並私共一同ノ間ニテ、全ク雙方ノ存込違ヒヨリ、右様行違候上ハ、今更彼是辨論仕候共無益之儀ニテ、此儀各國公使等へ漏泄仕候テハ、第一新定約書第六條之趣ニ相戻リ、各國政府へ御信義モ不相立、彼方ヨリ何様申出候共、御説破可相成御辭柄モ無之次第ニテ、御不都合無此上儀ト奉存、剩へ右期限モ既ニ打過候程ノ義ニ付、急速右器械御注文有之、何トカ御所置無之テハ相成間敷、尤前條日向守巴里滞留中、フロリヘラルトヨリ申立候趣ヲ以、右器械圖、並銀貨雜形製造等ノ爲メ、佛貨六千フランク相渡シ置候義ニ候上ハ、無論同國商社へ御注文相成候方ト奉存候ニ付、右御注文ノ儀、御勘定奉行へ被仰付、何レニモ

同國公使へ内談ヲ遂ケ、周旋ノ儀、同人へ相托シ候様被仰渡可然奉存候、依之、別紙相添此段申上候、以上。

卯十一月

連名

丑年中、柴田日向守、佛國御用中、貨幣改鑄器械之儀、御國事務取扱罷在候佛人フロリヘラルトヨリ申立候儀ニ付、取計候頭末、其外左之通、

一去ル丑年、横濱在留佛國公使ヨリ貨幣鑄造器械買入方、並右取建方ニ要用ナル諸職工等差添、早々差送可申旨申越候ニ付テハ、右委細ノ儀承知不致候テハ難取計間、既ニ公使へ書簡ヲ以問合置候へ共、未タ回答無之ニ付、右指圖出來候儀ニ候ハ、質問イタシ度旨、日向守巴里滞留中、同人宛フロリヘラルトヨリ書簡ヲ以申立候ニ付、我政府ノ爲メ注意有之候段ハ感謝ノ至ニ候へ共、右ハ我國貨幣方之吏人ヨリ、横濱在留公使へ引合ニオヨヒシ儀ニテ、拙者關係イタシ候儀ニ無之間、質問ノ條件應答難致、依テハ、右公使ノ報答ヲ待テ、尙可然周旋有之度旨、日向守ヨリ返書差遣シ候所、然ル上ハ、公使ノ回答有之迄、器械買入方、其外見合置可申旨、尙又フロリヘラルトヨリ申越候趣ニテ、九月五日附書狀ヲ以、右往復書類、心得ノ爲メ江戸同役共へ差廻シ越候事。

一十月中、一兩銀雜形、此度御國ヨリ相廻リ候所、頗ル臈略ニテ模寫難致候間、右雜形ノ分合ニテ大形、且分明ニ寫取吳候様、巴里ニオイテフロリヘラルトヨリ日向守へ申聞候間、右注文通支配向へ申付、爲寫取差遣シ候趣ノ事。

但、右大形ニ寫取候上、寫真鏡ニテ御國注文之分合通、縮寫イタシ候積ノ旨、フロリヘラルト申聞候趣ノ事。
一右貨幣雜形製造、並器械繪圖取調方等之爲メ、佛貨六千フランク入用ニ付テハ、右御出方ノ儀、江戸表ヨリ御廻シ相成候様、公使方へ可申遣哉、又ハ製鏡所御入用金ノ内ヨリ差繰出方取計置可申哉之旨、フロリヘラルトヨリ日向守へ申出、其後十一月中ニ至リ、尙又書簡ヲ以申立候ニ付、日向守ヨリ製鏡所首長ウエルテハ示談ノ上、製鏡所御入用之内ニテ相渡、尤右六千フランク相托シ候ニ付テハ、追テ我政府へ右證書添、勘定書差送り候様イタシ度旨、支配向ノ者ヨリフロリヘラルトへ書簡爲差送候處、右承知ノ旨返書差越候ニ付、寅二月中、日向守歸府ノ上、其段周防守殿へ申上、右往復書簡、

御勘定奉行へ御下相成候様仕度旨ヲ以、進達イタシ置候事。

一同月中、巴里ニオイテ、右一兩判銀貨雛形出來イタシ候旨ニテ、フロリヘラルトヨリ日向守へ差出候ニ付、同人歸府ノ節持歸差上候事。

一前段九月五日附、日向守ヨリノ御用狀、十一月十日江戸表へ相達シ候間、右書中ノ儀、御勘定奉行へ委細申談置候處、其後挨拶無之ニ付、右挨拶次第否可申遣旨、十二月二十九日附、返書差立候へ共、途中行違相成、日向守歸府後ニ至リ相戻リ來候事。

右之外、丑八月二十一日附、商社取組ノ儀ニ付、松平備中守、小栗上野介ヨリフロリヘラルトへ差送候書簡末段、先頃相願置候貨幣器械ノ儀、宜周旋頼入候トノ文段有之、十一月中、巴里ニオイテフロリヘラルトヨリ右書簡、日向守へ差示シ候越ノ事、

千八百六十六年二月十日附ヲ以、フロリヘラルトヨリ小栗上野介、星野備中守宛差送候書簡中、一兩判ノ見本ヲ既ニ差送、其外右貨幣ノ儀ニ付、日本政府ノ爲メ要用ノ儀ヲ報告セシ書簡ヲ、貴下等最早落手セシ儀ト存候旨、書載有之候事。外務省記

五日、本多忠貫、伊豫守○神戸藩主、食封一萬五千石、山田奉行ノ職ニ在ルヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメント請フ、之ヲ聽ス。

御書付拜見仕候、御別紙之通被 仰出候ニ付テハ、御用被爲在候間、早々上京可仕旨、御沙汰御坐候段、被 仰出候旨、被 仰渡承知奉畏候、然ル處、兩宮之儀者、格別 御尊崇被爲在候ニ付、御警衛向、近來別テ手厚ニ相心得候様被 仰渡モ御坐候處、當節柄、私留守中、右御警衛之儀深心配仕候儀ニ御坐候、私爲名代、家老共上京爲仕候テ不苦儀ニ御坐候哉、此段御内慮奉候、以上。

十月二十七日

本多 伊豫 守

二條攝政記
本多忠貫家記

別紙奉伺候儀ハ、兩宮御警衛筋深心配慮罷在候儀ニ御坐候、且神領取締等、手厚ニ相心得罷在候處、此節於市中異事之取沙汰モ有之、神慮之程モ奉恐入候、右ニ付テハ、私留守中、御警衛并取締等之儀深心配仕候間、格別之思召ヲ以、今般奉伺候儀早々御下知被下度奉存候、以上。

十月二十七日

本多 伊豫 守

○本日批紙
無據次第ニモ相聞、名代上京可有之候事。本多忠貫家記

○前田慶寧、加賀守○加賀藩主、食封百二萬二千七百石、時ニ松平氏ヲ稱ス、阿部正方、主計頭○福山藩主、食封十一萬石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ。二條攝政記

○幕府、再ヒ諸藩ニ令シテ、江戸外郭、及ヒ各處ヲ警守ス。

大目付
御目付へ、
覺、

酒井 下野 守
内田 主殿 頭

右、芝山内御警衛相心得ニ付、下野守ハ山下御門内、主殿頭ハ虎之御門内へ非常人數出之儀被成御免候段相違候間、得其意、右組合之面々へ、其方共ヨリ可被達候事。

伊東 播磨 守

非常之節、昌平橋へ人數可被差出候、依之、神田橋非常人數出へ被成御免候、委細之儀ハ御目付へ可被談候。

非常之節、東橋へ人數可被差出候、依之、和田倉御門外非常人數出被成御免候。 秋元但馬守

非常之節、人數出之儀相達ニ付テハ、右場所へ出張致シ、登城ニ不及候間、可被得其意候。 松平中務大輔

同文言、 青山左京大夫

同文言、 秋元但馬守 内藤若狹守 松平能登守

同文言、 水野肥前守 遠藤但馬守 堀 右京亮

右之通相達候間、可被得其意候。 酒井紀伊守

非常之節、内櫻田御門前ヨリ坂下御門前通リへ人數差出候様、左衛門尉へ相達候間、左衛門尉申談、其方儀モ同所へ人數可被差出候、委細之儀ハ大目付、御目付へ可被談候。

永代橋 酒井左京亮 大橋 牧野遠江守 兩國橋 佐竹播磨守

東橋 秋元但馬守 淺草御門 大岡主膳正 下谷新シ橋 黒田筑後守

和泉橋 大久保 三九郎 筋違橋御門内 酒井銚次郎 昌平橋 伊東播磨守

水道橋内 井上 宮内 小石川御門内 松平大藏少輔 牛込御門内 植村駿河守

市ヶ谷御門内 京極飛驒守 喰違 松平攝津守 赤坂御門内 岡部筑前守

土方鞆千代

溜池邊 水野日向守 山口長次郎

新シ橋 織田攝津守 片桐主膳正

幸橋御門内 井上辰若丸 北條相模守 織田出雲守

未下備中守 山内攝津守 稻垣若狹守

谷 大膳亮 堀内藏頭 青未源五郎

松平主計頭 柳生但馬守 堀 右京亮

右非常之節、書面之場所へ人數差出候様相達候間、得其意、可然向へ其方共ヨリ可被達候之事。

丹羽左京大夫

非常之節、新橋へ人數可差出旨相達候間、得其意、非常人數出之面々へハ、其方共ヨリ通達可被致候。

晩翠樓叢書

○德川茂承ノ家臣、江戸ニ在ル者、榊原政之介、竹内孫助謀主ト爲ルト云、幕府ノ親戚譜第、及ヒ諸藩士ヲ其邸ニ會シ、

德川氏ト君臣ノ義ヲ全フシ、幕府ヲ扶持センコトヲ勸諭シ、且其意見ヲ問フ。

一名分條理御正シニ付、御親藩、御譜代初、君臣之分一際相盡申度事、

一同心協力、兵制一致之事、

一今般御復政之舉、御曠世之御猛斷、大公至誠之御英圖ヨリ被爲出候御儀、實ニ不堪感泣御次第候、併御連技、御譜代臣子之面々ヨリ奉論候得者、九重御幼冲、輦下御動搖之折柄、御祖宗奕世之御大業、卒然一朝御辭解ニ相成候段、爭テカ坐視傍觀奉ルヘキ、悲憤痛惋此事ニ候、此上利害得失ヲ不顧、各爲德川氏益君臣之大義ヲ砥勵シ、以テ數百年之御厚恩ニ報シ候外無御坐候儀ト被存候、抑東照宮御武德ヲ以天下ヲ戡定被爲在、大ニ内外諸侯ヲ被封候テヨリ、何レモ君臣之分

相守り候事、殆于今三百年、其功德之隆、前古以來御比例モ無之處、近年草莽不逞之徒、姦説ヲ鼓張シ、禍ヲ蕭牆之内ニ醸シ、次第ニ御羽翼ヲ奉殺、御孤立之勢ニ相成候ヨリ、既ニ近來討幕之企相唱候ニ至リ、又一變シテ今日之御場ニ奉陪候、剩、諸侯之進退ハ、今ヨリ兩役ニテ被取扱候旨被仰出、且又召之諸侯上京之上ハ、王臣ト相心得候様御沙汰モ出候哉之趣風説モ有之、實以恐入候次第ニテ、一旦右朝命相下り候上ハ、即日幕府ト君臣之恩義相絶シ候得ハ、又候如何様成異變出來候哉モ難計、實ニ寒心之至リニ被存候、夫子弟功臣ヲ建立シ、夫々大封等ヲ被宛行候儀ハ申迄モ無之事ニ候得共、偏愛之御私情ヨリ出候儀萬々無之、斯ル時コソ、飽迄扶持匡救之爲ニ被建置候處、昇平數百年、上下之情隔絶シ、君臣之恩義澆薄ニ趣キ、御連枝、御譜代之向迄モ各民土ヲ私シ、自ラ開拓殖致候心得ニ相成、甚シキハ從來之姦説ニ籠絡セラレ、往々幕府ト君臣ノ大義ヲ忘レ、其御大難ニ臨ミ、不計モ不忠不義ニ陷入候モ難計、近年國家御多難之折柄、御親藩其外各天幕之間ニ周旋シ、聊臨機之御大權不被爲失、全御祖宗之御大業御恢復之一途ニ出候處、遽ニ臣僕之諸侯ト御比肩之徳川家ニ被爲成候事、實ニ冠履顛倒、綱常拂地共可申、嗚呼、歲寒シテ松柏ノ後凋ヲ知ル、誰カ幕府ト君臣之大義ヲ明ニシ、寧、忘恩之王臣タランヨリ、全義之陪臣トナリ、益砥節奮武之目的相立候得ハ、即チ依然タル徳川氏ヲ不被爲失、世運挽回之期モ可有之哉ト被存候、猶御深算御見込モ有之候ハ、國家之爲譯テ御示シ有之度候事。

卯十一月五日

晚翠樓叢書
水戸藩士小宮山毅介筆記

○佐倉藩老臣平野知秋手記ニ、本日ノ會議三日ト爲ス、又云、九日、紀州藩士榊原耿之介、竹内孫助二人來リ、過日諭示書中、寧志恩云々ノ二句削去候ニ付、左様相心得吳候様申聞。

○徳川慶篤答書

今般、御譜代大名衆之重職御呼出ニテ、御書取御渡ニ相成候儀、實以當今之御盛舉ニテ、幕府之御爲大義ヲ被唱候御先鞭不堪感佩候、右以來、諸藩ニテモ追々義勇ヲ鼓舞被致候趣相聞候、抑御當家之儀ハ、室町氏之末、天乃亂離ヲ被厭候砌、累世積徳之御家ニテ、東照宮被爲興、撥亂反正之盛勳偉業被爲立、海内億兆之黎庶ヲ水火之中ヨリ被拯出、莫大之御功德、天之寵眷ヲ被爲蒙、皇國割判以來、未曾有之泰平ヲ御開キ被下候儀ニテ、其御仍孫御遙胃ニ至ル迄、御福祉ヲ被爲受、千萬世之後迄モ盡期無之御儀ニテ有之處、貴論之通、近年草莽不逞之徒、恐多クモ勤王討幕之邪説相唱、妄ニ幕府ニテ天下ヲ私シ、朝廷ヲ奉輕蔑候テ、富貴ヲ恣ニ被致候様申觸、海内之人心致惑亂候類モ有之、是ハ全ク名義ヲ借り、天下ヲ紛亂爲致候迄ノ儀ニハ候得共、其動亂ニ乗シ、大權ヲ奪候奸謀點計モ難計儀、乍去、奸謀點計ニテ一時天下ヲ驚擾爲致候共、人心ヲ令感服候儀ハ、決テ相成間敷候、幾重ニモ道義之至誠ヲ以、累世恩波ニ浴居候者之義氣憤發爲致候ハ、批鉢百萬之兵モ、咄嗟之間ニ被指出候儀、仍テ當今之所、別テ御仁徳ヲ被施候儀專要ト被存候、既ニ東照宮ニテ討死之者、其子幼弱ニテ軍役勤兼候得共、父之祿被下置候旨、申斐武田家ニテ傳聞、徳川家之仁徳、後世必天下ヲ可取ト被評候由、況仁漸義摩之御親兵、彼名義ヲ借り候奸徒之爲壓倒被致候儀、決テ無之道理ト存候、古ヨリ坂東八州之兵力、天下ニモ敵スルニ足レリト申候ハ、天時地利モ不及候人和ヲ養置候テ、草莽不逞之徒、奸謀點計ヲ施候共、其術中ニ陥リ候者ハ有之間敷、將亦兵制之儀、素ヨリ一致ニ無之候テハ、不相成候所、遠藩ニハ頑陋之風習モ有之、砲銃ハ卒伍ノ兵仗ニテ、士大夫ノ器械ニハ無之様心得候者モ可有之候得共、今ノ砲銃ハ古ノ弓弩ニテ、唯古今之沿革有之處ト存候、古昔、上ハ將帥ヨリ下ハ士卒ニ至ル迄、弓箭ニテ致勝負候儀、當今連モ弓箭刀槍ヲ廢候儀ニモ無之候得共、沿革之勢無據儀、砲銃ヲ以古ノ弓箭ト相心得候テ、列藩ノ兵制必定一致ニ可相成候、弊藩之儀ハ、奥羽之諸藩ヘモ地勢聯接致候間、萬一上國ニテ騷亂ヲ生候儀有之候ハ、唇齒之勢ニテ相援合、幕府ヲ輔翼可致ハ申迄モ無之、殊ニ御親藩被建置候ハ、東照宮深御神慮被爲在候御事ト存候、御安危之御場合、各其一藩ヲ取纏置候テ、勿論幾重ニモ同心協力、是非於當節、幕府ノ御威權ヲ奉恢復、海内ヲ鎮壓致度、幕府ノ御威權ヲ恢復ニ相成候得ハ、縱令跋扈猖獗之諸藩有之共、自然震懼畏縮、覬覦ノ企相止可申、然ル處、幕威ヲ致恢復候得ハ、自然、王室御衰微ニ被爲至候勢ニモ可相成ト申唱候者モ有之候得共、草莽不逞之徒、陽ニ尊王ヲ唱候ハ、全ク名義ヲ借り候迄之儀故、萬一志ヲ得候テ、乍恐朝廷ヲモ如何可奉處置哉、左候ヘハ、矢張幕府御恢復之所、却テ王室御安泰之御基ト被存候、方今之形勢ニテハ、億兆之民殆水火之中ニ陥リ候哉モ難計候間、機會不相失、列藩麾下ヲ及糾合、

復古記 卷四

慶應三年丁卯十一月八日ニ起リ十五日ニ至ル

○十一月

八日、是ヨリ先、九條尙忠、入道前久我建通、入道前千種有文、入道前岩倉具視、入道前○具慶ノ子、富小路敬直、入道前罪ヲ獲テ洛外ニ居ル、是日、命シテ、各其家ニ歸ラシム

入道前關白

別業住居之儀、尤是迄之通、且本宅、我ハ近邊別莊一宿之儀、可爲勝手事、

右之通、去二月二十七日被 仰出候得共、自今歸宅可爲勝手被 仰出候旨、攝政殿被命候事、

入道前內大臣

千種 入道

岩倉 入道

富小路 入道

右、去三月二十九日、被免入京之節、住居洛外之事、

且月一度計歸宅不苦、一宿之外不相成候事、

右被 仰出候得共、自今歸宅可爲勝手被 仰出候旨、攝政殿被命候事。

五辻安仲手記

○幕府、英國公使將ニ橫濱ヨリ兵庫ニ來ラントシ、其軍艦一隻先至ルヲ稟ス。

橫濱表碇泊之英國軍艦一艘、同國士官乘組、二昨六日夜、兵庫津へ來著致候ニ付、其筋役人共ヨリ來意相糺候所、不日、同國公使橫濱ヨリ罷越候ニ付、右來著迄碇泊罷在候旨申聞候趣、只今屆差出候、右ハ同所詰役人ヨリ應接爲及候上、猶可申上候得共、先此段申上候、以上。

十一月八日 二條攝政記

○松平慶永、井伊直憲、京ニ至ル。 二條攝政記

○春嶽私記 十月二十 八日ノ條、ニ云、朝暮之召命、旁早々御上京無之テハ不相適候得共、是迄度々之御上京、イツ進モ始之程ハ幕府ヨリ御依頼候得共、次第ニ事之難難葛藤ヲ生シ候ニ隨ヒ、御論モ合兼、遂ニハ御物別レニテ、御歸國ニ相成候様之姿ニテ、此度ハ何分幕府之淵底反覆相伺候上、可然トノ御評定ニテ、二十日、十之丞差立、二十一日夜京著、翌二十二日、板倉殿拜謁之上、今般之御一條、御紙上之趣ニテ略拜察ハ仕候得共、猶此上前途之御見込モ如何之御儀ニ被爲在候哉、天下之公議ヲ御待被遊候御趣意ニハ御坐候得トモ、差當リ 朝廷萬機之御政道如何被遊候哉、是迄之小朝廷トハ御様子モ違ヒ、乍恐 御當惑ニモ可被爲在歟ト奉想察候、萬一夫等之邊ヨリ、又々御戻シニ相成候様之御儀ニ被爲運候テハ、以之外ナル御不都合ト申、且一時之御權謀ニテ、朝廷御薨如被爲在候御姿ニテ、天下之人心モ服シ申聞敷、愈騒擾ヲ醸シ可申歟、第一此末御實踐之御見込ハ如何被爲在候哉、是等之御次第篤ト相伺ヒ候テ上京モ仕リ、涓滴一滴之微力モ可相盡覺悟モ仕度旨申述候處、板倉殿御答ニハ、御尤至極之御尋ニテ候、元來此度之御一舉、土州ニ御迫ラレ、無御據此場へ被爲運候様ニモ相聞エ可申候得共、決シテ左様之譯ニハ無之、政權一途ニ歸セスシテハ、御國內治リ兼候ト申ハ、前日ヨリノ御著眼ニテ、時機ヲ御見合セ被遊候處、此度時勢ニ乘シ、土州之建白好機會到來ニ付、日頃持滿之強弩ヲ御切發チ被遊候御儀ニテ、實ニ公平正大、只管天下之安全ヲ被爲量候台慮ニテ、一毫御鄙吝之御念頭ハ不被成御坐候、然ル處、老公御賢察之通り、朝廷ニテハ、是迄更ニ御手覺不被爲在候儀故、一小事之 御裁決モ御六ヶ敷候故、矢張是迄之如ク、御相談之御模様ニ有之、此處甚御困窮

之御場合ニテ、其御相談ニ御乘リ被遊、御差支無之様御取計ラヒ有之候得ハ、御奉還ハ虛名ニテ、其實ハ御威權ヲ御手離シ無之ト申與論モ可差起勢モ有之、又截然ト御振離シ、一切御取合無之候得ハ、御立派之様ニハ候得共、朝廷ニテ今日之御差支ト相成候得ハ、又奉還ヲ名トシテ、結局ハ、朝廷之御迷惑ヲ御引出被遊、朝廷御窮弱之所ヨリ、再ヒ御依頼御委任之時ヲ御待被遊候ト申嫌疑ナキニシモアラス、御進退ニ御谷リ被成候御運ヒニ付、朝廷之御様子モ御功者之御儀ト申、幕府ハ申迄モ無之候得ハ、此中間之御扱ヲ御頼ミ被成、御私ナク御奉還之御盛意モ相立、朝野之嫌疑消除イタシ、諸侯會同ヲ御待付ケ、公議ニ附セラレ候様被成度トノ御趣意之由、恫々御物語有之ニ付、十之丞罷歸リ、仰之趣申聞、早々致上京候様可仕ト及御請、二十五日夜歸著、一時ハ前途危難ノ論モ種々作レテ、唯速ニ、朝幕之危難ニ不被爲趨候テハ、御大義ニオイト御濟被成間敷ト、御上京御決定相成リシハ、實ニ二十八日ナリ、又云、十日登場、第一尊慮如何ト被仰上處、此度ノ義ハ土ノ建白ニ發候ニハ相違無之候ヘトモ、其節ノ景況左様無之テハ、眼前ニ四分八裂ノ勢ヒニ相迫リ候故、事爰ニ及ヒタレトモ、其所置ニ至ツテハ、別ニ所見有之事ニテ、其譯ハ、是迄ノ御政體ニテハ、種々苦惱致候ヘトモ、如何ニシテモ政法兩途ニ相成候、總テ、朝廷ニテ御裁決相成候ヘハ、論モ無之候ヘトモ、夫ハ御六ヶ敷、幕ニテ決候ヘハ、朝ニ迫リ、或ハ、朝ヲ凌クノ說ヲ免レテ、政兩途ニテ治ルヘキ所以無之事故、是非一途ニ相成候様有之度ト申ハ、御承知ノ通宿昔ノ定見故、彼建白ト、時勢切迫トノ機會ニ當リ、兼テノ所見ヲ投セシナリ、皇國如此ナラスシテ決シテ治リカタキト申見込ヲ立、治否如何ノ大體ヲ體認シテ所置ニ及ヒシニ、朝廷ニテモ被、聞食、大ニ宜ク、此上ハ會同ノ公議ニ附シ、何トカ治體相立度、第一議事院等ノ事ニテ、帶刀、象二郎杯モ、夫々存寄モ有之可申出トノ事候ヘハ申談、免モ角モ國是ヲ決候心算ニテ、當時ハ唯差當ル事共ヲ伺ノ上、取計居候迄ノ事也、容堂モ是非上京可有之候ヘハ、厚申談度杯上意ノ由、御扣處ニテ伊賀守殿へ御逢ノ處、御同人ハ何分口惜事ニ相成候ト吝惜ノ語氣甚敷、公ニハ如何ト御申ニ付、公モ神祖ノ御盛業御持張被成兼候處ハ、御殘念思召候ヘトモ、如此相成候上ハ、何ト可相成哉、此上ハ斷然トシテ鄙吝ノ心ヲ擲却シ、内府公ノ、王國ノ爲ニ御家ノ御政權ヲ御抛被遊候御盛意ヲ遵奉シ、益以治安ノ策ヲ建候ヨリ外ハ無之ト御申候處、免角餘リニ惜キ事故、玄蕃杯トモ色々

申見候ヘトモ、更ニ良策無之、何トカ致方ハ有之間敷哉ト被申ニ付、夫ハ死シタル子ノ齡ヲ數ヘ候警ノ如ク、逆モ返ラヌ而已ナラス、却テ御盛徳ヲ損スルニ至候ヘハ、各ニモ其心得有之、上様ノ御鄙吝、或ハ御計策ノ様ニ世上ノ眺有之候テハ、御大切至極ノ事ニ候ヘハ、決シテ左様ノ義御口外ハ有之間敷ト御申ノ處、是迄吾輩ニオイトテハ、幕府ヲ主位トシテ公論正義ノ賓客ヲ請待ノ心算候處、此度其邊御超越ニテ、總テ、朝廷へ御還シ相成候事ニ候ヘハ、御正理ハ無間然候ヘトモ、今後ノ見込ハ立兼候、何分一度御投出シノ上候ヘハ、此度ノ被仰出ヲトコ迄モ御食言ニ不被爲成様仕度トハ存候ヘトモ、今日上ニオイトテ何ヲスル事モ無之、誠ニ茫然タル者ニテ、殆當惑罷在候ト被申候由。

九日、前田利鸞ノ朔平門前警衛ヲ罷メ、松平慶憲ヲ以テ之ニ代フ。

○松平慶憲へ口達

人數揃之旨届被出候ニ付、朔平御門前御固場人數支度次第、松平飛騨守方ト交代可致候、尤日限之義ハ、兩家示談之上取極可申候。
松平直 致家記

○利鸞家記ニ云、傳奏ヨリ朔平御門前警衛被免、爲代松平兵部大輔家來へ可相渡旨、口達ニテ仰渡サル、十一日引渡ス。
○幕府、前月二十二日外國事宜批紙中、所謂二三藩ハ、朝旨別ニ指定スル所アリヤヲ稟咨ス、是日、批シテ、別ニ指定スル所ナキヲ以テ、衆議之ヲ決行セシム。

○五日幕府上申書

外國取扱之儀、此程相伺候處、御附紙之兩三藩ハ、朝廷御見込モ被爲在候哉、差定兼候間、今一應諸藩衆議ヲ被爲盡候様致度旨、年寄共申聞候事。
大槻文 彦筆記

○本日批紙

兩三藩之儀、於朝廷御見込不被爲在候、差向候儀有之節ハ、諸藩衆議之上、御決定可相成候事。

大槻文 彦筆記

○幕府、譜第諸侯ノ職務ニ就キ、及ヒ警衛ニ服シ、若クハ疾病幼弱ノ者ハ、皆老臣ヲシテ代リテ朝召ニ應セシメント請フ、命シテ、警衛ヲ除クノ外、各其事由ヲ上陳シテ、命ヲ請ハシム。

老中	板倉伊賀守	稻葉美濃守	所司代
	松平周防守	松平縫殿頭	
若年寄	大阪城代	牧野越中守	
	永井肥前守	松平左衛門尉	
	松平豐前守	石川若狹守	
	立花出雲守	平岡丹波守	
	京極主膳正	大關肥後守	
寺社奉行	戸田大和守		
	土屋采女正	戸田土佐守	
	駿府城代	本多紀伊守	
	甲府城代	大久保加賀守	
	山田奉行	本多伊豫守	
	陸軍奉行	戸田長門守	

右者、夫々役儀被申付置候者ニテ、諸侯上京迄ハ、是迄之通ト之 御沙汰モ有之候得ハ、御國事之差支ニモ相成候間、在府之面々、且所々城代並奉行等者、當時上京爲仕兼候、右之趣、御兩卿へ可申入旨、年寄共申聞候事。

十一月 二條攝政記

○今般、被 仰出之趣モ有之候ニ付、衆諸侯一同上京可致儀ニハ候得共、不殘上京候テ一體之警衛向差支之儀モ有之候間、當時在府之者之内、繰合難出來面々ハ、爲名代重臣共爲差出、國邑ニ罷在候モノモ、病氣幼少之輩ハ無據儀ニ付、是亦名代爲差出候様可仕奉存候、尤名前之儀、猶取調可申上候、此段申上候、以上。

十一月 八日 二條攝政記
○本日批紙 晚翠樓叢書

○松平武聰、右近將監○濱田藩主、食封六萬千石、義ニ封ヲ失ヒ、美作ノ別邑ニ寓ス、幕府假ニ疾ヲ以テ、召命ヲ辭ス。
當時警衛之向ハ、名代重臣差登可申、且在府之者並國邑ニ罷在候モノ、幼少之輩ニテモ、銘々無據子細申立、時宜相伺可申事。 晚翠樓叢書

○幕府ノ親戚譜第諸藩、陰ニ政權ヲ復センコトヲ謀ルモノアリ、福岡孝弟、藤治○土 辻維嶽、將曹○ 佐藩士、安藝藩 士、等、松平慶永ニ説キ、其誑誤スル所ト爲ルコト勿ラシム。

○春嶽私記ニ云、九日夕、土州藩土福岡藤次參邸申出候趣意ハ、此度内府公御反正ノ思召立、稀世ノ御英斷ニテ、方今ノ御美事ニ相運ヒ候處、御三家並御親藩ノ内ニテモ、今一度幕威ヲ被復度坏ノ議論モ有之哉ニテ、種々ノ浮説流言モ有之ニ付、夫等ノ先入御當方様御聞込無之已前ニ、實際達御聽御疑惑不相生様相願度ト、同志一同申談罷出候由ニテ、頃日來ノ事情申立候件々、最初土州老候、後藤象二郎初ヨリ内府公へノ建白、事機今少早ク有之候歟ト存込候ヘトモ、過激輩ノ討幕論尤

熾盛ニ相成、已ニ事ヲ學ントスル勢ニ立至リ候故、討幕ノ名義モ不正、且、輩下ニ事ヲ生シ候テハ不相濟次第等、百方說得ニ及候ヘトモ、中々行届兼、殊ノ外骨折レ候事ニ有之候、其内漸間隙ヲ得候故、直様及建白候事ニ付、無據御用捨ノ義モ極テ切迫ニ相伺候運ノ内、建白以前、永井玄蕃頭殿大盡力ニテ、此場ニ及候事ニテ、此度永井殿ノ功力多分ノ由、紀州杯ハ甚見込違ヒニテ、先達テ 朝廷ヨリ諸藩へ 御尋ノ節ノ御答書ニモ、此體ニテハ迎モ治リ不申間、御義理合ニモ御元返シニ可相成儀、畢竟ケ様相運ヒ候モ、覬覦ノ藩有之候ヨリ起リ候ト申儀有之、覬覦ノ二字、於弊藩耳ニ懸リ候ヘトモ、役向ノ懸合ニ致候テハ、結局爭端ニ相成候テハ、無益故、書生輩へ申聞爲及議論候處、朝廷へ差出候奉書ニハ、左様ノ儀ハ無之杯、不分明ノ應對ニテ、今以決著不致、會藩ハ其砌及一論候處、外島機兵衛、手代木直右衛門ノ兩人ハ、尤ト存候ヘトモ、猶衆議ノ上可及返答トノ事ニテ、三日ノ後、議論兩端ニ分レ候間、今暫待吳候様トノ事ニテ、第八日ノ後、君前ニテ定論御同意ノ段及御挨拶候様、會侯被命候由ニテ返答有之、表向同心候ヘトモ、油斷ハ出來不申候、津藩ハ一議論ニテ同意ニ相成由、會藩大野英馬、尹宮へ參上、不當ノ事トモ御議論申上候へ共、象二郎、尹宮へ伺候、夫々及論辨、尹宮モ土老侯御同意ト申候御事ニ被爲成由、扱今後ノ見込ハ何レニ議事院ヲ開キ、上院下院ヲ分チ、上ハ攝政公初、内府公御主宰ニテ、明候御加リ、下ハ諸藩士ヨリ草莽輩モ出役ニ相成、何分 皇國ノ國體如斯ト御議定有之迄ノ事ニテ、大體ノ處ハ程モ可有之候へハ、有名諸侯サへ御會同ニ相成候ハ、其處ニテ篤ト御決議有之、御旗前ニテ御誓約有之、御確定之上、外諸侯へハ如何ト 御垂問、欠席諸侯へハ 朝廷ヨリ御通達位ノ事ニテ相濟、違背ノ者ハ御追討ト申程成、正大公明ノ御基本相立不申候ハテハ相成申間敷トノ儀ハ、内府公へ申上、至極尤ニ思召候トノ御沙汰候ハ、此御方様ニモ猶御參考被成下候様トノ趣ナリ、問云、越前表杯へ相聞候ハ、討幕論盛ニ相成、幕ニテモ敵對ノ聲息有之トノ實否如何ト承ルニ、其通り相違無之、實ニ危殆ノ形勢ニ相迫候事候ヘトモ、御反正ノ御英斷ニテ、一時ニ消沮ニ及ヒ、實ハ浮浪ノ徒、過激輩ハ失望ノ由、乍併、唯今ノ浮說旺盛ニ相成候へハ、暴黨又々時ヲ得、屯集ノ場へ可相運歟ト、甚心痛ノ由、又今更幕威ヲ御持被成候テハ、實ニ夫限ノ事ニ可相成由等物語レリ、同日藝藩辻將曹參邸、藤治同様、浮說御聞込ニ不相成様致度、既ニ尾、越ハ不同意故、上京無之トノ流言モ有之

處、此度御上京有之、同志大ニ副望ノ趣申達之。

十日、是ヨリ先、幕府 毛利敬親 長門藩主、食封三萬九千石餘、ノ支封主、及ヒ老臣ヲ大阪ニ召スノ令 七月ニ在リ、ヲ停メ、更ニ諸侯ノ公議ヲ經、朝命ヲ以テ、之ヲ召サンコトヲ請フ、之ヲ可ス、是日、幕府、淺野茂長ヲシテ敬親ニ傳諭シ、後命ヲ俟シム。

○幕府上申書

長防之儀、寛大之御處置可取計旨、當五月中被仰出候ニ付、家老並末家吉川監物上坂候様、松平安藝守ヲ以申達候處、末家監物ニハ不快ニ付、家老壹人上坂可致段届出候間、少ニテモ快候ハ、家老一同上坂可仕旨、猶又相達置候處、右ハ重大之事件ニ付、改テ衆諸侯ト公議之上、從朝廷御沙汰被爲在候儀ト奉存候、此段奉申上候。

十月 廿 四 日

大槻文彦筆記

○九日批紙

家老以下上坂之事、從幕府沙汰有之候處、尙從朝廷御沙汰有之候迄、上坂可見合旨可被 相達候事。

大槻文彦筆記

○文彦筆記ニ、批紙ヲ十一月十九日ト署ス、按スルニ、後條幕府達書ハ、批可ヲ得テ之ヲ發スルモノナレハ、十ノ字符ナルコト明ナリ、故ニ之ヲ削ル。

○本日幕府達書

長防之儀、早々寛大之處置可取計旨、從 御所被 仰出候ニ付、申達候儀有之候間、末家之内一人、吉川監物並家老一人致上坂候様、毛利家へ可相達旨、當七月中相達置候得共、右ハ猶從 朝廷 御沙汰有之候迄、上坂可見合旨申達候様、從 朝廷被 仰出候間、其段毛利家並吉川監物へモ可被達候。

毛利元徳家記

○脇坂安斐、淡路守○龍野藩主、食封五萬千八百九十石、櫻井忠興、遠江守○尼崎藩主、食封四萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、京ニ抵ル、二條攝政記堀直虎、内藏頭○須坂藩主、食封一萬五千三百石、疾ヲ以テ、召命ヲ辭ス。堀直明家記

十一日、前田利徳、歸藩ヲ請フ、之ヲ聽ス、十四日途ニ上ル、大給乘謨、稻葉正己、江戸ニ返ル。二條攝政記

○十日上申書

飛驒守義、當四月爲御警衛上京仕、于今滯京罷在候、然ル處、九月二十六日、參内御暇被下置候得共、去月十五日、御用被爲在候間、滯京可仕旨被仰渡之趣モ御坐候得共、御警衛御場所モ御免被仰付候得ハ、御用之廉ハ、定テ諸侯上京之上御尋之御儀ニモ可有御坐候ヘハ、飛驒守存體之儀ハ、本家ニ相隨ヒ可申儀ニ御坐候得ハ、何分加賀守ヘ一應面會不仕テハ、外可申上心底モ無御坐、且ハ無程、加賀守上京ニモ可相成、其上久々滯京罷在、在所表政事向行届兼、人心折合之程モ難計、夫是難澀之次第モ不少候間、何卒一旦御暇歸邑被仰付被下候様、格別之御慈評ヲ以、速ニ御沙汰被成下候ハ、不日發途仕度、只管此段奉敷願候、以上。

松平飛驒守家來

十一月

松見勘左衛門

二條攝政記

○本日批紙

願之趣無據次第二候間、一先歸邑可有之候事。前田利徳家記

十二日、國事掛近衛忠房、左大臣一條實良、右大臣近衛忠熙、前關白鷹司輔熙、右大臣大炊御門家信、内大臣九條道孝、權大納言連署シテ、大政復古、綱紀確立ノ策問二道、太政官八省以下再興ノ議案ヲ上リ、

廷議豫メ一定スル所アラント請フ、批シテ、策問二道ヲ採納ス。

今度、應召諸藩上京候上、諸事可相伺儀モ可有之候得共、於禁中粗御居リ之處不被爲在候テハ、御不都合歟ト存候ニ付、見込之趣言上仕候間、此邊ヲ以、何卒諸藩ヘ被尋下候テハ如何可有之候哉、猶宜可有聖斷存候事。

十一月

道 孝
家 信
輔 熙
忠 熙
實 良
忠 房

兩 役 中

大樹ヘ、

方今宇内之形勢ヲ考察シ、建白之旨趣、殊外國之交際日ニ盛ナルニヨリ、愈朝權一途ニ於不出者、綱紀難立、舊習ヲ改メ、政權ヲ朝廷ニ奉歸之趣、時勢難默止旨ヲ以、言上有之ニ付、則被聞食候、然ル上ハ、自王制一途之綱紀可相立事勢ニ候、然ルニ王制復古之儀ニ至候而者、諸事班々朦昧之儀ニ而者、綱紀モ難相立、縱令者當今諸藩封建之儀、杯、逆モ往古郡縣之儀ニモ難相成哉ニ被思召、左候得者、朝廷之綱紀、何邊一途ニ奉置候見込ニ有之候哉、過日言上之大意者被聞食候得共、右封郡之事ニ不限、諸事見込之處被尋下候事、右邊之以御趣意、被尋下候歟。

召之諸藩一同ヘ、

德川内大臣、方今之形勢ヲ考察シ、建白之旨趣、殊外國之交際日ニ盛ナルニヨリ、愈朝權一途ニ於不出者、綱紀難立、舊習

ヲ改メ、政權ヲ 朝廷ニ奉歸之趣、時勢難默止言上有之ニ付、則被 聞食候、然ル上者、自王制一途之綱記可相立事勢ニ候、然ルニ王制復古之儀ニ至候而者、諸事班々曖昧之儀ニ而者、綱紀モ難相立、縱令者當今諸藩封建之儀等、迺モ往古郡縣之儀ニモ難相成哉ニ被 思召候、然ル時者、朝廷之綱紀何邊一途ニ奉置候見込ニ有之候哉、右封郡之一事ニ不限、諸事見込之處、徳川内大臣へ被 尋下候間、於諸藩モ、朝權一途之見込可有言上候事、

右邊之以御趣意、被 仰出候歟、併可相成者 御再興之條々相顯シ、大樹竝ニ 召之諸藩へ被 尋下候方可然哉ニ奉存候間、先愚存見込之件々、乍不束左ニ申上候。

中務省使部七十人

大舍人寮 舍人八百人 使部二十人 圖書寮 使部二十人
 内藏寮 使部二十人 直丁二百人 縫殿寮 使部二十人
 陰陽寮 使部二十人 直丁二十人 内匠寮 直丁二十人

○太政官 攝政、左大臣、右大臣、内大臣、員外内大臣、大中納言以下、太政官則禁中也、撰器量之人、議奏之員數可被増歟、大中納言正官御再興可有之歟

式部省 使部八十人 大學寮 使部二十人 直丁五人
 治部省 使部六十人 雅樂寮 使部二十人 直丁四人 玄蕃寮 使部二十人 直丁二十人
 ○此寮頭一人、考察之國主可被任之歟、尤一ヶ年勤務之中在官
 諸陵寮 使部十人 直丁一人

○從治部省到宮内省、大輔、權大輔之兩官、看察之國主ニ可被授歟、尤一ヶ年勤務中在官

民部省 使部六十人 直丁四人 主計寮 使部二十人 直丁二人 主稅寮 使部二十人 直丁二人
 兵部省 使部六十人 直丁四人 隼人司 使部六人 直丁一人
 ○此司正一人、考察之藩主可被任之歟、尤一ヶ年勤務之間在官
 刑部省 使部八十人 直丁六人 囚獄司 物部四十人 物部二十人

○此司正一人、考察之藩主、可被任之歟、一ヶ年在官

大藏省 使部六十人 直丁四人 織部司 使部六人 直丁一人
 宮内省 使部六十人 直丁四人 大膳職 使部三十人 直丁二人
 木工寮 使部二十人 直丁二十人 大炊寮 使部二十人 直丁二十人
 主殿寮 使部二十人 直丁二十人 典藥寮 使部二十人 直丁二十人
 驅使丁八十人

掃部寮 正親司 使部十人 直丁一人
 内膳司 使部十人 直丁一人 造酒司 使部十人 直丁一人
 采女司 使部十二人 直丁一人 主水司 使部十人 直丁一人
 馬寮左右 使部二十人 直丁二人

○此寮左右之内、權頭一人、考察之國主ニ可被授歟、一ヶ年在官

諸藩士之術=堪タル者ヲ取テ令看察歟、

兵庫寮使部二十人

右八院

○此寮頭一人、同前、八省之寮=准シ、兵器ニ委シキ者ヲ取テ可看察歟、

省以十萬石以上之寮以十萬石以上之家長一人、並文筆算勘=堪タル者置之、司同之

○省國主、准國主、一年交代ニテ、時務看察可成之、官者堂上地下之中人撰有テ可被任、武藩者專監察ス、
省國主、准國主之家長、並近側可然之士人撰有之、出頭扶助可成歟、使部、直丁等、同下部之者可當歟、

寮總テ省、司=同シ、
寮=同シ、
司=同シ、
規則總テ省寮歟、

彈正臺使部三十人

衛門府物部三十人 使部三十人

兵衛府兵衛四百人 使部三十人 鑄錢司通實、總テ於京師可被鑄歟

○此司長官一人、考察之藩主可授之歟、一ヶ年在官、

瀧口

右十萬石以上、同以下之主二人、看察之家長、其外武ニ堪タル者被置之歟、鑄錢之義、是亦考察事ニ委數者、同前。

○臺國主、准國主考察、並家長藩士等人撰有之可出頭歟、一年交代ニテ、考之官人ハ堂上、地下人撰有之被授之歟、

檢非違使 同上、臺少弼一人被任國主歟、一ヶ年勤番中在官、

京職左右 使部三十人 直丁二人

掌左京戸口名籍、字養百姓、糾察所部、貢舉雜條、良賤訴訟、市厘度量、倉稟租調、兵士器仗、道橋過所、關遺雜物、僧尼名籍事、

大國之主看察之、或ハ在來之役人糾察有之、舊弊無之様、武藩ヨリ可檢證歟、京師之工商、悉皆寮司ニ附屬之上者、京職考察之通、其寮司非違糾察可有之歟。

○京職國主、准國主、並尾、紀、水、加之歟、一年交代ニテ、時勢考察之家長、藩士人撰ニ、京職テ出頭、使部、直丁等、殊ニ人撰可有之歟、官人ハ堂上、地下人撰有之被授官歟、

此職亮左右之中、一人國主ニ被授歟、尤一ヶ年勤番中在官、

市司東西 物部二十人 使部十人 直丁一人 價長五人

掌財貨交易、器物眞偽、度量輕重、賣買沽價、禁察非違事、

大國之主看察云々、准京職。

○市司國主、准國主云々、准京職。

○省寮、司職共、其局之御用途、年番、考察之諸侯ヨリ獻貢歟、臺又是ニ同シ、

總テ看察一ヶ年勤務之儀、諸侯近國遠國等有之、縱令者三五十里以下ハ行程費用等少分ニテ可相濟故、勤務之順次

早ク相立、遠國ハ對是順次緩ニ可有之歟、國費公平ニ相成候様可有之歟、

一諸國租稅之事、一萬石二十石歟、案スルニ、十ノ字千ノ誤カ、

一五畿内、禁中之御賄ニ可被當歟、付右五ヶ國之諸侯領分如何、代官所同斷、

一太政官者、不取敢 宮中則是也、又別ニ被置歟、

一八省 彈正 京職 市司其外夫々之局者、不取敢 御所近傍之里坊、夫々被借用歟、

一學習院者、被擬諸學院歟、

一六十餘州國府之事、

一國之中、大城ヲ國府代ト爲テ、其國之諸侯令集會、國事ヲ議シ、遙授介ニ付テ奏事可爲之歟、
遙授介古之如ク、人撰アリテ可被置歟、

一國書ニ委敷人體御撰學有之、律令格式等之書可被爲講候事、

既ニ於學習院被行有之トイヘトモ、更ニ此事ヲ被 仰付歟、

一禁中御造作始、諸國寺社、道、橋、川其外、是迄徳川ヨリ取扱成來候事トモ如何、

省、寮、司之御用途、年番考察之諸侯ヨリ獻貢候ハ、右之事トモハ更徳川之課役ニ可被 仰出歟。

○一武家之官内大臣始、大中納言、參議、羽林是迄通り、員外之儘可指置歟、

一武家侍從可被止歟、

一省、寮、司以下官、一ヶ年勤務之人被任候得者、其他員外可被止歟、

八省ヲ始御再興ニ付テハ、

中山前大納言	三條前大納言	柳原大納言
廣橋大納言	橋本中納言	野宮中納言
八條前中納言	右大辨宰相	大藏卿
長谷三位	頭右中辨	藏人辨
柳原侍從		

右之輩へ御用掛リ被 仰付、武家ト及示談候へハ、復古之條々行届候様奉存候事。

近衛篤磨家記
晚翠樓叢書

○批紙

第一條 右御文面之通大樹へ御尋、

第二條 中務省以下御ケ條、先御尋無之。
云々、 晚翠樓叢書

○行頭圍ヲ加フル者ハ、悉ク附票ニ係ル。

○本件日ヲ失ス、之ヲ近衛、九條二家ニ質セトモ、記録ノ徵スヘキナシ、嵯峨實愛雜記中、十二日建白書出スノ文アリ、故ニ此ニ收ム、又副書ノ署名、兩役中ノ三字、晚翠樓叢書ニ攝政殿ニ作ル。

○朽木爲綱、藩ニ歸ル。朽木綱
鑑家記

十三日、有馬道純、遠江守○丸岡藩
主、食封五萬石 疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請ヒ、津輕承敘、式部少輔○黒石藩
主、食封一萬石

疾アリ、召ニ應スルコト能ハサルヲ以テ、朝旨ヲ候ス。二條攝
政記

十四日、本多康穰、主膳正○膳所藩
主、食封六萬石 京ニ至ル、本多康
穰家記

○是ヨリ先、民間、符籙天ヨリ降ルト稱シ、之ヲ獲ルモノ、以テ祥瑞ト爲シ、奔走舞踏、幾ト狂スルカ如シ、參尾ノ地方ニ始リ、近畿殊ニ甚シク、覃テ山陽、南海ノ諸道ニ及フ、時勢見
聞錄 是日、京都町奉行、令シテ、其狂躁雜遝ヲ禁ス。

○京都町奉行布令

先日來、降神ヲ祝候ト唱、無譯花美之衣類等ヲ著シ、中ニハ異形之風體ニテ大勢連立、町々躍リ歩行、座敷内等迄土足之儘、深更ニ至迄踊騷キ、理不盡之仕方、追々増長致シ、産業之差支相成、迷惑之者モ有之由相聞、以之外之事ニ候、祝酒振舞候義ハ格別、右體踊騷キ候様之義ハ致間敷候、若不相用候ハ、急度可及沙汰次第ニモ可相成候間、其所々之役人共ヨリ、精々心付候様、雜色ヨリ所々へ可申通候事。

卯 十一月 時勢見
開錄

○附 土御門晴雄内儀へ申上書

先頃以來、世上守札其餘種々之品下降仕候趣、右吉凶有無之事可申上旨謹奉候、中天之間、自然生形候而落降候物者、凡雨、雪、雷、雹、霰或流星、隕石、此餘降候物モ有之事候得共、今度者、守札或雜物降候趣、元來守札天上有之候品ニ無之、何分於諸社寺祈願仕、尊信之族へ授與候義候へハ、自天上猥守札降候道理無之、全邪法邪行之者之所爲可有之存候、吉凶之有無者何モ無之存候、自然散來候ハ、守札之被納置候御場所へ被納置、格別御信仰無之方御無難哉ト存候事。

十一月

晴

雄

土御門晴榮家記

○晴榮家記ニ曰、十一月一日、内々御内儀ヨリ吉凶可申上旨被示、仍二日獻上、

十五日、大政歸一綱紀確立ノ策問ヲ、徳川慶喜及ヒ徳川慶勝、松平慶永ニ下シ、尋テ之ヲ在京諸侯ニ下問ス。

方今宇内ノ形勢ヲ考察シ、建白ノ旨趣、殊ニ外國交際日ニ盛シナルニヨリ、愈々朝權一途ニ於テ不出ハ綱紀難立、舊習ヲ改メ、政權ヲ 朝廷ニ奉歸ノ趣、時勢難默止旨ヲ以テ言上之、則被 聞食候、然ル上ハ、自 王制一途ノ綱紀可相立時勢ニ候、然ルニ 王制復古ノ儀ニ至候テハ、諸事班々曖昧ノ儀ニテハ綱紀モ難相立、假令ハ當今諸藩封建ノ義杯連モ、往古郡縣ノ儀ニモ難相成哉ニモ被 思召候、左候得ハ、 朝廷ノ綱紀何邊一途ニ奉置候見込ニ有之候哉、過日言上之大意ハ被 聞食候得共、右封郡之事ニ不限、諸事見込ノ處被尋下候間、朝權一途ノ見込可有言上候事。

春嶽私記
大槻文彦筆記

○春嶽私記ニ所載、尾、越ニ下セシモノハ、文首ニ徳川内大臣ノ五字ヲ冠シ、過日言上之大意ハ被聞召候得共ノ十四字ナシ、文彦筆記ニハ、右以下封建ノ事ニ不限、諸事見込ノ邊可有言上候事ニ作ル、十二日、近衛忠房等建白ニ、召ノ諸藩一同へ

ノ文案アリ、尾、越ノ外、諸家記見ル所ナシ、嵯峨實愛手記ニ、六公建白御下問、大樹へハ以松平越中守被尋下、書取武傳日野渡シ、尾、越へハ兩役列坐日野ヨリ、尾ハ成瀬、越ハ本多修理ナリトアリ、蓋本日ハ、幕府、尾、越ノミニ下問シ、諸藩ニハ十七日ニ至リ、下ニ收ムル政權之儀云々ノ文ヲ下タセシモノカ、實愛手記、及ヒ坤儀革正錄證スヘキニ似タリ。

○十七日下問書

大樹 並各藩へ

政權之儀、武家へ御委任以來數百年、於 朝廷廢絶之舊典、即今難被爲行届儀者、十日之所視ニ候、乍去、被 聞食候上ハ、神祇官ヲ始、太政官夫々舊儀御再興之 思召ニ候間、何レハ八省、其外寮司之内へ諸藩ヲ被爲 召加、年々交代可有勤仕、細目之儀者退々可被 仰出、 朝廷御基本ニ被爲在候間、右ニ基キ、見込言上可有之 思召候事、

一何レ往古郡縣之通ニハ難相成ニ付、封建之儘、名分明ニ相立候様被遊度候、
一御政務筋、往古之通ニ者連モ難相運被 思召候得共、總而新法而已之御政務ニ相成候而者、甚不宜候間、可成儀者、舊儀ニ基キ候様被 思食候事。

十一月十七日

近衛篤磨家記
酒井忠祿家記

○坤儀革正錄ニ云、十五日、幕府並尾、越へ被仰出、十七日、改テ本條ノ御沙汰候事ト、故ニ此ニ併收ス。

○酒井忠篤、酒井忠悖、松平忠誠、大河内信古、刑部大輔○參河吉田藩主、後豐橋ト改井上正直、河内守○濱松藩主、後鶴舞ニ移本多忠民、六人並ニ幕府溜ノ間詰格連署シテ、書ヲ幕府ニ呈シ、官位ヲ朝廷ニ還シ、以テ徳川氏臣屬ノ義ヲ明ニセント請ヒ、安部信發、攝津守○岡部藩主、食封二萬二百五十酒井忠強、下野守○伊勢崎藩主、食封二萬石板倉勝弘、攝津守○庭瀬藩主、食封二萬石渡邊章綱、丹後守○伯太藩主、食封一萬三千五百二十石加納久宜、嘉元次郎○一宮藩主、食封一萬三千石酒井忠美、銚次郎○勝山藩主、食封一萬二千石、後加知山ト改ム

復古記 卷四 慶應三年十一月十五日

戸田忠行、長門守○足利藩主、食封一萬千石、牧野忠泰、伊勢守○三根山藩主、食封一萬千石、後別邑大、米津政敏、伊勢守○長瀨藩主、食封一萬千石、後龍崎ニ移リ、藩名ヲ改ム、
 本多忠鵬、修理○西端藩主、食封一萬五百石、山口弘達、長次郎○牛久藩主、食封一萬七千石、田沼意尊、玄蕃頭○相良藩主、食封一萬石、後小久保ニ移封ス、戸田氏良、淡路守○大垣藩主、食封一萬石、堀之美、右京亮○椎谷藩主、食封一萬石、柳生俊益、但馬守○柳生藩主、食封一萬石、稻葉正善、備後守○館山藩主、食封一萬石、有馬氏弘、兵庫頭○吹上藩主、食封一萬石、森川俊方、内膳正○生實藩主、食封一萬石、蒔田廣孝、相摸守○淺尾藩主、食封一萬石、内田正學、主殿頭○小見川藩主、食封一萬石、永井直哉、信濃守○榑羅藩主、食封一萬石、井上正順、宮内○高岡藩主、食封一萬石、井上正己、辰若丸下妻藩主、食封一萬石、モ亦連疏シテ、朝廷ノ召命ヲ辭シ、君臣ノ義ヲ失セスシテ、僭越ノ罪ヲ犯スコト勿ラント請フ。

○忠篤以下ノ書

御譜代家筋之儀ハ、井伊家ヲ始、萬石以上ハ大名ト唱來候得共、萬石以下御家來ニ替リ無之、御家御盛衰ニ隨、其唱替リ候迄ニ候ヘハ、此度被仰出候趣ニ付テハ、何レモ大名之字ヲ退キ、御家人同様ニ相心得、官位返上可仕、萬石以下官位モ同様ニ有之趣、朝廷へ被仰立候様仕度候事。

月日

連

名

小宮山緩介筆記

○信發以下ノ書

今般、從 天朝被爲召、早々上京仕候様、兩奏業ヨリ御達御坐候段、不肖之微臣、身ニ取候テハ實以意表之次第、冥加至極難有仕合ニ奉存候得共、抑此程御復政被爲仰立候儀ハ、高明正大之御實情ヨリ被爲出候御英斷ニテ、不堪感泣御儀ニ奉存候、乍去、右ハ不容易大事件ニ付、一同悲痛慨歎仕罷在候、元來當席之儀ハ、御代々様ヨリ格別之蒙御愛遇、祖先ヨリ土地人民ヲ御宛行、數百年子々孫々安穩ニ相續仕候段、其恩澤之廣大、實ニ骨髓ニ通徹罷在、寸刻モ忘却不仕、斯ル御場合ニ相成候モ伏而奉願候、以上。

菊之間様頼詰

統

安部信順家記

瀧脇信敏家記

十一月十五日

○本多忠直家記ニ云、丁卯十一月下旬、於營中酒井忠篤以下同坐、閣老稻葉正邦、小笠原長行ヨリ談シ有之、一同異論無之、書面差出ノ儀ハ、上席ノ者ニ依頼致シ置、尤書面御受取ニ相成候哉否、同席ヨリ通達無之承知不仕ト、然レトモ、松平忠誠ノ徳川茂承家臣ニ答フル書中ニ、先達テ官位返上之儀相伺置ト云フニ據レハ、其上書セシコト疑ナシ、但其日ヲ詳ニセス、今大河内信古家記、十五日頃ノ文ニ據リテ此ニ收ム、信古家記ニ又云、其節出席名前、松平忠誠、酒井忠悳、本多忠民、井上正直、酒井忠篤、稻葉正邦、松井康英、小笠原長行ト、案スルニ正邦以下三人、當時現ニ老中ト爲ル、恐ラクハ溜詰格ト連署スルノ理ナシ、唯其議ニ參スル者ナラン、故ニ之ヲ除ク、菊ノ間様頼詰連署姓名、別ニ見ル所ナシ、姑ク本年正月ノ武鑑ニ據リテ、之ヲ填ス。

○賊アリ、阪本直柔、龍馬、中岡道正、慎太郎○並土佐藩士、ヲ刺ス。

○春嶽私記ニ云、十六日、福岡藤次來話、昨夜坂本龍馬被及殺候由、相手ハ恐ラクハ新選組中ナラントノ事ノ由、先日來、間者浮浪輩中ニ入込居タル由、旅宿ハ河原町土邸隣ノ町家ナリ、夜中一人アツテ手紙ヲ持來リ、僕ヲ招出シ届吳候様申ニ付、僕二階へ上候後ヨリ、兩人ノ刺客附上リ、直様龍馬眉間へ切込候由、龍馬ハ側ニ置タル脇指ヲ抜キ合セントセシカト、深手ニテ不及其儀、最期之由、外一人ト對話中ノ事ニテ、此一人モ深手負候、僕モ同斷ナリ、二客ハ逃去リ不知行衛、夫カ爲ニ種

種嫌疑ヲ起シ、大ニ心痛ノ由。

○晚家樓叢書ニ云、才谷梅太郎ト相聞候者、全坂本龍馬ノ變名ニテ、同人儀、先達テ一旦脱走中ノ人ニテ、此度右様變死ニ逢ヒ候、依テ實名相知候由、坂本龍馬紀直柔、年齢二十七歳、若黨藤吉十九歳、今一人來士ハ中岡慎太郎道正變名石川誠之介、三十歳、右才谷、中岡ノ二士、高名博論ノ人ニ有之候。

復古記 卷四終

總括兼纂修	
一等修撰	長松
校勘	
一等修撰	長
一等協修	四屋恒之
校錄	
一等書記	澤渡廣孝
繕寫	
二等繕寫生	小川長和
二等繕寫生	小島春

復古記 卷五

慶應三年丁卯十一月十六日ニ起リ二十一日ニ至ル

○十一月

十六日、徳川慶勝引咎ノ請ヲ慰諭シ、奉仕故ノ如クナラシム。

今度、大樹宇内之形勢ヲ考察シ、奉歸政權候儀ニ付、格別親藩之故ヲ以、彼是心配之趣、尤ニ候得共、先年來勤 王之儀モ 聞食有之儀故、必懸念無之、是迄之通出仕可有之事。 徳川義宜家記

- 大久保忠禮、加賀守○小田原藩主、食封十一萬石、堀田正倫、相模守○佐倉藩主、食封一萬石、酒井忠氏、眞田幸民、戸澤正實、中務大
- 新莊藩主、食封六萬八千二百石、相馬季胤、因幡守○中村藩主、食封六萬石、松平乘秩、和泉守○西尾藩主、食封六萬石、石川成之、宗十郎○龜山藩主、食封六萬石、岡部長寛、和田藩主、食封五萬石、松平忠禮、伊賀守○上田藩主、食封三萬石、内藤信民、豐前守○村上藩主、食封五萬石、有馬道純、出羽守○沼津藩主、食封三萬石、西尾忠篤、隱岐守○横須賀藩主、食封三萬石、土岐頼知、隼人正○沼田藩主、食封三萬石、松平親良、中務大輔○杵筑藩主、食封三萬石、諏訪忠誠、因幡守○高島藩主、食封三萬石、後花房ニ移封ス、尾忠篤、萬五千石、松平直己、佐渡守○廣瀬藩主、食封三萬石、稻垣長行、平右衛門○鳥羽藩主、食封三萬石、松平信庸、伊豆守○上山藩主、食封三萬石、鳥居忠實、丹羽守○壬生藩主、食封三萬石、酒井忠良、紀伊守○出羽松山藩主、食封三萬石、松平忠恕、大藏少輔○小幡藩主、食封二萬石、保科正益、飯野藩主、食封二萬石、植村家保、駿河守○高取藩主、食封二萬石、酒井忠良、紀伊守○出羽松山藩主、食封三萬石、松平忠恕、大藏少輔○小幡藩主、食封二萬石、保科正益、飯野藩主、食封二萬石、内藤文成、金一郎○舉母藩主、食封二萬石、本多忠紀、能登守○泉藩主、食封二萬石、本多助成、豐後守○飯山藩主、食封二萬石、水野勝知、日向守○結城藩主、食封一萬六千石、堀田正頌、攝津守○佐野藩主、食封一萬六千石、内藤政養、長壽庵○湯長谷藩主、食封一萬五千石、堀田正養、豐前守○宮川藩主、食封一萬三千石、三宅康保、備後守○田原藩主、食封一萬三千石

一萬二、柳澤光昭、伊勢守○黒川藩主、食封一萬石、丹羽氏中、長門守○三草藩主、食封一萬石、柳澤德忠、彰太郎○三口市藩主、食封一萬石、松平直哉、主計頭○母里藩主、食封一萬石、松平直靜、日向守○清崎藩主、食封一萬石、○連署シテ、書ヲ幕府ニ呈シ、朝召ヲ辭センコトヲ請ヒ、若シ採納ヲ得サレハ、直ニ奏狀ヲ議傳兩局ニ上ラントス。○遂ニ果サス

此度、從 朝廷被爲 召候旨、傳奏衆ヨリ御直達御座候得共、私共儀ハ、朝廷へ奉對候而者陪臣之身分ニ而、公儀ヲ被差置、御直ニ御用可有之筋者有之間敷處、此度之御大改革ニ付、定而意外之御用向モ可有之哉、萬一御沙汰之品ニ寄、御當家へ奉對、臣節ヲ失ヒ候場合ニ立至リ候而者、上者神君様以來御歷代様御神靈へ奉對、下者私共祖宗先靈へ對シ申譯無之、且被 召寄候上者、朝廷ヨリ御政務向御下間被爲在候様承知仕候間、右一々御答申上候様成行候而者、陪臣之身分相立不申、何分ニモ御請之儀當惑仕候、右次第柄ニ付、應 召上京仕候モ其詮無之、依而、乍恐家老一人ヲ以、此段哀訴仕候、幾重ニモ傳奏衆マテ被 仰達可被下候、伏而奉懇願候、以上。

十一月

連

名 姓名下ニ見ユ

堀田正義家記
吉田温苗聞見錄

○温苗聞見錄ニ云、右家々重役、或ハ使者ヲ以テ上京爲致、閣老マテ差出シ、若御取用ニ不相成段御沙汰ニ候ハ、左ノ文面ヲ以テ傳奏衆へ差出候事。

○傳奏ニ出ス奏狀案

謹而奉申上候、此度、私共 御用被爲 在候ニ付、上京可仕旨御達御座候得共、從來私共儀者、徳川家累代之家人ニ而、朝廷へ奉對候而者陪臣之身分ニ而御座候間、主家ヲ差置、御直御用御請申上候而者、第一君臣之大義ニ相戻リ候姿ニ相成、何共以奉恐入候、且被召寄候上者、御政務向御下間被爲 在候様承知仕候、右一々御答申上候様成行候而者、陪臣之身分相立不申、何分ニモ御請之儀當惑仕候、右次第柄ニ付、應 召上京仕候而モ其詮無之、依而、乍恐隸臣一人ヲ以、此段哀訴仕候、

何分ニモ螻蟻之微衷御洞察被下置、都而是迄之通、徳川家臣僕之御取扱ニ被成下候様、泣血奉懇願候、恐惶誠惶頓首敬白。

十一月十六日

連

名 姓名下ニ見ユ
石川成徳家記
吉田温苗聞見錄

○成徳家記ニ云、此書遂ニ不差出ト。

○十九日、連署人ヨリ幕僚へ申告書

此度、從 御所被爲 召候御請等之儀ニ付、先達而申上置候通、在府同席別紙名前之者重役、去ル十六日ヨリ十八日迄、三日之割合出立上京爲仕、伊賀守迄へ書面差出候儀ニ御座候、此段私共ヨリ申上置候、以上。

十一月

諏訪 因幡守

松平中務大輔

戸澤中務大輔

松平攝津守

本多能登守

三宅備後守

別紙

諏訪 因幡守	酒井 若狭守	松平 中務大輔	有馬 遠江守
戸澤 中務大輔	大久保 加賀守	松平 和泉守	堀田 相模守
真田 信濃守	相馬 因幡守	石川 宗十郎	岡部 筑前守
松平 伊賀守	内藤 豊前守	水野 出羽守	西尾 隱岐守
土岐 隼人正	鳥井 丹羽守	松平 伊豆守	稻垣 平右衛門
松平 佐渡守	酒井 紀伊守	植村 駿河守	内藤 金一郎
本多 豊後守	松平 攝津守	本多 能登守	水野 日向守
三宅 備後守	堀田 攝津守	保科 彈正忠	内藤 長壽麿

復古記 卷五 慶應三年十一月十六日

堀田 豐前守 柳澤 伊勢守 丹羽 長門守 柳澤 彰太郎
松平 主計頭 松平 日向守

牧野駿河守儀者、篤ト熟考仕候上申上度旨申聞候ニ付、除名仕候。

淀藩士
加藤某筆記

○佐倉藩老臣平野知秋手記ニ云、十一月五日、紀州邸へ同意ノ趣決答、本日同邸ニテ、在府御同席中方、御上京可否ノ議論、置然紛起遂ニ決セス、既ニシテ重臣名代ノ議ニ一決シ、奏文即本書ヲ草シ、帝鑑間御取締諏訪因幡守殿ノ内閣ニ供シ候處、御同人ヨリ内々閣老小笠原侯へ御相談ニ及ハレ、苦シカラサル旨ナリ、右ニ付、本書ハ自分持參、原稿ハ若州重臣岡見左膳持登リ、但シ同人ハ自分ヨリ兩三日前ニ上途ス、十八日江戸ヲ發シ、中晦日著京、岡見左膳へ面會、左膳左ノ大意申述、京著後、同役阪圖書ノ存意承リ、且本地ノ事情ヲ熟察スルニ、江戸ニテノ想像トハ天壤ノ相違ニテ、只今斯ル御書付等差出候テハ、却テ公邊ノ御不都合ニ相成可申、公方様ニハ、日々内藩諸侯ノ上京ヲ御待ノ事云々ノ儀ニ付、藩論幡然改轍相成、就テハ大目付様へモ事情相伺候處、同様ノ事ニ付、御同席詰合丈ニテ集議ノ上、御同席様御上京期限御猶豫ノ事ノミ、昨夜板倉侯へ願書差出候處、宜含置候間、別段傳奏へ申出候ニ不及トノ事ナリ、且又御申合ノ御書、其儘打棄候モ不本意至極ニ付、本書ハ差置、寫ヲ以テ板倉侯へ入御内覽候處、御預リ置ニ相成候トノ事、岡見ハ明日早追ニテ、江戸へ君侯ヲ迎ニ下リ候由、十二月二日、御取締重役ヨリ廻文ニテ、御演達申度儀有之趣申來候ニ付、參會ノ處、去ル二十九日夜、入御内覽候御書付、昨朔日板倉様ヨリ御取締重役へ御下ケニ相成、箇條書等種々有之、演說ノ大意ニ云、二條へ罷出テ、書面公方様へ奉入御内覽候處、譜代ノ面々、斯迄忠悃ノ段、滿悅致ス、然シ太政奉還ノ儀ハ、我等ノ眞情ヨリ出候事ニテ、決シテ外面ヲ裝飾スルニ非ス、即今箇様ノ書面差出候テハ、却テ我等ノ本意ニ悖リ、且何如ナル不都合ヲ釀成候モ難計候間、何レモ早々上京致候様トノ上意ナリ、就テハ役當リ無之面々ハ、早々上京可致、病氣幼年ノ者ハ名代可願、役當リ有之者ハ重臣可差出、且又以後傳奏へ直達ニ不及、拙者迄差出候へハ、兩卿へ宜ク申上へキ等ノ事件ナリ、右ノ挨拶ニテ、使節ノ役ハ相濟候。

十七日、一柳頼紹、因幡守○小松藩
主封一萬石疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ。二條攝政記

○幕府ノ親藩、及ヒ僚屬中、往々政權挽回ヲ議スル者アリ、尾、越二藩、其事ヲ敗ランコトヲ恐レテ、陰ニ之ヲ匡正スルヲ謀ル。

○春嶽私記ニ云、十日、尾州犬山ノ藩老小池奥左衛門參邸、申出候ハ、過日奥御右筆澀澤成一郎、成瀬隼人正方へ參リ、永井殿内旨ノ由ニテ、神祖二百年來ノ御鴻業ノ傳説長々敷申陳、約ル處、第三家並親藩ノ兵力タニアラハ、政權ノ取戻方モ可有之モノヲトノ趣ニテ、諷諫ラシキ口氣ニ付、隼人ハ唯々諾々ニテ不及返答相濟由、此兵力タニアラハ、政權ヲ復サントノ意味如何様ノ事ニ可有之哉、御當家様へ右様ノ説ハ相聞エ不申哉トノ事ニ付、唯今迄ハ會テ相聞エ不申、畢竟、討幕ノ論盛ンニ、時機殆切迫ニ至リ候モ、政權ヲ御歸 朝アリシカハ、群議喧囂、寂然ト相成候ニテモ可知事ニテ、今更政權御手ニ復候ハ、討幕論モ再興可致ハ必然ナルヘシト相答候處、御尤至極ニテ、私共方ニテモ一同左様存候處、右等ノ説ヲ唱候ハ、更ニ難解次第ニ候ト、十四日、此頃ノ風説、薩州ヨリ人數二千著阪、八千人ト唱ル由、内六百人ハ十二日淀川ヲ上リ、上京ノ由、長人モ相交リ居可申トノ聞エ有之ニ付、昨日青山小三郎ヲ探索ニ被遣、薩藩吉井幸助ト對談ノ次第、内府公一時ノ御英斷ニテ、激徒屏息致候ヘトモ、散走致タルニハ無之、會議ノ上、御實行ノ見ハレ候ヲ伺居候形勢故、唯案勞致候ハ、内府公ノ御腹心ニテ、實ニ政權ニ執著無之ハ、永井計ニテ、松山以下ニハ、必復古ノ臆念有之歟トノ嫌疑有之、萬一左様ノ事ト相成時ハ、忽地再亂ニテ、譯モナキ事ニ可相成勢ナレハ、早速大綱領ヲ御議定有之、夫ニ背ク者ハ討ツテ取ル外ニハ無之見込ノ由、右等ノ事情ニ付、御邸議ノ趣ハ、外藩ノ形勢、内府公ニハ疑念無之候ヘトモ、中間ニ疑ヒ有之、夫ヨリシテ前途曖昧ノ事ト相成候テハ、内府公ノ御反正モ徒善ト相成、忽討幕ノ義ニモ至リ可申、其節ニ及ンテハ御所置甚御困難ノ事ニ可相成候ヘハ、唯今ノ内板倉殿初反正動搖無之様、御取固メ置無之テハ難相成儀ト御評議有之、猶尾老公へモ可被仰合ト被決、十五日、雪江、澀澤成一郎ヲ訪フ、同氏ノ立説ハ、御三家御家門大憤發シテ、兵威ヲ盛ンニシ、抵抗力ヲ以御盛意ノ貫徹スヘキ様ニ御手傳申上ル事、此節ノ急務ナレハ、先ツ尾、越ニオイテ人數引寄せ、味方ヲ鼓舞スル時ハ、御譜代ノ面々大ニ力ヲ得、

同心戮力、御盛業ヲ補贊奉ルニ至リ候ハ、外諸侯ハ恐ル、ニ足ラス、往日ハ已ニ兵力ヲ以迫リ奉リ、私説ヲ遂ル末故、此後モ同轍ナラン事ハ、追々人数線入ノ手段ニテモ現然タリ、畢竟、幕ヲ初、親藩ノ威力衰弱ヨリ如此體態ニモ立至リタル事ナレハ、此度奮激セスシテ何時ヲカ期スヘキト、切迫激勵ノ説得甚敷、紀藩等ハ既ニ今日迄ニ二大隊上著ノ報告有之由等ヲ申シ越、老公ニハ如何程御人数御引率ニ相成候哉ト尋ニ付、此度ハ兵馬ニ付テノ 徵命ニモ無之、殊ニ隱居ノ身分候ヘハ、日田ノ家來共ノ外、兵備ハ一人モ無之段相答候處、以ノ外不滿ノ顔色ナリキ、津藩ノ知邸深井半左衛門モ來會シ、是モ澀澤同論ニテ、弊藩日頃因循ト言レシ耻辱ヲ雪クハ此時ナルヘシ、戰テ後信ヲ諸侯ニ示サン事ヲ欲スル由、當時京地ニ一十小隊アリ 近々若候兵ヲ引テ上京、末家佐渡守モ同様ナリ、何分兵力ナクシテ三寸計ニテハ道理モ立難キ由ヲ強辨シ、十九日、二十日比ニハ、必事アルヘシトイヘリ、又永井殿へ罷出對話ノ次第ハ、上様ニハ大方ノ御見込モ有之、先ツ大體ノ處ハ粗立候、諸侯會集ノ上ニテ、上様ノ御見込書ヲ 御奏聞ニテ、夫ヲ衆議ニ被懸候様被仰上、叔衆議ノ上、彼ノ善ハ無御固執御隨順ニ相成候ヘハ、夫ニテ大略相決シ可申、天下ノ見ル處、其様ニ變リタル事可有之様モ無之候ヘハ、大同小異ニテ相定リ可申ト存候、夫カ大綱ニテ、已下ノ細目ハ、追々ノ事ニ可有之、何卒常年中ニ、其邊ノ埒明候様致度心算ノ由、又坂本龍馬、昨夜モ參リ申候、象二郎トハ又一層高大ニテ、説モ面白ク有之、彼カ申處至極尤候ヘトモ、未タ時機不至ト申聞候處、夫ハ薩、土ニ任セ候ヘハ、必行ハレ可申トノ事故、例ノ兵威ヲ以テ事ヲ成候テハ、朝廷へ對シ不相濟、夫故ニ時至ラスト申譯ナリト申候ヘハ、兵力ニヨラスシテ可被行條理アリト申候故、然レハ兎モ角モト申置候トノ物語ナリ、原註、私云、龍馬ノ公關白職ノ事カ、澀澤ノ説及物語候處、彼輩ムヤミニ氣張候故、其處ハ常々誠メ置候事、已ニ今日モ御藩ニ兵備一人モ無之トノ事ヲ彼是論シ居候、畢竟、薩兵ヲ千人繰込メハ、此方ニモ千人ノ心當可致ト申ハ、甚敷小見、薩モ味方ナリ、少シニテモ多人數引入候事ハ歡フヘキ事ナルヲ、其處ハ如何ニ申聞セ候テモ、中々合點行キ不申候、夫故、二等ノ論ニ致候ヘハ、何方モ兵備アツテ惡敷事モ無之故、先ツ夫ニ爲任置候、薩、土ニテモ何方ニテモ、此度ハ敵味方無之ト見スシテハ相成不申候トノ事故、紀ハ如何ト問フ、是モ甚卑ク困リ申候、乍併、是モアレ程ニ思ヒ込候ハアシキ事ニハ無之故、相應ニ養ヒ置候事ニテ、腰ヲ

折候テハ相成不申候、夫故、何方ニテモ伊賀殿或ハ拙者ノ意忤ト申、主張ノ向モ可有之哉ト致心配候、夫ニハ大ニ意味有之、寛容致置候ヲ、信隨候様ニ取違ヘ候事ニテ候、薩ノ帶刀杯安心難致ト申者ヲ、強テ異心ナシト辨候テモ無益故、夫ニ任セ置候ヘハ、是以拙モ同論ノ様ニ心得候姿、象二郎モ同様ノ事、彼兩人杯モ、過激浮浪ノ制馭ニハ中々苦心ノ事共モ可有之ト體察致候、定テ今以討幕論ヲ唱居候事杯モ可有之ト思ハレ候、是ハ時勢無據次第ニテ、拙者杯モ幕軍ヘハ其通ニテ、何時ニテモ不逞ノ徒ハ討ネハナラヌ事ニ勵シ置候、左ナクシテ、干戈ヲ動シテナラヌ杯ト申、本意ヲ申聞候ヘハ、ヨキ事ニ致シ、忽チ懈惰ニ安シ候勢故、無是非其邊ノ釣リ合ヲ付置候事ニテ、當路ノ苦心何方モ同等ト被察候由、十七日、雪江、尾藩田宮如雲ヲ訪ヒ及論談候處、所見如合符節、御盛意ヲ貫通スル盡力ノ外ニ道ナキニ決ス。

○附 春獄私記ニ云、二十日御登城、伊賀殿へ即今御事業御手下シ之處、御尋問之處、當惑ノミニテ駭トシタル了見ハ無之、何分上様御直ニ御伺被成候様ニト被申ニ付、内府公へ御對顔有之、猶又、今後御事業之御見込御伺之處、方今之形勢ケ様無之而者不相叶ト、御定見被爲立事候ヘハ、政權ヲ御還シ、政令ヲ一ニシテ、皇威ヲ復セラレ、天下ノ心ヲ合セ、諸侯ヲ會同シ、公議ヲ興シ、天下之疑ヲ去リ、皇國ノ維持ニ御一世ノ御力ヲ被爲盡、御紀綱御振起被遊、神祖之尊王至治之御鴻業ヲ御繼述被遊度之外、御餘念不被爲在趣ニ付、公モ何分被爲在限之御心力ヲ被盡、御盛意御奉戴御輔贊可被及御忠勤ト、御契合之御惻話之由、其前日梅澤孫太郎來話、元來、如此御運ヒニ相成候ニ付テモ、其以前、大小監察初、諸有司ヲ御前ニ被召、御書付御開示ニテ、我等最早是ヨリ外ニ見込ハ無之、其方共ハ如何オモフ、神祖以來ノ鴻業一朝ニ廢候處ハ、奉對御先靈恐入候姿候ヘトモ、畢竟、天下ヲ治メ、奉安 宸襟候カ、即神祖ノ御盛業繼述ト申モノ也、方今、徳川氏武備衰弱シテ、天下ノ諸侯ヲ制馭スルノ威力無之而已ナラス、二十年來ノ非政ヲ數ヘ立ラレ候ヘハ、一言之申譯無之次第、此時ニ當ツテ、空敷神祖圖ノ形迹計ヲ執著シ、此儘ニ持堪エントスレハ、無理計多クナリ、罪責ハ益増加、遂ニハ奪ハル、ニモ至ルヘキハ必然ト見切リ申候、依之、今政權ヲ 朝廷ニ還シ奉リ、政令ヲ一途ニシ、徳川氏ノ有シ限リ、力ノ及ン丈ケハ、天下諸侯ト共ニ朝廷ヲ輔ケ奉リ、日本全國ノ力ヲ戮セ、外夷ノ侮リヲ禦キ候事ニ相成候ハ、皇國今後ノ目的モ定リ可申、乍併、是辻モ

見込之事ニテ、急度見居へ通りニ行クカ行カヌカ、其處迄ハ見貫キ難ク候へトモ、先ツ治ルヘキ條理丈ケハ如此ト存候、又是迄通りト申事モ、出來サヘスレハ致間敷ニモ無之候へトモ、是ハ決シテ出來ヌ事ト覺悟候、何モ存寄アラハ申セトノ御意故、一同感服ノ姿ニハ候へトモ、矢張幕權執著ノ向モ多ク、彼是ト叫キ合候迄ニテ、上意ヲ返シ奉ル程成明辨モ無之、嗚々嗚々罷在候處、又上意ニ、此節潛伏之徒、事ヲ謀リ候趣相聞エ、夫カ爲ニ恐怖シテ、俄ニ大權ヲ擲チ候様ニ存候向モ有之、潛伏ノ徒如何程アリトモ、多寡ノ知レタル事ニテ、討ハ討ツヘク候へトモ、此處ヲ能思慮スヘシ、我等如此在京セルハ何ノ爲ソヤ、カ、ル時勢ユヘ、輩下ノ騷擾ヲ鎮定シ、寂慮ヲ安シ奉ランカ爲メナリ、然ルニ、非徳ノ我等罷在候故、右等ノ禍根ヲ釀シ來リシナルヲ、又干戈ヲ動シ是ヲ討ニ至ツテハ、宸衷ヲ驚動シ奉リ、生靈ヲ困苦セシム、其罪重大ニシテ、一ツトシテ義理ニ當ラス、忠貞ノ素志モ空敷事ニ相成候、從來我等非才不徳ニシテ、大統ヲ繼クニ堪エサルヲ知ル、故ニ昨年モ相續ヲ辭シタル事ハ、何モ承知之通候へトモ、不得止事繼キタルモ、亦承知之譯ニテ、其節モ我等相續ニオイテハ、逆モ此體ニテハ難差置、大變革ヲヤラネハナラヌ、夫テモヨイカト申候處、伊賀初承知ノ事故、其以來端々取懸リ、旗本杯ノ事モ當時ノ處マテヤリ候へトモ、中々是式ノ事ニテ行クモノニモ無之、何分非常ノ事業ニ無之テハ不相適ト存込候ハ、決テ昨今ノ事ニハ無之、根底深ク有之候、又將軍職ノ義モ、固辭候へトモ、是以 先朝ノ寂慮モ有之、不及是非候處、果シテ不堪其任、事々此ニ及タル事候ヘハ、憤然自ラ反シテ已ヲ責メ、私ヲ去リ、從前ノ非政ヲ改革シテ、至忠至公ノ誠心ヲ以テ、天下ト共ニ 朝廷ヲ奉輔翼候儀、乍恐神祖ノ神慮ニモ適ヒ可申、神祖ハ天下ノ安カラシカ爲ニ、政權ヲ被爲執タルニテ、天下ノ政權ヲ以、徳川氏ニ私セラレタルニハ無之候へトモ、我等ハ又天下ノ安カラシカ爲ニ、徳川氏ノ政權ヲ 朝廷ニ還シ奉ルナリ、取捨異ナリト雖モ、天下ヲ治メ、朝廷ニ奉スルノ意ハ一ナリ、汝等モ亦能此主意ヲ體認スヘシト、又上意ニ、神祖ノ御時代ト違ヒ、外國ノ交際如形事ト相成候ヘハ、是迄ノ體ニテ交リヲ全フシカタシ、外國モ次第ニ日本ノ事情ヲ詳ニスレハ、今日ト相成候テハ、外國へ遣ス所ノ使節ハ、徳川氏ノ臣僕ニシテ陪臣ナリ、陪臣ヲシテ帝或ハ王ニ使ス、外國ニテモ既ニ其説アリ、然レトモ政令一途ニ出レハ、假令陪臣タリトモ 朝命ヲ奉シテ使スレハ、即チ 朝使ナリ、禮典ニオイテ缺

ル所ナシ、已ニ當夏外國公使、華城櫻門内マテ乘馬セシメシヲ、彼是批判スルト聞ケリ、外國ノ情ニ通セスシテ、皇國ノ尊ヲノミ知ルモノハ左モ有ルヘキナレトモ、日本臣外國へ到レハ、陪臣ニテモ玄關前マテ騎付ル事ナリ、然ルヲ彼下馬ニテ下馬セシムル時ハ、此方ノ使節モ、和蘭如キ小國ニ至ツテモ、外郭ヨリ下馬セシテハ不相適、其國辱ヲ外國ニ曝スナリ、大小輕重イツレソヤ、又往復書翰ノ書法、文例ニ至ルマテ、一ツトシテ禮ニ當ラス、自ラ尊大ニシテ傲慢甚シ、彼モシ儼然トシテ其失禮ヲ責問スルニ至ラハ、一言ノ返スヘキナシ、今兵庫開港一新ノ時ニ當ツテ、政令ヲ一ニシ、此等ノ非禮ヲ改革シ、信義禮讓ヲ以テ交ラサレハ、イカテカ其誼ヲ全フスヘキ、此開港ノ事モ、朝廷ニテモ開クヘシ、諸侯モ開クヘシ、幕ヨリモ開カント乞ヒ、一ノ異議ナキ事ナリシニ、勅許ノ際ニ當ツテ、不被爲得止事ノ文段アリ、是カ爲ニ大ニ物議ヲ起シ、迫ツテ許サレタリト云、是等皆二途ニ出ルノ大弊ニシテ、交際ヲ全クシカタク所以ナリ、又諸侯割據ノ説ヲ唱フル者アリ、今已ニ割據ニ非スヤ、徳川幕府ノ威令行ハレス、召セトモ事ヲ左右ニ托シテ不來、是幕府而已ナラス、朝命トイヘトモ亦爾リ、割據ナラスシテ何ソヤ、此時ニ當リテ 朝威ヲ翼ケ來リ、諸侯ト共ニ 王命ヲ奉戴シテ、全國侮擧ニ力ヲ盡サスンハ有ルヘカラスト、逐一ノ御明辨ニヨツテ、何モ一言ノ異説ナシ、敬服ニ及ヒタル事ノ由。

- 土屋寅直、采女正○土浦封主、食藩九萬五千石 土井利與、大炊頭○古河藩、主、食封八萬石 戸田忠友、土佐守○宇都宮藩主、食封七萬七千八百五十石 本壯宗武、津藩主、食封三萬石
- 青山忠敏、左京大夫○篠山藩、主、食封六萬石 秋元禮朝、主、食封六萬石 太田資美、總次郎○掛川藩主、食封五萬石 久世廣文、松平氏ヲ稱ス、主、食封四萬石
- 間部井道、下總守○鯖江藩、主、食封四萬八千石 永井直諒、日向守○高槻藩主、食封三萬六千石 内藤頼直、若狹守○高遠藩主、食封三萬石 板倉勝殷、出雲守○關宿藩主、主、食封三萬石
- 板倉勝己、甲斐守○福島藩主、食封三萬石 安藤信勇、理三郎○磐城平藩、主、食封三萬石 大岡忠貫、主、食封三萬石
- 黒田直養、筑後守○久留里藩、主、食封三萬石 板倉勝己、三萬石 安藤信勇、三萬石
- 土井利教、淡路守○刈屋藩主、食封二萬三千石 増山正修、對馬守○長島藩、主、食封二萬石 阿部正恒、駿河守○佐貫藩主、食封一萬六千石 水野忠順、主、食封二萬三千石
- 牧野康濟、遠江守○小諸藩主、食封一萬五千石 内藤正誠、志摩守○岩村田藩主、食封一萬五千石 遠藤胤城、但馬守○三上藩主、食封一萬石 酒

井忠經、左京亮○敦賀藩主、食封一萬石、後鞠山下改連署シテ、朝召ヲ辭センコトヲ幕府ニ請フ。

今般、以御英斷御復政被仰立候段、定シ深キ思召モ被爲在候御儀ト奉存候得共、實ニ感慨之至奉存候、折柄從傳奏上京可仕旨、同席共へ御直達有之、不肖之微臣共、蒙 朝徵御用之筋難計御座候得共、元來當席之儀者、格別之以御寵遇、數百年來奉蒙御恩澤候段、骨髓ニ通徹罷在、進退存亡隨君命之外、更ニ他念無御座候、就而者、今日ニ相及不俟君命、直ニ奉 朝詔候儀者過等之至、誠ニ以奉恐入候、只々君臣之大義ヲ不失、報恩盡忠之旨趣相立候様仕度、一同奮發罷在候間、何卒微衷之赤心幾重ニモ御洞察、宜彼仰立被下候様仕度、此段奉懇願候、以上。

在府 雁

間

本莊宗武家記
板倉勝達家記

別紙姓名、

土屋 采女正	青山 左京大夫	土井 大炊頭	戸田 土佐守
松平 彈正忠	秋元 但馬守	太田 總次郎	久世 出雲守
間部 下總守	永井 日向守	内藤 若狹守	板倉 主計頭
黒田 筑後守	板倉 甲斐守	安藤 理三郎	大岡 主膳正
土井 淡路守	増山 對馬守	阿部 駿河守	牧野 遠江守
水野 肥前守	内藤 志摩守	遠藤 但馬守	酒井 左京亮

外ニ

阿部美作儀ハ、京都表へ重役差出シ、松平右京亮、松平能登守儀ハ、別段申上、水野真次郎、青山峯之助、大久保三九郎儀ハ、伺候儀モ御坐候ニ付、除名仕候。板倉勝達家記

○是ヨリ先、幕府、航海術教導士官ヲ英國ヨリ雇フ、英國公使、書ヲ致シテ、其接待資給ノ事ヲ

申ス、是日、復書シテ、之ヲ謝ス。

千八百六十七年十一月五日 於江戸

日本政府ノ士官、及ヒ船乗ニ航海術ノ諸學科業前、及ヒ規律ヲ指南スルタメ、英國政府ニテ撰ミタル處ノ士官、竝ニ下等士官等、江戸ニ到着シタルニ付キ、日本政府ノ名代人ナル閣下ト、英國政府ノ名代人ナル余トノ間ニ談ヲ遂ケ、彼等ノ爲ニ任職ノ期限ヲ記載スルコト緊要ナルニ至レリ、

右士官、竝ニ下等士官勤務ノ儀ハ、英國政府ニテ、日本政府ヨリノ申出ニ任セ、二個年ノ期限ニ定メタリ、斯ノ如ク雇ハルル間ハ、右士官、竝ニ下等士官、イツレモ下ニ記シタル割合ノ給料ヲ受取ルヘシ、右ハ日本政府ニテ、陸軍教授ノタメ雇ヒタル佛國士官等へ宛行ヒタル割合ニ照合セシ者ナリ、

前文給料ノ儀ハ、各種ノ入用ヲモ其内ニ籠メタリ、サレハ住居ノ什具、馬ノ飼立ヨリ、薪炭燈火等ニ至ルマテ併セ、生活上ノ諸費用ハ、其節士官、竝ニ下等士官等自身ニ因テ取賄ハルヘシ、

士官ノ分、

教師頭取一人、毎月百二十ポンドステルリング、
教授方士官三人、毎月八十ポンドステルリング宛、

下等士官ノ分、

第一等士官二人、毎月二十八ポンドステルリング宛、

第二等士官一人、毎月十八ポンドステルリング宛、

第三等士官五人、毎月十四ポンドステルリング宛、

右之給料ハ、各士官日本へ到着シタル日附ヨリ相始メ、而シテ洋銀ニテモ、マタハ通用ノ兩替相場ニ應シタル日本貨幣ニテモ、歐羅巴各月ノ最終日ニ於テ、其拂フ可キ分丈ケテ渡シ、其外不相當ノ入用ヲ、右士官、竝ニ下等士官ノ内、誰人ニモ掛

ル事アルヘカラス、

日本政府、右士官、並ニ下等士官等ノタメ、各其位級ニ應シ、良好ニシテ、且都合能住居ヲ宛行フ可シ、然シナカラ、此事柄ニ付テノ緊要ナル約定、イマタ取極メラレサリシニ付、日本政府、目今一時ノ都合向テ計ラレ、家具、並ニ食事道具等ヲ彼等ノ自身入用ニ任シタリ、然シナカラ、此品物ハ日本政府ニ屬スル者トスヘシ、而シテ本住居ノ取備ニ付テハ、同様ナル手續ニテ取計ヒアルヘカラス、此士官、並ニ下等士官ハ、英國船ノ壹艘ニテ、英國ヨリ香港迄送届ケラレタレバ、同處迄ハ路用ヲ要セス、然レトモ、彼等ハ皆日本政府ニ仕フルカ爲ニ來レル者ニテ、英國政府入用外ノ者ナレハ、途中於テ英國ヘノ拂方、其外入費ハ英國政府ヨリ出スヘキ理ナシ、故ニ日本政府ヨリ拂フ可シ、別紙ニハ右給金等ノ總高ヲ認タリ、其高千六百十三ポンドステルリング十九シルリング十一ペンスナレハ、洋銀壹枚ノ相場ハ四シルリング三ペンスニ當ルヲ以テ、洋銀五千四百七十七枚六十二セントナリ、此士官、並ニ下等士官、若シ私便蒸氣船ニテ來レルトモ、香港迄ノ路用マタ右同様ナルヘシ、香港ヨリ右士官等、私便蒸氣船ニテ横濱ニ來レリ、其費用洋銀千六百枚ナリ、是亦日本政府ヨリ拂フヘシ、教授必用ノタメニ買上ケ、而テ甲必丹フラシー自身ニ携來タル所ノ書籍、竝ニ諸器械ノ費用五百二十五ポンドステルリング十七シルリングノ三口ノ合高ヲ、余ニ拂フ可キ貴答ヲナシ、而テ英國政府ニ此費ヲ償フ可キヲ希望ス、恐惶謹言。

英國特派公使兼全權

右器械並ニ書籍ノ目錄ハ、別紙ノ如シ、
右器械並ニ書籍ハ無恙到着シタリ、而テ固ヨリ日本政府所持ノ物ナリ、
若シ日本政府、右士官並下等士官ノ仕ヘテ要セスンハ、日本政府ヨリ私便蒸氣船ニテ歟、或ハ來レル時ノ如キ手立ヲ以テ、彼等ヲ英國ニ歸ラシムヘシ、
余、小笠原壹岐守閣下、此條々ヲ承諾シ、且ツ五千四百七十七ドル六十二セント、千六百ドル並ニ五百二十ポンドステルリング十七シルリングノ三口ノ合高ヲ、余ニ拂フ可キ貴答ヲナシ、而テ英國政府ニ此費ヲ償フ可キヲ希望ス、恐惶謹言。

ミニストル

ハルリー、エス、パークス

外務省記

○給金總高ノ別紙、器械、書籍目錄ノ利紙、並ニ原記ヲ失ス。
○答書

大額利太尼亞特派公使全權

ミニストル兼コンシユルゼネラール

エキセルレンシー

シエルハルリー、エス、パークスケシビヘ

貴國第十二月五日附之貴翰披見イタシ候、然者、我政府ヨリ、貴國政府ヘ御頼申候海軍術教導士官、並ニ下等士官等到著イタシ候ニ付、閣下ト我等談判ヲ遂ケタル諸事件御申越之旨、逐一領承イタシ候、種々御手数數之段忝存候、右諸士官在留之期限、並ニ給料之定員、生活之諸費用、給料渡方之時限、寓舍之事、並ニ英國ヨリ香港迄之諸費用、及ヒ香港ヨリ横濱迄飛脚船之入用、及ヒ教導必用之書籍、諸器械之代價等、閣下ヘ御渡シ申ヘキ總高者、其筋之モノヨリ御渡申候様可致候、此段貴答如此候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月十七日

小笠原壹岐守花押

外務省記

十八日、前田利裕、丹後守○七日市藩
主、食封一萬石 本壯道美、宮内少輔○高富藩
主、食封一萬石 疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ。前田
利昭

本莊道
美家記

復古記 卷五 慶應三年十一月十八日